



60
652



始





醫學博士 醫學博士 文學博士 醫學博士
 富士川 小川劍三 唐澤光 尼子四郎
 游郎 編修

叢書

第三輯

大正 13.10.2 内交

吐鳳堂書店發售

杏林叢書第三輯

目次

一、東門隨筆	一
二、師談錄	三五
三、習醫先入	五三
四、醫家初訓	九一
五、橘黃年譜抄	一〇九
六、醍醐隨筆	一六一
七、靜乃石屋	二一一

解題

東門隨筆

東門隨筆一卷、山脇東門著はす所なり。山脇東門、名は陶、字は大鑄、東門はその號なり、一に方學居士と號す、東洋の第二子、元文元年八月京都の家に生る、幼名を阿藤といふ、後改めて玄侃といふ、延享三年、年十一にして父東洋に従ひ參府して將軍に謁す、寶曆十二年父の官職を襲ひ、明和三年六月法眼に絞せらる、年十七の時父東洋の命を承け、永富獨嘯庵と共に越前府中に赴き奥村良竹に就て吐方を學び京師に歸りて大に其術を行ひ始めた古醫方に汗吐下の三法備はる、明和八年父東洋の遺緒を嗣ぎ一婦人の屍を解き視て圖譜を作る、後安永四年及び五年男女各一人の屍を解き以て解剖學が醫學の基本たるべきことを唱道せり、東門又刺絡の方を吉雄氏より得て、三稜針を用ひて瘀血を取ることを稱揚せり、天明二年七月病を以て歿す、享年僅に四十七、著はすところ「東門隨筆」一卷あり、而かもこの書梓行せられず、謄寫世に傳はるのみ、ここに收めたるものは余が家藏の寫本を底本とし、更に一部の寫本を参照對校したれども魯魚焉馬の

誤は更なり、一二事實の疑はしきを校正するに由なし、遺憾の至なり。

師談錄

師談錄一卷、水野慶善がその師土生玄碩の口授せるところを筆録せるもの、漢文體のもの、國文體のもの二種あり、大體にありて同一なりと雖も、兩者の間、互に記事の出入するところあるが故に、併せてそれを收載したり。土生玄碩、名は義壽、桑翁と號す、安藝國吉田の人、家世々眼科を業とす、玄碩年十七にして京都に遊び醫方を和田東郭に學び、五年を経て郷に歸り箕裘の業を嗣ぐ、當時眼科の徒、單に家習を奉じ師授を信じ、囂然として門派の高低を争ふのみにして治術に至りては鍊拙にして觀るべきものなし、玄碩此間に起ちて深思苦慮治法を攻究し、手術を工夫し、其名聲大に揚る、文化五年四月廣島侯の女南部大膳大夫に嫁して、江戸の邸にあり眼を病む、諸醫手を束ねて爲す所を知らず、侯深く之を憂ひ、遙に玄碩を召して治を托す、未だ幾もあらずして全癒す、四方傳へ聞きて治を乞ふもの門に盈つ、乃ち居を芝田町に卜し、其業益々盛なり、文化七年二月擢でられて幕府侍醫となり、十三年十二月法眼に絞せらる、文政十二年獨逸の醫家シーボルト幕府に謁す、玄碩その眼科に精しきを聞き幕府に

請て教を其門に受く、散瞳の藥を得て大に喜び贈るに將軍賜ふところの葵章服を以てす、其年十一月シーボルトの獄長崎に起る、官急に女傾を召し、この國示を犯して葵章服を外人に贈りたるの罪を詰り官祿を褫き獄に下す、後許されて獄を出で、居を深川木場に卜し、大に門戸を張り一時隆盛を窮む、嘉永七年八月十七日病てその家に歿す、年八十七。

習醫先入

習醫先入三卷。香月牛山著はすところ、自家多年の経験に徴して醫學を修むるの順序及び醫人の道義を説きたるものにして、享保十八年の刊行に係る。香月牛山、名は則真、字は啓益、筑前の人、少ふして貝原益軒に學び、又鶴原益に從ふて方伎の書を受け遂に醫なる、壯なるに及び中津侯に仕へ、居ること十四年、病に托して仕を致し京師に遊ぶ、偶ま大覺親王病あり諸醫百方效を得ず、牛山之を治して效あり、醫名大に著はる、居を二條に卜し刀圭を業とす、又書を著はし優遊自適す、小倉侯其名を聞き聘召すれども起たず、侯其嗣則貫を辟す、よりに則貫と共に小倉に來たり客員を以て養老の俸を受く、元文五年八月五にして歿す、著はす所、「牛山活套」、「牛山方考」、「醫學鉤玄」、「國字醫義」、「婦人壽草」、「老人養草」、「小兒必要記」、「螢雪餘話」、「習醫先入」等あり。

醫家初訓

醫家初訓一卷、寛政四年、多紀永壽院著はす所。多紀永壽院、名は元徳、通稱安元、字は仲明、藍溪と號す、安永五年奥醫師法眼に任ぜられ、次で法印に叙せらる、永壽院と號す、元徳少ふして氣を負ひ、先世名家あるを以て其業を振興せむとするの志あり、其父元孝明和二年躋壽館を神田佐久間町に創建して醫學講習の道を擴む、永壽院父の遺志を嗣ぎ躋壽館の規模を擴張し、其災に遇て再建するに方り家産これが爲に蕩盡するも意なき、寛政二年旨によりて家塾を轉じて國學となし更に修飾を加へて醫官の子弟に命じて悉く就て學ばしめ、永壽院は命を承けて總理となり、子孫相承けて世々この學務を總ぶ、時に白川侯政を執り百度維れ新なるに際し、永壽院獻替するころあり、官醫の宿弊頓に改まる、又請て製藥所を設け以て進用の藥劑に備ふ、寛政十一年病によりて仕を致し、尋で歿す、著はす所、この書の外に「廣惠濟急方」、「養生大意」、「醫學平言」等あり。

橘黃年譜抄

橘黃年譜三卷、淺田栗園著はす所、天保七年より始めて明治元年に終る、その間三十五年、記事はその本業に關する醫治

を主とすれども、又政治、經濟、災難、及び人事動靜等自己の見聞にかかるものを筆録し、この年間に於ける史料として價値少なからず、本三卷に分ちたれども、今はその中の純乎治術に關し、多數の讀者の興味を喚起するところなるべしと認めらるる部分を省略し、私に「橘黃年譜抄」と題して、これを一卷に纏めたり。淺田栗園名は惟常、通稱宗伯、信濃の人、高遠の儒醫中村元恒に就て醫方を修め、年十八笈を負て京攝に遊び、大に得る所あり郷に還りて醫を業とせしが、年二十二にして江戸に出で、醫を業とし、學問該博、治術に精しきを以て名あり、後幕府醫員に擧げられ、明治年間漢方醫の泰斗を以て名聲甚だ高かりき。明治二十七年歿す。ここに收めたる「橘黃年譜」は唐澤氏が著者自筆の本を謄寫せしものを採れるなり。

醍醐隨筆

醍醐隨筆二卷。中山三柳著はす所、中山三柳、名は忠義、華陽軒と號す、大和の人、長澤道壽の門に入りて醫を修め、又儒教を三宅道乙に受く、二川隨筆に曰く

中山三柳は土州の道壽の弟子にて濃州大垣戸田左門氏に仕官してありしが病氣になつて暇を乞ひしに御免あらざればふたび御匙をこるまじにて御暇を申うけ京都に塾居せられしかどもこより良醫のほまれあれば人みなつぎ

ひて診脈を乞ふ是非なくして門弟に言つけ藥を合さずこいへきもかつて療治せず、後水尾院の御脈をもうかがひ奉りぬ醍醐へ隱居せし時

つみなくしてさすらふる身の樂みを

今朝のねさめにまつ覺へぬる

こ詠せり後水尾院これを聞き召されて

先達て入りしころそなれぬへき

今住そめし山の奥にも

一首の御製を下されしとぞ

亦以て三柳の名聲の當時に隆々たりしを想ふべし、貞享元年六月二十日歿す、年七十一、著はす所「増補醫方口訣集」、「切要方義」、「病室要覽」、「保兒三方」、「蹄疾集」、「飛鳥川」、「醍醐隨筆」等あり、「醍醐隨筆」は寛文十年に梓行せられたれども、ここに收めたるは余が藏するところの抄寫本(文化年間)に依れり。

靜乃石屋

靜乃石屋二卷。平田篤胤が門人に講述せるものを筆録せる所なり、平田篤胤、通稱大角、初名元琢、又胤行、後ち篤胤と改む、大堅又眞菅屋、氣吹屋等の別號あり、本姓大和田氏、父名は詐胤、安永五年八月二十四日出羽國秋田城下下谷地町に生る、幼時漢籍を中山青莪に學び、又叔父大和田柳元に就

て醫方を修む、寛政七年、歳二十にして繼母と不和なるの故を以て家を脱して江戸に出で、或は消防夫となり、或は俳優市川團十郎の弟子となり、或は商家の炊夫となりて具さに辛苦を嘗む、寛政十二年備中杉山の藩主板倉侯の家士平田篤穩の知遇を受け、遂に養はれてこの嗣子となる、享和元年始めて本居宣長の著書を読み古學を修むるの志あり、松坂に名簿を送りてこの門に入りしも其年九月宣長歿したるによつて親しく教を受るこゝ能はず、文化八年十二月駿河に寓して古史成文を撰び、又古史徴の稿を草し、爾來徒を集めて盛に古道を唱道せしが、この靜乃石室はこの年の正月に成れるものにして、篤胤が醫業を廢して専ら古道の唱道に力を竭さむとせる始なりき、文政六年致仕して板倉家を去り浪人となる、天保九年秋田藩主佐竹侯篤胤の篤學を聞き切に歸藩を望みしによりて、秋田藩士となり祿百名を食む、天保十一年幕府の忌諱に觸れて江戸を去り本國に歸る、同十三年九月十一日歿す、年六十八、秋田城北正洞院に葬る、明治十六年正四位を贈らる。

大正十三年九月

富士川 游記

東門隨筆



東門隨筆

當時醫流ニ古方家ト稱スル者其根源ヲ究ルニ享保ノ頃京師ノ大醫ニ名古屋玄醫トイフ者アリ此玄醫ハ後世家ニテ附子ヲ多ク使ヒタリ眼ノアキタル男故ヨク療治シタルトミエタリ又後藤左一郎トイフ者アリ生國ハ江都ニテ其コロハイマダ若年ナリシガ笈ヲ負フテ京師ニ來リ所縁ナキ故紹介モナクモトヨリ貧生ナレバ自ラ青銅壹貫文ヲ提束脩トシテ玄醫ガ門ニ入ラントトテ願エドモ其束脩入門ノ式ニ合ザル迎辭シ歸タルヲ左一郎大ニ憤リスデニ門ヲ出ントスル時フリカエリ目ヲ瞑シ今ニ此門流ヲ傾テ見スベシト大ニ罵テ出タルトヤカクテ日夜研勵シ内經ヲ初テ看破シ藥石病ニ利少キト云見識ヲ以テ溫泉熊膽艾灸藥餌等ヲ以テ取リ得タリ其人物豪傑タルニ因テ一家ノ大先生ト仰レ聲名日域ニアマテク中國西國ニテハ野老樵夫ノ輩マデ其風ヲ仰慕シテ名古屋ガ門流コレガ爲ニ傾廢シタリ是乃チ良山先生所謂後藤流ナリ其門人ニ香川太沖ト云モノアリテ師業ヲ唱エ自己ノ見ヲ加エ

東門隨筆

一本堂藥選行餘醫言ナド云書ヲ著シ四劑ト云者ヲ組ソレニ加減シテ諸病ニ配當シ自我作古ト云ヲ見ヲ以自ラ聖賢儒中ノ醫ト稱シ亦一家ヲナシタリ其爲人庸人ニアラザル故門弟モ多ク集リ良山ガ驥尾ニツキテ其聲籍甚サレドモ元來術能拙ニシテ後ニハ灸オロシノ様ニナリタリ當時ハ彼ガ門流モ髮ノ風バカリ殘テ誰カ箕裘ノ業ヲ繼者モナシ衰果タリ又同ジ頃ニ余ガ先人モ出タリ幼ナル時良山ニ朝夕シテ其說ヲヨロコビ後又張仲景ヲ主張シ大命ヲ奉テ外臺秘要ヲ翻刻シ晚年醫則ヲ著シ又官ニ請テ刑人ノ屍ヲ得觀臟シテ臟志ヲ著シ古今ノ大誤ヲ正シタリ良山ハ古方ヲ用タルニモアラネド世ニ此三人ヲ古方家ト稱シテ古方ノ醫流興隆シタリ又當時吉益周助ト云者出タリ此者元來安藝ノ産ナリシガ醫ニ志アリテ年四十ヲ過テ松原才次郎ト云フ醫ニ學タリ此才次郎ハ仲景ノ方ヲ取扱タル者ナリ周助ハジメハ師說ヲヨロコビ居タリ然ルニ徂徠ガ末流ノ儒生ニ從テ當世流行スル古文辭ノ學ト云者ヲ聞ハツリ尙書ニ云藥弗眩厥疾弗瘳ト云語ヲ聞テ前後ノ文ヲ考ヘズ一語ノ上ニテ醫道ノ要訣トシタ

リ蓋シ此語ハ納誨ノ刻苦ヲ見シメ姑ク其事情ニ類シタル者ヲ擧グルニテ古人必シモ瞑眩ノ藥ヲ服シタルニ非ズ又周禮ノ集毒藥以供醫事ト云フ見テ彌増ニ峻藥ヲ使ヒタリ此毒藥ト云タルハ後ニ瘍醫ノ職ノ所ニ五毒五藥ト云タルコトアリ其事ヲ初ニ毒藥ト一所ニ兼テ云タルナリ然ルニ前後ノ辨モナク淺見ヲ以テ眼目トシタルコト笑ベキコトナリ此レ全ク文盲ヨリ出タリコレヨリシテ才次郎トモ不和ニナリ自ラ一家ヲナシ論證不諭因命在於天醫何知死生ト云フ說ヲ立テ安ニ峻藥ヲ驅使シ人命ヲ誤ルコト許多ナリ就中生死ハ命ナリ人事ハ既ニ盡シタリナド云ヘル苟モ彼ダ言ノ如クナラバ死シタルハ醫ノ過ニモアラズサアレバ活シタルモ功ニナラザルナリ一切巧拙ノ論ハイラヌコトニテ周官ニ歲終稽考ノアルハ聖人ノ無益ノコトヲシタルナランカ自分ノ淺知ヲ以テ限リタルコト不届至極ナリ夫醫タル者ハ自分ノ技窮シタラバ辭スベキコトナリ行ツク所マデ行ト云コト一分ノコトハ格別大切ノ人ノ命ヲ任シタル醫ノ心ニアルベキコトニテハナシ扁鵲ナドハ病篤ケレドモ治スベキ者ハ治タ

リ可死者ヲ治シタルコトナシ元ヨリ死生ヲ決スルヲ以醫ノ事トシタリ故ニ史記扁鵲傳曰越人非能生死人也此自當生者越人能使之起耳又云使聖人預知微能使良醫得蚤從事則疾可已身可活也其他傳中ニ醫事ノ精良ヲ云タルニ死生ヲ決スルヲ以テ稱セザルハナシ又命ト云コトハ性命ノ命形氣ノ命ト二ツアリテ醫ノアツカル所ノ者ハ形氣ニ屬シ心ニアツカル者ハ學士ニ屬スルナリ此二ツノ者モ皆天ニ本歸シタリ大抵盡人事而後至者ヲ天ト云ナリ天人ノ際ハ庸人ノ知ルトコロニテハナシ究竟スル處彼自分ハ見エキドモ世ニ見ル者アレバ其所セツナキ故拙ヲ掩ハンガ爲ニ天コカシニシタルトミヘタリ今コトニ病人アランニ病人ハ死シテモ病ハ治リタルトモエルニ其鬼來ツテ天ニテ病治タルト云タルコト有ベキニヤ逆モ證據ナキコトナリ然ルニ人事ハ盡シタリト誰カ許シタルヤ皆自分ノ得テ勝手ニテ道理ニ戻リタルコトナリ又彼ガ著述ニ醫斷建殊錄醫事或問藥徵方極類聚方ナド云モノアリ白面ノ徒吠聲ノ輩ヲ蟻附雷同シテ古醫道ナリト思ヒ其マテヲシテ人命ヲ誤ルコト數限モナク遂ニ罪

ヲ古方ニ歸シタリ元來周助庸人ニアラザレドモ中年ヲスギテ醫ニナリタルコトナレバ中々精細マデモナク漸ク一家ノ說ヲ立タル計ナリ幸ニ時ノ之ヲ受テ碩老ト推シ簡様ノ殘忍ナル醫流ヲ弘ルコト所謂日暮途遠倒行逆施スル者トイフベシ誠ニ時運トハ云ナガラカ、ル胆僧ニ出合タルハ斯民ノ不幸ナリ彼ガ門人ニモ少々才藝アリテ高弟分ノ者ハ今ニテハ師說ヲトラズ自分ノ見ニテ療理スル者多クアリ誰ニモセヨ少ニテモ才智アル者誰カナガク其說ヲ信ゼンヤ今ニテモアレ周官ノ如ク醫師ト云者ヲ立テ醫ノ政令ヲ掌ルコトアラバ手始ニ彼ヲ鬼録ニ載センモノヲト思フコトナリ。

一、中華ニ古方後世ト云フコトハ云ハズ元ヨリ古方ハ悪ルキト云タル者ナシ近世ノ如クニツニ分レタルハ世ノ變遷必然ノ勢ニテ醫道ニ限ラズ儒學モ同様ナリ。
本朝ニテハコノ四十年來後藤良山出デ、宋後ノ說ヲ破リタルヨリニツニ分レタリ其所以ハ補瀉ノ說ヨリ出タリ五十年前以前人參附子ヲ妄リニ用ルコト時行

レテ強陽滋陰ノコト盛ナリ此弊ヲ良山看破シテ一家ノ說ヲオコシタルナリ又當時古方家ト稱スルハ吉益ガ徒ニ限ラズチト六ケシキ病ト見レバ妄リニ大黃巴豆甘遂輕粉ノ類ヲ配スルモノアリ譬バ隣家ノ夫婦喧嘩ノ取シヅメニ行トテ馬ニノリ甲冑ヲ帶シ楯ヲツキ槍ヲ提タルニヒトシイカニモ裝ハ具リタレドモ事柄不相應ナリ其人本ヨリ上手ナラチバ狂人ノ刃ヲ持タルニ同ジオソロシキコトナリ又後世家ト稱スルモノ、所爲ヲ見レバ錐鑿刀鐮バカリヲ以テ家ヲ作ラントスルガ如シ鋸斧類モナケレバ大段ノ裁斷ナリガタシ各其使ヒ處アリテ其用ヲ假サヌモノナリニツトモ不自由ナル工匠ト云ベシ。

一、後世家ト稱スル療理ハ大カタ万病回春ヨリ出タリ此作者龔廷賢ハ補益ノコトヲ盛ンニ云タル男ナレドモ巴豆大黃輕粉ハ元ヨリ砒礬ナド云オンロシキ物ヲモ多ク使ヒタリ去ニ依テ沉痾痲癩ヲ善療シテ上手ト呼レタリ然ルニコノ書ニ依テ療理スル人大黃サヘモ蛇蝎ノ如クオンレタマノ用ルモ酒製ニシテ一分ハカリヲ底ニシタリソレ故沉痾痲癩ハ固ヨリ急劇ノ

病ニ臨テ手ヲ束ルコト毎時ナリ此全ク回春流ニシテ
 回春ヲ知ラスナリ吉益ガ峻薬ヲ驅使シテ人命ヲ誤ル
 ト病人ノ死ルニ至テハ平峻ノ違バカリニテ拙キハ同
 ジコトナリ其外宋後ノ名醫ト稱シテ諸醫ノ規則トス
 ル輩何レモ峻薬ヲ使タルコト方書ニ見エタリ連モ峻
 薬ヲ使フコトヲ知ラテバ沉痾痲急劇ノ病ヲ療スル
 コトナラス故名醫ニハナラヌナリ畢竟後世家ト稱
 スル醫ハ骨ヲ折テ穿鑿セザル故其技精細ナラズ惟峻
 薬ハオソロシキ物トノミ覺エタルハ病人ノ爲ヲ思フ
 ニハアラデ我身ヲ大事ニカケ譏リヲトラヌ様ニスル
 故ナリソノ譏ヲ取ラヌ様ニトナラバ良師ニ親炙シテ
 能キ鑿本ヲマノアタリ見テ夙興夜寢研勵精セバ自
 然ト上手ニナルベシ兎角我ト云フモノガ先ニ出ルト
 得手勝手ガイヅル故何事モ成就セズ聖釋ノ教モ我ヲ
 出ダサヌ様專トスルナリ昔紀國守ト云ル典薬アリケ
 ルガ其頃春宮ノ御腹疾ヲ療スルニ芒硝黑丸ト云劑ヲ
 調進シタルニ以テノ外眩暈マシマシ御惱シキリナル
 ユヘ武士國守ヲ帶刀ノ陣ヘ引立行キ刀ヲ抽キ胸本ニ
 指アテ、万一不可諱ノコトアラバ殺害スベキヨシ云

罵タルニ程ナク穢物升餘ヲ御瀉下有テ年來ノ脚腹疾
 一時ニ除キタリ依テ篤ク御褒賜アリタリ國守家ニ歸
 リ親族ヲ集テシカミノコトヲ語り家傳ノ書ヲ取出ダ
 シ悉ク燒ステ子孫ニ至リ永ク醫ヲナスベカラズト戒
 タルコト古事談ト云書ニ見エタリ昔ハ至尊ニサエモ
 我ヲ忘レテ劇劑ヲ進タルコトアリシナリサレバ國守
 ノ醫ヲヤメタルハ不得已事ナリ典薬ノ職ハ精妙ノ技
 ナラデハ難キコトナルニ近世醫道衰タル上ニテ其職
 ニアルナリ良工ナキハサモアルベシ國守ニ懲タルト
 見エタリ歎ズベキコトナリ。

一、當時古方家ト稱スル輩汗吐下ヲ第一トオモエル
 ハ僻ガコトナリ汗吐下バカリニテ療治ノナルモノニ
 テハナシ云ワデモシレタルコトナレドモ假初ニモ汗
 吐下ノ三方ナド、イエバ白面ノ諸生ハ其所バカリニ
 目ヲ付ル故謬失スルコト多キナリ張戴人ガ吐下汗齊
 ク行ト自慢ラシク云タルハ名家ニ似合ズ愚ナルコト
 ナリ凡吐ヲスルハセツナケレバカナラズ汗モ出ルナ
 リ吐スレバ必然ノ勢ニテ下ルモノナリ此ハ吐薬ヲ用
 キタルニモカギラズ食アタリナドニテモ毎事アルコ

トナリ無益ナルコトヲコトノシク云タルハ偏狭ナ
 ル氣性ユヘ一家ノ奇說ヲ立ントテ後世ノ笑資ニナル
 コトヲ知ラザルナリ越前府中ト云フ處ニ奥村良筑ト
 云醫アリタルガ此オトコ豪傑ニテ微賤ヨリ出デ名ヲ
 近國ニアゲタリ張子和信仰ニテ其人物魁顔美髯子和
 ガ再來ト云ホドノ顔色ナリ吐方ニ精故余弱年ノトキ
 父命ヲ受テ彼地ニユキ親炙シテ其法ヲ授リタリ越前
 ノ瓜蒂ハ鼠瓜谷川筋甜瓜ト上中下三品アリ他邦ニ無
 キ所ノ物ナリ蒂ノ苦キニ良筑其地ニ出タルハ奇遇ト
 云ベシ此翁療治子和カ流義故兎角偏狭ナリ故ニ面白
 カラザル所アレドモ一體骨ヲ折タル者故長シタル所
 ニハ益有ルコト多シ。

一、本邦近世ニモ名醫ト稱セラレタル人數多アリ皆
 宋後ノ療治ヲ取タルモノナレド一體骨ヲ折タルモノ
 ユヘ格別ノコトドモアリ甲斐ノ徳本ナドハ全ク諸州
 ヲ遍歴シ草間ノ遺方ヲ得テ實驗ニテ編タテタルモノ
 ナリ文盲ニアリシヤラン大ナル所エ目ガツカザル故
 無盡藏カギリニテ仕舞タリ遺憾ナルコトナリサレド
 モ其書面白キコト多シ。

一、古方ハ多ク單方ヲ用ヒテ療シタリ總ジテ古方ノ
 粹ナルハ七八味ヲ限ルナリ其余十味ニ過タルハ多ク
 ハ晉唐ノ方ナリ傷寒論要略ナドニモ晉唐ノ方雜糅シ
 タル趣見エタリ其多味ナルハ皆末症ニ拘リ煩冗ニナ
 リタルナリ其多キ中ニテ何ガキヤラ分ルモノニテ
 ハナシ單方ハ一二味ノ去加モナラスヤウニ急度工合
 シタルモノナレバ自然ト其利ク筋毛明了ナリ總ジテ
 大切ノ評議ニ多人數ヲヨセテ決定セントスレバ必各
 異見ヲ立テ、小田原評議ニナリ肝要ノ事ヲ取ハツス
 モノナリ各無分別ヲ云計テモアラテド其時ノ間ニ合
 ス了簡ハ皆無益ノコトニテ好キ思慮モ却テ相談ノ邪
 魔ニナルナリ藥方ノ多味ナルモ藥性互ニ相妨テ肝要
 ノ藥鈍クナリ邪毒ヲ制スルコト出來ヌ故古方ノ妙訣
 ナルハ單方ニアルナリ此ニツキテ話ノアルナリ近衛
 基熙公ノ御方ニテ冬ノ頃歌ノ御會アリケルトキ御障
 子ノ明キテアリシニ折フシ寒風烈シカリケレバ若御
 所近習ノ人ヲ召テ寒キホドニ其障子ヲサセヨトノ玉
 ヒシヲ御會果テ後基熙公人シテ仰入ラレケルハ最前
 障子ヲタテサセラレタル時ノ御言葉口惜ク承リ候向

後御心得アルベシト御異見有ケルトカヤ若御所此コトヲ解シ得玉ワズ或醫師ノ隔ナクマイリタルヲシテ醫師ノ心得ナルヤウニシテ問セラレケレバ大御所仰アリケルハ凡ソ障子ナド明キテアランハ障子トイエバサスベキナリサシテアラントキモ同ジカルベシ塞キホドニ障子サセヨトノ玉ヒシコト敷嶋ノ道ニ携ル人ノ言葉ニハ無念ナリ和歌三十一字ノ中ニ左ヤウノクトク敷言葉多クテハ歌ニナラヌモノ故ニ向後ノ爲メヲ思ヒ申シツルナリト仰ラレシトヤ有リ難キコトナリ後世方ノ如ク無クテモ濟タルモノヲ用ルハ上工ノ技トハ云レザルナリ總ジテ古方ニモ煩冗アルハ後世ノ意味アリ後世ニモ簡粹ナルハ古方ノ意趣ニ異ナラズ此二ツハ古方後世ノ分レナリ凡病ニ古今ナケレバ道ニモ古今ナシサスレバ其病ニ其藥ヲ配適スルコト醫ノ技ナリ奇驗ナル方ナレバ田夫野人ノ傳ニテモ誰人ニモ用ルコトナリ別ニ古方後世ノ肩臂ヲ張ルコトニモアルベカラズ畢竟藥品古今ノ變遷ハ必然ノ理ニテ男女ノ髮容衣服ノ製カワリタルモ同ジコトナリ古方後世ト分レタル上ニテソレヘ目ヲツケ門戸

ヲ張ル故其習染偏執ニナリテ自然ト匙劑圓通ナラズ當時ノ醫人吾知ラズ皆此巢穴ニスタリ兎角斯道濟世利物ノ所業ト云コトヲ忘レヌガ肝要ナリ。
一、古人ハ病ヲ療スルヲ攻病ト云ヘリ攻ノ字義ハ玉工ノ攻玉トイエルト同ジ義ニテ其危惡ナル處ヲ磨テ明徹ナル處ヘ至ントスル義ナリ攻城攻伐ノ義ノ如ク勢ヲ持テ見ルニハアラズサレド攻城モ人數ヲ以テ城ニ附キセリ合テ其内エ入テ思フ處ヘ届リ止ラントスルコトニテ攻玉ノ攻ト義相通ズルナリ唐ノ元行中ガ言ニ凌朮以攻病ト云タルコトアリ人參白朮ニテモ病ヲ攻ルト云ルハ病ニ藥ノ氣ガ親ク附テ病ヲ除キ中ヲ清クスルコト玉ヲ攻ズル心持ニ同ジケレバナリ總ジテ食用ノ外ニ體ヲ養フ物ナシ其多キ中ニモ木ノ實ナドハ淡白ナル故體ヲ養フコトハ不足ナリ米肉ノ二ツニハ過ズ況草木金石ハ皆病ヲ除キ去ルノ具ニテ體ヲ長シ肌肉ヲ生ズル者ナラズ此コトハ古人モ云タル者アリ病サエ除ケバ自飲食進ナリサスレバ諸經ノ流行順和シテ自然ト肌肉ヲ生ジ健強ニナルナリ病モナキニ參附朮茶ハ補藥ナリ連服シタランニハ口ニ適ワ

ヌ物ニテ却テ臟氣ヲ傷ルニ至ルベシ無益ナルコトナリ兎角病ヲ除クニセ緩急進退持重スルコト有テ其權宜ニ從フコトナリ此ヲ會得セヌ者ハ如何様ノ良方ヲ知リテモ上手ニハナリガタシ當時醫ノ尊崇スル物人參ノ上ニ出ル物ナシ補藥ノ最ト思エバナリ然レドモ空腹ナルニハ握飯一ツニモ及バズ此體ヲ養フ物ナラズ故ニ總ジテ古人ノ參ヲ用ルハ開鬱痞下氣逆ヲ目當ニ用テ降氣ノ聖藥ナリ故ニ仲景人參ノ入タル方ニ瀉心ノ名アリ然ルニ宋後ノ醫人補藥ヲ用テハ元氣ヲ升提スルト云コトヲ云ヘリ後ニ此升提ノ義ヲ取テガエタルヨリ瀉心ノ義モ一反セルコトナリ始ニ升提スルト云出セル人ハ心下ヘ物ノ支結スルカ攻刺スルカ何レニモ心臓ヲオカス物アリテ心氣ノ沉鬱セルヲ除去ガ故ニ心氣降リテ元氣故ニ復シ爽然タル所ヲ外ヘ升發シタル意ヲ升提ト云タルナリ下陷トイエルハ元氣下部ヘ陷タルニハアラズ内ニ斂タルナリ此趣ヲ了解スレバ瀉心ノ義明白ナリ抑人ノ病ハ何病ニヨラズ氣逆スル者ナリ氣ノ下リテ病ト云コトナシ長病人ナドノ水腫下部ニ多ク有テ指ニテオシタル跡ノ不起ナ

ドハ元氣ノ下陷ナリト見ルベケレドモ此ハ其人長病ニ體レ心氣衰エ一身ノ氣虛乏ナルニテ上逆ノ勢ニテ水ヲヒキ上ル程ノコトモナキユヘ水ハ就下ノ物ニテ下部ニタマリタルナリ元氣ガ下ニバカリ陥リテ有ルト云ニテハ無シ又腫滿シタル病人死ル一兩日已前ニ面部ノ腫無クナルコトアリ此モ死ルホドノコト故元氣虛脱シタルナリ凡病篤漸ニシテ凶危ナルハ皆氣急痰喘冷汗手足寒直視上竄等ノ症出ルナリ此中ノ症一ツモ出ズシテ死スル者ハナシ或ハ老人ナドノ天年ヲ終テ死ルハ右ノ症ナクテモ死スルモアレド連モ療治事ニテナケレバ論ズルニ及バズ總ジテ心下エ物ノ結聚スレバ心氣塞ル故精神沉乏スルナリ其筋ヨリシテ又恠悸怔忡等ノ症出ルナリ此等ヲ俗ニ引ズリコムヤウナリト云ヘルヲ人參ナド用テ體ヲ開キ氣ヲ下ス故ニ心氣舒暢シテ精神爽然タルヲ頭ノ方エ升提シタルト覺タルカ可笑コトナリ近頃或儒生長崎ニ遊ンデ華人ト筆談シタル序ニ人參ヲ服シテ上逆スルト云コトヲ語レバ華人拍掌シテ笑シ故其子細ヲ尋タレハ人參ハ甘草附子ノ汁ヲ以製スル故附毒ニテサアルナリ和

人ハ此事ヲシラザルニヤト云シヨシサアレバ古人ノ人參ヲ服シテ上逆スルト云フコトヲ云タル書ヲ見ズ本艸綱目ナドハ精物ナレド其言ナシ韓種ノ人參生干ノトキハ甚苦味アリ今時ノ韓華渡來ノ甘味ナル物ニ似ズサレバ渡來ニモ至テ上品ハ苦味ヲ帶タリ又ハ製造ヲ經テモ日光御種人參苦味有テ甚效アリ本邦芳野産ノ苦烈ナルハ又一種ナリ源ノ順カ和名集ニ人參ニ和名久麻乃伊ト附タリ其苦味ト下氣ノ功頗ヒトシキ故ナリ予十七八歳ノ頃平生痰血ヲ患ヒ一歳ニ四五度モ茶碗ニ半分許ヅ、吐血シタリ其發スルトキハ冷汗出脈モ無倫痰血咽喉哮喘シテ如鋸アリシガ初ハ生地黃汁生藕汁童便ナドヲ用タレドモ屢連湯ヲ服スルニシカザル故ニ毎ニ人參ヲ用ヒ功ヲ得タリ若氣ヲ升提スル物ナラバ吐血ニ用ヒハ彌上逆甚カランニ此ヲ用テ氣ヲ下シ血ヲ止タルコト屢ナリ其外積ニハサシヨミ直視シタル病人ニハ人參ナクテハ療ガタキモノナリ其外下氣ニ用タルコト古今トモニ同ジ適下氣シテ治シタルモ升提シタルト覺タルハ功能ヲシラテバナリ古今醫道ノ相違此一ヲ以テモ知ルベシ近世和華ト

モニ藥ノ製造煩多ニシテ取分ケ人參ハ人ノ尊ブ物ユヘ其形狀ヲ好美ニセント種々ノ細工ヲスル故藥性鈍クナリテ病ニ利少シ人參ニ限ラズ諸藥トモニ山野ニ其物ヲ生ズルハ天然ト其氣凝テ其性ヲ具タル物ナリソノ天然自然ニククワエタル氣ヲ人作ニテ損傷スルコトイワレナキコトナリ譬バ才智アル膂力モアラシ人ニ酒ヲ飲セテ沈醉セシメ久シク湯ニ浴セシメ或ハ束縛シ或ハコ、カシコヲ切ハツリナドシテ而後ニ其人ニ大切ノコトヲ任用スルニヒトシ斯クシテ其人功ヲナスコトアルベキニヤ理ニ疎キコトナリ其外古今トモニ炙炮炒熬煨等ノコトハ品ニヨリテハ藥性ヲ銳發スルコトモ有ル故ニスルコトモ有ルナリサレド近世ノ製造ノ精ニ過タルハ頑婦愚婆ガ兒ヲ愛スルトテ甘味ヲ過テ疔ヲ病シムル類ナリ習染流凡トハ云ナガラ盲昧ナルコトナリ且又當時渡來ノ韓參ハ甚稀ニテ皆華參ナリ此鑒定モナクウカノト用來レルハ無念ナルコトナリ。

一、甘草ハ諸經ノ藥トシ功用廣キ物ユヘ古今トモ多ク用タリ然ルニ今時ノ醫甘草ハ耳搔ニ一杯ホドナラ

デハ入レズ是ハ何レノ時代ヨリノ風儀ナルニヤ奇怪ノコトナリ本草綱目ナドニモ人參ナドヨリ前ニ出デ草ノ部第一タリ其故國老ノ名モアリ後世家ハ滋陰強陽トイフ事ヲ物ニ目ニハ云ニカ、ル功能有ル物ヲ用ナガラ其穿鑿ナキハイカマナル事ニヤ地黃ナドハ補血ノ物ニテ地黃ガ直ニ血ニナルト覺タル醫多シ左ニテハナシ亡血ナドノ症ニ利アルハ其亡血スル由縁ヲ治スルナリ夫故破血ノ症ナクテモ男女ノ瘀血病ニ地黃ヲ用ルハ血ヲ行スル爲ナリ其滯ル譯ケサエ治スレバ本分ノ氣ニテ血モ生ズルナリ人參ノ直ニ元氣ニナルト覺タルト同ジ間違ナリ其他金匱要略ニ大黃廣蟲丸ニテ緩中補虛スルト云タリ尤婦人ノ瘀血病ニ用タル方ニテ桃仁芍藥杏仁甘草乾地黃大黃黃芩乾漆蟲蟲水蛭蟻廣蟲ケ様ノ物組合テモ緩中補虛ト云傷寒論勞復篇ニ病後虛羸不足ナド云處ニ竹葉石膏湯ヲ用タリ石膏ナド當時人ノ畏ル、物ナレド古人ノ病ヲ治スル必シモ參茸朮當歸地黃附子ニ限ラズシテ補虛スル意ナリ石膏ハ解熱下氣ノ物ニテ内外ノ熱病共ニ古今用タリ畢竟石膏ハ寒瀉ノ藥ニテ強陽ノ物ナラズ

ト愚醫ノ畏ル、コトナリ陽サヘ強クスレバ人ハ健ナル物ト覺ヘタルニヤ死レバ冷タフナルヲ見テ此見アルカ病ハ變ナルニ常ヲ以論ズル故愚癡ナルコトモ出ルナリ病人ニ對シテ不足アルユヘ補フテヤルト云ヘバ結構ナル藥ヲ用ルナラント喜ブ故其所ヲ以テ醫ノ所得トシタルナリ貪鄙ナルコト齒牙ニ掛ルニタラズ穢シキコトナリ世ニハ地黃人參ナドヲアテニシテ色ヲ貪ル人有其人極テ驕竭ヲ病ムナリ何程地黃人參ヲ服シタルトテ一身ノ量ヲ過テハ病スト云コトナシ地黃ノ血ニナリ人參ノ氣ニナル物ナラバ色欲ハ人ノ第一ノ欲ナレバ富豪ノ人ニ驕竭ハ無キ筈ナリ或ハ又病氣モナキニ養生藥ヲ服スル人ハ雷ガ落テヤウカトテ晴天ニ蚊帳ヲツルニヒトシキナリ此等ハ知レタル理ナレドモ其本分ラザル故ケ様ノコトモ有ルナリ。

一、聖教竝ニ醫道トテモ古今ノ差別ハアルベキ筈ハナケレドモ秦火以來聖人ノ書散逸シタル故漢儒ヨリシテ其義ヲ取失ヒテ天地人ノ本ヲ窮タル易學大キニ乖戾シタル故陰陽仁義ノ解古今判然タリ是故ニ醫道ノ陰陽モ自ラ舛差出來テ古聖人ノ本意ヲウシナイタ

リ内經ヲ唐王永ガ説ニ偽書ナリト云リ然ドモ其文辭
秦漢ノ間ニ出デ、古醫ノ道多ク存シタリサレド其事
柄深奥幽微ナル故明識ノ人ナラデハ辨別スルコトア
タハズ蓋代々ノ醫人モ此書ニ原カザルハナシ仲景モ
此書ヲ尊信シタルト見エタリ全體醫業ハ人ノ腹中ヲ
察スルコト故甚難キコトニテ凡庸ノナスベキ事ニハ
アラズ是良工ノナキイワレナリ易學蔽隠シテ代々ノ
醫人諸説紛興シタルモ無理ナラヌコトナリ後漢ノ郭
玉ガ醫ハ意ナリト云タルハ鍼醫ナレバ左モ有ベシ此
書ヲ以テ疾醫ノ口實ニシテ幽微ノコト故口外ナリガ
タキヲ以テ意ナリト云ハ實ハ暗昧ナルコトナリ凡耳
目口鼻ノ具タル人間トシテ頑愚ナルハイザシラズ中
才タリトモ心中ニカクナシメト思ヘルコトノ大抵
口外ナリガタキト云コトナキモノナリ口外ナルベキ
程ノコトナラバ筆ニモ任セラルベシ其出來ヌハ不辯
舌拙筆ト云ベシ全體口外ナラヌト云ハ多ハ心理ニ明
ナラヌ故ナリ兎角醫ノコトハ著實ナルガヨシ少シニ
テモ紛ラシキハコトハ云ヌガヨシ一ツヲ以テ夫ヨリ
割出シテ行物ナレバ其本毫釐チガヘバ末ニテ千里差

ト云畏レアル故實驗ヲ以テ本ヲ立タランハ不朽ノ道
具タルベシ。
一、凡心ハ一身ノ主宰ニテ此氣ヲ以テ諸臟ヲ行ル物
ナレバ此氣ダニ盛ナレバ先ヅハ凶變ナキ物ナリ夫ト
モニ胎毒漏瘡瘵血蟲瘕血塊ナド増長シ或ハ宿食杯ヨ
リシテ心ヲ病テモ血液耗損或ハ衝心入胸或ハ膨脹緊
滿ナドシテ精神困沉ニ至リ死スルナリ中寒傷冷或ハ
虵厥ナドニテ心氣ヲ閉テ手足冷汗洞泄完穀不化嘔
吐大渴舌黑囊縮煩悶昏沉シテ絶脈ニ及ベル症ニ四逆
湯虵厥ニハ甘草粉蜜湯ナド用ユレバ十二八九ハ瘥ル
物ナリ斯症ハ外寒或ハ痲積或ハ虵蟲ナドニ心氣ヲ閉
ラル、故ニ心氣一身ヲ守護スルコトヲ得ズ故ニ手足
モ冷テ脈モ絶スルナリ且心氣鬱閉スル故舌モ焦レ瀉
下スル故大渴モスルナリ冷汗ノ出ルモ皆心氣ノ縮ル
故ナリ卒ニ驚怖シテ冷汗ノ出ルト同理ナリ脈ノ少シ
應ズル者ハ手足モ少シ温ナリ箇ヤウノ病症ハ心氣ノ
舒縮ニテ輕重アルナリサテ附子ハ強陽ノ物ニテ補藥
ノ最ト人々覺タリサレド漢ノ霍后ノ産後ニ飲セテ毒
殺シタルホドノ畏ロシキ物ナリシカレトモ病ニノゾ

ンデハ反テ良藥トナルナリ仲景附子ヲ用ルニ強人ニ
ハ多ク用ヒ羸人ニハ少ク用タリ今時ノ用カタトハ相
反セリ畢竟スル處補ハ補綴ノ義ニテ不足ノ處ヲ補フ
コトナレバ病ヲ治シテ其人ヲサヘ健強ニスレバ大黃
巴豆甘遂輕粉ノ毒烈ナルモ補藥ト云ベシ參朮朮朮ノ
類其性平和ナル物計ハ傷害ナキ故補藥ト心得タルハ
淺陋ノ見ナリ上手下手ニヨリテ補藥モ毒藥ニナリ毒
藥モ補藥ニナルナリ畢竟病ハ邪惡ナリ其形勢次第ニ
テ此方ニモ平峻ノ配劑アルコトナリ韓信彭越黥布ノ
輩ミナ梟將悍士ナル故破強秦滅項羽役ニハ立タレド
モ治國ノ人物ナラヌ故高祖ノ深慮アリテ皆禽殺セラ
レタリ蕭何陳平張良ナドヲヨク使ヒ分タルハ高祖ノ
神醫ト云ベシ大病ト云ヘドモ必峻劑ニテ治スルモノ
ナラズ只其時宜ニヨルナリイカニ利ク物ナレバトテ
巴豆甘遂輕粉ナドヲ長服スレバ臟氣傷虛シテ花ノ萎
ムヤウニ死スルナリ凡文武ノ道弛張アルモ此理ニ同
ジ其理ニ背タル者韓信彭越黥布ガ輩兇猛ノ人多ク終
ヲ能セザルハ好キ止メ時分ヲ止ヌ故却テ我が技能ニ
テ我體ヲ亡シ折角シタル功モ烏有トナリタリ此類和

漢トモ多キコトナリ周物ハ鈍ナルヤウナレドモ敦厚
ニシテ漢家ヲ安ジタルハ此男ナリ此レ調理ノ劑ヲヨ
ク用ヒタルナリ文帝ノ代ニ至リ養生ヲヨクシテ置レ
シヲ武帝ノ世ニナリテ神佛ヲ好マレシハ厚味ノ過タ
ルナリ夫故塊癖ヲ生ジ常ニ病アリ又漢北ニ兵事止ズ
シテ府庫空クナリタルハ色欲ノ過タルナリ此ニ由テ
天下虛耗シタリ此二ツヲ以テ漢家傾初メタリ兎角人
ハ養生ヲ第一ニシテ心氣ノ動散セヌヤウニサヘスレ
バ自然ト長壽ヲ得ル物ナリ藥ハ變ニ用ル物ニテ常ニ
用ル物ニアラズ變ノ中ニモ緩急輕重ヲ計リ弛張ノ機
會ヲ失セズンバ自ラ功全カラシ。
一、三稜鍼ヲ以テ毒血ヲ取ルコト内經ニハ數多見エ
タリ故ニ代々ノ名醫モ皆オコナヒタリ降テ明ニ至リ
テモ龔廷賢ナドモ行ヒタリ就中近世郭志遠ガ痧脹玉
衛ト云書ヲ著シテ三稜鍼ヲ專ニ行タリ今時ノ醫人痧
病ト云コト不穿鑿ニテ吾邦ニハ無キ物ノヤウニ思エ
ル故其書ヲ知ラヌ人モ多シ畢竟痧ハ沙毒溪毒ナド古
人ノ云タルト同ジコトナリ山溪ノ間偏僻ノ地ノミア
ルニモアラズ中原都會ノ地ニモ平生アル物ナリ志遠

ナドモ外來ノ物トノミ心得タルト見エタリ是ハ大ニ
 說アルコトナリサレバ其治術ハ精シケレドモ人々中
 原ニハナキ物ト心得テ怪テ其說ヲ取ラズ夫故其書世
 ニ行レザルナリ俗ニ早疫癘ト云カ即痧病ノ一症ナリ
 全體外來ノ毒ニテハナク一身ニアル瘀血ノ上逆シテ
 項肩ニ凝リ心氣ヲ塞デ精神昏沈スルナリ其故此療治
 三稜鍼ニカギラズ天頂額上舌下ノ青筋脣肩項ナドモ
 刺テ紫黒血ヲ取レバ其效神ノ如クニシテ早速癒ル物
 ナリコレハ三大都ナドノ人ハ知ラヌコトニテ田舎ノ
 人ハマ、知リタル者モアリ其外北國廻リノ船ナドハ
 度々此病ニカ、ル故案内知リタリ畢竟北方ハ陰地ニ
 テ山嵐溼氣ノ人ニ中ルコト烈ナル故瘀血ノ多キ人此
 氣ニ感ジ易ク内外相感應シテ發スル病ナリ因幡ニ
 七類ト云浦アリ此浦ハ港ユヘ海入込テ山ニテ環抱シ
 タル所ナリ此地ニ俗ニ豆嘴ト稱スル病アリ其初發ス
 ル忽寒熱頭疼如破顔色如丹大渴譫語狂躁悶亂ニ及デ
 一二日ニシテ死スルアリ土人案内ヲ知リタル故其病
 ト見レバ早速大豆ヲ嘴セ試ルニ大豆ノナマ臭キヲ覺
 エズサアレバ直ニ額ヲ何ニテナリトモ切リサケバ紫

黒血出デ、二三日ニ痊ルヨシ此ニヨリテ其土人額上
 ニ刀瘢アル者甚多シトナリ其近里ノ人ニ聞エタリ此
 レ沙溪毒ノ類ナリ又内因ヨリ出ル瘀血上逆ノ病ニ志
 遂ガ云處ノ症甚多シ古人卒倒氣絶ノ者ニ鍼刺シテ毒
 血ヲ取り治スルコト多シ此皆志遂ガ云痧ナリ其他大
 抵瘀血ヨリ出テテ上部ニ逼リ頭項肩背耳目口鼻ノ病
 心痛嘔逆腕臂胸腹腰膝脛ノ痛結核癭瘤癩癬脚氣或
 ハ腹裡拘急癱瘓硬強彎急久瘡疫熱喘嗽惡瘡產後諸病
 等ニ鍼刺シテ毒血ヲトルコトハ内經以來代々ノ諸名
 家必シモ外因ノミニヨラズ此等ノ病内毒ヨリシテ
 一身ノ氣順行セズ故ニ血モ不流シテ瘀滯積血トナル
 ナリ回春ニ云青筋ノ症皆瘀血上攻ノ病ナリ其他溫鍼
 燒針等ハ其法傳レドモ誰モ面ノアタリ施ス人ナケレ
 バ習得タル人モナシ三稜鍼ハマ、行フ人アリテ其術
 傳レドモ其人良醫ナラザルユヘ兪粗ナルコト多シ偶
 效アレドモ人懼テ信ゼズ三稜針ノ效ハ筋合ニヨリ藥
 ヨリモ神速ナルコト多ク醫タル者ノ知ラズバナラヌ
 物ナレドモ其術廢絶同様ニナリタルハ紫黒ノ毒血ニ
 モセヨ血ノ出ルコト故人ノ懼ル、コト餘義ナキコト

ニテ醫モ之ヲ憚リ心中ニハ施タク思ヘドモ兪角我ト
 云物ガ邪魔ニナリテ云出スコトサヘ遠慮スル故自ラ
 行フ人少クナリ果タリ牛馬ノ療治ニ針刺テ血ヲ出ス
 コト甚多シ即效アルコトニテ刺サレバ忽死スルナリ
 定メテ牛馬モ好モスマシキナレドモ套架ニ繫レ動カ
 レヌ故是非ナク針ヲ受ルコトナリ此モ牛馬同士ガ針
 スルコトナラバ懼レテ其術廢レンナレドモ人ノスル
 コト故止ムコトヲ得ズ針ヲ受ルユヘ術モ傳リタリ南
 都ノ天滿ト云所ニ大ナル鳥屋アリ此主人鳥ノ病ヲ療
 スルニ針ヲ刺シ灸ヲスヘテ治スルナリ甚上手ナルユ
 ヘ大阪アタリノ鳥屋ナドヨリ大切ノ鳥ノ療治ヲ頼ム
 ヲシ先年南都ヘ行タルトキ右ノ鳥屋ニテ聞タリ此モ
 牛馬ノ針ヲ受ルニ異ナラズ療治ノ廣キコト枚擧スベ
 カラザルナリ灸灸トテモ全體皮ノ上ニ火ヲ置テ慘苦
 ナル物ナレド其效アル故人モ受ケ其法モ傳リタリソ
 ノ初ハサゾヤカマシク云タランサレド血ノ出ルホド
 ニハ懼ザル故流風習染シテ嬰兒マデモ賃ニ羈サレ辛
 抱スルナリ三稜針ニテ治シタル病人ハ血ヲ取ルホド
 心易ク早ク利ク物ハナキナリ灸ノヤウニアツクモナ

ク痛モセストテ悦コビ一切畏懼スルコトナシ畢竟懼
 ルモ命ガ惜キユヘト其大切ノ命ヲ全ク延シヤランニ
 豈畏ル、物アランヤ皆醫者ノ拙キユヘ俗人ニ惡ルキ
 癖ヲツケタルナリ近年東國ノ廻船安南ヘ飄流ノコト
 ヲ書タル書ニ彼地逗留中ニ水主ノ灸灸シタルヲ土人
 怪デ尋問フタルユヘ其效ヲ語リタレバ好事ノ者一人
 此ヲ所望シテスヘタルガ甚功能アリテ其所ノ土人其
 船頭ヲ甚尊敬シテ病人數多見セ灸治ヲ頼タルト云コ
 トアリ然レバ安南ハ未ダ灸灸ヲ知ラヌ所モアリシト
 見エタリ定テ其後ハ灸灸モ覺テ弘リタラン兪角物ハ
 踏込シテ見テ功ハナキ物ナリ紅毛人モ諸病ニ披針
 ヲ以テ血ヲトルマト有リ大抵其療治内經以來諸名家
 ノ中ニ針ヲ仕カケハヂキ金アリテ刺ス前ニハヂキカ
 ケ置針ノ出口ヲ刺ス所ヘアテ置ハヂキ金ヲオサユレ
 バカチリト云テ針下ルナリ此ノ如ク機撥ヲ以テ面倒
 ナルコトヲスルモ刺スコト拙キユヘ手ノクルワヌヤ
 ウニト思ヘバナリ然レドモ二三ノ取ベキコト有テ益
 ヲ得タリ此コトハ紅毛通辭吉雄幸左衛門ニ授リタル

者精ク傳タリ。

一、凡病二十ノ内ニテ一ツハ黒星ニ中ラテバ治セズ
 其次ハ的其次ハ縁矢其次ハ射梁ナドヘ中リテモ治ス
 ル心ナリトガ十マデ的ニ中ラテバ治セズト云物ニテ
 ハナシ輕病ニモ病ノズデニヨリ黒星ヘ的ナラデハ治
 セヌ物アリ病重キニモ縁矢位ニテ全ク瘵ル物アリ病
 ハ隨分正直ナル物ニテ藥ダニ利カバ治セント思ヘド
 モ醫者ガ治スマイミト療治スルコトアリ大抵上手ト
 呼ル、人ニテモ筋違イスルト得テハカヤウノコトモ
 有ナリ博學ト世人ノ稱スル人モ一向匙ノ動カヌ人ア
 リ文盲ニテモ氣轉アル人ハ治スルコト多シ學才揃フ
 タル上ニテ惟其筋合ヲヨク學タランハ本道ヲ行クユ
 ヘ志ザス所ヘ早ク至リツクベシ迷イ路ヘハイリタラ
 シハ行ケバ行ホド茨ノ中ニテ其内ニ飢疲シ力竭テ廢
 スルナリサルニ依テ良師ヲエラビ其誨導ニアイタラ
 シ人ニ其人驥足ナラバ成就セズト云コトアラジ凡弟
 子タル者ノ師ニ就テ學ブニ吾眼ニ師ノスルコト十分
 ニテ不足ナクンバ論無シ其内ニモ少シニテモ不足ナ
 リト思フコトアラバカナラズ師ノヤウニ成タシト思

フベカラズサアレバ入子ノ鉢ニナリテ其人師ヨリハ
 一トカサ少クナルモノナリ惟其實驗ヲ見テ其主藥ニ
 心ヲツケ數人ヲ見トマケ或ハ自カラ試タル上ニテ此
 藥ハカク利ク物ナルユヘ此筋ヲ以テ使ヒ博レバカク
 有ル病ニモ利クナント心ヲツクレバ古人ノ未發ノコ
 トモ出ベシ一藥ヲ以テ一方ヲ知リ一方ヲ以テ一病ヲ了
 解スベシ自然ト古人ノ意ニ符合スルナリ斯シテ其實
 功ヲ人ニモ語り必我一人ノ物ニセズ又誰カレニモ通
 交シテ吾道ニ益アルコトナラバ何國マデモ成ベキダ
 ケ聞出シテ飛耳長目ナランハ志ノ最上ナルベシ譬ニ
 云獵ハ鳥ガ誨ルトテ病カラ療道ヲ誨ルコトアル故ニ
 數十百人ヲ屢試スルニツキテ自然ト上達スル物ナレ
 バ輕症ナリトテ漠視スベカラズゾンジモヨラスコト
 ニテ發明スルコトアリ又其人ノ氣性ニヨリ何方ヘモ
 ツカス比興ナル療治スル人アリ自欺ト云ベシ修行ノ
 爲ニナラスコトニテ醫ノ大禁ナリ吾力ニ及バヌコト
 ハ人ニ渡シ如何ナルヤト急度眼ヲツケ受取タル者ガ
 アケヨクシタラバ其レヲ穿鑿シ強記シテ今度ノ用ニ
 立ベシ治ル病人ハ固ヨリノコトニテ死スル病人ニテ

モ急度稽古修行ニナルコトアリ總ジテ醫タル者ハ人
 ノ死様治様ハカクアル物ト云コトヲ知ベシ此二ツサ
 ヘ手ニ入バ生死ノ決斷自然ト明白ナルベシ此功ヲ積
 テハ勿論ノコトニテ取扱フ中ニモ十分ソシシタル
 コトハ峻擊ノ劑ト云ヘドモ其趣ヲ病家ヘ談シテ會得
 ノ上施スベシヒカヘメニテハ生涯大病ヲ治スルコト
 ハ出來ズ自身モ上手ニ得ナラス物ナリサアレバトテ
 見届モセスニ功ヲ貪テオボロゲノコトヲスルハ魔神
 ト云ベシ甚ダ醫ノ大禁ナリコジツケタルコトヲナサ
 デモ取扱フ間ニ修行ハ隨分出來ル物ナリ惟就木迄モ
 日進ノ心ヲ止メザレバ功ヲ一世ニ施シテ名ヲ無窮ニ
 垂ルベシ蜀諺ニ學者費紙學醫者費人ト云コトアリ
 醫タルモノ常ニ此コトヲ服膺シテ戒慎スベキコトナ
 リ。

來仲景ノ本文散逸シタルヲ後世ニテ補タルトキ姜棗
 ヲ入タルト見エタリ其證據ハ防己黃芪湯方後ノ文ハ
 右劉麻豆大每抄五錢匙生姜四片大棗一枚水盞半煎八
 分去滓溫服良久再服近效方朮附湯ハ右三味對每五錢
 匙姜五片棗一枚水盞半煎七分去滓溫服トアリ此二方
 方後ノ文例相似タリ宋後ノ方書方後皆此文例ナリ其
 上近效方朮附湯ハ白朮附子湯ト同方ニテ白朮附子湯
 ハ生姜一兩半大棗六枚ナリ方後モ右五味以水三升煮
 取一升去滓分溫三服覺身痺牛日許再服盡其人如冒狀
 勿怪云々トアリ三味ノ藥分量同ジクシテ姜棗水量大
 ニ相違アリ總ジテ古方ニ棗ヲ一枚用タル例ナシ元來
 鈍キ物ユヘ一枚ナド入タルトテ何ノ利モアルベカラ
 ズ入ヌガマシナルベシ其上片ト云タルコト甚粗ナル
 コトナリ古方ハ皆兩ト云ヘリ此等ハミナ後人ノ配劑
 甚精シキヤフニテ却テ麤粗ナルコトナリ古人姜ヲ用
 キタルモ後世ト使ヒ方ニ別義ハナケレドモ單方ニテ
 用ユルユヘ壹藥モ遊ブコトアリテハ利ナキユヘ姜棗
 ニ限ラズ分量精キナリ姜ノ功用ハ顯然タル物ナレバ
 贅スルニ及バズ古人棗ヲ用ユルコト寬中潤燥ヲ主意

ニシタル故ニ咳嗽渴嘔逆内熱煩自汗等ニ用タリ其
他諸方ニ棗ヲ用タルモ寬中潤燥ヨリ割出シテ用タル
ト見エタリ何レニ物トモ有用ノ物ナレバ古立方ノト
キ君臣佐使ノ中ヲ相持スルヤウニ急度組立置タルナ
ルベシ仲景亭麗大棗瀉肺湯十棗湯即葵丸以棗膏和湯
服ノ類利水ノコトニテハナク皆寬中潤燥ノタメニ用
タルナリ夫故心肺ノ病ニ用ル方ニハ多ク棗ヲ用タリ
甘麥大棗湯ヲ臙躁ニ用タルハ心肺ノ病ナラテ下是ニ
テ推知ルベシ吳茱萸湯ノ嘔スル者ニ用タルモ生姜多
キユヘ棗ヲ用タルニテハナク心胸ヲ利スレバ治スル
トミヘタル故嘔ニカマワズ用タル所古方ノ妙ナリカ
ヤフノ類古方ニ多シヨク味フテ覺悟スベキナリ總ジ
テ甘草生姜大棗諸方ニ多ク竝ニ用タルハコノ三物カ
相待テ能効ヲナセバナリサレド急ニ利カセ度トキハ
必シモ三味ナラベ用ヒズ其初メヨリ一ヲ以徑ニ病ヲ
攻ルコトハ向方ト緩急トニアルコトナリ姜棗水煎ナ
ド輕易ニ云置タル故今時後世家ノ醫人一盃半入一盃
ニ煎ズベシ或ハイツモノ通リニ煎ズベシ生姜一片入

ナト云ヘバ病家モ習染ニナリテ諾スルモ可笑コトナ
リ此全ク後世ノ臭氣ナリ又水量ノコトモ大抵人ノ堪
ルホドノ味ニ煎アクレバ事濟ムベケレドモ物ニヨリ
濃煎ナラデハ性ユルキ物アル故古人水量ヲ精ク云置
タリ去ニヨリ仲景ハ麻黃葛根茵陳蜀漆括蕒小麥葦
酸棗仁茯苓ナト主藥ニシタルハ諸藥ヨリ先ニ煎ジ又
大承氣湯厚朴三物湯竝ニ柴胡加龍骨牡蛎湯ノ大黃桂
枝人參湯ノ桂枝枳實薤白桂枝湯ノ桂枝薤白括蕒實其
他香豉ナド諸藥ヨリ後ニ煎ズル類其外膠飴蜜阿膠雞
子黃芒硝人尿猪膽汁地黃汁ノ類消化サヘスレバ宜分
ハ煎アガリテ後入ルルコトナリ皆古人精細ノ極ナリ
後世ノ精細ナルハ穿鑿スギテ煩冗ナル故却テ樞要ヲ
取失ヒタルナリ何ニヨラズ時々明識ノ人出デ、轅ヲ
正フセザレバ背馳スルコトアルベシ古人ノ書トテ中
ニ油斷ハナラヌ物ナリ。
一、小兒ノ胎毒ト云モノ初生ノ兒分娩間モナク口ヨ
リ黃色粘膠ノ物ヲ吐クアリ竝ニ大便ニ黑色ノ粘膠ナ
ルヲ通ズ此ヲ俗ニカニコ、ト云疳コ、ノ轉語ナリコ
コハ即糞ナリ疳病ニナル糞ト云コトナリ小兒ノウフ

着ニカントリ小紋一名カニ小紋トテ蔓生ノ草ヲ模様
ニ染ルコトアリ此草ハカキトオシト云草ニテ即チ連
錢草ナリ此草疳ヲ治スルユヘ此意ニテカヤウニツク
ル古實ナリカニ小紋ト云ヨリ蟹ヲ模様ニツクル人モ
アレドモ此ハ語ノ轉ジタルヨリ誤タルナリ扱此カニ
コ、藥ヲ用テバ一向通ゼヌモアリアマモノノ類ヲ用
ユレバ多ク通ジテ兒生長ノ上瘡毒ノ病少ナシ此アマ
モノハ俗ニマクリ或ハ海人草ナド云救荒本草ニ云處
ノ鷓鴣菜ナリ此カニココハ乳ヲツクレバ藥ヲ用ヒサ
レトモ多クハ通ジヤムモノナリ夫故二十四時ヲ過テ
乳ヲツクルコト大法ナリ此ハ元來產婦ノ乳大抵二十
四時ヲスギザレバ升ラヌ物ニテ先ハ產婦ノ乳ヲアタ
ヘルコトニシタルモノナリ其アイダ乳ヲツケズシテ
兒ニ害ナキハ天然ノ理ナリ然ルニ此理ヲ辨ヘズ呱々
ノ聲ヲ空腹ナル故ニ啼ト心得姑息ノ愛ニヒカレテ二
十四時ヲ待ズ早ク乳ヲツクル故臙穢ノ物内ニ遺リテ
腹底ニ毒塊ヲムスビ末々大病ノ柱礎トナルナリ貧家
ニテハ其母ノ乳ヲアタエルガ常ニテ早クツケタク思
ドモ己コトヲ得ズ自然ト二十四時間ヲ過ル故此患ハ

ナケレモ醫藥調護行キ届ザル故此ニ因ツテマタ其害
多シ此二ツノ妨害其兒一生ノ強弱ニカ、レリ慎ベキ
事ナリ又分娩シタル處體小ニシテ啼聲モ小シ肌膚清
白ニテ或ハ帶下痰物ノ類一身ヲ纏イ或ハ腋下陰所屈
伸ノ處ナド爛レタル物アリ此ハ其母病中ニ妊娠シ或
ハ胎育調ラズ或ハ驚動勞心憂怨多房或ハ本身瘡毒帶
下ナド有ユヘ其兒自然ト右ノヤフニナリ其甚シキ者
ハ大期ヲ待ズシテ墮胎ニ及ブナリ適全ク産スルニ死
胎ナルモノアリ或ハ驚風丹毒牙疳急病等ノ病ヲ以テ
死スルモアリ或ハ黃瘦ニシテ解顛ナルモ有或ハ四五
歳十三四歳マデニ疳勞ヲ病テ死スルモアリ其外病症
多端枚舉スベカラズ此本稟受弱弱ニシテ血液清ク盛ナ
ラズ肌清白頭面及ビ一身ニ青筋ナド多アリテ其様イ
カニモ生長スマジキト見ユルナリ此療法甚難クシテ
醫力ヲ用ザレバ十ニ一モ全フシガタシ又兒ニ初生ヨ
リシテ血色モヨク瘡疹ノヤマイモナク健強ナルガア
リ或ハ肥健ナレドモ血色十分ナラズ外ノ病ハ無クテ
痰バカリ多キ者アリカヤウノ兒得テハ急病ヲ取出シ
死スル者ナリ此痰ノ多キハ甚見ツケ處ナリ凡二三歳

ノ兒ハ乳哺バカリニテ食物少キユヘ大人トチガイ格別疹多キイワレナシ總ジテ痰ハ飲食ノ流行セザルヨリ出ルモノニテ其不流行ヲサセル物ガ病根ナリ胃中ニ痰物ヲ積カ癰塊ガ上ルカ氣逆ニテ腹氣ガ下ラヌカ塞邪ヲ受タルカ飲食過タルカナドニテ其不流行ヨリ胃汁粘膠シテ痰トナルナリ小兒ノ痰多ク同ジ理ニテ腹裡ニ痰毒アリテ乳食ヲ不流行ニサセル故ナリ夫故痰ニ拘ラズ胎毒ヲ解スルコト良法ナリ此筋ノ小兒使秘スルコト多シ兒ノ便秘ハ宜カラザルコトニテ油斷スマジキコトナリ得テ卒病出ルモノナリ凡小兒十二三歳ニ至ルマデハ大人ト違イ多房勞心ノコトナキユヘ飲食不節驚怖外感ノ外ハ胎毒ニ因ルコト多シ故ニ病道少クシテ療ヤスキナリ昔ハイザシラズ近世幼科ノ職ニ粗拙ナルユヘ胎毒ヲ除クコト疎ク假令十四五歳マデ其毒發スルコトナクテモ生長ノ上塊癰蟲癩ヲ生ジ種々ノ病狀ヲナスナリ大人科モマタ此コトヲ解セズシテ心脾肝腎ナドノ病ト見夫ヨリシテ理療大ニ繆リ嫌疑ヲ生ジ異說ヲ興シ衆醫群集シテ病人ヲ蕪弄シテ終ニ死ニ至ラシムルナリコト、ニ又幼科ノ身適レ

ヲスルコトアリ其コト何如ト論ズルニ驚風ナドハ知レタル胎毒ナリ其他驚掌風ノ類風ノ字ヲ冠ラシムル病胎毒痰血ヨリ出ル病枚舉スベカラズ此根源ハ内經風論ヨリ出デテ諸病ニ風ノ字ヲ冠ラシタルユヘ内外ノ因混雜シテ理療戾乖シタルコト甚多シ幼科ハ兒ノ初生ヨリアツカリ居ルナレバ胎毒ノ病ナキヤウニ防ギオクベキ事ナルニ其コトナク一旦驚風ナド發スレバ外來ノ物ニシテ我不調法ニナラヌヤウニ云ナスコト不届至極ノコトナリ畢竟如在モアルマジキコトナレド胎毒ヲ除クコトヲ知ラズ故ニ斯ク憂キ目ヲ見ルナリ故ニ小兒初生一二日ノアイダハ猶サラノコト一百日ニ至ルマデモヨク々々胎毒ヲ除クコト專要ナリ此間ニ胎毒ヲ除クコト手スカリナケレバ生長ノ上健強ノ丈夫トナルベシ總ジテ腹内ニ蟲ノ生ズルモ腐穢ニ蟲ノ生ジ痰濁ニ魚ノ生ルガ如ク胎毒痰穢ノ氣ニテ蟲ハ出來ルナリ至テ清冽ナル水ニハ魚モ生ズ必シモ飲食ニテ蟲ヲ生ズルニアラズ哺乳ノ兒ニ寸白蟲アルヲ以知ルベシ古來蟲ニ九蟲ト云テ九種アルヨシ余ハ七種マデハ見タリ病道多キコトナレバ種々ノ蟲モアル

ベキナリサレド亦格別奇異ナル蟲モナシ其中ニモ余ガ療シタル十三歳ノ兒一通ノ胎毒蟲積病ニテ初鷓鴣菜湯ヲ用ヒ後紫圓ヲ一分用タルガ細蟲穢物ヲ下シタル中ニ長サ一寸二三分バカリノ深綠色ノ物二三十條下シタリ其形狀大サ如此ナリ光澤アリテヒワ々々スルモノナリ何レモ長サ大サ揃ヒタリ勿論ケ様ノ物ヲ食シタルコトモナク又有ベキ形ニテモナシ一ツ二ツマジリ下ニハ何ゾノ腐爛シタルナラント不審モ立マシケレドモ紫圓兩度用タルニ初ハ二十バカリ後ニハ十二三ホドアリタリ後度ニハ少々形ノ損シタルモアリ完モアリ食物ノ腹内ニ入テ如此形ノ揃フコトハアルマジ兎角一氣ニテ生ジタル物ト見ユレドモ活動セザル物ナレバ蟲トモ云ガタケレド一氣ニテ斯ク成タルモノナリ蟲ナラデハアルベカラズ又余ガ療シタル二十歳ノ一男子甚愚ニテ近所ニテモ沙汰ノアル馬鹿者ナリ其症故ナクシテ悲喜笑思シ一日ニ幾度トナク門ニタズミ諸方ヲ眺望シ得テハウカ々々ト近所ヲ步行シ方



角ヲ取失ヒ大聲ヲ出シ街頭ニテ泣居タル故近所ニテモ見識タル馬鹿者故宿所ヘツレ來ルコトアリ惣ジテ此類ニテ諸事五六歳ノ小兒ニヒトシ平生食餌ニムラ多シ大便秘滑無事シテ清穀スル癰アリ脈モ甚フサキ腹脹テ拘急セリ此病人ニ鷓鴣菜湯ヲ用ヒタルニ雜喉魚ノ中ニアルシヤクナケノ形ニ似タル物ヲ下シタリ少シ形損シタル故不審ナガラモ何ゾ食物ノ消化セザルナラント思タルニ近ゴロ土荔ノ余ガ門人ノ療シタル中ニ一寸バカリ蝦ノ如キ蟲三ツ下リテシバラクノ間六七バカリ飛上リタルコトアリシヨシサスレバ前ノ云所ノ下シタル蟲モ同ジ類ニモアラシヤト思エルナリ又余ガ子ンゴロナル者ノ小婢久シク勞咳ヲ病タルガ危篤ノ症トナリ一夕甚嗽入タルトキニ一物欸ニツレ三尺バカリ向ヘ吐出シタリ其物活動スル故介抱ノ婦人ナド大ニオソレシヲ其主人燭ニテ見シニ形守宮ノ如ク色白ク尾ハナカリシヨシ其病人右ノ物ヲ吐シヨリ咳ハヒシト止ミ其靜ニナリタレド其翌朝死タルヨシ此二物ハ又アルベキ物ナレバ序ニ云オクナリ又痢ト云テ取扱フ病ノ中ニモ蟲症甚ダ多クアリテ

終ニハ蛇厥トナリ死ニ至ルモノ甚多ク故ニ小兒ノ病ニカギラズ肌表外形ニ顯ル、物ハ人モ見損セザレドモ沈伏シタル病ハ繆ルコト多シ末々癥瘕積塊トナリテ難理ノ症ニナルモノナリ凡癩血病ノ外癥瘕積塊ノ病胎毒ニ因スル者十二九ツナリ此コト異説ナルヤウナレド深ク考ヘ實事ニ涉ランニ自明白ナラン爰ニ其二ヲ引テ證據トセンニ膈噎鼓脹偏枯ノ病症ナド皆四十ヲ過タル人ナラデハ病ズ又難理ナルハ何故ゾヤタマノ弱キ人ニ此筋ノ病アルニ理スル者有コトハ畢竟四十過タル人ノ病ハ積年釀成シタル故ニ其病膠固ニシテ除キ難キナリ弱キ人ノ病タルハ皆三ツノ物ニ似テ少々ツ、趣モ異ナリ其上全體盛ナル故理療モ施シヨク一旦ノ勢ハツヨケレドモ病根淺キユヘ拔去ル事ヲ得ベシ先ノ膈噎ヲ病ム人ハ其初兩脇ニ拘急シタル大筋アリテ上脇肋ヨリ下少腹ニ連リ腹勢アレドモ腹裏急ニシテ其上腹底ニ處々堅塊アリテ胸高ナルモノナリ得テハ此人初ニ癩ヲ病ム者ナリ是ハ少腹ノ邊ニ癩毒ノ塊アル故是ヲ根ニシテ癩トナルナリ此筋ヨリ便毒ヲ病ムコトモアルナリ故ニ氣衝ノ邊ヨリ内

股ニツラナリ内脇ノ筋ノ上ニ瘀血ノ小塊有コトアリ人々氣衝内股ノ邊ヲ探リミレバ少キハ一二枚多キハ七八枚モアリテ下ホド小キ物ナリ此小塊積月累年ニ小腹ニ入氣逆ニツレ稍々攀躋シテツイニハ胸中ニ填滿シ腹勢自然ト瘁減スル故胃腑是ガ爲ニ窄狹シ飲食ヲ受ズ胸中ニ停滯スル故咯吐ヲ待ズシテ容易ニ吐スルナリ心下痞シテ胃ノ捌ケ悪キ病人ノ吞酸嘔噦スルモ此趣ト同ジカヤウノ症増長シテ絶粒ニ及ブ故氣力虛乏シテ後ニハ血塊ヲ吐者アリサスレバ二三日ヲ過ズシテ死ル者ナリ此血塊新鮮ノ色澤ニアラズ腐敗紫黒ノ物ニテ往年少腹ヨリ攀躋シタル物ナリ余ガ識タル翁此病増長シテ咽喉塞リ粒ヲ受ザル者ニ喉嚨ニ鍼ヲ刺テ血塊ヲ吐スルコトヲナセリ其當分ハ食ヲ受ルコトヲナセドモ亦前ノ如ク塞リテ度々ニ及ブ内一體ノ元氣虛乏シテ終ニハ死スレドモ先ヅ一旦ハ效アルナリ奇術ト云ヘシ惣體此病ヲ取出ス人十二七八ハ平生性急ナルモノナリ是モ腹氣ノ上ヘセマリタル故ナリタマ々々緩ナル人ニモアレドモ是モ勞心憤厥ヨリシテ成就スルナリ其中ニモ格別勞心憤怒ノコトナクテ

モ病ム人アレドモ是ハ甚緩クシテ最初ヨリハ四五年モカ、リテ死ニ至ルナリ後藤長山齒五十ヲ過テ此病萌シタルヲ自覺知シテ諸翁ヲ周遊シ七十ヲ過テ終リタリ是全ク家事ノ煩冗ヲ厭ヒ縱ニ優遊シタル故血塊攀躋ノ患ナカリシ故ニ天年ヲ終タルト見エタリサスレバ勞心ノコトナキトテ世間交リヲスル人ハ我シラズ今日ノ事業ニ勞心スルコトアル故病ノ緩急ハアレドモ終ニハ是ガ爲ニ命ヲ損スルナルベシ此病ハ多ク必死ノモノニテタマノ治シタルハ其藥皆破血逐毒殺蟲ノ物ナリ是此病癩毒血塊蟲積ニ屬スル事ヲ知ルベシ又鼓脹ハ癩毒アル人男女ニ限ラズ勞心ヨリシテ諸經ノ血彌増ニ流行セズ瘀滯トナリテ緊張ニ及ビ末ニナリテハ臍突出スルニ至ルナリ此病腹ニ青筋アルヲ以テ鼓脹ト落着タルトモ緊張ニ及ベバ多クハ青筋出ル物ニテ一ト通脹滿ノ症モ甚クナレバ臍モ突シ青筋モ出ルナリ是必然ノ勢ナリ鼓脹脹滿ト名ハカワレドモ先ヅハ一ニテ少シノ違ヒナリ鼓ノ如ク脹ルト然ラザルトニテ分ツコトナリ鼓脹ハ最初ヨリ脹ヤウ鼓ノ如クナリ脹滿ハ餘程ツヨク脹テモ鼓ノ如クナシ然レ

ドモ末ニ至リテハ鼓脹ト一樣ニナルナリ浮腫ハ初ヨリ少々ツ、足部ニアリテ次第ニ増セドモ洪腫ニ至ラズ第一ニ腹部脹リテ面部ニハ無キ物ナリ勿論氣分ニナヤミナシ是心ノ病ニテナク諸經ノ不流行故ナルコト知ルベシ腹脹レドモ水氣バカリノ脹ニテナク筋ノ脹テカラミモツレタル如クヒワ々々スル籠ヲ按スル如クナル故鼓ニ見立タルナリサアル故峻藥ヲ用テ下セドモ格別穢物モ下ラズ却テ腹氣ヲ損シ得テハ清穀ニナリテ元氣虛脱スルモノナリ若シ此病發セントスルトキ早ク見ツケテ委中ヲ刺シ瘀血ヲ取ラバ理スルコトモアラシク中頃ヲ過タルハ却テ不理ノ症トシルベシ又偏枯ノ病ハ所謂中風ニテ半身不遂ヨリシテ枯ニ至ルナリ中風ト云名驚風ノ所ニ論ジタルト風ノ字同ジキ故爰ニ略ス全體此病發スル人平生腹ニ塊癩アリテ一旦胸肋ニ逼入シテ發シタル病ナリ故ニ余ガ門ニテハ卒癩ト稱スルナリ癩ノ字義スワリタル處デ離レ所ヲカエル義ナレバナリ字書ニ癩瘕口噤スル病ヲ癩ト云タルモ下ヨリ上ヘ逼ル物アル故瘕瘕口噤ノ症出ルナリ癩癩狂癩等モ下ニアル物ノ上リタルナリ其

義相同ジ小兒ニ此症多キユヘ痲ハ小兒ノ病トモ字書ニ見エタリ先ヅ半身不遂ノ發スル人右ノ痲痺アル故經閉ノ婦人ノ肥ルガ如ク氣血滯滞スル故胖大ニナリテ腹ナド布袋ノ像ヲ見ルガ如クナルヲ自分ニモ腹ヲ鼓キ自負スレハ傍ヨリ羨ム人アリ醫者モ褒ルユヘ油斷ニ油斷ヲ重テ安ニ過飲多房勞神シテ大病トハナルナリ惣ジテ人ノ一身中分ヲ過テ肥胖ナルハ皆病ト知ルベシ如此人ハ多ク卒死スルモノナリ左ナケレバ痲ナト發スルナリカヤウノ類勞神ノコトナクテモ勢ノ極ルトコロ是非發スルモノニテ其中憤怒憂愁ノコトアレバ早ク發スルナリ就中憤怒憂愁ヨリシテ早ク發シタルハ初メカロクテモ變ジテ多ク死スルナリ自然發ハ年カズカ、リ仕込テ發露シタル故重キヤウナレドモ難理ナルバカリニテ急ニハ死ズ半身枯癱言語塞澁或不語ナドニテ十年餘モ存在ノモノアリ此症瘦人ニハ少シ其ワケハ全體氣血盛ナラザル故右體ノ病發スルホドナレバソレマデニ床ニツクホドノ容體トナリ或ハ偏枯ヲ待ズシテ死ニ至ルナリ余一老婆年七十餘ニナル者膈噎ヲ病テ絶粒日久甚羸瘦骨立ニ及ビ命旦

夕ニアル中ニテ一日口眼喎斜半身不遂ニナリテ灼熱自汗如洗昏悴ニ及ビタルヲ見タリ勿論其夕死タルヨシ此病人脈ハ無論腹緊急堅硬ノ大塊物ニツアリテ動悸如春膈噎ニテ死ニ向トシタル程ニナリタル上ニ卒痲ヲ發シタルコト珍ラシキコトナリ此老婆平日多病ニテ腹ニ塊物多ク所謂積氣持ニテ時々ナヤミタルガ平生家事ニ勞心シタルトヤ此筋ヨリシテ膈噎ニモナリ又卒痲モ發シタル病ノ因ハ一ツニテモ發シタル形狀ニテ名ハ異ナリ膈噎ノ因ナル者ノ俄頃ニ變ジテ卒痲ノ因ニ成物ニテハナシ是ニテ病ノ根源推尋スベキナリ肥人ノ卒痲發シテ偏枯ヲ多ク病ムハタトヘバ土藏ノ失火ノゴトシ内ハ燒レドモ外邊丈夫ナル故發露スルコトオソク棟梁モ燒落ルニ至リテ人モ知り最早救フベカラザル勢ニナルナリ此病人久シク羸瘦セザル故顔色ニ悅澤アリテ死テ後モ熟睡ノ者ヲ見ルガ如シ是全ク内バカリニテ外邊ニ云分ナシ土藏ノ燒落テモ四壁ノ依然ト立タルガ如シ惣テ此病ニ限ラズ卒倒卒死ノ者ハ多ク前ニ肩ノ凝ル物ナリ是ハ氣ニ連テ瘀血上部ニ聚ル其勢ツマリ切タル所ニテ發スルナリ

早肩癖ナドモ同ヤウニテ卒倒不還者ニ披針ニテ肩井ヲ深ク刺シ血出レバタマ々々挽回スルモノナリ死切リタルハ血出ヌナリ肩井ハ平生ハ禁穴ナレドモ是ハ卒死ヲ救ノ法ナリ此症肩ノツマルモ腹中ニ瘀血ノ塊アリテ氣血ヲ滯滞スル故如此ナルナリ大抵此等ニテ病因ヲ察スベシ又余弱冠ノトキ一老婆平日瘦形ニテアリタルガ勞心ノ事アリテ一日卒倒發シ右半身不遂口眼喎斜昏悴ニ及タルヲ見タリ此病人マタ俄ニ左不遂ニナリテ口眼ノ喎斜モ左ニカワリタリ夫故腹ノ緊急ナルモ左ニカワリタリ此類タマノアルコトナリ是ヲ以テ考ルニ塊ノ左右ニ連レ手足ノ不隨モ左右アルベキコトナリ諸病トモ積氣ノ有カタ手足ノ患アリテ其方ノ脈モ沉澁ナドニナルモノナリサテ塊任脈ヲ上レバ心ヲ衝クユヘ即死スルナリ其他ハ塊ノ上ルコト強キト弱キニテ命期ノ長短病ノ輕重アルコトナリ是等ヲ以テ見レバ塊ノ上逼ニヨルコト明白ナリ此類發スルトモ多少ニヨラズ血ヲ吐クモノハ難理ナリ癱ナド病ム人ハ大抵四十以上氣血充盛ニテ腹裡ニ瘀毒アル人其鑿鑿ニマカセ貪色勞神或憤懣憂愁或好酒肉一氣充溢

シテ其毒肩背ニ凝結シ發スルナリ弱人ニハ無キモノナリカヤウノ類ハ平日ニ其手當アルベキナラバ發スルコトナカルベシ其人壯健ナリトモ醫タルモノ其人ニ親シクバ平日ニ戒理スベシ先膈噎鼓脹偏枯三者ハ古今共ニ多キ病ニテ諸人熟シタル病ナレド素問ト云ル狐ニ惑サレテ先入ノ見固泥シタルユヘ本道ヲ行得ズユヘカク蒙昧ナルコトアリ深ク思ハサルノ過ナリ全體人タル物氣血ダニ清クハ腹裡ニ塊モアルマジ斯シテ七情ノ變動サヘナクバ膨脹ガ毒モノソマルベケレドモ當時人ノ世智カシコキハ左ヤウノ人アルベクモオボヘズ其上當時ハ微毒盛ニシテ上下トモニ此病ナキ者ハナシ是ハ昇平ノ世ナル故上下トモ衣食慾事ニ至ルマデ縱情競華ユヘ萬事度ニスグルコトアリテ此筋ヨリシテ憂抑愁慮ノコトモ多ク出來心氣滯ルユヘ血モマタ純潔ナラズ因テ腹裡ニ塊ヲ結ビ其瘀毒ノ精ヲ以テ作リタル胎必血液不清淨又婦人トテモ同ジ流風ニテ是モマタ經事不調帶下等ノ病多クトリワケ下部不清淨ナルユヘ胎孕スルトモ其穢毒ヲ兒ニ遺スコト所謂虎ノ子渡シニテ一人ヨリ萬人ニ傳ルト知

ルベシ或説ニ濕毒ハ本我朝ニハナカリシガ國初ノ頃
 華人長崎ニ來リシ者其毒ヲ妓女ニ傳タルガ今世上ニ
 廣ガリタルヨシ故ニ初ハ此病ヲ唐瘡ト云タルトヤサ
 レド古キ和書微毒ノコト所々ニ見エタリ昔ハトモア
 レ當時ハ此毒三大都ハ勿論其外都會幅濶ノ地ハ別テ
 多ク卑賤ノ者ニトリワケ多シ是全ク賤妓ニ交ル故ナ
 リ賤妓ハ別テ數人ニ交リ穢氣除ク間ナキユヘナリ右
 ヤウノコトヨリシテ兒ニ毒ヲ遺スユヘ腹裡ニ塊癩ヲ
 生ジ種々ノ病ヲ生ズ小兒ノ下疳瘡ヲ遺毒ト云ヘド大
 人ノ袋疳瘡ノ形狀ニ異ナラズ小兒ユヘ其毒根淺ク酷
 性ノ藥ヲ得ズシテ治スルナリ又痔漏鼠瘻ナド所ニヨ
 リテ名ハ異ナレドモ其形狀相同ジ名サヘ異ナレバ病
 因別ノヤウニ心得レドモ治療ノ趣意相同ジ上下ノ違
 ニテ藥ノ向方輕重アルバカリナリ總ジテ此微毒ヲ濕
 毒ト云ヘドモ濕氣外感ノ因ニテハナシ又必シモ青樓
 妓館ニ登レバ此毒ヲ感受スルニテモナシ近世サル上
 モナキ高貴ノ御方ニ便毒アリタルコトアリ秘スルコ
 トユヘ顯ニ云ガタシ是ニテ知ルベシ畢竟妓ハ數十人
 ニ交接スルユヘ其身瘡毒少クテモ他人ノ毒ヲ受ケ他

人マタ其者ニ交接シテ其毒ヲ受ルナリ實ニ妓ハ微毒
 ノ府ト云ベシサテ平生花柳ニ耽タリトモ自分ニ毒ナ
 ケレバ感受セヌ人多シ又感ズルコトアリテモ其毒感
 觸シタルバカリニテ内ヨリ發動スル物ナキユヘ其毒
 淺シ自分ニ所持シタランハ打テバ鳴ル道理ニテ始テ
 妓樓ニ登リテ始テ微毒ヲ病ム人多シ是ニテシルベシ
 但シ世ニ濕毒ト云フコト其因縁ナキニテハナシ下濕
 ノ地ニスム人ハ微毒多ク高燥ノ地ニハ少シ凡高燥ハ
 舟ノ便利ナク下濕ハ其便アルユヘ自然ト都ヲナスモ
 ノナリ都會ハ妓樓アリテ人十二八九ハ折枝ノ者多キ
 故ニトカク此病多シ其症或痔脫肛下疳淋疾便毒腫瘡
 陰鮮小瘡膿癰骨疼此等ノ病ハ皆下部ニテ濕毒ニ因ス
 ルト云ヘドモ元來下濕ノ氣ガ人ノ肌肉ニ染シテ久ク
 含リ病マシムルニアラズ持前ノ瘡毒有ニ下濕ノ地ニ
 スムユヘ其氣ニ感ジテ内毒ノ發動スルナリ外來ノ物
 ト見ルユヘ治療モ迂遠ニナリテ利ナキナリ余近年浪
 花ノ豪富鴻池氏ガ微毒ヲ病タルトキ診視シタルガ此
 子元來京師ノ産ニテ彼家ニ養子ニ行タリシガ一二年
 シテ下疳楊梅瘡ヲ病ミ咽喉腐爛シ後ニハ鼻梁陷リタ

リ元來其他新ニ築タル地ユヘ土淺ク水近シテ甚濕氣
 深ク此トコロニ住居スル者十二七八ハ一二年ヲ過ズ
 シテ梅毒發スルニ其形狀ハ異ナレトモ多ク前段ニ云
 下部ノ病ナリ外氣ノ因ナラバ一般ニモ病ベケレドモ
 其中ニモ至テ壯實ナル者ニハ間々病マヌ者モアリ是
 ハ毒ノ有無ニヨレバナリ是ヲ以テ考レバ濕ナリト思
 エルモ餘義ナキコトナレドモ貴尊ノ人生平高牀厚蓐
 ニ坐シ寒濕意ニ適シ憂愁思慮モナキ人ノ濕氣ヲ感ズ
 ベキ謂レナシ江戸深川ハ海邊ニテ其下濕ノ地ナリ此
 トコロニ甚小瘡多シトヤ因テ深川瘡トモ稱スルヨシ
 是等ニテモ知レタルコトナリ又男女ニカギラズ顔色
 亮白ニシテ健強ナル人ナリトテ此毒ナキニモアラズ
 肌表ニ現セザレバ蘊毒アリテ後ニハ其尾ヲ見スルナ
 ド多シ此類粗工ナレバ察セザルユヘ治療大ニ繆失ス
 ルコト多シ醫ハ只望聞問切ヲ精細ニスルコト肝要ナ
 リ婦人ナドハ殊更忌嫌フコトアルユヘ貴人ナドハ別
 シテ憚ルコトナレドモ治療ノコトハ格別ニテ此トコ
 ロニ斟酌アリテ肝要ノコトハザル、故氣ノ立スヤウ
 ニ誠實ヲ以深切ニ吟味スベシサアレバ病人モ心ウチ

解テ何トナク言出ルモノナリ此コトハ細事ト見テ醫
 者必ズ輕忽スベカラズ惣ジテ此病ノ骨疼漏瘡ナクテ
 毛伏毒アル故脈數寒熱咳嗽吐沫盜汗ナドノ症アル
 ハ難治ナリ鼻毀レ舌裂耳鳴目赤髮落咽喉腫爛骨疼屈
 弱下疳便毒結核癰癤漏瘡等ノ症アリテモ腹脹不
 衰飲食減ゼザルハ全ク瘡ル者ナリ微毒タリトモ數年
 ヲ經レバ沉固シテ療ガタシ痔漏ヨリシテ骨蒸ノ形狀
 ニナリ膏肉ノ瘵削シタルハ不治ナリ是ハ其漏穴ノ淺
 深又ハ開キ様ニテ治不治ノ鑿法アリ兎角此病中頃ヲ
 過テハ難瘡モノナリ諸病ノ中ニモ癩疾微毒ハ肌肉臟
 腑ニ浸淫シタル惡毒ユヘ表ハ瘡タルヤウニテモ兎モ
 角モ其毒ノコリテ難瘡モノユヘ酷療シテ其後ハ緩々
 ト解毒ノ劑ヲ長服シ萬事禁戒シテ調護スベキナリ粗
 工ハ毒ノ新舊表裡ノ向方ニモ拘ラズ妄ニ峻苦ノ劑ヲ
 投ジテ一時ニ毒ヲ一掃スルコトノミスレドモ藥毒ニ
 テ一旦逐毒スル而已ニテ得テハ關節ノ處ヘ毒ヲオイ
 スクヌ癩癧トナルコト多シ惣ジテ毒ノ新舊表裡ニ
 ヨリテ藥劑ヲ配適スルコトナレバ初中後ノ療治措置
 スレバ毒一身ヲク、リアリクバカリニテ沉伏膠固シ

テ除クコトヲ得ベカラズ因テ良藥ニテモ其效ナシ所謂濕勞トナル者ハ此故ナリ先ヅ微毒ヲ療スル藥ハ大抵輕粉朱砂水銀生々乳銀花土伏令草薺馬薺大黃荆芥芎藭巴豆ノ類竝溫泉雞肉砒刺等其權宜ニシタガフナリ此外藥方服餌枚舉スベカラズ又吸煙法アリ上部ノ痲毒ヲ除クニ效アリ輕粉ハ其藥性至テ酷毒ノ物ナレド痲毒ヲ除クコト此ニ過タル物ナシ其使イ方アリテ良師ニ學ビ得テノチ用ユベシ安ニ用レバ其害ヲノコスナリ水銀生々乳ノ類皆藥性毒烈ナルカユヘ徐々ニ少宛用テ腹裡ノ固毒頑癩ノ類ヲ治スベシ是等ハ使イカタ甚精シカラザレバ其害淺少ナラズ安ニ輕薄ノ人ニハ傳授シガタシ銀花土伏令草薺ハ除毒清血ノ物ニテ初ニ用テハ效ナシ荆芥ハ穢毒ヲ發散スル物ナレバ一物ニテハ力少キユヘ馬薺大黃ナドヲ合シテ其效甚多シ巴豆ハ砂水等ノ劑ヲ用タルアド少シ用テ動キタル穢毒ヲトルベシ過用スベカラズ疲勞ノ病人弱人ハ堪ガタシ溫泉ハ舊久ノ沉毒ニヨリ初ニ浴スレバ一時ニ發動シテ弱人ハ堪ガタシ又或ハ毒ヲ逐スクメ關節ニ凝滯シ痲癩トナルコトアリ雞肉ハ痲癩沉毒ヲ動

ス物ナリ輕粉ト違ヒ眩暈ナクテ筋ニヨリ甚效アリサレド其用イ場所ヲ誤レバ反テ毒ヲ上部ニ聚テ耳目聾略ス先大抵右ノ趣ヲ以テ療セバ思半ニ過ン錯療スレバ終身ノ毒トナルユヘ精細ニスベキナリ凡是等ノコトニテ胎毒ノ因多キコトヲ會得スベシ。

一、凡醫書ニ病門ヲ立タルニ天行傷寒ヲ多ク初ニ出シタリ世ニ多キ物ユヘ第一ト心得タルハ次第ノナキコトナリ惣ジテ人ノ病ト云物ハ内因ノ病アリテ而後外因ノ病出ルモノナリタトヘバ感冒スル人精神爽快ニテ榮衛充盛密護ナランニ誰カ邪ニ感ズル者アラン是痴者ノ狐狸ニ惑セラルト同ジ理ナリ少シニテモ氣體疲倦シタル所ヨリシテ風寒暑濕疫勞穢觸狐蟲邪魅等ニ感惑スルナリタマノ壯實ノ人聊ノ疲倦薄衣ナドニテ外氣ヲ感ズルコトアレドモ元來心氣充盛ナル故深侵ニ至ラズ故ニ生死ニカ、ル程ノ病ハ其發スルヨリ已前ニ勞倦過動ノコトアルカ又ハ至テ稟受虛弱ナルカ又ハ宿疾アル人ナラデハ外氣ノ深ク侵スコトナシ病家ハ本ヨリ此事ヲ解セザル故發病已來ノ疾

苦ヲノミ云ナリ醫モ其病根ヲ解セズ一體ノ病ヲ洞視セザル故始終心得チガイテ錯療スルナリ是故ニ醫者其人ノ幼少ヨリノコトヲ精細ニキ、諸事ヲ領會スベシ主病ノ處ヲ療スベキコトナリ病因ノ中ニ或ハ其家六親ノ不和閨閣ノ不理竝ニ會計ノ失得ナドハ祕シテ云ザル物ナレバ其家ノモヤウヲ視テ推察スルコトモアルナリ此醫案ノ一ツナル故序ニ云オクナリ凡カクノ通リノ物ナレバ外因ハ其次序ヲ立テ後ニ出スベキコトナリ第一養生ノコトヲ揭示シ次ニ產孕竝婦人ノ病ヲ立テ次ニ小兒養育竝其諸病ヲ出シ其次ニ內因末ニ外因難病トアルベキコトナリ孫思邈ナドハ此コトヲ氣附タルヤラン右ノ次第ヲ立タリ此等ノコトハ治療ニ妨ナキヤウナレドモ條理ナケレバ教ニナラズ此等ノコトヨリシテ得テハ本ヲ取失フテ筋ヲ繆ルモノ故嚴重ニ立オクベキコトナリ仲景傷寒論中外傷ノ療理ヲノミ云タルヤウナレドモ內傷ノ藥ヲ用タルコト甚多シ是ハ古人言約ニシテ旨深ク後人ノ如ククドノシク云ハザルナリ識者ナラデハ其玄奧ヲ探鉤スルコトアタハザルニヨル諸說モ紛與シテ醫人ノ迷

惑トハナレリ。

一、本邦近時ノ醫藥劑分量甚些少ナリ中華ニテ劑ヲ作ルコト本邦ニ比スレバ方ニヨリ十倍シタルモアリサレド華人ハ平常肉食厚味ヲ食スル故藥ノ濃ニモ堪ベキコトアラン此所ニ相違アルベケレド本邦ノ些少ハアマリナル事ナリ況後世方ハ取ワケ多味ナルニ其一ニ味二三分ヅ、用タランニ朮荅猪澤ナドノ淡白ナル物何ヲ以利アランヤ古方ニ茯苓ナドヲ主藥ニシタルハ八兩モ用ヒタリ漢代ノ一兩ハ大抵本邦ノ一錢ニ準ズ左アレバ八兩ハ八錢ニテ晝夜三劑ノ積リニテ一劑ニ二七分バカリニモナルナリカヤウニ用テコソ淡味ナル物モ利アルベキナリ其上本邦ニテ近時ノ醫藥ヲ用ルハ晝夜二劑ニ過ズ沉痾痲癩危篤ノ病ニ小劑ヲ二劑バカリ用タランニ利少キハ知レタルコトナリカヤウノルイ流風習染ニナリテ一人モ巢穴ヲ破ルモノナシ量ヲ知ラズト云ヘシ誠ニ人參ナドハ五厘一分ナド用ルガ當時ノ流風ナリ元氣虛極ニ至リ垂死ノ病人ニハ言ワケノ爲ニ一錢ノ獨參湯或ハ一步等分ノ參附湯ナド用ルコト是亦流風ニテ貴人富貴ノ死際必ズ

此二ツヲ出スカクシテ昔ヨリ一人ノ救得タルヲ見ズ其愚ナルニ至リテハ韓參ヲ用ザレバ世間へ對シ不相濟ト覺タル輩モアリ此皆醫者ヨリシテ迷路ヲ開キタルナリ捧腹スベキコトナリ全體本邦ニテ人參ヲ盛ニ用ヒ初タル者ハ六十年バカリモ以前京師ニ居タル林市之進ト云フモノナリ其風遺リテ當時ノ醫人元氣ノ虛ト見ルヤイナヤ盲擊ニ用ルコトナリ左ホド用タキコトナラバ餘分モ用ユベキニ五厘一分ハ何ノ恐レアルニヤ價ノ貴キユヘ餘分用タルシキカ惣ジテ藥ノ世ニ少キ物ハ貴價ナリ貴價ナルトテ神藥ト云ニテモナシ當時人參ナドヨゾモ貴キモアレドモ其利ヲ筋ノ外ニハ他病ニ效ナシ又下廉ナル物トテモ筋ダニ合ヘバ利アルコト神ノ如シ人參病ニ利アリトテ價ヲ貴クスルト云コトイワレナシ又左ホド世間ニ稀ナル物ニテモナケレバ何故少シヅ、用ユルト云コト知レズ定テ其效他藥ニ過タル故少シニテ利タト覺エテ些少ニ用ルニテアルベシ筋チガイハ干大根ヲ用ルニ異ナラズ仲景方ニハ五兩モ用タルコトアリ五兩ハ五錢ニテ晝夜三劑ノ積ニテ一劑ニ一步七分バカリモ入ルナリ

左スレバ今時ノ危篤ナル病ニ三分バカリ用ユルニ比スレバ十倍ニ近シ古人ノ病ハ剛ニテ今人ノ疾ハ柔ナルカ古ノ參ハ效少クテ今ノ參ハ效古ノ參ニ倍シタルカ左アレバ其議論アルベキコトナリ察スルニ元氣ヲ引立スギテ上逆スルト云ヨリ出タルトミヘタリ兎ニ角不念至極ナルコトナリ凡藥ニ分厘ヲ爭フ物ハ大抵巴豆輕粉砒礬斑貓ナドノ大毒ノ類ナリ大黃ナドハ峻苦ノ物ナラテド便ノ祕滑ニアヅカル故其斟酌ハアレドモ厘ヲ爭フマデニハ至ラズ其他ノ藥分厘ノ相違アレバトテ過不及ニ論ナシ又石膏ナドハ古方ニ雞子大或ハ半斤或ハ一斤用ヒタリ雞子大ハ十二步モアルモノナリ大抵分量ハ一通立タルバカリニテ石膏ナドハ熱勢ニヨリ隨意ニ多少スベキナリ大渴ノ病人ニ至リテハ中々晝夜三劑ニテ濟セズサスレバ晝夜三劑ノ積リニテ立タル分量モ多服スルニ至リテハ二倍三倍ニモ至ルナリ畢竟石膏ナド藥性峻烈ニナキ物ユヘ多ク用ザレバ其效ナキユヘ古人モ多ク用タリ今時ノ醫自分ニ多ク用タルコトモナクテ大效アル物ヲ古方醫者ハ畏ロシキ物ヲ用ルトノミ心得生涯匙ニカケタルコ

トモナキ者アリ此ハ何等ノ見ナルソヤ惣ジテ石膏大黃ナドハ古今トモ多ク用ユル藥ニテ宋後ノ名家モ皆用タリシカルニ其方書ヲ規矩トスル醫ノ其藥ヲ藥籠ニサヘ備ザルハ何カニ愚昧ナルトテ餘リナルコトナリ是全ク毀譽得喪ヲ第一ニスルユヘハ愚俗ニ異ヤウニ思ハル、ライヤガリテノコトカ面ニ唾スベキコトナリ。

一、氣血ハ陰陽ニテ凡病ハ此二ツノ不順ヨリシテ生ズル物ナリ故ニ氣ヤメバ血モヤミ血ヤメバ氣モヤムナリ依テ辨スルニ此二ツヨリ外ハナシ打損水火傷等ハ内因ナラチバ此外ハ惣ジテ病ニ内因外因ト二ツアリ外因ハ誰人モ見易ケレド内因ハ隱レタル病ユヘ見エガタシ心ハ一身ノ主宰ナルユヘ内因ノ病心ニアヅカラザルハナシ心氣ガニ變動アレバ心疾トノミ見ルコト甚拙キコトナリ故ニ左ニ論ズルナリ數種アル中ニモ憂悲憤怒恐懼驚愕ナドヨリシテ生ズルハ皆心ノ正疾ニテ此皆心ノ中ヨリ病ム心ナリ此等ノ症ハ心下痞塞心胸痺痛寒熱往來舌胎渴飲欬吐沫吐紅少氣短息寢汗遺精鼻衄嘔穢食飲無味小便短少大便或滑或澀

脈動數甚者細數或沉澹其甚者ハ羸瘦腫滿等ノ症出ルナリ又男女ノ勞ヨリシテ心氣ヲ動シ精液ヲ耗損シ髓竭ニ至リテ死ルナド其症大抵心疾ニ同シテ小ク異ナリ此病ハ少氣頭重ク寒熱往來欬吐沫吐紅心下動氣渴飲煩食夢交滑精寢汗少氣小便頻數或白濁大便滑澹不常小腹弦急痛引胃脇類紅羸疲萎弱拘攣脈動數甚者細數一身浮腫等ナリ斯二ツノ者ハ心腎ヨリ出タル病ユヘ其原因モ知レヤスク誰人モ見損ハナキモノナリ又蟲積ヨリシテ心氣ヲ變動スル病アリ此症ハ天氣陰レハ即鬱冒シ晴レハ即爽然タリ或羞明怕眩好居闇室或上氣頭痛或潔癖氣習或癡或忿怒喜悲無常或性急或惰緩或獨語獨笑鬼語怪言或多言或沉默或忪怯怯懦或多夢多魘或手足搖擗或解噴無力或肌肉潤動或眼胞暗黑甚ケレバ發狂或銳視或鈍或發暈或昏冒甚者不省人事或卒倒須臾復甦其他面腫耳鳴或吃或眼花或暈翳或爛眩或吐沫欬嗽或憎風或發熱或嘔逆或結核氣或噎膈或發喘或腹滿痛脹或心下妨塞或結痛攻刺或心胸痛悶或寒熱如瘧或大便祕澹或燥結或滑利甚者ハ時々清穀飲食無節或不能粒食或無故吐食或好食甘或弄鼠刮目

砥壁喫炭等ノコトアリ此等ノ脈或弦細或沉微或結滯或遲或數或伏或無倫或有熱者洪弦動數ナルモアリ先大抵此病ハ陰脈ヲ得ル者多シ瘀血ヨリシテ心氣ヲ病モ蟲症ニ似タル處アリ此蟲ハ胎毒ヨリ生ルユヘ蟲症ニハ胎毒アルコト必然ナリ故ニ其症相似タルナリ胎毒ノ病蟲症ノ天氣ノ陰晴ニツレテ變動アルト同ジ趣ニテ其上ニ上氣頭痛咯吐沫咽喉如有物一身甲錯或鱗體或勝脛腫脹等腫痛時寒熱飲食不節或不能穀食心腹逆滿少腹無力大便祕難或燥結或滑利潔癖氣習語言諄々此等ノ症蟲症ト甚似タルユヘ蟲ナリトテ療スレドモ甚效ナシ唯胎毒ヲ解スルコトサヘスレバ治スルナリ此症腰脚盛經脹タランハ瘀血多キナリ刺テ血ヲトルベシ手ニ隨テ效アルベシ凡蟲ハ大ナルハ其患ケヤケキユヘ胸ニ入レバ胸中惡ルケテ吐スルコトアリテ早ク常ニ復スルナリ其中ニ霍亂ヨリシテ蛇厥トナリ自汗吐逆心腹刺痛大渴引飲完穀不化手足清冷吐衄及臭穢青汁醫蛇厥ナルヲ知ラズ回陽一圖ニ心得テ四逆理中連服スレドモ效ナク死ニ至ルモノアリ是等ハ皆大蛇ノ所爲ナリ又細蟲ハ年月ヲ積蕃息スルナ

リ中ニハ胸中へ入タルハ心痛吐沫咯々如有物狂躁悶亂或口眼喎斜流涎遺尿昏冒如醉絕粒月餘羸瘦死者アリ是等ノ症ハ心氣ヲナヤマス故得テハ心疾ト見テ錯療スルコトアリ又此細蟲腹裏ニ蕃息シタルヨリ心下常ニ煩悶シ腹勢下部減ジテ力ナク腸胃滯滯スルヨリシテ足脛常ニ浮腫アリテ一旦腫滿ニナリ險凶ニ至ルモノアリ此病藥驗アリテ水腫ハ治シテモ病根拔ケザルユヘ又腫滿ヲ病デ終ニ死ルモノ多シ又婦人十三四歳ヨリ經ノ行ルコト常ナリ然ルニ胎毒蟲積ニ障碍セラレ經ノメグルコト遅クナリ或ハ行リテモ少ク或不月ニナルコトアリ是ハ蟲ヲ下シ胎毒ヲ驅リサヘスレバ經ハ自然ト行ルモノナリサレドアトニテ順血ノ劑ヲ長服シテ調理スベシ惣ジテ婦人ノ生稟虛弱ナラザルハ多ク才發ニシテ早ク情實開ケルユヘ經モ早ク行ルナリ生長ノ上ニテモ心疾ノ障サヘナケレバ經滯リナクメグルユヘ其人一體盛實健強ニテ五十餘マデモ行ルモノナリサレド人トシテ十二八九ハ勞心ノ障ナキ者ハナケレバ其輕重ニヨリテ月水不調ニナリ積リテハ塊ヲ結ビ大患トナルナリ諺ニ借家カシテオモ家

ト云類ナリ此時ニ至リテハ重キ處ヲ治療スルガ權ニテサナケレバ治ヲ得ヌモノナリ此等トテモ蟲症胎毒ト同ジコトニテ瘀血病ト見エガタキモ能ク辨ヘテ心疾ト取チガヘヌヤウ識別スベキコトナリ是故心疾ト云ハ心ノ中ヨリ病出シ胎毒蟲症瘀血ニヨル心ノ外ヨリシテ心氣ヲ障碍スル病ナリ故ニ其病劇キヤウナレドモ心ニ甚シキ損傷ナキ故其病根ヲサヘ除ケバ早ク快クナルナリ心中ヨリ病出シタルハ一身ノ病トナルユヘ肥立モ甚達シ此類ハ其紛ラハシキ物ユヘ醫錯療スルコトアリ深ク考ヘシ

一、禁食ハ其病ノ筋ニヨルコトナリ當時ノ醫禁食多キユヘ不食ノ病人彌増ニ不食シテ羸瘦ニ至ルコト多シ殊ニ麵類ハ米ニ比スレバ其味淡薄ナルユヘ禁ズルニハ及バズ其内冷麵ハ病ニヨリ禁ズルコトアリ蕎麥ナドハ疝氣アル人ニハ障ル者アリ又是ニテ腹ヲナオスト覺タル人アリ是等ハ其人カチテ心得居ルユヘ其時宜ニ從フテコト濟ベキナリ瘡疥ノ類ニ至リテ禁食スレドモ是ハ甚笑フベキコトナリ事品ニヨリテワザト食セシムルコトモアルナリトテモ食ニ依テ再發ス

ルヤウナル治療ニテハ益モナキコトナリ瘡後ナドニ異ヤウナル物ヲ食シ又ハ妄食スレバ得テハ再發スル者アリ抑瘡疾ハ常ノ病トチガイ奇妙ナルコトニテモ截ルヤフナル異病ナレバ食物ノ異ヤウナルニテモ又發スルコトアルナリ瘡論ノ處ニ詳ナリ故ユ略ス其他腸滑ノ病ニハ堅ク禁食スベキコトナリ水腫病ハ鹽味ヲ多食スレバ腸胃滯滯シテ通利アシクナルナリ鹽ヲ絶テ通利出ルニテ知ルベシ其外病後ニハ腸胃不調一氣衰弱ナルユヘムサトシタル物ヲ食スレバ消化セズシテ食復トナリ大事ニ及ブ物ナリ深ク慎ベキコトナリ

一、水腫痰癰ノ病ヲ見テ此病痰ナリ留飲水腫ナリト名クルコト笑ベキコトナリ痰モ留飲モ水腫モ皆病ノ枝葉ニテ其根源アルコトナリ其根元ニ病名有テ治療モ其所ニヨルナリ夫故痰アリトテ痰ヲ驅逐スルコトバカリシタルトテ效ハナク腫アリトテ水ヲ利スルコトバカリシタルトテ腫モ減ゼズタトヒ峻藥ナドノ力ニテ腫強ヒテ減ジタルトテ全體ノ病理セザレバ不日ニ故ノ如クナルナリ全體病ノ根元ヲ攻レバ病ノ除カ

予バナラス道理ニテ夫ニテ全理スル物ナリ夫ユヘ痰ヲ去リ水ヲ利スルニモ品ノ藥アリテ皆各其筋合ニヨリテ療スルガ常ナリ古方ノ水腫ヲ療シ痰癰ヲ驅ルヲ見テ領解スベシ後世家ノ頭痛トサヘ云ヘ百川芎白芷ヲ用ルモ其根元ヲ見ツケズ枝葉ノミ芟ルユヘ其效ナシ惣ジテ病ヲ療スルハ多ク其根元ヲ搜索シ其筋イカント精細ニ辨別シテ後藥ヲ投ズベキナリ此ノ如クシテ功ヲ積メバ精妙ニ至テ良醫神醫トモ稱セラレベシ。

一、脚氣病ハ唐ノ王焘ガ外臺祕要ニ精シク見エタリ二十五六年已前マデハ此書モ甚稀ニテ醫人モ心付ズ故ニ脚氣病ヲ知ル者ナシ余ガ父此書ヲ翻刻シ脚氣ト云フコトヲ説初シヨリ世上ニ脚氣アルコトヲ知タリ故ニ世俗ハ新病ノ出來タルト心エタル者多シ醫人モ其治療ニ疎カリシガ年ヲ經タル故今時ハ少シハ療法モ覺タレドハカトシクモナシ但此病俗間ニ云膝脚氣濕脚氣ナド云トハ大ニ相違シタリサレド膝脚氣ナドハ脚氣ノ一症ニテ甚輕キ時アルコトニテ筋擊ヨリオコレルコトアリ全體脚氣ニ卒慢ノ二種アリ卒ハ十二九ハ救得ガタシコノ病初夏ノ頃ヨリ初冬ノ頃マデ有

モノニテ其餘ハナシ外臺祕要蘇長史論曰凡脚氣病多以春末夏初發動之也皆因熱蒸情地憂憤春發如輕夏發更重入秋少輕至冬自歇大約如此亦時有異於此候者ト云ヘリ此確論ナリ醫此病ニ疎キユヘ晚冬初春ノ頃モ衝心ノ病ニテ浮腫サヘアレバ脚氣ト覺エ療スルコトアリ不吟味ナルコトナリ金匱要略ニ脚氣冲心ト云ニ礬石散ヲ湯中ニ投ジ浸脚ノ法アリ其他外臺ニ杉木湯ニテ將脚ノ方アリ甚快キモノナリ千金方脚氣論有テ竹瀝ヲ多ク用タリサレド脚氣ハ外臺ニテ盡シタリ其他古書ニモ左傳成公六年獻子曰民愁則墊隘於是乎有沉溺重腿之疾ト云ヘリ此土薄水淺ヨリ出ル病ナリト此レ脚氣ニ類シタル者ナランカ又呂氏重己篇ニ室大則多陰室高則多陽多陰則屢多陽則痿此屢ト云タルモ亦脚氣ナランカ又源氏物語枕艸昏ナドニモ脚氣ノボルト云又ウツボ物語カクヒヤウナド云タルモ皆此病ナリ此等ノコトニテ見レバ本邦ニモ古人ハ明辨シテ療スルコトモ覺居タランニ世ノ變遷ニツレ廢シタルト見エタリ千金論曰特以三方鼎峙風教未一霜露不拘寒暑不等是以關以西河北之人不識此病自聖唐開關

六合無外南極之地襟帶是重爪牙之寄作鎮於彼不襲水土往者皆遭近來中國士大夫雖不涉江表亦有居然而思之者良由今代天下風氣混同物類齊等所致也耳ト云ヘリ是ヲ以テ見レバ彼土ニモ有處トナキ所トアルト見エタリ本邦ニハ三大都ノ内京都第一ニテ江戸コレニ次ギ大阪ハ甚少シ京都ナドモ郊外ニアルハ身ヲ持タル者ノ平日梁肉ニ飽安逸ナル者ニアリ廊内ノ人ニテモ平日勞脚力奔走スル卑賤ノ者ニハ甚稀ナリ其中ニ平日梁肉ニ飽テ體ヲ勞セズ心氣ヲ勞シ坐シテ家ノワザヲ營ム者ニハ多シ是故ニ上天子ヨリ下庶人ニ至ルマデ甚多シ大抵脚氣脚弱ト二ツアリ中ニモ脚氣ハ衝心胃氣急促迫擡肩洪腫ニ及ビ脚弱ハ頑痺屈弱裏急瘞蹙ニ至レドモ腫ルコトハナシサレドモ脚氣ニモ痿弱アリ痿弱ニモ腫レニ至ルモアリ是皆重症ナリカクハアレド二ツナガラ病因ニ別ハナシ二ツトモ寒熱アルハ輕病ニテモ筋合アシク療治弛緩ナレバ凶危ニ至ルナリ脚氣ハ氣急サヘナケレバ洪腫ナルモ治シヤスタ腫ナクテモ氣急ナルハ凶變生ズルナリ危篤ナレドモ小便少シニテモ通ジ快キハ藥驗アル者ナリ脚氣ハ脈

洪緊數面垢唇黑氣衝心胸擡肩項強鼻扇掀胸寒熱如瘧嘔逆食飲不下小便短小等ノ症アルハ凶危ナリ脚弱ハ寒熱氣急サヘナケレバ多救得ベシシカレドモ年久冷痛脚脛瘦削絕無肉色者難理ナリ惣シテ脚氣ハ十二三歲ヨリ五十歲バカリマデハ有モノニテ幼弱極老ニハナシ多クハ血氣壯實ノ人ニアルユヘ十五六歲二十三歲ノ者甚多シ殊更肥胖ナル者ニ多シ其故ヲ尋ルニ凡人肥過タルハ皆病ニテ眞ノ壯健ト云ハ中肉ノ人ニアル者也胖大ナルハ腹内ニ蘊毒アリテ血氣ヲ滯滯スル故ナリ經閉卒痲ノ處ニ論ジタルト同ジ理ニテ血氣滯滯スレバ瘀血トナリ一身流行セズ足部常疼痛シ閉挫蹠熱轉筋浮腫等ノ症アルナリ此病初夏ニ初リ冷氣ノ候ニハ自然ト去レドモ一體輕便ナラズ如此シテ二三年或四五年ヲ過テ其蘊毒瘀滯炎蒸ニ乘ジテ發スルナリ其中ニモ憂勞ノコトアレバ他病トモ成又時節發陽ノ頃ナレバ例ヨリハ早ク發スルモアリ此治療ハ丸散湯皆降氣ヲ主トシ腫アルハ逐水ノコトヲ兼艾灸將脚疔刺等其宜ニ從ヒ施スナリ脚弱ハ其人多瘦弱テ腹拘急ヨリシテ足部筋擊スルユヘ此病生ズルナリ瘦人ニ

テ血液盛ナラザレバ其毒淺少シテ衝氣モナク日月ヲ過テ屈弱痺痿ニ至ルナリ此治療艾灸砭刺ヲ先トシテ湯藥或ハ酒劑等ヲ以氣血ヲ行シ中ヲ温ムル劑ヲ以施スナリ脚氣脚弱トモ寒熱アルヲ風毒脚氣ト稱シテ外來ノ病ト見タルユヘ古人防風獨活升麻前胡等ヲ用ルコトアリ此四物必外來ノ病ヲ療スルバカリナラズ皆瘀熱ヲ去留血ヲ行ス物ナリ畢竟脚氣ハ内毒瘀血ヨリ出ル筋ナレバ古人モ犀角羚羊角雄黃朱砂蜈蚣麝香牛黃等ヲ用タルナリ古人其理解ハ配適シタルドモ見解ハ大ニ垂錯シタルノ故ニ其方中齟齬シタルコトモ甚多シ先年比叡山御修履御手傳ヲ安藝侯ヘ命ゼラレタリ彼國ノ大夫淺野河内ナル者惣奉行トシテ江菟坂本ニ逗留シタリ數百人ノ衆ナレバ彼地民屋狭小ニシテ其衆ヲ容ルニ足ラズ故ニ田島ニ假小屋ヲ立テ其所ニ住居タリ時節孟秋ノ間ニテ別テ其年ハ炎源盛ナリシガ右ノ卑濕ノ地ニ建設タル小屋ナレバ濕氣升漸シテ十二八九ハ脚氣ヲ病タルニ寒熱アル者甚多カリシ是全ク濕邪ヲ兼タル故内外ノ毒ニテ死タル者甚多シ其時河内モ寒熱如瘧衝心痿弱ノ症ニテ死タリ余ガ父是

ヲ診タル故委ク此コトヲ聞タリ右ノ衆皆居處ハ一ツナレドモ其中ニモ至テ健強ナルハヤマス者モアリタルヨシ是ニテ人ノ病ヲ生ズル所何故病ムト云處考ヘアルベキコトナリ。

東門隨筆終

師談錄

師談錄

先生以眼科名振海內。先考俊德嘗執贄于門下。是以善亦得侍左右親受其業焉。先生今年已八十。而矍鑠無衰容。乞診治者踵常接于門。終日拮据。未嘗辭勞勩。訖則俯案講業。每至中夜。凡書之瞥見。客之偶談。苟係于本業。必極根抵。乃試于病者。往夕收奇效。平居語門人曰。人之尤可戒者。在我自智。苟自智則與施々拒人者。一間耳。何以集衆智成鴻業。欲不固陋。豈可得哉。是聖人所以詢芻蕘也。其教育門人。諄諄提導。至若善惡愚俯之畜之。啓發之。將欲使以有爲矣。嗚呼先生不出世之人也哉。

先生家世業眼科。其所傳固多良方。然猶不敢以爲足。千辛萬苦。枯髯嘔血。以大成此業。嘗曰。唐宋諸家五輪八廓五臟配當之說。可謂妄矣。然其中亦有確言不可廢者也。若夫和蘭手術製煉之法。萬國無出其右者。然風土異宜。有難遽施用者。況言語侏離。文字橫行。譯者不能無誤。一藥誤譯。乃致誤于千萬人。所以不可不慎重也。至獨得之方術。則超然別樹一臬。

師談錄

有不屑。漢蘭諸說者。善嘗與同塾生論曰。先生之術。非漢蘭之術。而土生先生之術也。當今海內以眼科鳴。一方者何限。而無能勝先生而上者。非阿好之言也。嗚呼先生之術。可謂泄造化之秘矣。

先生曰。余少年遊京師。學和田泰純先生。凡五年矣。後遊于大阪。締交播州醫生高久脩助。討論眼科。脩助爲杉田玄白門人。余堅株守漢說。每討論辨難。辭數屈。遂折節請教。脩介曰。子宜博讀書耳。何問人之爲。余強請不措。脩介感余意之切。篋中出一書與之。余讀之。其說漢人所不夢知也。後五年解體新書刻成。惠美三白贈致一本。於是始知。脩助所與之書。卽解體新書眼目編也。

又曰。余少時世人不知製羅鐸索乙劫兒法。是以貴價不得多用。鄉人中井廣澤者遊長崎。得其方。來授之。余始得自製。唯疑其味雖同。而其色黯黑。不似舶來潔白之品。且用之眼中。却作滲痛。常以爲憾。後來江戶語之大槻玄澤。玄澤搜得之於肖墨兒中。譯以與焉。於是始知。方中所用之醋。卽蒸露酢也。則如法製焉。用之絕無滲痛。然其色猶帶青。既而思之。和蘭造

蒸露皆用硝子。我邦多用銅。乃知其帶青者以銅氣滲出也。自是常用陶器。其色潔白。果得與蘭製不異者。

又曰。同鄉醫者澤都者。一年遊京師。歸途過住吉。憩一酒樓。即天下茶屋者。旁有醫生。熟視澤都曰。子之目是可治也。澤都不信。誘而別。既而行思。彼與余行路人耳。彼何為欺余。且余固醫者。假令不治。亦不失為醫者。遂到大阪。乞治于三井元孺。元孺診之曰。此白內翳也。乃行鍼術。得全治而歸。時余少年浮氣不散。治遊為樂。學三絃于醫者重都。澤都偶造重都。謂余曰。甚哉人之相遠絕也。齊是醫也。三井公如彼。吾子如此。余殆漸死。始有憤然欲歷搜海內。精究眼科之術之志。家大人不許。余固請不。舍。叔父某君憐余篤志。勸大人得許。乃經備前備後。過大和遊大阪。大阪有醫者一止者。患石翳之症。此古今眼科為不治者也。余試鍼之全愈。一止所謂先天眼。至此年甫十七。始見白日云。四方聞之。乞治者求交者絡繹不絕。始驩高充國。介充國。縮交三井元孺。自是三人往來盡善講究斯道。互相援所長。余得橫鍼術於元孺。當時海內善

內醫術者僅數家。而其術止用直針。行橫針者三井元孺一人耳。元孺讀岐人也。

又曰。馬不時刺絡則病。蓋以其多血也。余往年自吉田之廣島。途賃驛馬。馬夫互勞問曰。子馬病矣。得無刺絡後乎。曰然。紛冗不暇至此耳。余問馬夫曰。汝何術一見知之。曰。愚輩以馬為生。豈當見而知之已哉。不見亦猶能之。蓋刺絡後則馬病。馬病則四脚不齊。或輕或重。所以見而知之也。四脚不齊則鈴聲亦不整。或和或怒。辨問著鈴以是也。豈非雖不見可知邪。余喟然歎曰。扁鵲望桓公而走。其術不難學也。自是益焦心覃志。未嘗一日不在斯業。又曰。備後庄原染匠志平者。患鷄冠蝨肉之症。求診治。余為施截斷。服藥數日。病者言病已治。但覺上胞有物摩擦。余翻轉視之。有如麥粒者。以小鏡子引出之。得竹皮長五六分許。廣五厘許。窮問之。則曰。先是一年許。舟中誤以竹棹撲目。爾後眼中不如常。自是不復發。後來江戶。尾侯臣某乞診。自言若如有上胞內物。余以為是亦必與志平同症。即翻轉視之。果得竹皮長七八分許。廣六七厘。窮問之。則曰。嘗觀射於三十

三間堂。流矢觸廊廡樹石。而摧飛者甚多。自是目不快。如此者間有。診候之間不可不用心也。

又曰。醫學館所藏全骨。藝州醫星野良悅所造也。初藝州瘍醫田中道長者。目不識一丁字。特以手術精妙。大行于時。良悅伯母某。患落下顛。衆醫束手無策。乃請道長。道長方療之。延病者於室隅。相與冒一大布袱。使良悅不得觀其治法。一術即治。良悅心憤之。以為不知內景。若此症不可得而治。非親解剖安得明。覈內景。遂乞藩購刑屍。親解剖。以覺之。然骨肉之際會。經脈之連屬。未能分明。因再購刑屍。往海濱。以火炙猶炙。小解而後解之。始得分明。於是創意作全骨。居數年。聞杉田玄白唱蘭學于江戶。携來江戶。徵之玄白所著解體新書。毫無差謬。云。今醫學館所藏即其也。其悅携來全骨。依解體新書。益得正而後獻之。是骨也。幕府以堀一甫。桂甫周為有用之具。故納諸云。又曰。升屋喜平次者我同鄉人也。其妻即余從妹也。夏六月卒。然吐逆昏冒不省人事。余以為霍亂。將調藥。喜平次曰。妻偏身似不遂。乞再診。余驚診之。左手足果不遂。然脈左右不異。余甚惑亂。遂不從脈而隨症。作附子劑。與之。漸次而治。如若症者脈固不足。據乎。

將余診候之未審乎。疑之久矣。後會星野良悅。質以此事。良悅曰。善哉子之疑也。余往年與杉田玄白談醫事。玄白曰。人之所以知覺寒熱痛痒者。獨以有神經也。而神經與脈不關係。故有脈病而神經不病。神經病而脈不病者。如中風偏枯。脈左右不異。以之也。此事蘭人所發明。未見和漢言及者。子之疑也。不亦宜乎。余憬然始有慕蘭之志。

又曰。先是五六十。蘭學未開。世之稱眼科者。皆陋守五輪八廓之說耳。至行內醫鍼者。尾州明眼院信州竹內某筑前田原某及余耳。況如他之手術。海內絕無知之者。余憤然深思熟慮。以發明新法者不少矣。今而考之。多與蘭學冥合。古人云。思之。思之。復重思之。思之不通。鬼神將通之。非鬼神之力。精氣極也。先師和田先生為余數稱之。今而後知不欺余也。汝曹宜精研。

馬之眼中角膜內生小蟲。細小如蟬。不蚤療必盲。余嘗觀同鄉馬醫善太療之。其法縛四足。臥之地。按頭使不得跳動。以三稜鍼刺角膜。作小創。入鉤創口。盡鉤出之。出了。後點熊膽汁。不日而癒。余於是發明

膿眼剔出之術。試之屢有良效。後數年遊大阪。與高脩介三元孺友善。二子偶聞蘭人有膿眼剔出之術。大為奇。以告之余。余始知余所發明與蘭人暗合。余發明刺絡法亦從馬醫。馬醫鍼刺之法。自經絡之循環脈之道路。盡有規則。不可毫差。非如世醫亂刺不知法也。余竊做施之病人。得殊效不少。後讀大槻玄澤所譯刺絡篇草本。蘭人刺法亦太率與我邦馬醫之術相符。余益得精究其術。及來江戶。寓玄白家。數施刺絡。玄白奇之。告大槻玄澤。玄澤驚曰。邦人未嘗有行之者。子安從受之而其妙如此。余笑曰。豈別有師受耶。其初就馬醫。觀其施術。後觀子之刺絡篇。參究其術耳。玄澤撫掌曰。譬之演劇。子猶優人。余猶撰諸劇者。優人不能兼撰者。撰者不能兼優人。是相互所讓也。余鄉近傍有田村喜平次者。眼目盲廢。家產蕩盡。終為乞人。徘徊乞憐。余診之。眼臉糜爛甚。而隻眼已膿潰。隻眼白內翳也。余為施橫鍼術。至已下鍼。眼臉粘滑。介者不能按住。遂致緊閉。不可如何。余用意鍼鋒。摸索行術。已了。視之。翳全然不墜。居二三日。忽言目得見。能辨人眉目。診之翳猶如故。而虹彩

近結膜處。現一小孔。物形透映。不異瞳孔。蓋方其行術時。以暗中摸索。鍼鋒逸去瞳孔。而截離虹彩者也。遂復明。余於是豁然解悟穿瞳之術。後語之惠美三白。三白初不遽信。既而曰。有奇病。此有奇術。往歲香月牛山。療舌上生毛。余亦親視。妊婦膿瘍兒出。於創口者。由是觀之。子之所言豈虛耶。爾後余施穿瞳之術。得良效者數人。及後觀蘭畫。知和蘭亦有穿瞳之術。而其奏鍼之法。與我所為正同。本邦施穿瞳術。余一人而已。未聞有施斯術者。想者以余之愚。術之至干此。豈非殫精所致乎。

又曰。和蘭人始明穿瞳術者。為眼科泄兒。有一小兒痘瘡後厚翳覆角膜中央。遂為盲者。偶誤以鴉管撞傷角膜。以貫虹彩。虹彩近結膜處。現一小孔。厥腫疼痛不可堪。泄兒鄂療之。外症漸退。盲復從治。蓋厚翳雖不退。以物自其創口而透徹也。泄兒鄂奇之。與眼科郎倦別骨相謀。遂創穿瞳術云。郎倦別骨即什一簿兒士伯父也。什一簿兒士為余具言之。事彼在紀元一千七百八十八年。實我天明七年也。彼由療外傷致發明。余由誤治內醫得發明。其所發明略

相似。而其術與年世亦祇同。可謂隔國知音矣。

善曰。世人動言。泰西人巧思百倍邦人。豈天地秀靈之氣獨厚於彼耶。今有我先生。可以見邦人之巧思。嘗不讓於彼矣。彼役心於富貴利達。而不能專精於方術者。焉得能窮斯道之妙乎。

又曰。余遊大阪。與芝支叟高充國柳井啓山友善。三人以學術顯。余獨以不學無術。周旋其間。支叟獨嘯菴子也。高充國即高久脩助也。後又稱一齋。啓山備中松山人也。向與余同遊。和田氏。皆後入龜井道載之門。支叟告余曰。其哉惠美三白之陋也。嘗聞人言。三白秘方不敢傳。藥名用隱語。余始不信。遊歷之次。過藝州。訪三白。三白不見。余亦徑去。三白何人。豈非先人之弟子耶。於是知人言不虛。甚哉三白之陋也。後余傳是言於三白。三白曰。否支叟之來訪也。余偶不在家也。歸後遣人於旅館。乞再臨。時支叟已去。無如何耳。○余年十七。遊和田氏之門。同學之士三十人。其最可畏者為柳井啓山。啓山長余一歲。才學顯達。無有及焉者。其為人衣綻不補。櫛沐不理。終日跪坐讀書而不事醫。先生時責之亦不為意。遂去入龜井道載之門。二

十年前。余已為侍醫。啓山亦來江戶。在藩邸。故體依然。有人乞治者。書藥方與之。未嘗為調劑。是以貧困其矣。叔父某憂之。使余諭之。余委曲諷之。唯曰從來誤讀莊子。終釀成此狂體。雖欲改無由耳。余笑而止。如啓山可謂不為名動者不為利疚者矣。○高充國終始在大阪。為一時之聞人。五十六年前歿矣。其嗣良齋學於什一簿兒士。今現在大阪。

又曰。小兒驚風。眼中角膜上瞥々見。如羹上之肥者。則決不治。

又曰。筑前田原某家。所謂高山司度流也。外用方則諸症唯一方耳。稱正明羔。其方樟腦牡蠣丹辰砂四味。蜜煉點之。

又曰。筑前眼科高山司度流者。有八家。在津元貞其一也。余與之友善。正明羔其所傳也。

又曰。三井元孺亦外用方唯一方耳。稱陽丹。其方蘆眼石一味。蜜煉點之。間或用稱水洗藥者。即朱砂敬也。然甚稀。

又曰。砂石粘着角膜不離者。撰稻稗心強硬者。以利刀斜截其端。以鉤起出。愈於針鉤萬々。余受此法於

石匠某。某告余曰。愚輩每石末入於眼。輕者筆端絡棉絮。以摩擦即出。重者以稻稗心。扶起則出甚妙。詩云不識不知從帝之則。是之謂也。

又曰。眼臉瀉血無若以蘭切刀。輕々刺纖維。如以燈心麥芒等。摩擦。以鹿角燒存性者。屢々粘着。皆非所宜也。以蘭切刀。則血能瀉。其創亦易癒。至如上件諸法。以剝傷臉皮創痕離。愈且眼臉皮損滑澤之質。遂有發昏之症者。

又曰。獨嘯遊藝州也。始從學者為奧文叔。次為惠美二白。獨嘯遊講吐方。門人皆傳之。余弟昌有從三白受吐方。余亦用吐方。屢々得殊功。今舉一二。余嘗患反胃五六月。諸藥無驗。用吐方全治。又一婦人發狂。余用吐方全治。無幾其女復發狂。罵詈不絕口。其母請用吐方。余以腹脈不實。辭之。母強請曰。曩者妾服吐方。得為全人矣。若得服吐方。死亦可也。乃如法而與之。不吐而反下利。卒然暈倒。不省人事。一身汗出。脈絕。唇舌淡白。瞳孔開大。全不與死異。家人恐違。余亦倉皇失措。食頃許診其脈。猶如故。消息半時。眼臉纖維少生。血色。瞳孔漸復收。諸症隨解。於是狂

全治。不復發。然以眼眩甚人多懼之。爾後余亦不安用。

又曰。凡吐劑先與黃連解毒湯六七日。而後用之。詰朝使喫熱稀粥一碗。禁午食。瓜蒂散六分以豆鼓湯送下。少頃而吐。吐了。又與瓜蒂散。如前法吐。吐了後。更服鹽湯一碗。取吐。吐了。後又用粘紙探吐。吐凡四次。藥力達肯紫。至有昏冒或不省人事。徐々精復神經常。乃進熱稀粥一碗。與黃連解毒湯。又六七日。或兼用滾痰丸。是用吐劑之法也。

又曰。近和蘭吐方。用乙百格安那或吐酒石也。二物不甚眩。而其效尤勝。惠美三圭常用之。嘗扈候朝勤。在江戶邸。及其西歸。多購乙百葛格安那而去。江戶藥舖所貯乙百葛格安那。殆為之空。

又曰。余來江戶。始執贊者為杉田立卿。高野敬仲。敬仲嘗受業於岑少翁。一日語少翁曰。有一新話。玄碩療眼病未嘗用真珠。少翁嗟嘆曰。有特見者。固不隨人取捨也。此一事足以概知其為人。敬仲為余言之。

又曰。余用梓葉得之和田先生。先生得大津藥舖某。

某家有治瘍奇藥。世無知其法者。某嘗有病殆危。先生療之。因欲得治瘍方。某辭以先祖所斷秘。居一年。某復病。先生復療之。某感其德。書其方。詣先生。置之席上。而歸云。其方梓葉一味。水煎用之。蓋梓葉以有發揮之妙效也。爾後先生用之屢得奇驗焉。

又曰。余得一奇方於蘭醫什一薄兒士。初什一薄兒士秘之不敢傳。余欲得之。萬方請求而後許之。然藥名蘭語不可解。因問曰。藥品我邦有否。什一薄兒士曰。有。便翻小冊子。曰。宮。宮。宮者尾州地名也。蓋彼自長崎至江戶。路經尾州宮驛。路旁見其乎。余之悅甚。不知所以謝之。即脫御賜外套與之。使人搜探山野。果探得而歸。乃如法製之。其功比之蘭製却勝。余之得罪唯坐此一事也。

又曰。杉田玄白門人某。逸其名。欲得和蘭眼書。請之長崎奉行某。某為購求之。以轉致價十金也。某寒窮不能辨。謀之玄白。玄白即自購之。使宇田川棗齋譯。後立卿上木行于世。今眼科新書是也。

又曰。蘭名某藥譯槐木誤也。余舉問之于什一薄兒士。什一薄兒士曰。決非此物。

又曰。蘭名某藥。譯白頭翁。是亦恐譯者之誤也。以何知之。考之本草。白頭翁效用與烏頭葇若等。固大異者。而蘭書所藏某藥者與烏頭葇若其效同然。則其非白頭翁斷然明矣。

又曰。我邦造白色硝子。以余及澁井長伯為嚆矢。實三十年來事也。蘭人造硝子。擇堅白好色之石。煨碎為極末。攪鹼蓬鹽。上火煒調。是以其色也潔白。邦人不知用鹼蓬鹽。用銻煒勻。所以不白也。

又曰。蘭人發明硝子製法也。自漁人。漁人寢食于海濱沙石中。其炊飯烹肉之薪。唯有鹼蓬之類耳。火與砂石鹽氣相合。地中凝結生如芒者。滑澤可愛。是硝子製造之所由起也。

又曰。淚管瘻。但時々以手壓出膿汁為良。余今年八十。未得保全之治法。如蘭人截斷術。其事非容易。而施亦恐無效。

又曰。余家傳一眼科書。其書甚古。末曰一竿齋傳授。一竿齋終不知為何人。

又曰。烏頭葇若矢鳩苔蔓陀羅。其效大概同。而蔓陀羅為最勝。一小兒十二三歲痛風走注。日夜號泣。余以蔓

陀羅實五分一味。水煎頓服之。頃刻謔言妄語如狂。半時許。醒疾苦如忘。又余嘗患脚氣。五六月四肢攣急。小便不利。憂陀羅實八分一味。水煎頓服。良久煩渴甚。頭眩目眩。心神恍惚。至翌朝而醒。小便快利。三倍于常。重患立退。其效著。類如此。臨機應變。用之取效。有不可勝數者。

又曰。賴春水藝州竹原染匠之子也。幼時嘗赴筵席。坐里正上。里正叱曰。汝何爲者。敢坐余上。引而退之。春水直走歸。號泣告。故于父。父告諭曰。我輩理固不可。坐里正上。叱且退之當矣。雖然小兒耳。人情似不宜。然汝苟恥之。則當思所以報之方也。春水感憤。自是讀書不已。少有意慢。則其父督責曰。汝忘筵席之恥乎。後遊大阪。入混沌社。學業大成。國侯召爲儒臣。禮遇甚厚。遂執海內文柄。是固雖因天材。而亦非有所激厲。遂成此大業者耶。

又曰。菅茶山生。備後中庄農家。幼與群兒牧牛山林。群兒嬉戲無所不至。獨茶山手唐詩選。朗誦不已。遂從和田先生爲醫。余入先生門。時已茶山歸鄉。然以備後去京不遠。時々往來。余屢得活接。能悉其爲人。

性好奇異。縮頭髮如螺髻。而插笄櫛。平生衣帶外套。皆用黃色棉布。而不用他色。不着他衣。棉布蓋所自染云。嘗賦月梅詩各二十律。示之和田先生。先生示之村瀨栲亭。栲亭嘆歎曰。雖宿儒不可及也。時年二十五六耳。無幾爲儒。三十餘年前。來江戶。其髮與衣猶如故。

又曰。菅茶山從兄弟松井子魯與余同學。和田先生。余歸鄉日。使人郡川者。率無賴少年。橫行爲暴。問之人。則曰。備後中庄人也。其子曰。力智。亦能肖。後力智患眼乞診治。余問曰。子知松井子魯者乎。曰從兄弟也。余驚曰。然則菅茶山亦非從兄弟乎。力智羞赧曰。然彼既如彼吾獨如此。猶盜跖於顏淵耳。余笑之。

又曰。凡有內伏劇毒者。不可妄施截斷術。又曰。安藝小吏大助者。有眼病。求診治。其症角膜外面生赤肉形。色恰如赤小豆。肉上生細毛五六莖。每瞬動刺戟疼痛。余拔去之。十日許。毛又生。又拔又生。凡三次。點眼皆無效。終辭不療。又曰。余少壯時。施內醫術。手指每戰。嘗不使手指二三日。灌冷水。極冷以行術。猶不已。常爲慨。及年至

不惑。此患甫除。如今年已八十。執箸若筆。皆手指戰不自由。獨至執內醫鍼。則活轉機用無不如意矣。蓋術未熟。心抱疑懼。所以不得不戰也。術稍熟。心不復疑。戰從已。年益老。術益熟。手中殆似有神助。又曰。後藤香川山脇松原吉益。各以古醫法鳴矣。當時稱爲五大家。而如今言古醫法者。獨依吉益氏。無復言四家者。其故何耶。夫取仲景之方法。以驗之日用之病者。驗得而後言之。無一空言。以是吉益氏獨擅四家不得而與。

善且。夕土生先生。深歎其非常之人也。欲一記其談。以爲後規。匆忙不果。從冬春之交。刀圭頗閑。則稍集錄舊聞。以爲一篇。名師談錄。其間有醫事係禁祕。不得顯然書者。故此篇僅々乎是耳。且以從遊日淺。未能盡十之一二。將往儲蓄師說。以繼作不已云。天保十三年壬寅二月。會津水野慶善。謹識于江戶迎翠堂。

門人水野生。集錄余說談。爲一篇。請題言余。余告之曰。管子曰。思之思之。又重思之。而不通鬼神將通

之。非鬼神之力。精氣之極也。旨哉言也。近者塾中無如子篤志者。勉強不已。將有大爲矣。余告子。是而已。又更何言。生拜謝曰。謹受教。於是乎書以塞責云。土生義壽法眼。行年八十題

孫 義由再拜謹書

師
談
錄

師談錄

土生玄碩先生一夕話

門人 水野善慶筆記

一、馬時々刺絡セザレバ則チ病ム、蓋シ其多血ヲ以テナリ。余往年吉田ヨリ廣島ニ行ク、途ニ驛馬ヲ賃ス、馬夫互ニ勞問シテ曰ク、子ガ馬病メリ、刺絡後ル、ニアラザルカ、曰ク然リ紛冗暇アラズシテ此ニ至ル耳、余馬夫ニ問フテ曰ク、汝何ノ術アリテ一見之ヲ知ルカ、曰ク愚輩馬ヲ以テ生ヲナス、豈當見テ之ヲ知ルノミナランヤ、見ザルモ亦猶之ヲ能クス、蓋シ刺絡後ルレバ則チ馬病ム、馬病メバ則チ四脚齊シカラズ、或ハ輕ク或ハ重シ、見テ之ヲ知ル所以ナリ、或ハ和シ或ハ怒ル、轡ノ間ニ鈴ヲ著クルハ是レヲ以テナリ、豈見ズトモ知ルベキニアラズヤ。余唱然トシテ歎ジテ云ク、扁鵲桓公ヲ望テ走ル、其術學ビ難カラザルナリト、コレヨリ益々焦心覃志、未ダ嘗テ一日モ心ヲ斯業ニ留メザルコトハアラズ。

師談錄

一、醫學館藏スル所ノ全骨ハ、藝州ノ醫星野良悅ノ造ル所ナリ、初メ藝州ノ瘍醫田中道長ト云フモノ、目一丁字ヲ識ラズ、特ニ手術精妙ヲ以テ大ニ時ニ行ハル。良悅ノ伯母某落下顛ヲ患ヘ、衆醫手ヲ束手テ策ナシ、乃チ道長ニ請フ、道長之ヲ療スルニ方リ病者ヲ室隅ニ延キ、相與ニ一大布袱ヲ冒シ、良悅ヲシテ其治法ヲ觀ルヲ得ザラシメ、一術即チ治ス、良悅心ニ之レヲ憤リ、以爲ラク内景ヲ知ラザレバ此ノ如キノ症得テ治スベカラズ、親シク解剖スルニアラザレバ安ゾ内景ヲ明ラカニスルコトヲ得ント、遂ニ藩ニ乞テ刑屍ヲ購ヒ、親シク解剖シテ之ヲ覺ル、然レドモ骨肉ノ際會經脈ノ連屬未ダ分明ナル能ハズ、因テ再ビ刑屍ヲ購ヒ、海濱ニ往キ火ヲ以テ炙ルコト猶ホ小鮮魚ヲ炙ルガゴトクニシテ後之ヲ解キ始メテ分明ヲ得タリ、是ニ於テ創意木ヲ以テ全骨ヲ作ル、居ルコト數年杉田玄白蘭學ヲ江戸ニ唱フト聞キ、携ヘテ江戸ニ來リ、之ヲ玄白譯スル所ノ解體新書ニ徵スルニ毫モ差謬ナシト云フ、今醫學館藏スル所、即チ是レナリ、良悅携ヘ來ル所ノ全骨、解體新書ニヨリ益

益正ヲ得、後之ヲ幕府ニ獻ズ、堀本一甫桂川甫周、有用ノ具トナスヲ以テ館ニ納ムトイフ。

一、升屋喜平次ハ我同郷人ナリ、其妻ハ即チ余ガ從妹ナリ、喜平次妻夏六月卒然吐逆昏冒人事ヲ省セズ、余以テ霍亂トナス、喜平次曰ク妻偏身不遂ニ似タリ、再診ヲ乞フト、余驚テ之ヲ診スルニ左手足果シテ不隨、而テ脈ハ左右異ナラズ、余甚ダ感亂シ、遂ニ脈ニ從ハズシテ症ニ隨ヒ附子劑ヲ作りテ之ヲ與フ。漸次ニシテ治ス、若ノ症ハ脈固ヨリ據ルニ足ラザル乎、將タ余ガ診候ノ未ダ審ナラザル乎、疑問久シク存ス、後星野良悅ニ遇フ、質スニ此事ヲ以テス、良悅曰ク善哉子ノ疑ヤ、余往年杉田玄白ト醫事ヲ談ズ、玄白曰ク人ノ寒熱痛痒ヲ知覺スル所以ノモノハ獨リ神經アルヲ以テナリ、而テ神經ト脈ト關係アラズ故ニ脈症アリテ神經病マズ、神經病ミテ脈病マザルモノアリ、中風偏枯ノ如キ脈ノ左右異ナラザルハ之ヲ以テナリ、此事蘭人發明スル所、未ダ和漢ニ言ヒ及ブモノアルヲ見ズ子ノ疑モ亦宜ナラズヤト、余幡然トシテ蘭方ヲ慕フノ志アリ。

一、是ヨリ先キ、五六十年、蘭學未ダ開ケズ、世ノ眼科ト稱スルモノ、皆五輪八廓ノ說ヲ陋守スルノミ、内醫鍼ヲ行フモノニ至テハ尾州ノ明眼院、信州ノ竹内某、筑前ノ田原某及ビ余ノミ、況ヤ他ノ手術ノ如キハ海内絶テ知ルモノナシ、余憤然トシテ深思熟慮以テ新法ヲ發明スルモノ少カラズ、今ニシテ之ヲ考フレバ多クハ蘭學ト冥合ス、古人云ク、之レヲ思ヒ之レヲ思ヒ、復タ重テ之ヲ思ヒ、之レヲ思フテ通ゼズンバ鬼神將ニ之レヲ通ゼントスト、先師和田東郭先生余ガ爲メニ數々之ヲ稱ス、今ニシテ始メテ其余ヲ欺カザルヲ知ルナリ、汝ガ曹宜シク精研スベシ。

一、馬ノ眼中角膜内小蟲ヲ生ジ細小蚌ノ如ク蚤ク療セザレバ必ズ盲ス、余嘗テ同郷ノ馬醫善太ガ之レヲ療スルヲ見ル、其法四足ヲ縛リ之レヲ地ニ臥セシメ頭ヲ按シテ跳動スルヲ得ザラシム、三稜鏡ヲ以テ角膜ヲ刺シ小創ヲ作り鉤ヲ創口ニ入レテ盡ク之レヲ鉤出ス、出シ了リテ後熊膽汁ヲ點ズ、日ナラズシテ癒ユ、余是ニ於テ膿眼剔出ノ手術ヲ發明シ、之レヲ試ミテ屢良效アリ、後數年大阪ニ遊ビ高橋介三元儒ト

友トシ善シ、二子偶々蘭人ニ膿眼剔出ノ術アリト聞キ大ニ奇トシ以テ之ヲ余ニ告グ余始メテ余ガ發明スル所、蘭人ト暗合スルコトヲ知ル、余ガ發明ノ刺絡法モ亦之レヲ馬醫ヨリ得タリ、馬醫鍼刺ノ法、經絡ノ循環血脈ノ道路ニヨリテ盡ク規則アリ、毫モ差フベカラズ、世醫ノ亂刺法ヲ知ラザルガ如キニハアラザルナリ。余竊カニ之ヲ病人ニ施シテ殊功ヲ得タルコト少ナカラズ、後大槻玄澤譯スル所ノ刺絡篇草ヲ讀ミテ蘭人刺絡ノ法亦大率我馬醫ノ術ト相符スルヲ知リ、益々其術ヲ精究ス、江戸ニ來ルニ及ビテ杉田玄白ノ家ニ寓シ、數々刺絡ヲ施ス、玄白之ヲ奇トシ、之ヲ大槻玄澤ニ告グ、玄澤驚テ曰ク、邦人未ダ曾テ之ヲ行フモノアラズ、子安ヅクヨリ之ヲ受クルカト。余笑テ曰ク豈別ニ師受アラシヤ、其初メ馬醫ニ就イテ其施術ヲ見、後子ノ刺絡篇ヲ讀ミテ其術ヲ參究スルノミト、玄澤掌ヲ拍テ曰ク、之ヲ演劇ニ譬フルニ、子ハ猶ホ優人ノゴトシ、余ハ猶ホ狂言作者ノ如シ、優人作者ヲ兼ヌルコト能ハズ作者優人ヲ兼ルコト能ハズ是レ互ニ讓ル所ナリト。

一、余ハ一奇法ヲ蘭醫シーボルト(什一薄兒士)ニ得タリ、初タシーボルト之ヲ秘シ敢テ傳ヘズ余之レヲ得ント欲シ萬方請求シテ後チ之ヲ許ス、然ルニ藥名蘭語解スベカラズ、因テ問フテ曰ク、藥品我國ニ有リヤ否ヤト、シーボルト曰ク、有リ便チ小冊子ヲ翻シテ曰ハク、宮、宮、宮ハ尾州ノ地名ナリ、蓋シ彼レ長崎ヨリ江戸ニ到ル、路尾州宮驛ヲ經シトキ路傍ニ其レヲ見タルカ。余ノ悦ビ甚シク、之レヲ謝スル所以ヲ知ラズ、即チ御賜ノ外套ヲ脱シテ之ヲ與フ、人ヲシテ山野ニ搜探セシム、果シテ採リ得テ得ル、乃チ法ノ如ク之ヲ製ス、其効之ヲ蘭製ニ比シ却テ勝レリ、余ノ罪ヲ得タル唯此一事ニ坐スルナリ。

一、杉田玄白門人某(其名ヲ逸ス)和蘭眼書ヲ得ント欲シ之ヲ長崎奉行某ニ請フ、某爲メニ之ヲ購求シ價十金ヲ轉致センコトヲ以テス、某寒窮辨ズル能ハズ、之ヲ玄白ニ謀ル、玄白即チ自ラ之ヲ購ヒ宇田川榛齋ヲシテ譯セシム、後チ立卿上木シテ世ニ行ハル、今ノ眼科新書是ナリ。

一、蘭名某藥ヲ槐木ト譯スルハ誤リナリ。余舉テ之

ヲ什一薄兒土ニ問フ什一薄兒土曰ク決シテ此物ニ非ラズト。蘭名某藥ヲ白頭翁ト譯ス是亦恐ラクハ譯者ノ誤ナリ何ヲ以テ之レヲ知ル之レヲ本草ニ考フルニ、白頭翁ノ效用ハ烏頭蓇蓉等トハ固ヨリ大ニ異ル者而シテ蘭書ニ藏スル所ノ某藥ハ烏頭蓇蓉ト其效同然タリ、即チ白頭翁ニ非ラザルヤ斷然トシテ明カナリ。

一、我邦ニテ白硝子ヲ造レルハ余及ビ澁井長伯ヲ以テ嚆矢トナス、實ニ三十年前ノ事ナリ、蘭人ノ硝子ヲ作ルニ堅白好色ノ石ヲ撰ビ煨碎シテ極末トナシ鹼蓬鹽ニ攪ゼ火ニ上セテ煇調ス、是レヲ以テ其色ヤ潔白、邦人鹼蓬鹽ヲ用フルコトヲ知ラズ鉛ヲ用ヒテ燒灼ス白カラザル所以ナリ、蘭人ノ硝子製法ヲ發明スルヤ漁人ヨリセリ、漁人ハ海濱砂石中ニ寢食其炊飲烹肉ノ薪ハ唯鹼蓬ノ類アルノミ、火ハ砂石鹽氣ト相合シテ地中ニ凝結シ蓬ノ如キ者ヲ生ズ滑澤ニシテ愛スベシ是レ硝子製造ノ由テ起ル所ナリ。

一、淚管瘻、但シ時々手ヲ以テ膿汁ヲ壓出スルヲ良トス、余今年八十、未ダ保全ノ治法ヲ得ズ蘭人ノ截

斷術ノ如キハ其事容易ニ非ズ而シテ施ス亦恐クハ效ナケン。

一、余ガ家一眼科書ヲ傳フ其書甚ダ古シ末ニ一竿齋傳授ト曰フ一竿齋ハ終ニ何人タルヲ知ラズ。

一、烏頭蓇蓉若鳩若葛陀羅、其效大概同ジ、而テ蔓陀羅ヲ最モ勝レリトス、一小兒十二三歲痛風走注、日夜號泣ス余ハ蔓陀羅實五分一味ヲ以テ水煎シ之ヲ頓服セシム、頃刻ニシテ譫言妄語狂ノ如シ、半時許ニシテ醒ム疾苦忘ル、ガ如シ、又余嘗テ脚氣ヲ患フ五六月四肢攣急、小便不利ナリ、蔓陀羅實八分ノ一味ヲ水煎シテ頓服セシニ良久フシテ煩渴甚シク頭眩目眩、心神恍惚トシテ翌朝ニ至リテ醒メ、小便快利シテ常ニ三倍シ、重患立ロニ退キ其效著シ類于此ノ如シ、臨機應變之レヲ用ヒテ效ヲ取ル勝テ數フ可カラザルモノアリ。

一、賴春水ハ藝州竹原染匠ノ子ナリ、幼時嘗テ筵席ニ赴キ里正ノ上ニ坐ス、里正叱シテ曰ク汝何タル者ゾ敢テ余ガ上ニ坐ス、引テ之ヲ退ク、春水直ニ走リ歸リ號泣シテ故ヲ父ニ告グ父告諭シテ曰ク、我輩理固

ヨリ里正ノ上ニ坐スベカラズ、叱シ且ツ之ヲ退ク當レリ要スルニ小兒ノミト雖トモ人情宜ク然ラサルベカラザルニ似タリ汝苟モ之ヲ恥ヅ、則當ニ之ヲ報ユル所以ノ方ヲ思フベキナリ、春水感憤是ヨリ書ヲ讀ミテ己マズ、少シク怠慢スル有ラバ則チ其父督責シテ曰ク汝筵席ノ恥ヲ忘レシ乎ト後大阪ニ遊ビ混沌社ニ入り學業大ニ成ル、國侯召シテ儒臣トナス禮遇甚ダ厚シ、遂ニ海内文柄ヲ執ル、是レ固ヨリ天材ニ因ルト雖モ亦激勵スル所アリテ遂ニ此大業ヲ成ス者ニ非ザル邪。

一、管茶山ハ備後中庄ノ農家ニ生ル、幼ニシテ群兒ト牛ヲ山林ニ牧フ群兒嬉戲至ラザル所ナシ、獨茶山ハ唐詩選ヲ手ニシ朗誦シテ己マズ遂ニ和田先生ニ從ヒテ醫トナル、余ガ先生ノ門ニ入ル時己ニ茶山郷ニ歸ル然レドモ備後ハ京ヲ去ル遠カラザルコト以テ時時往來ス余ハ屢々活接スルヲ得テ能ク其人ト爲リヲ悉ス、性奇異ヲ好ミ頭髪ヲ縮テ螺髮ノ如クシ而シテ笄櫛ヲ插ム、平生衣帶外套皆黃色綿布ヲ用ユ而シテ他色ヲ用ヒズ他衣ヲ着ズ綿布ハ蓋シ自ラ染ムル所ナ

リトイフ、嘗テ月梅ノ詩各二十律ヲ賦シ之ヲ和田先生ニ示ス、先生之レヲ村瀨栲亭ニ示ス栲亭嗟歎シテ曰ク宿儒ト雖トモ及ベカラザルナリト、時ニ年二十五六ノミ、幾クモナクシテ儒トナル、三十餘年江戸ニ來ル其髮ト衣ト猶ホ故ノ如シト。

一、管茶山ノ從兄松井子魯、余ト同ジク和田先生ニ學ブ、余郷ニ歸ルノ日、俠人郡川ナル者、無賴少年ヲ率キテ横行暴ヲ爲ス、之ガ人ニ問ヘバ即チ曰ク備後中庄ノ人也ト、其子ヲ力智ト云フ、亦能ク宵タリ、後チ力智眼ヲ患フテ診治ヲ乞フ、余問テ曰ク、子ハ松井子魯ナル者ヲ知レル乎ト、曰ク從兄弟ナリト、余驚テ曰ク然ラバ即チ管茶山モ亦從兄弟ニ非ズヤト、力智羞赧シテ曰ク然リ彼モ既ニ彼ノ如シ吾レ獨リ此ノ如シ猶ホ盜跖顏淵ニ於ケルガ如キノミ、余之レヲ笑フ。

一、凡ソ内ニ劇毒ヲ伏スル者アルトキハ妄リニ切斷術ヲ施スベカラズ、安藝ノ小吏大助ナル者、眼病アリテ診治ヲ求ム、其症角膜外面赤肉ヲ生ズ色恰モ赤小豆ノ如シ、肉上細毛ヲ生ズ五六莖、瞬動スル毎ニ刺

戰疼痛ス、余之レヲ拔去リ十日許ニシテ毛又生ズ又拔ケバ又生ズル凡テ三次點服皆效ナシ終ニ辭シテ療セズ。

一、余少壯ノ時、内醫術ヲ施ス、手指毎ニ戰ク、嘗テ手指ヲ使サル二三日、冷水ヲ灌ギ、極冷ヲ以テ術ヲ行フモ猶已マズ、常ニ慨ト爲ス年アリ、惑ハザルニ及テ此患甫メテ除ク、如今年已ニ八十、箸若シクハ筆ヲ執ル皆手指戰ヒテ自由ナラズ獨リ内醫鍼ヲ執ルニ至テハ、則チ活轉機用意ノ如クナラザルハナシ、蓋シ術未ダ熟サズ、心ニ疑懼ヲ抱ク戰カサルヲ得ザル所以ナリ、術稍熟シ、心ニ疑ハズ戰從テ已ム、年益々老ヒ、術益々熟シ、手中殆ント神助アルニ似タリ。

一、後藤、香川、山脇、松原、吉益、各古醫法ヲ以テ鳴ル、當時稱シテ五大家トナス、而シテ如今古醫法ヲ言フモノ、獨リ吉益氏ニ依リ復々四家ヲ言フモノナシ、其故何ナラン、夫レ仲景ノ法方ヲ取り、以テ之ヲ日用ノ病ニ驗スル者、驗シ得テ而シテ後ニ之ヲ言フ、一ノ空言ナシ、是ニ於テ吉益氏、獨リ擅ニシ

四家ハ得テ與ラズ。

善士生先生ニ旦夕シ深ク其非常ノ人タルヲ歎スルヤ一々其談ヲ記シテ以テ後規ト爲ント欲ス勿忙果サス冬春ノ交ヨリ刀圭頗ル閑、則チ稍々舊聞ヲ集録シ以テ一編トナシ師談錄ト名ク、其間醫事禁祕ニ係ハリ顯然書スルヲ得ザルモノアリ故ニ此編僅僅乎是ノミ且ツ從遊日淺キヲ以テ未タ十ノ一二ヲ盡ス能ハズ往々師說ヲ儲蓄シ以テ繼作シテ已ムザラントス。

天保十三年壬寅二月會津水野慶善謹テ江戸迎翠堂ニ識ス。

門人水野生、余ノ説談ヲ集録シテ一篇トナス題言ヲ余ニ請フ、余之ニ告ゲテ曰ク、管子ノ曰ク之ヲ思ヒ之ヲ思ヒ又之レヲ重テ之ヲ思ヒ而シテ通ゼザレバ鬼神將ニ之ヲ通ゼントス鬼神ノ身ニ非ラズ精氣ノ極ナリ旨哉言ヤ近者塾中子ノ篤志ノ如キ者ナシ勉強シテ已マズンバ將ニ大ニ爲スアラントス子ノ子ニ告グルハ是ノミ又更ラニ何ヲカ言ハン、生拜謝シテ曰ク謹テ教ヲ受ク、此ニ於テカ書シテ

以テ責ヲ塞グト云フ。

土生義壽法眼行年八十題

孫義 由再拜謹書

習醫先入

習醫先入敘

不類壯而官于東豐以阿堵病辭而隱于京師老而再官于西豐茲歲之春賜告而寓于洛東十閱月矣老弱抱病而立門諸生挾書而升堂是特以承乏焉而馬齒之長耳有三四諸生雨霽月夕徒涉洛水來往僑居而問習醫之法則不覺桴鼓相應寅鷄已報者亦幾回矣豐之三小子在側筆記以為秩亦惟習醫先入之言也欲使此言盈耳充腹以距邪說解疑惑矣名曰習醫先入云

享保丁未歲冬至日

玄々翁香月啓益牛山甫

牛山

貞庵啓益

習醫先入卷之上

牛山翁香月啓益述

門人

内海春東

相良梅山

藤江玄雄

記筆

○醫は民の司命百工の長といふの説
いにしへに稱す。醫は民の司命百工の長なり。此意は天地人を合せて、重とするものは命なり。命を生ずる者を父母といひ、命を主るものを君といひ師といひ。これを兼總る者を醫といふ。こゝをもつて三皇の昔より端を肇給ふ、伏羲神農黃帝は君にして醫なり。岐伯鬼臾區は臣にして醫なり。張仲景徐文伯は大守にして醫なり。伊尹老耽は聖にして醫なり。葛洪董奉は仙にして醫なり。周禮に。醫師を天官につらねて天下の大業とす。故に其道大にして。其任も亦鉅なり。夫士農工商とて。天下に世業を立るもの四つあり。工とは己が心と手とをもて。其業をたくみ出し。仕へす耕さす交易せずして衣食を供するをいふ。醫もまた其一にして。中華本邦の古へより。諸

藝の甲科とす。范文正公の言に。儒者宰相たらん事を得ずんば良醫となるべし。司馬溫公も達するときは良相となり。達せざるときは良醫ならんといへり。中華の儒者は文學をなし。進士及第を経て。庶人より次第にすゝみのぼりて。官祿をたうび宰相となり。國政を取り萬民を成敗して。國政を壽域に登す。これ儒を學ぶ人の目當とする事なり。されども其人により。時にあはす其志を得ざる者は。良醫となりて人の疾苦をたすけ。壽命をすくひ。此民をして壽域に登す所の仁恵は。ひとしく其志も亦相たがふ事なし。しかるに先賢の言に。農圃醫卜のたぐひ。大道にあらずといひ。唐書にこれを方伎に列してより縉紳先生衣冠を着して官位ある學者をいふ也常に醫を譚する事を羞て。下流の人の業とし。中華本邦共に醫の大道をして小道となさしむ。宋の林億の説に。至精至微の理を以て。至卑至賤の人に屬す。其能效を求めども。人の病を起す事鮮かるべしといへり。凡九流百家の世業の中に。仁の術たるこれにしくあらんや。いかなぞ小道となして。其人をいやしむべけん。晉の

平公の臣趙孟の醫和にさふに。醫も亦國家に及ぶやとありしとき。醫和の答に。上醫は國を醫し。其次は病すといへり。啓益願に經に所謂聖人は已病を治せずして未病を治し。已亂を治めずして未亂を治む。それ病已に成て後。これを藥し。亂已に成て後これを治むるは。譬ばなを渴して井をほり。戰て兵を鑄がごとし。亦晩からずや。又いはく。主明らかなるときは下安し。こゝを以て生を養ふときは壽かく。世を成るまで殆からず。天下を治むるときは大に昌ふ。主明らかならざれば十二官危く。使道閉塞して通せず。形乃大に傷る。又いはく。急なるときは其標を治し。緩なるときは其本を治すなどいへる語意を見れば。醫道をもて國家を治めつべし。其大道たるなんぞ耻る事あらんや。諸藝の甲科となして。百工の長といはざらめや。

○醫を學ぶ人を選ぶべきの説

醫業をもて其身を立させんとをもふ人を選ばんに。其親又はその一族の中にも。其長たる人に談じ。其子の器量骨相等をよく見定めて後。醫を習は

しむべし。その生質幼より人に勝れ聰敏にして。才智至てたくましく。識量極めて剛強に。其性安靜にして。書を弄ぶ事を嗜者を選てその人とすべし。高坂彈正の記にいはく。老練の者みたり四人寄合て。武者雜談する所に童子四人其座に居に。一人は口をひらき語る者の顔ばかり見てきく。一人は耳をすまして。ちどうつぶきてこれを見きく。一人は語るものの顔ばかり見て。少しづつ笑ひる顔してきく。一人は其座を立退く。此四等の童子長になりて。それぞれの生得をあらはすなり。始のうか／＼とさきく童は。後までも其心をこり。跡先のわきまへもなく。形儀ごりひろめつゝかぬ作法なれば。しかるべき人を持事もなく。よき朋輩の異見うくる近付もなきものなり。二番に耳をすまして。武士の雜談きく童は。長になりては竝なき武邊譽の覺への者となる。三番に此物語を聞てにこゝ／＼と打笑て。面白がる童は。後には必武邊の譽ある者になれど。あまり過て權高く。人に惡を請る者なり。四番に其座を立退たる童は。後には十人のうちに八九人は臆病者なり。譬一二人

未練になくて。其人の跡につき合戦せり合の時。追頭の人並に逃る敵を討ても。鎧下の本の高名とおもひ。醫驗をいひまわり。能武士の本の手柄をも。己か心に引あて。是も我ごとく討よき敵をうちてこそ。大剛の譽にいはれずらんご心得。人間にあまり替りたる人は。世の中にあるまじきご。能武士をそねみ。口にまかせていひまふる事。是幼少の時其座を立退たる童子。長となりても仕形如斯侍ることあり。これよく童の氣性を試得たりご知へし。醫を習はせんごおもふ人も。かく童の時より其氣性をよくためし選ぶごきは。いかんぞ其人を得ざらんや。今の世の風俗を見るに。其親あまたの子を持て。それぞれに渡世の業をなさしむるに。其子の生つき人相見かけもよく。心はせも賢をあらびて。まづわが家督を定め。それにをこらぬ生つきの子を。親族婚家の養嗣。他家をも繼すべき心當とし。そのうちにても生質魯鈍なる子か。或は無名の指かゝまり。或は隻眼か偏癩か。又は多病にして虚怯なる者か。此等の類の物の用にも立まじきものをして醫を習はし

む。又は其親により其子の愛着にひかれて。小さかしく猿利口の生れつきの者を。よき才覺の性質と心得。此子がごときの才ならでは。學問も成かたく。治療の工も働く事侍らしなどおもひて。醫業を習はしむるもあり。いま其子の生れつき不具にて。人前に出しても此片輪にては。世間にうごまれん事を口惜くおもひ。此術業を勉勵せんに。五體こそ不具ならぬ。心はなごか賢きより賢きにもうつさば移らざらんや。なれば猶更學問に心をよせ。其名を天下にもしられんと。大志を立る者もまゝ多ければ。其道成就して公武に選舉せられ。位祿共に貴く。富巨萬をつみ。良醫の號を得。其身の不具はかへりて其徳さなる者多し。又多病にして虚怯なる者も。その性質安靜にして。多くは學文を好むものなり。静ならざれば學をなす事なしといふ古語に違はず。其上氣弱きをもて。世間の俗樂をいこひ。己が病身なるをもて保養を慎み服藥をなし。其身の病を治し得て後。其術を他人に推し及すなれば。おもひの外に良醫となる者も多く侍る。左なくとも中位の名を得。

老練の後は。巧者と稱せられて。名醫の列に入者も多き事也。又魯鈍なる性質の者は。親もその子の生れつき人並ならぬを知て。仕官はさらなり。農家商家のしわざも成がたければ何ぞぞして此術業もて。其身を立させまほしくおもひ。金銀をあたへて學問料とす。彼學友のわる賢き諸生。此なまぬるき男をいざなひ。親の前をば。けふは詩に明日は輪講の會などゝことよせ。すかし出して惡所へ伴ひ。學問をせぬのみか。果はえもいぬ病をうけて。生れもつかぬ片輪者になり。身體髮膚を毀傷するの謗を得る類のもの多し。又魯鈍なる者のうちにも。性質の美を備へて惡事にひかれず。本式の學文にはあらねど。治療の方書など讀ならひ。藥方等を少ばかり暗じ得。經絡俞穴など所々覺へて。四五十の比に至れば。少く世に聞ゆるなどの名を得る者もまた侍れど。多くは下手功の行たるまでの庸醫なるべし。願ふに世の中の事すべて功者と稱するは。多くは下手藝を取なして譽ることはにぞ侍る。和俗の諺に。正直とは馬鹿の漢名といふにひこしく。功者とは下

手の唐名と心得たる。誠にてしかり。又小さかしく猿利口の者は己が智惠自慢のみして治療をなすに。人並に癒やすき病を。遇中に癒しても。中的本の療治ごおもひ。醫驗を云まはり。明良の醫師の療治をも。己か心にひきあて。是も我ごごく治しやすき病を癒してこそ。大功の譽にいはれやすらんと心得。人間にあまり替りたる人は世の中にあるまじき。明良の醫師をそねみ。口にまかせていひまはる。たま／＼經書の片端をのぞきては。いにしへの聖賢もよほど利口なる人達かな。我等がをもひし事をこくさとりて説給ふよなど。口のあきたるまゝにいひちらし。醫書は文章の拙きものにしてみるにたらず。經書の工夫理學の議論などはなまぬるき事。詩賦文章こそ學文の花なれとて。圓機活法の古句などをつぎ合せ。己か物のやうにこしらへて俗を欺く。たまたま識者ありて。これは古人の句を竊み。古人の心をそのまゝ出したるなど評判すれば。それは古人こそ我等か詩句を犯しぬすみたれなと。わるじやれのおどけ口を云ならひ。俗を誣てみづから儒醫と誇

り。古人の醫按を己か醫狀のこごく語なして。鼻のかぎりおごめかす。是幼より姦曲の性を養ひなすによりて。長になりてかく偽多く。己があやまちをかざり。他の非を病て恒なき人なり。此等の人品の者に。醫業を習はしむる事なけれ。上にいふごごく。其座を立退たる童子。長になりての所爲かくの如し。童の時より其性質をよく見定て。其人を選び醫をならはしむべし。古語にも。人恒なくんば巫醫をなすべからずといへれば。能々心得へき也

○親につかふまつる者は醫をしらすんば有べからずといふの説

伊川先醒の言に。病で床に臥す。これを庸醫に委ぬ。これを不慈不孝に比す。親に事る者醫をしらすんば有べからずといへり。庸は常とよみて。學文もなく其術も働かず。尋常の下手醫師をいふ也。此庸醫に親の病はさらなり。其身の病とても委ね托するといふは有べき事にしもあらず。藥を服してかへつて其病を加へ。輕病は重くなり。重病は死に至る。しかれば親に事るもの。醫をしらすんば有ましき

といふ義なり。此醫をしるといふを。近世の學者多くは人の子として。醫學をよく知極め。醫術をよく知得るといふ事と心得たる人まゝあり。丹溪先生の言に。古人醫を以我儒の格物致知の一事とす。記し給ふも。伊川先生の語意をふくみてなり。啓益顧に。醫を知らば左にはあらじ。天下の人の子たる者。悉醫學をなし醫術をしらば。比屋皆醫師成へし。其身よく知極めたる事なれば。醫師にゆだねるまでもなく。己直に薬を用へし。聖人さへも達せざるの薬は嘗給はず。鄙事に多能なれども。田島を作る事は老圃老農にしかずとのたまひ。軍旅の事は學はずなどのたまふは。それ／＼の専門の業あればなるへし。聖人の才智さへ。かく物にあまねからず。いはんや世間の俗。それ／＼の世業をいごなみ渡るに。何のいごまありて醫術を學ひ得てんや。醫をしることは醫學をなし。醫術を知極て人に施す。醫師のごとくせよといふにはあらず。大概醫の道理をしりて。その醫師の良庸をしりわきまへよとの教なるへし。丹溪は白雲の許氏の高弟にして。朱晦庵先生よ

り四傳を経たる儒者也。三十歳の時より。醫に志て良醫と成たる人なれば。醫も亦我儒の格物致知の一事と書給ふなり。今時の學者。醫をしらては叶はざる事のやうに心得。醫書の片端をいごけども。それの家業の勤あれば。専門の人のいごくもあらぬを。己か少しく心掛たるを鼻にあて。世間の醫師を。はもの、數ごもせず。父母の病其身の病にも醫を招かず。たま／＼世のいひわけのみに醫をまねき。薬をこひ請ても。引ひろけて逐一に選分ち。是は何の方なり。是にて此病を治せんは。迂遠千萬など誇り嘲り。外向は其醫師の療治分にして。内證にては己か手合をし。家ごぞりてこれを服す。輕病は重くなり。重病は死に至れども。薬の誤といふには氣もつかず。たゞ天命ごのみをもふなり。丹溪先生の博學多才の大儒にてさへ。素問をとりて三年讀てこそ。得所あるに似たりといひ。始に學ふ所の擧子の業の書を。悉く燒捨て。醫學一偏にかたふき。そのうち羅太無といふ明醫の師に教を得て。はしめ療治の誤にて廢人となり。或は死に至りぬるなど。逐一其誤を

後悔し。種々に心を用てこそ。明醫とは稱せられ給ふ。かくのこごきの大業を。少く其傍をのぞけばごて。人に施すなどいふは。和俗の諺に。なま兵法は。大疵の基といふにひごし。中華の諺にも。書を學ぶごときは紙費へ。醫を學ぶごときは人費のいへは。大切なる事ごおもふべきなり。三山の蕭京の説に。醫をしるごは醫學の道理を識て。此病はいかなる事より發りたれば。薬はいかなる方を用ひ。保養はいかゝすへきごいふをわきまへて。治療は醫師にまかすべし。をのれよく學び識ごも。醫師をして其道理を説せ聞て。みづから見得し。或は己所見ありごも。亦他に説て商量斟酌して。醫師を撰ひ試べしごいへり。しかれば醫をしるごは。醫の道理を大概押極め。醫師の善惡をしりて。父母の療治を委ぬべしごいふ義ご心得へし。これ醫師ならぬ世間の人に教る所の大法なり。醫を業ごする輩。猶更心を用へし。能々心得へき事なり。

○醫師に其品類數多あるの説
いにしへより明醫と稱するは上三皇六臣より以下

の。醫の道德を明にして。其神玄機に遊んで。誦して能解し。解してよく彰し。彰して能變化し。其診よく十全に合し。儒仙に超てその道德の高き人といふなり。又儒醫といふあり。秦漢よりこのかた經に通し史に博く。身を脩め行を慎む。聞人傾儒にして。兼て醫道に通したる人これなり。又德醫と稱するは。明醫儒醫のうちにも。其德行の猶更勝れたる人にして。宋の潤芳のごとき。貧家の病を治するに。金を懐にして席の下に置。これを得せしめ。病者一たび喜んで其病いへ。東坡先生の貴藥を蓄へ置て。病人を救ふ類これなり。又隱醫といふあり。儒にして舉用せらるゝ事をいごひ。醫に隠て世事に預らさず。治世に在ては其名の權門高家に聞達せん事をいごひ。若は亂世に居ては性命を全くして。災害をまぬかるゝ類これなり。その内深山幽谷にかくれ。凡俗に交らず。茯苓松の實やうの物を喰て。服食家ごなり。世の爲に仙方を傳へ書をあらはす類の人。葛洪孫真人等これなり。これを仙道の醫といふ。又世醫と稱するは。世々相傳へ醫を以て世業ごする人

をいふ。三世の醫。又は一世の醫にても。これを世のいごなみなりはひとする人をいふ也。又時醫といふは。其時にごりて世に擧用せらるゝ類。和俗の名醫といふ。蕭京の説に。名醫とは明良の醫をいふにはあらず。庸手粗工の實學なく。巧に虚聲を竊みて。人を炫す者これなり。又奸醫といふあり。其性質姦曲にして諂諛を事とし。權貴の門富貴の家に入し。腰を折膝をかゝめ。婦人女子に阿り近付て。擧用せられんごのみはかる類是なり。薛已の醫按に。ひごりの奸醫あり。病を治して效なし。薛已を迎て治せしむ。參附湯を用て速效を得たり。其前醫薛已の前にては。同心の醫を得たるなご諛言をいひ。薛已歸りたる跡にて。竊に病家にさゝやき。此藥能事はよく侍れど。溫補に偏なり。後には必其害を見む。今われ少しく黃連を加へて其毒を解せんごいひて藥をあたふ。これさへ姦佞なる事なるに。をのれが藥に黃連を用るまねして。薛已の用られたる參附湯を。ごりも直さずそのまゝ用ひ。其效を得て

己か能に誇る。薛已その姦曲を惡み。世の戒とせん爲に。表してこれを出すと見へたり。蕭京の説に。奸醫のなす所を見るに。治しやすき病を見ても。病家に對しては大切に。治も及ひかた。變症も出來らんと危言を假て示し赫す。又容易の病に峻劑を用ひて變證せしめ。重症となして治するもあり。又富貴の人内亂の家などに値ては。嬖妾寵を妬み。奸讐を挾む事あり。病にこよせて害をはかり。手を假て毒をすゝむ。これ利を貪る奸醫にして。人の嗣をたち。人の生を喪ひ。既にその心術を壞ふ。又淫醫あり。人に妖淫をすゝめて。道を傷ひ齡を損す。高貴豐饒の人は。知命耳順の後。多くは方士仙術の邪説に惑ひて。或は房中補益などいふことを信じ。或は食料の類にも。補陰益腎の物ごたにいへば。怪しき類の物までも求め得て食し。補腎壯陽の藥ごいへば。後にはその災害の生する事のわきまへもなく。頻にこれを服する事。いにしへより今にわたりてさる事ぞかし。彼淫醫の輩此術を相傳し。其藥を調合しこれを權門高家に獻じて媚諂ふ。老子の

神仙の道骨さへ。房中補益の術はよく人をたすけ。またよく人を殺すといましめ給へり。いかんそ凡俗のなす所ならんや。東海の張弼仙芽といふ藥の。陽を盛にし腎を益すといふ事を。本草に讀するを刺る言に。君をして昨日纔に持去しめ。今日は人來て墓銘を乞とあり。誠なるかな姪を教へ徳を敗りて。人の天年を損するは。これ岐黃の罪人也。醫はたゞ徳を納め。人を治する事を司るものなるに。かへつて人を損傷す。これを淫醫といふ。かくのごとく數多の醫あり。能々心を用て醫業を慎むべき事也。

○醫に十三科あるの説

中華には醫を十三科にわかつてり。所謂大方脈。小方脈。風科。婦人科。産科。口齒科。咽喉科。金鐵科。傷折科。瘡科。眼科。鍼灸科。禁祝科。此十三科の名目。いつれの世よりかく定たるごいふ事いまだ考えず。陶九成の輟耕錄に載侍れば。多くは宋朝よりいひ出したるならんか。王肯堂の證治準繩には。脾胃科を合せて十四科とす。本邦には大人科。小兒科。婦人科。眼科。口齒科。鍼科。按摩科。外

科。此八科を立る也。大人科は大方脈の事にして。和俗のいふ本道の事なり。近世本邦按摩の術盛に流行すれば一科に立へし。中華にてかく十三科十四科ご其數をわかつては。其一科つゝを専門の業とするときは。其術もまた委きに至らん事をおもひて。かく其品を立たるなるへし。そのうちにも本道の醫ごいふは。醫道に預る所の萬事の學問をなし。其理に通達するなれば。十三科の業術ごつごとして知覺せずといふ事有べからず。諸の方書に病門を立る後に。婦人科小兒科外科門を備へ載せざる事なきを以て知へし。上古の醫にかく名目の品々ある事をきかす。末世になるほど諸の業も皆事繁く成行ゆへに。それ／＼の科を立て。其術業を勉勵すれば専門となり。事すくなにして委しきに至らしめんごなるべし。本道の醫たる人此事をささし。先一旦それ／＼の専門の學に心をよせ。勤得て後諸科を除き。本道の治療のみをなすべし。凡病家は平生本道の醫に頼む所多ければ。毎日病家へ出入する故に其次には萬の病をも。打まかせて頼む者もまゝ多きなり。されど

必それ／＼の専門家にゆづり。己か療治を施すべからず。若くは専門の醫の療治にても。其驗なきときは。世間多くは本道の醫に頼む。もこよりそれ／＼の道理に通徹したれば。専門の人にもその業術をささるゝをさそらぬ事なれば。誰にはかりゆつる事あらんや。治療をなして其效をさるべし。此故に十三科をわかつといへども。大方脈をもて第一とする事をしるへし。禁祝科といふは。中華本邦共に太古より傳へ來る術也。素問に移精變氣論あり。其由を呪て。その精氣を變し轉して。其病をのつから癒ゆるなり。丹溪は移精變氣は小術のみ。小病は治すべし大病は治すへからすといへど。邪祟病瘧疾の類。藥を用て效なきに。祝由して其效まゝ多し。本邦太古は醫をしる者すくなく。病あれば梓の弓にかけ。或は修驗の法を行ひ。其病を癒す。されどこれは巫覡の類のしはぎにして。醫のなす事にしもあらず。病家の心にまかすべし。病家は何にても病の癒ん事のみをおもへば。平生は學文だてをなし。邪説の妄言をいこふ人も。病苦に臨んでは巫覡を招きて祈り呪

ふ類多し。醫によりてこれに道理を争ひ距むあり。此等の事に争ふは至て益なき事なり。和俗の諺に。藥せ禱れといへば。外よりなす事は妨なきなり。いかほとも祈禱せらるへしなど、おこなしくいひて病家の心にまかすへきなり。禁祝の科は醫の別術にして。我道に預る事にあらずと心得べき也。

○巫を信じて醫を信せざるの說

中華にも禁祝科の一流を立たり。素問に移精變氣論あり。此意は。人は一氣の流行をもてたつなれば。其由を神明に呪て。精氣を轉移すれば。一氣めぐりて其病をのつから癒るなり。丹溪の説に移精變氣は小術のみ。小病は治すべし。大病は治すへからすといへり。此事至極の論なり。本邦はもこより神國にして。上中下共にすべて神明を尊敬し。祈禱を専とする風俗なれば。病の時醫療をなす事はすくなく。巫覡或は修驗の行者。天台眞言日蓮宗の出家に屬して。種々のまじなひ祈禱をなす。こゝを以て醫の科とすることなし。本邦のいにしへの六國史。或は源氏物語等にも。多くは醫療を宗とするなく。たゞ

祈禱のみせしことを書載たり。鎌倉將軍家の時代までも。多くは其風俗にして治療せしと見へたり。吾妻鑑等の書に。たま／＼藥を用たる事を書載たるを見るに。こゝ／＼局方の藥劑のみを用たるなり。近世とても邊鄙の俚俗は藥といふ事をしらぬ類もまあり。たゞましなひにて病は癒る物とはかり心得たる所もあり。本邦治世百有餘年なれば。文明時至り。人智開けたれば。醫も文學を好み。本草の學盛行はれ。近世こゝに物産形狀の學流行して。藥物に博く。本邦になき藥物の類も中華朝鮮より渡り來て。何の乏しき事なく。をのづから藥物に精しく。柚木とるあら山。鯨よる遠浦までも。醫療の事疎からず。たゞ邪祟病と瘧疾との二病のみ。祝由して癒す。近世なまものじりの儒醫などいふ人は。實に狐狸犬猫などの人に着といふ義あらん。皆病人の虚と痰との所爲にて怪しき事あり。丹溪の邪祟の論を見て知へしといへれど。もこより虚痰の二症の。邪祟に似たる事もまゝ多き事なるゆへに。丹溪も邪祟に似たりといふ論を立給へり。決して邪祟といふ事な

くは。似たるの字を下すべけんや。内經にも邪は虚に乗して入と説。古哲の言にも。心正しき人邪に犯さるゝ事なしといへり。こゝを以て賢人君子此患あらず。此病は多く婦人女子か。又は頑愚の人。或は大病の後元氣薄弱の者の類ならでは有事なし。此時は祈禱をなして邪氣を禁祝して其病癒なり。上古より中華本邦ともに。祝由科を立たるも故あるべし。しかるに庸愚の人は。たゞ怪しき事のみを信じ。巫覡賣僧の輩は。その邪術をもて種々の奇妙をこき怪談を街ひ財利を貪る故に。扁鵲の言に。巫を信じて醫を信せざるは。ひこつの不治なりと。六不治の中に入給ふ事。誠にこゝはりふかき義と知へきなり。

習醫先入卷之中

内海春東 門人 相良梅山 記筆
牛山翁香月啓益述 藤江玄雄

○醫三世ならずんは其藥を服すべからずといふの説竝に老醫の説

禮記曲禮の篇に。君病ありて藥を飲給ふときは。臣まづこれを嘗。親疾ありて藥を服するときは。子まづこれをなむ。醫は三世ならずんは。其藥を服せずといへり。此意は。君平生無事の時は。膳夫といふ役人。その御膳部に供する所の品々を嘗て奉る。太子これを見てすゝめ給ふ。これ唐土の禮にして。其慎をなす事かくのごとく嚴重也。本邦にても。公武の貴人かくのごとし。又膳夫を鬼役といふ事は。何にてもまつ一口づゝ喰試るを以て也。此名は伊勢物語に。鬼はや一口にくひてけりといふにこれり。疾あるときはその世子。又は臣たる者。まづ其藥を嘗る事は。尤忽にすへからざるの義なり。三世の醫と

いふに。いにしへよりさまゝの説あり。呂氏の禮記の註に。三世とは祖父より三代相傳するときは。人の病を治する事多く。藥を用る事も熟する故に。其效すでに試み得て疑惑なし。かくのごときの醫を選びて治せしむる時は誤る事なし。これ病を慎むの道なりといへり。宋景濂の説には。三世とは一曰鍼灸。二曰本草。三曰素問難經。此三ツのもの、道理を究め得たる醫を三世の醫といふ。なんぞ祖父相承のみをいはんや。吾郷に嚴生といふ者あり。三世の業なりといへども。局方の藥方のみを用ひ。其工はなはだ能なり。又朱聘君といふ者あり。其家世世儒を學ぶ。聘君の時に至りて始て醫を習つて當世に鳴なり。嚴生は三世の醫にして。其術一世の聘君にしかすといへり。虞庶の難經の註には。素問本草難經これに三世の書とす。これをよむ者を三世の醫といふ。秦定養生主論には。伏羲神農黃帝の書これを三墳といふ。墳は大なり。いふこゝろは大道也。これをよむを三世の醫といふ。續醫説には李東垣。朱丹溪。滑伯仁の輩。皆世傳の醫にあらずして。委

く醫術に通ししは、危殆の病を起し或は書を著し言を立て後學の楷範とす。初よりその祖父相傳の事を聞ず。しかれば醫は書をよむにありて。三世にあらざる事明なりといへり。啓益願に本邦の醫も亦かくのごとし。必世々相傳の醫には限るべからず。古語にいふかごこく。美人はかならず西施の種にあらず。舜の子も不肖なり。いかなぞ其家がらの。數代を経たるのみを貴はんや。三世とは其術の委しかるへきにござる。家傳の妙方の效を試得たる事も多く。世々相傳して畜る所の書も乏しからず。新習の一代醫師とは違ひ。其傳來もしかるへければ。良醫たる事勿論也。これその常なるべし。三五世を経ても。龜工といふは變なるへし。ひざり醫のみにかきらす。世間の藝者。其家業を世々うけつきても。なす所よろしからぬは。その人の生得の才智と。勤とにあるなれば。必三世の家をさがむべからず。三世の醫にして三世の書をよみ。其業に心をいれ勤るときは。いよゝゝ其術に委しからん。彼數代相傳の醫師は。己が家自慢のみをなし。書を讀こをいごひ。わざ

家傳の澁紙表紙の横切の寫本のみを信し。古來の方法のわきまへもなく。是はわが祖父の工夫をもてくみ出したる妙方にして。他の知事なしといひの、しり。あまつさへ古人の醫按を。何のせんぎもなき。是は予か何代前の何某といひしが。何の國に在し時。かやうなる手柄をしたる醫按なりと。こごこしく語なせば。彼醫を荷擔する人は。家久しきほどありて。其妙術をのつから傳來し備るといひ。みつからは三世の醫と誇る類まゝ多し。又一世に鳴出たる醫師は。をのれが智惠自慢のみをして。書籍の片端を讀たるをたのみ。それを鼻にあて。儒醫學醫と誇る類多し。此ころ我門に遊ぶ小子も此氣性のものまゝ多く侍れば。狂歌一首よみてこれを戒むミミカキ空耳にひごつばかりの智惠自慢の墨のちらぬのみミミカキかはミミカキ和俗の傳來に視の墨のちらぬのみミミカキおかしき事なから戒となるべきにや。又家傳妙藥といふも有へし。妙藥とても凡人が神農にてもなければいかんぞ新に其妙を發明せんや。此妙藥といふもみないにしへの方書の中に散在してあれども。其用を病に施

し試み得る事なければ。好んで書籍を博く弄ぶ輩もたやすく見過して其妙たる事を知ず。家傳にて用ひならひ。其效を試み得て後こそ。神妙の靈方たることをもしるべし。是も亦有益の事成へし。又世に老醫とて舉用る者多し。これも亦世々相傳の醫を上手といひて用るにおなじ。老醫なれば物に博く試み得たる事も多かるべしと思ふにおもひの外にたゞ犬馬の齡をのみ經て用なき類の者多し。むかし靜念上人腰かゝまり眉白く誠に徳たけたる有さまにて。内裏へまいられたりけるを。西園寺の内府見たまひてあなごふこのけしきやと。信仰のきそくありければ。日野大納言資朝卿これを見て。年のよりたるに候と申され。後日にむく犬の淺ましく老さらばひて。毛はけたるをひかせて。此氣色たふとく見へて候とて内府へまいらせられたりける類もある事ぞかし。和俗の諺に。醫師と船頭とは古きをもてよしとすといへとも。船頭も年老ては氣弱くなりて。少の風波にも驚き躁ぎ。進退度を失ふ類多し。醫もまた年老ては。心も恍惚となり。物わすれ多く。なす事みな氣弱く

なり。其理にあたらぬ事もまゝ多し。されども氣能暴なる若き醫に較るときは。まされる所も有へし。四十五にして聞る事なき者は。おはんぬらくのみと古聖人ものたまへは。四十より六十有餘までを醫の用ひ盛りとせるべし。醫を業とする者老衰の後は強て人頼むごとも心あるへし。病家もよく心を付て。三世の醫になづます老醫の古狐に妖さるゝ事なかるべきなり。

○良醫は福醫にしかすといふの説
中華の諺に。良醫は福醫にしかす。明醫は時醫に及はすといへり。ひとり醫のみにかきらす。世間の事にも。亦天然自然と貧福は備るものに侍る。こゝに二人あり。一人はけふは西へゆかんごともふに。はからざるのさはり出来て西へはゆかて東へ行き。東の空朝曇したるが。ほどなく快く晴わたりて。天氣和暖になり路のほども靜かに。先さまのあるじも在宿にて。甲事のほどおもふまゝに相談し終れば。わが好む所の基友ごち不圖來り。かけ碁に勝。すきの河漏ふるまはれて歸る。一人はけふは北へゆかんと思

ふにさはる事出来て。北へはゆかて南へゆくに朝は南の空晴わたりたるか。俄に空かきくもり。大雨大雷にあひて濡しほれ。うれしや雷雨も少くやみたるごおもふ所に路の行すりの辻喧嘩を見て。傍杖をまぬかるゝまでにて漸く先さまへたどり着たれば。あるじは他出にて心當の用事も調はず。たまゝ隠居が宿に在てよき所へ來り給ふ事かなけふは雨中にてみたりよたり相催し。夏切一服申す折からなるご四疊半にいさなはれにじり入て。嫌ひの麥飯ふるまはれて新茶をのみ。歸るさにも亦雨の名残に逢て明日より頭痛が發て。持病の眼氣になりたる類もあるぞかし。福醫とは。世々家傳の醫にもあれ。又は世に鳴出たる人にもあれ。しいて學問をもせず。さるから世間儀の勤をも苦勞せず。さまで利害の事をはかるにもあらず。彼の東の方へ行たる仕合男のごこなすほどのこと皆わかおもふまゝになり。治しやすくして見かけは重きやうなる。病の療治をのみたのまれ。又は他の療治にて過半は能方なれと。前醫も扁倉ならねは。後の變をもんばかりて。はや數日

ひきしるへは今少ごおもひなからも辭退をなす。病家も心もごなく思ひ。醫をかゆれば。十にして六七は前醫の藥にて癒かゝりたれば。藥を用る事數日ならすして。するゝと快くさはやぎて。しかも其病家は權門か富家なれば。其醫驗世上に隠れなく。かくのごとき事打續て仕合よく。たまゝ藥の誤にて殺したる者は。貧賤の家又は奴婢の類なれば。誰知事もなく。あまつさへ病家は。おれつらの下部今時の大醫のはやり醫師の御手に及はねは。これ天命也といふ。此醫の年齢いまた初老にたも至らねごも。却て明良の醫を壓倒す。これ福分の備たる人。時に逢て世に舉用せらるゝ。福醫時醫にして。明良の醫のしかず及ばざる者なり。奸醫淫醫の種々の術を街ひ。諛諂佞姦をもて俗を欺く者とは。同日の談にはあるへからず。今時いふ所の福醫時醫は。多くは奸醫淫醫のまぎれものなり。わか門に遊ぶ小子。假にも淫醫奸醫の風俗に傳染する事なけれ。一旦は利を得るに似侍れと。後には必妖あらはれ。和俗の諺にいふこごとく。化方ケウの下阪ゲとやらんにて。末ごげ

ぬのみか。わさはひ其身に及び。子孫も繁昌せざる類多し。能々心得べき事なり。

○三度脈を折て良醫となるの説

古傳に三度脈を折て後。良醫となるは。孔子の御こと葉といひ。楚辭には九度脈を折て良醫となるといへり。古註の意を考ふるに。脈を折とは過を悔て。其道理を知の義也。二度も九度も病者の脈を打折て後に。方薬を用ひ試みて。をのつから其病をしりて。良醫とはなるといふといへり。啓益願に脈を折とは左には有へからず。其事を工夫思索するの貌をいふなるへし。和俗の物に苦惱をし。精を出す事を骨折といふこと。物を工夫思惟するときは。幾度も／＼脈を曲て沈思し。精慮をめぐらすにあらでは。其理に至るへからず。かく骨を折て後こそ。良醫とは成侍るへきといふの意なるへし。博物の士に就て。二たびこれをたすべき也。

○醫師幼より學をなす次第の説

醫を學ぶ童蒙を教るには。十歳よりうちは千字文蒙求標題等を。數百遍記誦せさせて。誦誦するに至る

べし。十歳の後は。四書。小學。近思錄。五經。古文前後集。文選等の書を素讀すへし。一日に十枚宛數百遍なすへし。是十歳より十三四歳までの間。五ヶ年の功をつまては。何ほど聰敏にして記憶よき者とても。成就すべき事にしもあらず。いはんや魯鈍薄憶の生質に於てをや。十四五歳よりは。素問靈樞。難經等はさらなり。宋元明の間の。明醫の述作の發明の書。運氣論。大成論。原病式。脾胃論。辨惑論。格致餘論。源洞集。難經本義。正傳惑問。明醫雜著。十四經發揮。局方發揮。本草序例。診家樞要。入門歌括。此等の小部の書十五六部もあり。これを數百遍記誦すへし。十歳より儒書を讀たる其力にて。醫書の素讀はおのつから文字もよめ侍れば。習はされども容易かるへし。そのよむるをたのみて。多くは數遍よむ事なし。十四歳より十五歳まで二年の間。上にいふ所の醫書を。一日に三十枚を五十遍つゝ讀へし。かくのことくすれば。其語は其篇にありといふほどは。大概覺ゆるなり。是こてもたやすからぬ事なればにや。昔兼好法師も、紫の朱を

奪ふといふ句を。論語の九の卷のそこ／＼のほごりに侍ると。堀川の大納言師信卿へ答たるを。自讀の

ひとつに入しぞかし。上にいふ所の書は。本邦の舌耕者流の。醫の講習討論する書也。此等の書をよく素讀して。講釋をきくときは。其理渙然として解す。いかほど聰敏なる生質の者も。素讀うときは。講釋を聞ても。上邊はすみたるやうなれども。底意に通徹するはなきものなり。されども此數部の醫書を誦誦するは。いかに記憶の強き人とても成か

たき事に侍れば。醫を學ぶ書生に。其要文をしらくめん爲に。往歳醫學鈎玄三卷を編集し。梓にちりばめて世に廣くす。此書は諸の醫書中にて。其肝要の文。或は半章或は一句を揚て。童蒙の記誦し安き便とす。わつかに三卷の書なれば。誦誦することも容易かるべければ。毎日何枚といふ課程を立て。數百遍記誦すべし。此書は醫論のみを擧げ。十類の門を立て。醫の能事畢るなれど藥物の性効。本草の事をのせず。しけきをいふにあらず。近歳又藥籠本草三卷を編集し。梓に彫て世に行ふ。藥物の性効は少し

く藥性歌などを誦したるまでにては。委きに至らざればその益すくなく。又本草綱目に載る所の。一千七百餘種の藥性を識得ても。其要はたゞ藥籠中に畜ふる所の。百十餘味の功能を誦じ。其議論の委きにしかんや。是も亦わつかに三卷の書なれば。記誦しやすかるへし。此二書を記誦し。其理を究め盡すへきなり。此一件にいふ所は。初學の醫生。十歳より十七八歳までの。修行底と心得へきなり。

○醫師十七八歳より以後の學問の次第

の説

上にいふ所のことく。十歳より十七八歳までは。儒書醫書の素讀をむねとすへし。十七八歳よりは舌耕者流の學者に就て。儒書醫書取ましへて。講談をきく事一兩年にしてやむべし。儒者も醫者も。講釋のみ聞て學者になる者はなし。聰明なる者は好んで書をさへ閱すれば。其義理をのつから通して。講釋をして人を導くなり。されども魯鈍なる性質の者は。講釋を聞て。漸く其義に通するもまゝ多ければ。一概にはいひかたし。講釋を聞て漸く會得するほどの

器量にては。世間より師家と稱するほどの人には成
立ぬものなり。しかれば講釋をきくは。書を涉獵す
るほどの益はなく。たゞ暇を費すのみと心得へし。
二十歳の比より三十歳までは儒書醫書相まじへて。
博く涉獵すへし。毎日課程を立て勉勵すへし一日の
間三分二を醫書。三分の一を儒書と定むべきなり。
史に博く詩文に巧なる者は。多くは醫書の文字の拙
く。義理の穿鑿めきたるを誇り。をのつから醫書に
うごくなる者もまゝ多く侍れば。始より其心得を
し。醫書に心を入れて學ふべきなり。先内經の註を涉
獵すへし。王氷の次註より始めて。馬玄臺の註證發
微。張介賓の類經に終るへし。類經は内經を十類と
なし。其本文を或は半章。或は數句を切て。其類を
わがちたれば。一章のつゝかぬ所多く。其一篇の文
意をなしかたき所もまゝあり。此を張介賓は。古今
の發明との自讚なれども。おなしくは一篇を書つら
ねて。註し侍らんはよかるへし。内經を講する便と
成ぬへくおもひ。余若かりし時。類經の板本を披き
わがちて。もこの本文のごとく次第をなして裁切

て。かけたる所には白紙を入れて其所を補ひ。其切々
はそれ／＼の篇内にかへし入て。貼にして取合せ。
全部十八巻もこのごとの靈素の本文となして。其
註解は張氏の作なり。次註の説註證發微の説。竝に素
問抄の説の異なる所を頭書にして。靈素合註と名付
く。後學に靈素を講する便とし侍る。これ張介賓の
意に違ふに似たれども介賓もまた岐黃の意には違ひ
ぬるを。余今岐黃の本意にかへして。もこのごとき
になす事なれば。其罪もまたまぬかるべきならん
歟。註證發微。竝に類經の註意を見るに。多くは王
氷の註意をうけて。言よく云述たるのみにして。さ
まてかはりたる發明ごともなければ。まゝ新意を出
したる所もありて。取用る事多し。王氷は靈樞を註
せず。馬氏張氏始て靈樞を註するは。後學に益ある
事なり。益啓願に。王氏の靈樞を註せざるは故ある
へき歟。滑伯仁も素問抄を著して。靈樞に及はず。
二氏の意は素問の註意をもて。靈樞に推及すべき
は。をのつから其理義通するごの事なるにや。醫
學に精き人を得て。重て其義を明すべき也。内經の

輿議此三註をもてきはめ知へし。ごりはき次註を數
遍涉獵すへし。素問抄は其註所々少つゝあれば。次
註の本に頭書にして見合てよし。其次は本草綱目を
見るへし。綱目は證類本草を元として。編集したる
書にして。諸の本草を集めて大成したる也。證類
本草を引合て一覽すへし。二遍目には附方を除て見
る。三遍目には集解と附方を除て。主治發明正誤
等を見るへし。綱目は事博き書なれば。書誤たる所
多く。或は異名ある藥に。同名異物あれば。その效
能を彼效能と心得て。取ちかへ誤りたる所もまゝあ
り。本邦の人は。多くは中華の人の説ごたにいへ
ば。その誤りをたゞす事なく。ならつて察せざる事
多し。能々心を用ひ。師傳をうけて吟味すへし。和
漢の板本其品多し。引合せて文字の誤を改正すへ
し。湯液本草。本草集要。本草蒙筌。本草綱目。本
草新編等は。綱目を見る時引合せて見るへ
し。本草經疏は。綱目を註したる書にして。すこし
く鑿論にわたるといへども。はなはた方ある書な
り。心をこゝめてこれを見るへし。本草約言は薛巳

の作にして。諸説を約めてよく辨じたる好書なり。
されご此書の説。大形本草蒙筌に出たり。まゝ一字
もたかぬ所もあり。陳嘉謨は薛巳より前の人なれ
ば。薛巳必しも蒙筌を見るならん。しかるに我いひ
出したるさまにするは竊盜に似たり。いかんぞ薛巳
の人品をもて。かくのごごきの所爲あらんや。好事
の者薛巳に托したるならん歟。しかれども本邦いま
た蒙筌を印行せず。此書初學の記誦して益ある書ご
知へし。其他の本草。近來新渡の唐本多しといへご
も。皆同じ趣にして替たる所も。し。治療の爲に藥
性效能をしらしめんと欲して。あまねく本草を考て
抄録し侍れば。余が著すごころの。藥籠本草三巻を
熟讀し。其理義に通達すれば。治療の本草に於て
は。能事畢ると心得べきなり。其次は難經を心をご
めて見るへし。難經は多くは内經の内より出たれ
は。其義を推て及すへし。古來より其註解數多あ
り。滑伯仁の本義好書なり。張世賢の圖註も。亦よ
く此經に心を入たる書也。八十一難共に圖に移し
て。解する事はよく／＼此書の手に入たる事ごしる

へし。龐安常の説に。難經は古傳の久しきのみならず。華陀の曹操より。火刑に逢し時の煨燼の餘文にして。後人の補ひ増たる所も多ければ。悉く信用しなかつた。學ぶ者心を用へしといへり。其次は仲景の書を涉獵すへし。是も亦古傳の遠ければ。其全文にあらず。奇零の文に似たり。傷寒全書を見るに。多くは成無己已下。明朝の醫。仲景の意を取て書たる也。諸病の内傷寒は暴病にして。大切なる病なれば。傷寒科とて一科を立たるほどの事なれば。能諸説を引合て知覺すへし。陶節庵の傷寒六書好書也。熟誦すへし。傷寒の論は。王肯堂の證治準繩に詳なり。近來新渡の尙論條辨等の書も。仲景全書に引合て一覽すへし。其次は巢元方の病源候論を見るへし。此書諸の病源を論す。されどいつれの病も皆風冷とのみ説事は。是一偏の見なり。一覽して可也。其次は孫真人の千金方を涉獵すへし。古人の説に。思邈の龍宮より傳來したる禁方を。此書の内に編入て散在し侍れば。その藥方には神妙あり。心を付へしといへり。しかるやいなや。又本邦古來の

醫傳に唐土より本邦に初めて醫書の渡りたるは千金方也。こゝをもて古來は。年始に神農の像と孫真人の像とを圖して。合せ祭るといへり。其次は王叔和の脈經を見て。脈理脈狀を知究むへし。其外小部の脈書多し。脈經を見る時引合てみるへし。其次は陳無擇の三因方を一覽して。外因内因不内外因の三因を詳にして。病の因て來る事を知究むへし。是よりの後。宋元明の間に至つては。世の文明も開けたる時なれば。明醫代々出て。其編述の書棟に充。牛に汗するに至り。本邦に印行する所の書も亦夥し。大抵一覽して可也。劉張李朱は。我醫家の四君子にして。儒門の周程張朱あるがごとし。彼四君子出て聖道開け。此四君子出て醫學明なり。しかれば此四家の書に心をこゝめて。義論を究むへし。就中東垣の李先生の學は。張潔古先生の流をくみ得たる人也。潔古氏の言に。古方は今病に宜しからず。氣運ひとしかからず。今古軌を異にす。をのづから家法ありといへるは。誠に醫師の活法なり。近時の醫はみな古人の糟粕に酔り。ひゞり新意を發するは潔古氏

に限れり。かく見識の高邁なる人なれば。其書傳はらすといへども。東垣の李氏ふかく此道を傳へり。脾胃論。辨惑論。蘭室秘藏の三書は。平日の工夫發明を著す所なれば。常に吟味して。東垣の療治の意味の深長なる所を知覺すへし。羅天益王海藏その高弟なり。その著す所の衛生寶鑑。此事難知。醫壘元戎。是亦東垣の餘緒なれば。心を入てみるへし。劉河澗の宣明論。保命集。原病式は。熱火の病を發明したる書なれば。心を用て見るへし。張子和は攻撃を旨としたる醫也。儒門事親を見て其意を知へし。丹溪の朱氏は。碩儒にして發明多く。その文章も醫書中に於ては拙からず。格致餘論。局方發揮を見て知へし。王安道戴元禮その高弟なり。源河集。證治要訣等を見て其意味をしるへし。劉宗厚の玉機微義。汪石山の醫學原理。虞天民の醫學正傳。方廣の丹溪心方附餘等の書。皆丹溪の流亞なれば。涉獵翫味すへし。それより後は。薛立齋の書。治療に於て益多し。十六種醫按等を見て其意味を知へし。その内にも。陳自明の婦人良方は。婦人の科に詳な

れは。心をこゝめて見るへし。薛己の十六種といへど。他人の書をも入加へたる也。東垣十書東垣十二書といふかこごとく。他人の書をも取加へて全部としたるなり。徐春甫の古今醫統は。醫に博き書にして。治療の外種々の事術を載たり。博學の便となる書なれば涉獵すへし。樓英の醫學綱目。生々子の赤水玄珠。張三錫の醫學六要。王肯堂の證治準繩等の書は。大部なれば一覽して可也。李挺の醫學入門は醫學の大成をなせる書にして。大抵醫を學ぶ人の知へべきほどの事を書載て。醫の能事畢る好書なりとて。本邦にても大阪の見宜堂老人。これを門弟子に授て。歌括を誦誦せしよし。これよく此書に眼を付し人なり。又龔氏の七部の書は平々穩々底の書にして。本邦の醫流の意に相叶ひたるなれば一覽すへし。吳昆の名醫方考は。諸の方意をこきたる書なれば涉獵すへし。雪潭居の醫約。蕭京の軒岐救正論。李仲梓の醫宗必讀。久吾の奇效醫術。活幼心法は。明朝の好書也。心を留めて翫索すへし。江皇南の明醫類案は。古今の明醫の治驗を書集めたる書なれば

は。好書にして益多し。涉獵蕪索すへし。近來新渡の書。馮氏の錦囊秘録。張介賓の景岳全書。張路玉の醫通。俞嘉言の醫門法律等の書。多くは同し類の書にして。明朝の風習を移したる書也。一覽すへし。上にいふ所のごとく次第を立て。古書より段々に涉獵すへし。是二十歳より三十歳までの。醫學の修行底にして。醫書を閲するの次第を見つへきもの。ひとりこゝによるべきなり。

○明師に就て學ふにあらすんは良醫には成かたきの説

醫を習ふ次第。初に素讀をなす事は。儒家者流の教に異事なし。十五六歳より醫書の素讀をし。講釋をきき。二十歳より三十歳までは。儒書醫書取ましへて涉獵する事は誰もかくこそ導き。弟子もかく勤事なれど。明醫に就て親炙し。傳授するにあらては。明良の醫には成かたし。扁鵲は長桑君に逢て。上池の水をのみ物しる事あり。倉公は陽慶にまみえて其道を傳へ。完素は陳希夷に逢て仙酒をのみ。東垣は潔古氏に對して。千金を捨て交を締ひ。丹溪は舉士

の業の書を焼捨。醫書三昧になりても。猶其道に通しかたきにや。羅太無の明達なるを聞て。師ごし事て終に其道を成就す。戴原禮はあまりに此道に熱心ふかく。あまねく諸國をめぐりて。明師やあらんと其所に時醫ありと聞ては。禮を厚くしてま見え。かしこに名醫ありと聞ては。束脩を奉して交を締ふといへども。師ごすへき人なし。或所に名醫ありと聞て。傳をもごめてまみえん事を乞ふ。其門に至れば。門前に病者來りて市をなす。原禮座につく。師いまた出あはす。ひとりの弟子病者に告るに。此藥のうちに。鉛を加へて煎服せよといふ。原禮これを聞て甚いぶかしくおもひぬ。師出て謁す。原禮先此鉛の事をさふ。師答るに。いかんぞ怪しみ給ふぞ。我も人も平生用る所の方なりとて。弟子を呼て其方書を取出して。これ見給へとさし出す。原禮これをみれば。黃芪建中湯也。此板本に鉛の字を誤て。鉛の字に書たるなり。原禮はやく其所を辭しておもへらく。天下の醫滔々として皆是也。其都會に於てかくれなき名醫なれば。何ぞ各別なる事もあらん

やとおもふに。かやうなる療治をなしても。其效を奏するなれば。良醫は福醫にしかすといふ是誠なりとて。そのゝちは修行をやめ本國に歸り。丹溪に師ごし事へて醫道の奥義を傳へ明醫と成し也。昔の醫師は文學をきはめ得ても。天下の廣きには。かはりたる明師もやあらんと尋ね求めたる。その志の此道に熱心ふかき事かくのごとし。又師家にたつ人も。其弟子の志をよく見届け。そのゝち一大事を相傳する事也。素問にも其人にあらすんは傳ふる事なかれとのたまへり。丹溪の羅太無にまみえん事をこひたりしにも。中々容易に降接することなく。其志の厚薄を試みられたり。門前の大河を渡るに。臍をかくすの水あり。霜をふみ氷を渡りて。相まみえん事を欲すれども。羅太無諷する事なし。門前に躊躇して寒氣に侵され。夜半の鐘聲を聞てむなく歸る事幾そ度なり。太無その志の深切なるを見定て。師弟の約をなし。學海こごごかたぶけ盡して。醫道の奥義を相傳し侍る。ひとり醫のみに限らす。黃石公の張良に兵書を相傳せしもかなり。又師た

る人は弟子の志を能うかゝひ知て。其道を傳ふへし。二十歳の前後より代脈として病家につかはし。ひたすら病人を診せしめ。脈状をも傳授すへし。元來脈の狀。其道理はそれゝの書に出たるなれども。心をもて心に傳る事なれば。病人によりて教るの外他なし。かく數年を経て教へ入れは。自然と診得て。生死の決斷。形聲色脈の四診。口授心傳を知覺して。其道の成就に至る。いかに聰敏の性質。又文學に力ある人ごても。かくのごとく病人をもて。たたちに引合せて教示せされは。醫術の事は得がたきものなり。若き醫師は何ほど病人を見まくほしくおもひても。人療法をゆたねす。師のかけならては成かたし。又師によりて病人に對して教ゆる事をいとふ人もあり。これ多くはその性質物むつかりにて。弟子を取立る機にあらざる人也。又弟子の性質物くさくなまぬるき男は。病家に至りてのあいさつ時宜さし合をもいふ事をいとひ。をのつから病家にごさき者もあり。醫を業とする者は。師弟ともに物毎によく／＼心を用ひて。まめやかに或は藥の製法。

丸藥散藥煉藥の類まで。其修合をも自身に見届け。弟子に命じてこれをなさしめ。學をなす輩にも。それその性質に聰鈍にしたかひ。金仙子の機に應じて法を説たまふこと。教を立て導く。是を教て倦さるの明師といふ。世間に明師といふは稀なれども。百千にしてひとり二人もあるへし。志を立る所の。學んでいとはすといふ弟子は。百千人のうちひとりも稀なるへし。是親は子をいつくしみ憐めども。子は孝心のうとぎに同じ。世の風俗たゞ。利慾にのみ目がつくにより。當分の事にかゝはりて。師恩を忘るゝ事多くは俗習也。近世師に志の厚き人は。ひとり安藤省庵翁のみなり。明朝より朱相公舜水の亂をさけて。本邦に渡海せしに。省庵翁長崎へ至り。束脩を奉して弟子の禮を執る。舜水明に歸らんといふ。其比省庵翁は。柳川侯より菜地二百石を賜るを。其半をわかつて。舜水の旅費とし、其身纒に百石の祿をもて家産とせり。誠に有かたく殊勝なる志にあらずや。これ學問を好む志の厚きよりおこりてかくのごとし。諸の藝に遊ばん輩。師をかく大

切の事に思ひて。其道を學はんに於ては。何の道も成就すへきと心得へきなり。

○醫師三十歳よりは治療の業を専とす
べきの説

醫師たらん者。三十歳までは文學の次第階級を歴て。其道理を講習討論し。胸の鏡を研立て病者に押向ふに。悉く移し照さすといふ事なく。其上明醫の師に附したかひ。代脈に行てまのあたり病人をもて教へられたるなれば。木馬青表紙の稽古とは違ひ。其術も慥に行はるゝなり。こゝをもつて三十歳の比よりは。押出して療治を勤むべきなり。始て師を離れ療治をなすに。たやすき病を引請て治するとき。扱も療治はやすきもののみおもひ。己が術を頼み。療治はこれに極まり。此道理より外は。扁倉の再生なればとてなご。おもひつめ侍れど。治療ひろく病人あまたに成ては。思ひの外薬を用ても驗なき事多ければ。種々のまよひ出來て。師の傳來をも打忘。みつから離術を出すこと。道理に離れたる事をして死に至らんとすれば。はやすべき業も盡。手を

束ねて天命也といふ。かくのごとき病者打つゝきて三人四人もあれば。世間よりも下手のやうになへなし。其身も療治におそろしげがつき。いよいよ治療を誤る類多し。これ醫師の器にあらざる人なり。几世間の藝いまた熟せされば。その事を用盡して。せんすべを失ふもの也。其道々に心をよせ。十ヶ年も勤めたるは。身を終るまで用ひ盡すといふ事はなきものなり。十年の功をつまさる藝は。いかほごその器にあたりたる人も。押出してはなしかたきものなり。いはんや人の生死をつかさどる。醫の術に於てをや。かくいへば三十歳より後は。治療のみにかゝりて。學問のせぬ事と心得たる醫もあり。又世間の俗は。三十有餘までも學問する醫を。いまた書生のことくあしらふをもて。それに恥てをのつから學問に疎くなる者も多し。或老儒の余にいはれけるは。翁の醫に精しく。吾儕が儒に少しく得たるをいかにとおもふに。七十まで机に寄りて居る。鈍氣たる男かなきによりてなりと。おどけ口を申されしは。誠に願を解事にこそ侍れ。世間の醫も

三十歳の前後までは。名の爲祿のために學文を勤るものもまた多けれど。療治を勤め田祿をたうびぬる上は。はや人も取はやし。暇もなきやうになへなせは。いよ／＼いそかしふりをなし。我も若き時は學文をも好み勤めたれども。いま暇なく晝夜療治にかゝつらひては。中々成かたきなごゝ遁辭をいひて。黒甜ヒツカンのいごまはあれど。書を見るの暇のなきはいかにそや。醫を業とする者は。學問をして明師の傳をうけ。をのれか術をよく嗜み。病者に施して誤りなきときは。其名聲世間に聞達し。求めされどもこれを招請し。明良の醫と稱せられ。三十歳の前後よりはや若手の出來ものよはれ。四十五の比よりは其名四方にしらる。此方より必しいて其術を街ひ。權貴の家に諛諂して。用ひられん事をはかるへからず。たゞ其身の徳を納め。よき賈をまちて沾へし。いまた熟せざるの術なす事なけれ。能々心得へき事也。

習醫先入卷之中終

習醫先入卷之下

内海 春東 門人 相良 梅山 記筆
牛山翁香月啓益述 藤江 玄雄

○醫師平生の心行慎むべきの説

醫を業とする人は。其心行を慎み。其徳を收むべし。招請せは遅く去事なかれ。人の病の苦みいたむ事を。我身の上になぞらへ。さそたえかたからんことおもは。招くに遅く行事あらんや。貧富をさふ事なく。貴賤を選ふ事なく。貧賤をあなごらす。豪貴に諂ふ事なく。人の識能をねたむ事なく。人の恭慢を議する事なく。前醫を誘るべからず。他薬を評すべからず。その前醫を誘り。他薬を評するは。皆己か功をたてん爲なり。人を誘りて我能を誇るは。小人の所爲也。前醫の藥效なければこそ。今我にはたのむなれば。わが薬にて效を奏せば。前醫はそしらすして倒つへし。又病を療して。若くは效なきときは。いかなる事やらんと心を用て思慮工夫をなし。

諸書を考て薬を用よ。病を治するに悉く死證そなはり。天命の極りたるものごと。是はわが見識の及はぬ所にてはなきやらんご。恐み慎みかへり見て。他にゆつり治せしむへし。我こそ死症とおもへども。他醫に替りてまよき事もあれば。必我を頼むべからず。病家ごにかくに我のみならてはごしめてたのまは。やむごをえされは薬を用へし。若くは天命の極りたる病人にても。己か薬を用て鬼録にのほりたらん其翌日は在宿し。弟子を集め諸書を考へ。其理を議論し盡し。幾度くも其事の誤りにてはなきやごおもひ悔て。我術をたのむべからず。嵯峨の意安は。病人を誤り治する事あれば。其年中療治をやめ蟄居して。醫書を考へ讀て工夫を加られたるよし。これを恥をしり義を重んずる人といふべし。世間の醫の風俗。をのれか誤りごしりなから。種々の辨をかまへいひわけを爲せご。人も眼をそなへたれば。其あやまちをかざる小人たる事をしりて。いよくその人品を見落す也。醫師の第一慎むべきは。酒宴遊興の事なり。古語にも酒は狂薬に

して佳味にあらずとて。其暴桿の氣。人の氣力をたすけ。俄に狂亂のこごくならしめ。其氣を傷ふ。生れつきて上戸たりごも慎み畏るべきなり。釋氏の飲酒戒を立たるも故ある事にこそ侍る。ひとりの酒狂人隣家の鶏を偷盜して。殺生するのみか。それより起りて邪淫妄語も悉く犯したるためしもあるぞかし。世間に流行する醫の。少く文學をも心得。治療をもよくする者をは嫉みて。醫業の上には誘つべき事あらねは。その心行身持につきて。種々の難題をいひてなじりそねむ。もごより其人賢徳の生質にもあらねは。いふにいはいはれぬといふ事なく。後には誘り倒さるゝ事多し。されごも大綱さへ違はねは。ひとりの醫のみにかざらす。何の藝者も云けたるゝ事はなきものに侍る。たゞ酒に酔て心を取亂す癖あるものは。平人もさらなり。醫師などは猶其身を立るといふはなきなり。されご上戸に生れ付ては。酒の樂は何事にも換かたき物といふめれご。いにしへの賢人も志を得ざる人隱逸の境界ご成てこそ。いよく酒に隠れ世をいきごをり。風顛漢の狂客ごしなしたる

なれ。世間に出て勤る人の。酒狂の客ごいはれたる事をきかす。兼好法師の酒の害をあけて戒たる次でに。されご上戸は罪ゆるさるゝものなりごいはれしもさる事に侍れご。其罪を酒にゆつらんよりは。始より醉して罪なからんにはしかし。予二十はかりの時までは酒を嗜めり。飲ときは顔赤く成て。三四盃の酒にても。沉醉したる者の顔のこごく見え侍れご。心の亂れに及はす。さまで酔にいたらす。強て妨なしごおもひ心にまかせけるに。或時貝原益軒先生の。酒ははかりなし亂に及はすといふ所の講釋を聽けるに。亂ごいひて本心を取失ひ。亂心に及ぶをいふのみにあらず。酒を飲て言語の平日より多くなるも。顔色の赤く成て平生の氣色にたがふも。皆亂ごいふへしご説れし事耳底に留まり。そののち酒をいごひ断ければ。元よりさのみの上戸にはあらで。たゞ元氣壯に脾胃の強かりける故に。酒に堪たるにて有けるやらん。をのつから酒を好事なり。三十歳より仕官して後は。猶更下戸ごなれり。何によらず其事を取用て勤れば癖ごなるものなり。煙草を飲習

ふ時は、目をめくるめかきぬ人とはなけれど。しゐてひたすらつとむれば、苦葦の味かへりて爽口に變するもて知へし。煙草の事をいへるによりておもひ出たり。煙草は酒とは違ひて、何の妨もなき物に侍れど。仕官の醫師などは飲ぬにしかず。主君によりて煙草の香をはなはた嫌ひ給ふものあればなり。又姪行の事慎むへし。世間老醫を賞するは、病あるときは醫は晝夜を限らず。奥口の差別もなく出入して。婦人女子と打まはりて其用を達すれば。若き醫師は其見懸も似合しからね共。わかき時は其慎もつよく。をのつから嫌疑をさけて。却つて老醫の人にゆるされたらんより。まさりて其德行を收め養ふ者もまゝ多く侍る。大老の醫は、人これをゆるせば心奢て。色慾の念などは断性も亦無也といふ境界などといひて。俗にいふ直妖とやらんおとけ口きけとも。老若ともに醫師の身持は嫌疑をさけて。ちこかたくなしきといふほごがよし。中華にては王公大人の家。皇后女王の脈を診するに。帷幄の内に在て。手ばかり出してこれを見せしむるなり。後漢の

和帝の時。郭玉の術を試んて。嬖臣の美手腕の者と女子とを。帷幕の内にまじへ居しめて。各左右をわけ手をさし出して診せしめ其病いかんと問たまふ郭玉診終て左は陰右は陽にして脈に男女の状あり異人のことしといふ和帝その奇妙を褒美して官を給へりこれは其術の良庸のみを試むる爲也。本邦の權貴富豪の家にては醫術の事はさならなり其醫の人品をも試んと種々のたくみなる事をしてはかる事も多く侍る兼好法師千本の寺にて優なる女の姿にほひ人よりもことなるが膝にいかりけるを便あしきとおもひてすりのきたるに猶るよりおなじ様なればたちぬ。後にきけば。あるやんごとなき御方なり。兼好の心を引見んとて。かく女房を作り立て出し給へるごそ。兼好もこのたちしぞきたるを。しすましたりと思はるればこそ。自讚のそのひとつにもあげ侍りぬ。此等の事をあらかしめおもひて放蕩すべからず。又中華にては。婦人の脈を診るには。手巾とて絹をもてこしらへたる。手袋を病家より出す。醫師これを取て手にさして。其脈を診す。貧家は出す事

なきゆへに。醫師常に懐中して用をなす。中華はかく男女の別を正しくするなり。宋の宣和の比に何澄といふ醫あり。一士人病を患ふ。百治愈る事なし。何澄を招きてこれを治せしむ。其妻何澄を密な所へ引入て。我夫病事數年にして家産悉く盡たり。醫藥の資に報するに財なし。願くは我身もて相酬んといふ。何澄色を正しくして。これにしめしていはく。いかんそかくのこごくの不道の言を出して我を汚や。たゞ療治を勤めて病の愈ん事をおもふへし。萬一外人これをしらは。何澄か身人の誅さる事あらすとも。鬼神の責を免れんやと云てこれを戒む。何澄一夕夢見らく。神祠に入ぬれば判官あつて。汝さきに色慾を以て良人の婦を犯す事なし。こゝを以て上帝官一資と錢五萬貫とを賜ふと。いま一月ならざるに。春宮の病甚し。官醫これを治して驗なし。草澤の醫をめす。何澄召に應し薬をすゝめて其病愈たり。朝廷より錢五萬貫。初一品の官とを賜てより。醫の名天下に聞へしなり。是陰徳のしかする所。人報せずといへとも天必暗に報す。醫たらん者は其徳

行を收めて。假にも姪行に放蕩する事なかれ。古語に陰徳はなほ耳の鳴かごとし。己しりて人しらすといふなれば。其心中の潔く快き事これにしかんや。たゞ天然の四知ある事を知て。能々心を用ゆへきなり。

○公武諸侯の醫師常に心得へきの説

醫師となつて其術の拙きは。諸藝の拙きと違ひ。人命を傷ひ断事に侍る。古人これを刃をとりて人を殺すに近らすやと。いましめたるもむべならずや。中に就て。公武諸侯の醫。大祿を喰ながら拙き術をして。御樂の事に侍るは不忠不義。何事かこれにしかん。仕へて國政を執る人。若くは其人にあらざるごきは。其國かしけ民苦むといへとも。其君を弑するに至らすごきは。經義をこなはれ。教ゆるまるといあらざるごきは。仕へて侍講の師となる人。若くは其人にあらざるごきは。君命を弑するに至らす。仕へて四方に使用する人。若くはその人にあらざるごきは。君命を恥しむれとも。その君を弑するに至らす。仕へて醫を業とする者。若くはその人にあらざるごきは。其害忽其

君に及ふ。恐るべきの事ならずや。世々仕官の醫家に生れたりとも。文學術業共に不器用ならば。其親も親族婚家もよく幼より其人を選て。養嗣をし其器たらん者になさしめ。其身もよく此意をさとして辭すべき也。或老醫の説に。いま世間の醫に事のかけぬ醫と。事たらぬ醫とあり。事のかけぬ醫とは。をのれか宗とする醫書の大抵押渡り涉獵し。十四五部の小醫書の講釋をして。運氣又は經絡の事をも。素人に説聞するほどに通達し。四書。小學。五經。古文前後集など。所々講釋するほどにて。詩聯句書翰文章等も間に渡るほどの醫にして。療治も大概の醫格を仕覚え。左まで誤なきほどの醫をいふ也。又事たらぬ醫とは。治療は下手功ながら。しかも福醫にしてなす所の事。十にして八九は偶中して其病愈るをも。其身も良醫とおもひ。脇よりも上手と取はやせとも。中華の醫書儒書はもとより諸事もなく。片假名まじりの倭書をあが佛と尊ひ。藥性をも覺えず。經絡俞穴の名をも讀わかつ。世間にまじはりても。つがもなき事のみなれば。療治は可也がけなれこ

も。事の缺たるにあらずや。又儒書醫書詩賦文章を達者に講釋などは。いかやうの書にても望次第にする人も療治すればいつも迂遠なる事のみにて。其身は儒醫など、誇れども。病の愈る事なければ。脇よりは下手醫師と云。是も亦事たらぬ醫にあらずや。さるによりて事のかけぬ醫といふは。國牧の御家にて。二三人の内外なり。此事のかけぬといふ醫とても權貴の大人の御病をゆだねるといふは。猶不足なれど。世に明良の醫師乏しければ。烏なき里の伏翼とやらんにて。此等の醫ほどにあれば。まづは國牧の醫となりても恥しからずといへり。此老醫のいへる。事のかけぬほどの醫にならんとて。中々大抵の勤にては成かたき也。世にはやり醫師とよはれて。家富榮へ肥太たる類も。醫書を二十部と首卷より末卷まで涉獵したる醫は。多くはなきものなり。國牧に仕ふる醫。をのれか聰鈍によらず。隨分其術業を勉勵したる上にても。下手なるは是非なき事なり。其生質の分際を盡すほどの勤をもなさず。其福分にまかせ。諸人の氣に應ずるやうなる事のみをた

くみはかり。愚人に取はやされ。小さかしき人には愚弄せられて氣に入。はやり醫師となりて其術業を諸人に施すさへ。天道おそるべき事なるに。此拙き術をもかへり見す。其君たる人に藥を用る事は天理神明の冥罰。なんぞ其責を免れんや。國牧の醫師己を勤めても。時に遇さるは其身の不幸のみ。なまじいに時に遇て用ひられんよりは増なるへし。彼の奸醫の種々の諛諂便佞をなし。才覺邪智をめぐらし。時に遇て名醫時醫ととなへられ。御藥の事に侍る類の。不忠不義。人こそしらね心のごは。いかに答ん歟。能々心を用て勤め懈事なく。不忠不義の罪に陥る事なかれ。慎むべき事なり。

○國牧の醫師たらん者心かけの説

國牧の御家には。儒者も數人あれは。學文邊に事かくる事はなけれど。西國筋の御領地には。朝鮮國より漂流の船來り。近年は唐の商船も漂流し來る。其者ともに對して筆談もならぬほどにては。間にあはぬ事也。又御小身の御方には。儒者とても數人は持給はねは。猶更少しく學文ありて。大抵の文字に通

するほどの事なくては。御用も調はぬなり。又は御膳の時は。御相伴にも出る者なれば。食物等の功能も大概諳せすしては。徒然草に書ける。藥師篤茂の鹽といふ字を土扁をいひし事もありとおもひて。往歲卷懷食鏡を編集し。板行して世に廣くす。此書を懐にして。自然の時の覺悟とすべし。御相伴の時なからでも。常に御伽などに召出され。墨跡の御掛物のよめかぬるもうるさき事也。さて四方山の物語なごし侍らんにも。いふべき事いふまじき事あり。あまり御氣にいらんとて。おどけ口なご過て。おもひの外御見かきりにあふもの多し。醫は學文の筋道をもわきまへたる者の成行なるに。おもひの外の輕口。又は當世の落し咄。又は龜末の下卑咄。金銀米錢の沙汰。又は姪亂不道の事。假にもいふべからず。又は輕き事とおもひて。見もせぬ事の聞及たるを。誠にやかに物がたりする事なかれ。大名は事を極め給へは。それはいつの比の事ぞ。いづれの國にての事かなと、御穿鑿に及ひて。虚實分明になれば。うきたる咄はならぬ事と心得べきなり。こゝに

ひごつ物語あり。或國牧の侍臣。江戸の長屋に他家の知人を招き饗應しけるに。此は八月中旬なるに。夏菊の殘花の。大輪にして莖葉も麗しきを一輪生たり。此客人いまままで夏菊のかく有へしとも思はねは。扱々見事なる御花かな。かくのこごきの早咲もあればある物やと譽ける。此あるし譽たるにのりて。不圖申けるは。是は一種の早咲奇き花に侍るこあいさつす。二三日を経て彼客の方より此間の菊花あまりにめつらしく覺え侍る。御秘藏にてはあらんすれど。其菊苗一芽御恵みを蒙たく。又は植時培養の次第も有へき事也。その御傳授をもちたしたきこの消息をつけたり。此あるしの返事に。安きほどの事ながら。此菊は主君秘藏せられて。他所には出来成かたきよしひやりける。そのうち四五日を経て。何某の御大名より。この主君の御大名へ御使者有て。御家來何某方の早咲の菊所望申候へは。御秘藏にて他所へは御出しなきよし。是は家來の所望にてはなく候。我等大望にて候。一芽申請たきとなり。主君の大名おもひより給はねは。此男呼出し

御僉議あれば。しかくのよし申上る。主君聞給ひて。不實千萬の事かな。先かたへの仰分られなれは。さて。不便には思召せども。御暇給りたるごころ。かくのこごきの事も侍れば。假初にも虚言妄語を慎むへき事と心得へき也。又主君によりて。何かの藝を好み給ふもあり。その好み給ふ事をしりては。御氣にも入かたしとおもひ。醫に似合しからぬ亂舞鼓やうの事などは。得たらんごとも出さへからず。尤武藝は醫師ごとも。武門に生れたれば知たるを嗜よき人といふれど。是も押出したるはわるき事なり。醫師の氣性により長袖ごて人の侮るなごいひ。しいて種々の武藝などを勤るは。徒然草に見えたる。彼説經者の。諸藝をあらましごこにならひたるためしにひごしく。笑ふへき事なり。又主君によりて。詩文章學文邊を好み。或は和歌連歌等を弄ひ給ふもあり。是は醫師などの御あいてに成ても。似合しき事に侍る。次に。本邦中華の歴史記録等を讀て。事實に疎からぬほごに諳すへし。國牧の御物かたりは。多く和漢の軍記に及ふ事多し。殊に其御家

の御成立。御武功の事をよく知覺すへし。御伽に出ては。御意に入らんとおもふ事なけれ。御機嫌に違はぬやうにこ心掛て勤むへし。醫師の分外の事にて出頭なごするを。恥る所と知へし。すへて醫といふものは。僧形長袖といひて。諸士のいやしむものなれど。位祿ありて家の官長たる人の上にも坐し。主君に對して言上しがたき筋をも。遠慮なく物の申上よきやうにして。方外の一格なるものと知へし。かく一家中の諸士も尊崇し。少しの我まゝなごは許すをもて。多くは心奢。おもはざる不徳不禮も有類の者多し。能々心得へき也。又醫師は萬の藝能。又は世間儀の取まはしは少し無調法なる人なれども。醫業にはまりて療治すきと呼らるやうなるがよきなり。かくはいへども。人間世に生れては。何事になりごもよらすして。月日を送るといふは成かたきものなり。其人々の好む所にしたがひ。それにたより隠れ遊びをして居るにあらずんは。たゞ暇のみにして。小人閑居して不善をなすといふごころ。種々の悪念にひかれ。其人品に似合しからぬ事も出来る也

人は藝に遊ぶ事をしらは。此世の中に生る甲斐なし。醫師たらん者の藝は。第一は文學詩聯句和歌連歌など嗜むべき也。又園に草木を植て。四時の造化の變替する事を感じ。ごりわき藥草を植て。其物産の形状をも知究めたるは。心の養ごも成侍る業なれ。又茶道は。本邦の禮式の其一なれば。一座一通は習ひ得て。間にわたるほごなるへし。しかはいへど。此事を好み過て。道具集めをするは。物を翫ふごきは志を喪ふご。古賢の戒もある事ぞかし。五雜俎に古器を愛翫する人を戒めさみすること。舜の笠着。堯の杖つき。孔子の五器持て。鉢をひらきたるためしもある。又醫を業とする人の。茶事を三代の禮樂のごごころおもひ。一大事ご心を移して。急病に招かれても。けふは正晝の茶會の約あり。明日は朝會にて未明よりゆかで叶はぬなごごて。朝脈を怠ることごきはあるへき事にしもある。諸藝を好むごて。病用を専ごして。わか樂む所の事に。名のなきやうにすへし。其他の酒宴遊興娯樂鄭聲の類は。戒されごも心を移す事は有へからず。又醫師はやんこ

さなき人の御前へも出る者なれば。身くさけれども
にほひするすべもしらす。爪には赤銅のふくりんを
ごりたるやうなるは。心をごりせらるゝこと也。さ
はいへど爪先に燕脂をぬり。掛香にはひ袋やうの物
懐中したるは笑ふへき事也。又老人の醫に紅裏の
衣服着たるなどは。さながら今少の餘命なれば。人
にも若やかに見えんごおもふ心根あらはれて。いご
童らしき事に侍る。しかれども主君なり其人の老を
稱し徳を賞して紅裏の小袖をたうび向後は上着にも
くるしからすと御ゆるしを蒙りたるは各別の美目な
るへし。すへて醫師の衣類は垢つかす。刀脇指印籠
巾着等に至るまで。いかにも奇麗にして目だたず。
物がらのよきがよきなり。

○醫師謝皆を受る心持の説

中華も 本邦も共に。病愈ては猶さらなり。其病治
せずしても。その謝禮とて金銀衣服酒肴等を。其分
限よりも過分に奉ずる事なり。主君の病を治してさ
へも謝費を給はる。いはんや其他に於てをや。しか
れば醫師の大都會の地に居住するはいふに及はす。

其國其郷所々の廣狭にしたかつて。富を得る者多
し。されど猶あきたらす。其奢を極め。俗樂を事ご
も足事なく。家産乏しき類の者多し。又かく世間の
施を受たる金銀を。みたりは無益の私用にのみつか
ひ捨る事。芥のごとくするをもて。天命ゆるさず子
孫につき災害多く。富は得れども子孫繁榮せざる者
まゝ多し。醫たらん者こゝに於て心を用へきなり。
たゝ人の病を愈さんごのみおもひ。假にも謝費に心
を付へからず。貴賤貧富をえらはず治を施すごき
は。求めされ共をのつから皆を奉す。これ學ふや祿
そのうちにありといふ義にひこしかるへし。予豊前
國中津に有し比。ひごりの町醫師我を師のごとくせ
し在しか。ひごり來りて物かたり侍る。昨日町人
何某か所より當春娘の危篤の病を。予か治療にて愈
たる其謝禮に。酒肴竝に圓金五片を贈る。其使には
老人の手代を差越たり。やつかれ其手代にむかひ
て。其方歸りて主人にいふへきは。其方のひごり女
子の命が。いかにして金子五兩などに買るべき

や。酒肴は申受へしとて。金子はさしかへしぬご怒
氣甚し。予これをさとして。それは醫たるものゝす
へき事にしもあらず。醫は仁の術にして。謝資の多
少に心をよするものにあらずといへば。此醫いよ
いよ腹をすへかね。それは先生なごのやうに。國君
よりの田祿を受たまふ人の事なり。我等ごごきの世
間の謝費のみにて世を渡る。町醫師はさにはあら
ず。彼等は此所にては限ある富家の町人。それに不
相應の振舞なれば。かく恥しめたりといふ。予再ひ
これをさとして。其方の事理なきにはあらねど。心
を靜にしておもひはかられよ。其方はすべての謝禮
を何ほどを身上相應ごはおもはるゝぞ。貧富相應ご
は誰が定たるならん。商家のごとく書付を賦りて。
代物を催促するにもあらねど。其折々の際にはおも
ひ出て謝禮をなすに。いかに吝かなる者ごても。其
身の分限より厚くするは尋常なり。今貧賤なる者を
療治するに。此者は謝禮などはえすまじきごおもふ
に。かへりて其分限より過分なる謝費も有へし。又
此度のごとくひごり娘の命をたすけられたる富家の

謝禮のおもひの外に輕きも有へし。其謝費の輕ごて
怒恚て返しなは。何ごして謝費の重きを返し侍らぬ
ぞ。又人の命をたすけ。重き病を治したると醫驗を
つごり。しむて其謝費をおもひのまゝに受得へきな
らは。療治を誤たる時も。おもひの外に謝費を重く
する者もあるべし。其時の謝費を返すへきや。いま
た其方のかくし侍りたるごいふ事をきかす。しかれ
はその謝費の輕ごて返すは。有まじき事なりといつ
りければ。此醫道理に伏し。我を再拜して有かたき
教示を蒙りぬ。誠にさる事なりとて。其懇意なる者
を頼み。しかゝのごを告て其謝費を請返しぬれ
ば。先方も面目を施し。娘の命の親なりとて。毎度
醫たらん者必利慾に耽り。卑劣の志を發する事なか
れ。たゝ仁術にして施藥を事ごするごおもふごき
は。をのつから其謝費來り集り富を重ねるなり。予
さきに醫戒ごいふ文一篇を書て諸生に示し導く。其
文の中に。僧道貧士醫を求めは。謝費ありごいふご
も一毫も受くるごごなかれご記して。出家或は浪人

貧士の謝費をは。そのまゝ返し侍る。予京師に在し時。寶永四年の春の比。洛東にて限りある本寺の方丈の病を療治せしに。謝禮として白銀若干枚をたうびぬ。予が平日の立派なれば。出家衆よりの謝禮を受侍らすとて返しぬ。花頂山の麓に隠れすめる。或る上人予を訪ひて。此比何某の院の方丈より贈られたる謝費を返さるゝよし。もごより翁の立派の操はさもあらんかし。それは人にもよるへき事なるへし。彼院の方丈の富をもて。病愈ての悦のあまりに贈られたるを返し給ふは。其志をやぶり。かつは其分をしらぬともいふへし。彼方丈ほどの人。翁の施薬を受ては。いかにして心よかるべきや。すべて翁の出家の謝費を受られぬをもて。寺院の僧徒翁の治療を頼たくおもへと心にまかせず。翁の操はたつへけれど。人の爲には事の缺たる所ならんか。予もごより隠者の境界なれば。若より寺院をも持たず。位階をも申さず。たゞ書をのみ嗜み説法講釋をして世俗を濟度するを。世人殊勝の事とおもへばにや。何の徳もなき我等を拜するなどいひて拜具を奉ず。初

のほどは翁の志のこごく。此拜具を受るは。あるまじき事と思ひ返し侍る。されど諸人持來り佛前に備へ。其名をも書付す。我等かしらぬやうにしてさしをく。講釋説法の上にて拜具を受さるの事をこごはり。是は予が志をやふる事なりといへども。世間の風俗。受ぬといふを感じて猶更擲つ事其常なれば。いやましになり。その物陰かしこの片隅に。名をも書付さる拜具のいくつもあるをもて誰人の施といふ事もしらは返すへき方もなし。そのうちはずべきやうなれば。向後拜具を受んと披露すれば。聽衆法恩を報謝すと喜悅し擲つ事夥し。されど其施を受る事心にこゝろよからねは。其拜具を集て私用せせず。予若かりし時南都へ行て。唯識の學をなす比。大和國を巡行せしに。古伽藍多き地なり。其佛像數百年を経ぬれば。多くは破壊しぬ。是を修復せんと思ひ立て。過半取立再興の功を終りぬ。又おもひ付て本邦の記録古書の類。縉紳家の祕書となり。或は好事者の手に落て。世間に流布する事なく。むなしく蠶魚の餌となり。末の世には多くは斷絶せん事も

やと歎しくおもひ。又此拜具を集めて。紙筆併に筆耕料となし。古書を求め祕本を借得て寫させ。我本山の文庫に收藏し侍りぬ其拜具露ほども我身の事に用ざれば。受てうけぬ事ともいふべきなり。翁も亦出家の謝費をうけて身の私用となさる時は受る事なかれといふ。操志もたちぬべしと教化せられ。誠に深切なる事とおもひ。彼上人を頼み。彼方丈の謝費を請返し其翌年の春。遠祖朝散大夫則宗府君の肖像を修營して。遠く筑前國吉祥教寺に安置侍る夫よりの後。毎歲出家の謝費をあつめ。貴薬を買て貧家に施行し或は浪人を仕立仕官せさせ。或は貧士の婚喪の事をたすけ。一毫も我身の用になさるをもて。出家の施を受てうけぬといふに侍らんか。是ひごへに彼上人の有かたき教示を蒙りしゆへなり。古聖のことも得を見ては義をおもふとあれば人の物を與ふるときは。能々心を對て思ひおもふべきなり。聖人さへも富はわか欲する所ごのたまへは世俗はなをさらなりしかれども不義にして富かつ貴きは我に於てうかへる雲のごとしと。これ仁義の正理を

もて利慾の私に克事を知へし醫師をば世間の人。命をたすけられたる事を悦び命親といひて。謝禮を厚く奉し睦み親むなり國牧の醫となりては。其ほとほとに田祿をたうごびて。其上にも謝費を受るなれば。おもひの外に。富集り分限不相應の奢をなして。天道の惡みをうけ。必子孫繁榮する事すくなし。醫業をもて身を立んごおもふ人は。此書に書あらはす事を拳々として膺に服て。これを先入の言とし。畏み敬むときは。醫の能事を盡して名聲四方に聞達し。富巨萬を積て位祿共に貴く。子孫繁昌壽福無量の樂をうけさらめかも。

醫家初訓

醫家初訓序

雲、林、龍、子、才、撰、暇、筆、石、頑、張、路、玉、著、十、戒、可、謂、
醫家之龜鏡矣、然而時異域殊以

我、邦、之、今、日、觀、之、猶、有、未、悉、者、予、今、茲、花、甲、適、周、唯、
懼、後、生、輩、墜、廢、箕、裘、之、業、而、不、免、尸、素、之、罪、也、因、
不、量、蕪、陋、作、斯、編、以、示、子、侄、宋、楊、文、公、曰、童、穉、之、
學、不、止、記、誦、養、其、良、知、良、能、當、以、先、入、之、言、爲、主、
此、乃、初、訓、之、意、耳、壬、子、十、有、一、月、二、十、有、七、日、雪、中、書、法、
印、侍、醫、永、壽、院、丹、波、元、惠

三十
五世
業醫

丹波
元德

此書顏以初訓者乃所以啓發學童而立其志也故不願言俚辭鄙綴以國字婆心叮囑無復餘蘊宜虛心澄思欸欸熟讀以體認其指趣而已勿未看訖一葉半簡即便拋棄目爲淺陋冊子焉

醫家初訓

多紀永壽院法印述

一昔晉ノ虞溥ト云モノ諸生ニ諭テ曰學者ハ材ノ不
及ヲ患ヘズ志ノ立ザルヲ患ヘヨト又明ノ王陽明ガ
曰ク志立ザレバ天下成ルベキノコトナシト殊更醫
ノ徒ハ初學ノトキヨリ志ヲ立ルコト堅固ニスベシ
醫ノ志ヲ立ルトハ忠孝仁慈ヲ本トシ治學兼備ノ良
工トナリ上ハ君父ノ身ヲ安ジ下ハ衆庶ノ疾ヲ救ハ
ント心ヲ專ラニシ意ヲ一ニスルヲ云ナリ如此ニ
志ヲ立テ學術精熟ニスベク病家ニ對シ貴賤貧富ノ
論ナク診視處劑ノ際ニ於テ分毫モ忽略セザルコト
己ガ心ノ癖トナレバ煩勞ヲ覺エズ孔子云ク少成ハ
天性ノ若ク習慣ハ自然ノ如シト是ナリ能クコノ域
ニ至ラバ其材ノ長短利鈍ニヨラズ各自上達シテ良
醫タラムコト必セリ此業ハ君父ノ性命ニ關係シテ
重任此上ナシ且ツ病ノ變化測リガタク醫ノ道幽深
ナレバ熟練ノ上ニモ戰兢ヲ加ヘ老後ニ至ルトモ新
知ヲ開キ異聞ヲ廣クシ妙理奇術ヲ精究セント身ヲ

畢ルマデ念ヒ念テ怠ルコトナキトキハ自己一人ノ益ノミナラズ子孫ノ遺風ヲ承テ永ク其德ヲ保チ世々芳名ヲ傳ヘ家道隆盛ナルコト疑ヒナシ古人云明醫ノ後嗣必ズ昌大ナリト寔ニ虚語ニアラズ

一 醫ヲ仁術ト稱シ又司命ノ職トス其義如何トナレバ仁人君子モ其術ナキトキハ其仁ヲ行フコトアタハズ是故ニ古先聖王醫師ノ職ヲ設ケ民瘼ヲ救ヒ天横ヲ免レシメ給ヘリ此ニ依テ死生ノ命ヲ司ル職ト云コトニテ司命ノ職トイヒ又仁術トモ稱セシナリ意フニ人ハ萬物ノ靈ニシテ人ノ命ヨリ重キハナシ其重キ命ヲ司ル任ナレバ凡百技藝ノ中ニ於テ醫業ホド重キハナカルベシ又其中ニ君父ノ疾ニ施治センハ殊更ナリ醫家輩ヨク此義ヲ會得シ醫タルモノノ君父ニ事ヘ奉ルニハ如何セバ忠ナルベキ如何セバ孝ナルベキト自ラ省シ醫家ノ忠孝トセンハ其業ヲ精專スルヨリ外ナシ若此ニ暗キトキハ必ズ思ハズシテ大罪ニ陥ルコトアリ最恐懼スベキコトノ至ナルベシ往歲或國ニ五穀不登ノコトアリテ饑字途ニ滿チ或ハ匍匐シ或ハ倒レ臥テ居タリシヲ行客ノ

中ニ富商アリテ惻隱ノ心切ナルマ、費ヲ出シ博飯ヲ多クトトノヘ與ヘタルニ饑人ソノ飯ヲ喫スルトヒトシク命終リテ一人モ活タルモノナシ其故如何ト尋ヌルニ凡饑人ヲ救ハントナラバ先粥清等ノ物ヲ與ヘノマシメ漸クシテ稀粥ヲ喫シ數日ノ後軟飯ヲ食セシムルコト饑人ヲ救フ術ナルニ此ヲ知ザリシ故仁心却テ不仁ノ術トナリシナリ醫ヲ以テ業トスルモノ口頭ニ忠孝ヲ唱ヘ身端ク心誠ニシテ行狀ニ於テ聊モ議スベキモノナシト云トモ肝要ノ學術ニ暗トキハ不思シテ失診誤藥アリテ不忠不孝不仁不慈ノ罪ニ陥ルコト商ガ仁ヲ施タルガ如キモノアリ醫家輩深ク思フベシ

一世或ハ云醫ハ專ラ病ヲ治スルニ用アリテ其他異論アルベカラズ利慾ヲ本トスル心ヨリ此術ヲ業トスルトモ何ノ妨カコレアラム所詮忠孝仁慈ヲ本志トシテ醫ヲ業トスル者ノナキコト菩提心ヲ發シテ釋門ニ入衆生濟度セン爲ニ出家スルモノ無ガ如シ此說固ニ左モアルベシ去ナガラ醫名ヲ以テ祿仕スル者ノ用心ニハアラズ是皆商賈工匠ノ屬ヒ總テ卑賤

ナル者ノ本志ナルベシ往昔都下ニ一名穩婆アリ其術頗ル妙ニ入ラ其伎ニ誇レルカ偶得産ヲ視テ死胎ナリト家人ニ告グ已ニ分娩ノ際ニ至リテ探リ候フニ活胎ナリケレバ人知ラズ己ガ膝ニテ壓殺シ其言ノ違ハザルヲ自負セリ是其名ヲ失ヘバ其利ヲ失フ故如此殘忍慘刻ノ振舞ヲナシタルナリ若名利ヲ捨テ仁慈ノ心ヲ本トシテ斯術ヲ業トセムニ假令一旦其診ヲ誤ルトモ膝ヲ以テ壓殺スニ至ルマジキナリ凡醫ヲ以テ生活ヲ計ル者ニシテ名利ヲ覓ンコトヲ本トスル者ハ假令其術神ノゴトクナリトモ藥費ノ多少ヲ論ジ貧賤養廝ノゴトキハ診視ヲ忽略シテ意ヲ留ズ權貴富豪ニハ節ヲ屈シ意ヲ盡シテ診視處劑スル輩少カラズ甚スキニ至リテハ一旦ノ效驗ヲ取ベキ藥ヲ施シテ後日ノ害ヲ省ミズ變證蜂起スルニ及デハ他ノ病證ニ云ナシ他人ノ能ヲ蔽ヒ我が不能ヲ飾リ商賈ノ利ヲ逐テ親疎ヲ辟ケザルガ如クニシテ其極リ彼ノ穩婆ガ所爲ニ等シキ者アルマジキニアラズ此故ニ醫ヲ以テ祿ヲ世々ニスルモノハ忠孝ヲ本基トナシ毫末モ名利ニ馳ルコト勿レ楊泉

ガ物理論ニモ醫ハ廉潔淳良ニ非レバ信ズベカラズト云シモ此ガ爲ノ故ナリ

一 凡人ニ耻ベキコトト耻マジキコトアリ醫家耻ベキノ最トスル所ハ本業ニ拙ヨリ外ハナシ如何トナレバ忠孝仁慈ノ四ヲ闕ユヘナリ凡人ノ世ニ居ル各自營ム所アリテ士農工商ノ四民ハ勿論俳優僮儒ノ賤キスラ俗樂或ハ滑稽ヲ以テ人ノ歡ヲ助ルニ勞動シテ口ヲ糊セザル者一人モアルコトナシ朋友ヨリ聊ノ贈物ヲ得タルニモ相應ノ報酬ナクテハ叶フマジ然ルニ歲凶ナレドモ饑ルコトナク歲寒スレドモ凍ユルコトナク妻子眷屬マデ安逸ニ養フ俸祿ヲ累代賜ル君ニ對シ奉リテハ莫大ノ洪恩ヲ報ゼントスル心ナク嘗テ家業ヲ勤メズ年中逸豫シテ日ヲ曠クシ夏日ノ長キニモ日ノ暮ヲ待テ寢ニ就キ明暮逸樂ノ餘リイツカ奢侈ノ心増長シテ家貲給セザレバ遂ニハ連誹茶香圍碁蹴鞠其他ノ雜伎ヲ以テ本業ト取タガヘ身ノ本分ヲ忘レ弄臣ノ振舞ヲ勤ト心得慙ル氣色毫髮モナキハ淺間シキコトノ至リナラズヤ其中ニ一等アリテ素餐ヲ恐レ徒ニ平士ノ如ク朝夕ノ直

ヲ勤ノ左ナガラ有司ノ態ヲナシ卒ニ昏倒ノ病人アルニ臨デハ周章狼狽シテ病人ト共ニ面土色ノ如ナルヲ傍人捧腹シテ笑柄トスルヲモ知ズ數年ノ勤功ヲ自慢スルハ何ノ勤ヲ勤ト心得タルヤ又一等アリテ是亦素餐トイハレマジキガタメ且利慾ノ心ヲ加ヘ藥籠ヲ持セ東西ニ奔走スレドモ素ヨリ不學無術ナレバ入門回春中ヨリ平和ノ藥方抄録シテ祕書ト號シ大醫ノ體ニテ弟子ヲ養ヒ病家多ケレドモ皆人ヲシテ不死不生ノ間ニヲカシムルノ手段ニテコレヲ官醫ノ治法ト唱ヘ其實僧形ニ似テ刀ヲ帶タルマデニテ醫ノ工拙ハ論ズルニ及バズ此等皆耻ベキノ甚シキナラズヤ然ルニ特リ衣服居室ノ美ナラズ從騶ノ盛ナラザルヲ耻トスルハ婦女女子ノ耻トスル所ニテ丈夫ノアルマジキコトト知ベシ。

一醫名ヲ以テ祿仕スル輩弱年ニシテ自ラ印可ヲ出シ位ヲ進ミ祿ヲ増ンコトヲ求ルハ大道ニ背ケルコトナリ若其志ヲ遂ナバ程伊川ノ所謂少年ニシテ高科ニ登ルト同ク不幸ト云ベシ其故如何トナレバ醫ハ司命ノ職ニテ君ノ安危ニ關係スル大任ナルヲ弱

齡ニシテ其任ニ當ラムトスルハ其君ノ身命ヲ輕ンズルニ當レバナリ老輩スラ自ラ許テ大醫ノ班ニ列センコトヲ希ハ有識ノ士ノ嘲ル所ナルヲ弱齡ノ輩ニシテ醫經數千言ヲ誦シ治術ニ於テモ稍得ル所アリトモ積年ノ功ヲ積ザレバ圓熟スルコトアタハズ左ナクシテ萬一事ヲ誤ラバ如何スベキ宜ク深ク思ヒ遠ク慮ルベキノ至ナリ且少年ニシテ顯位ニ處スルトキハ中人以下ニ治ヲ請モノ少シ總テ治術ノ習業ヲ實意ヲ以テ習熟セントナラバ貧賤養厥ノ病人ヲ多ク治療スルニ如クハ莫カルベシ貧賤ノ者ハ病發ヨリ快復又ハ命終ルマデ一醫ニ委ルモノ多ケレバ病情病變初中末ヲ診視シ不測ノ妙理ヲ識悟スルコトアリ顯位ノ醫ニハ貧賤ノ者ハ憚リ恐レテ治ヲ請ハズ中人以上ハ顯位タレドモ弱輩ノ醫ニハ請フモノ鮮シ多クハ陽ニ治ヲ請受テ陰ニ他醫ノ藥ヲ服シ其藥ハ積置テ夏月蚊遣ノ料トナルヲ知ズ如此證ハ如此藥ニテ癒エ又ハ不治ト心得テ活セシモ死セシモ他醫ノ所爲ニ心付ズ其活セシトキハ昂顔ニ自負シ死セシトキハ赧顏慚愧シ此ヲ以テ他ノ病人

ニ律トスルユヘ竟ニ治術ノ眞的ヲ得ルコトナクシテ君ノ實用ニ害ヲナスニ至ル最謹慎スベキノ至ナリ且弱冠ニシテ立身セント謀ル程ノ胸中ナレバ所詮醫治ノ眞理ヲ得ントスルニ心ナシ然ルニ其意ヲ得テ志願已ニタレリト安心決定スルヨリシテ激勵スルコトナク漸ニ學術荒廢ニ及ビ世務ノミ專一ニナリテ君ノ爲ヲ謀ル心ハ忘レ果ルニ至ル立身ノ文字ハ孝經ニ出テ君父ニ事ルノ道全シテ身ヲ忠孝ニ立ルヲイヘリ然ルニ未ダ習業ノ熟不熟ノ沙汰ニ及ザル年來ニシテ自ラ良醫ノ席ニ列シ君ノ身命ヲ輕ンズル不忠ヲ以テ吾身一己ノ榮利ヲ得ルヲ立身ト稱シテ可ナランヤ此義ヲ自ラ省我心ニ問テ知ベシ弱齡ノ輩他事ナク學術ノ習業ヲ專精ニ勤メ數年ノ功ヲ積タルニハ必其名聲四方ニ發シ君ノ撰ニ擧ラレ吾才ノ程ニ出身シ忠孝ノ道立テ世榮ヲ獲ンコトヲ願フベシ大器晩成ト古人モ云リ必ズ弱冠ニシテ仕進ヲ覓ルニ志スコト勿レ父世ニ或ハ其業ヲ勤メ學術漸クニ進ミ出身稍遲キコトハ君ヲ恨ミ人ヲ尤テ遂ニ放逸ニ至ルモノアリ此最謬ノ甚キナリ君ニ

奉リシ此身ナレバ撰擢ニ邁ストモ益勉勵シテ愈謹格ナルベキノ左ナクシテ憤悶スルハ其本志忠實ヨリ出ズシテ初學ヨリ仕進ヲ希フ心專ナルヨリ起レル故ナリ。一福醫ノ有様ヲ羨ミ其行ヲ學ブベカラズ福醫トハ醫ノ名ヲ以テ榮利ヲ貪リ寬濶ニ暮ス醫賊ノコトヲ云ナリ此徒ハ學術ノ勤ルト不勤トヲ知ズ專ラ世事ノ務ヲノミ勤ト心會學術ノ修行ハ同職ノ者又ハ病家ノ人ト相應ニ挨拶ダニ出來ヌレバ事足レリトシ醫事ノ眞理ハ置テ論ナク居室麗宏ニ構ヘテ外飾ヲ第一トシ相識多カラザレバ藥乞フ人多カラズ故ニ相識多クセン工夫ヲ一大事業トシ詐リ欺キテ親切モノノ名ヲ取り四方ニ奔走シテ人ニ思ヒ付レンコトヲ謀ルハ疎遠ナル醫者ノ上工ヨリ下工ニテモ親シキ醫者ニ先ヅ藥乞フハ世中ノ習ナルヲ解了シテノ計策ナリ輕證ノ棄置テモ癒ル病ヲ我效トスルハ勿論危險ナルベキ病人ト見ユレバヨキ程ニ見計ヒテ他醫へ譲リテ我罪ヲ免レ他醫ノ施治スル病人ニ吉候徹シク見ユレバ口給ヲ以テ我方へ引受我ガ處方

ニテ快カラザレバ前醫處方ノ不當ヲ指シ斥リ我投劑ノ病人他醫ノ療治ニテ效ヲ奏スレバ我投劑ノ效今アラハレシナド云ノ類ニテ年中病人受取ワタシノ間ニ智ヲ振ヒ我罪ノ道レ様ニ巧ミナレバ醫術ニ巧ミナリト世ニモテハヤシ高名トナリ實功サラニナケレドモ夥シク藥ヲ撒チラス中ニハヨキ處へ藥ヲ投シ當テコボレ幸ニ效ヲ得ル者アリ或ハ病ノ方ヨリ痊タルヲ己ガ功トシ或ハ他醫ノ功ナルヲ我功トシ或ハ一二ノ妙藥ニテ稀ニ效アルコトモアリテ病人中ニ十人千人中ニハ百人信用スルモノアレバ病家モ多クナリ時節ノ酬養モ亦多キヲ樂ミ夜ヲ日ニ繼テ奔走シ相識多ケレバ吉凶ノコトタヘズ其間ニハ寒暑ノ間尋花月ノ宴ニ歡ヲ助ケ贈リ物攜へ物ニ種々ノ奇巧ヲメグラシ明暮是等ノコトニ神思ヲ勞シ違ナケレバ醫事ノ上ニ就テ見聞ヲ廣メ意智ヲ益スコトナシ元來根柢ナケレバ益ベキ智モナク伸スベキ才モナク徒ニ病家ニ到リテ投藥スルノミニテ仲景ノ所謂相對スルコト斯須ニシテ湯藥ヲ處シ速ニ肩輿ニ打乘リ一家モ多ク省ルヲ勤ト心會是ヲ

一大要務トシ人迎跗陽明堂闕庭ナニモノナルヲ知ラズ年ヲ累ネ老ニ至ル程醫治ノ道ハ誰々モケ様ノコトニテ宇宙ノ間ニ處セラルト安堵シ藥費ノ收納多ケレバ抗顔ニシテ倨傲ナル體ヲヨキコトト心會終身我行ノ道ニ乖シヲ知ズ我ガ非ヲ知ザルハ是非ナシ是ヲ子孫隨從ノ子弟ニ傳へ類族盡ク其風ニ化シ亦復終身其弊ヲ免レズ司命ノ職ハ斯アルマジキヲ疑フ者一人モナキニ至ル且此黨ノミナラズ外飾華麗ニ口給ヲ以テ虛名高ク居宅ハ諸侯ノ第ノ如ク家族奴婢等大勢寬濶ニ暮ス模樣ヲ見聞シ人情ノ習ナレバ自ラ羨ム心ヲ生ジ初ハ實學ナル人モ如此セザレバ榮利ヲ獲ガタシト心得自然ト彼ノ風ニ化シ思ハズ邪路ニ陥リ藥賣ノ所行ヲ學ビ遂ニ右ノ醫賊トナリ果テ眞ノ醫事ヲ棄置テ人ヲ欺クヲ業トシ人モ欺カル、ヲ覺ヘズ夢中ニ夢ヲ語ルガ如ク滔々トシテカヘラズ可嘆ノ至リナリ特リ奈何セン君父ノ病ルニ於テハ夢中ニ夢ヲ説クガ如クニテ可ナルベキヤ凡有司ノ人其職ヲ謬ルコトアレバ腹ヲ割シ喉ヲ刺テ其罪ヲ謝スルハ古今ノ通義ニシテ其君

ノ身命ニ妨ナシ其後名臣良吏出テ其政ヲ改ムレバ更ニ舊政ニ優ルコトアリ醫ノ一事ニ於テ一トタビ其治ヲ謬リテハ再ビ蘇生スルコト無ニ極レルナレバ其醫タトヒ腹ヲ割シ喉ヲ刺ストモ何ノ益カアルベキ故ニ此伎ヲ以テ祿仕スル者ハ他事ナク戰兢ヲ加へ粉骨碎身シテ醫道ノ闡奧ニ至リ其眞理ヲ得テ無涯ノ君恩ヲ報ジ奉ルベシ左ナクシテ福醫ノ所業ヲ羨ミ君ヲ欺キ人ヲ欺キ徒ニ榮利ヲ貪ラバ其罪竊盜ヨリ大ニ縱令ヒ陽戮ナクトモ陰譴免レガタシ太上感應篇ニ云非義ノ財ヲ取ル者ハ鳩酒ニ渴ヲ止ムルガ如シ暫ク飽カザルニ非レドモ死コレニ及ブト云ヘリ恐ルベシ恐ルベシ。

一世或ハ云庸醫モ病ヲ治シ良工モ病ヲ治セザルコトアリ病ノ治ト不治トハ醫ノ精能ニ預カラズト此說庸醫ノ吾伎ノ能ナルヲ飾ルニ資テ口實トスルヲ弱冠ノ醫輩竊ニ此說ヲ恃ニスル心ヨリシテ自ラ勵ム心ユルミ怠テ遂荒廢スルニ至ルモノアリ慨嘆スルニ餘レリ夫良工ハ心眼明ニシテ離婁ガ如シ能工ハ心眼暗クシテ瞽者ノ如シ病ノ人ノ軀内ニアルヲ其

表ヨリ視見スルハ明目ノ人ト雖モ辨ズベカラザル證アリ況ヤ心眼昏暗ノ人ノワカチ識ベキニアラザルヲ漫ニ施治スルコソ實ニ危キコト氷谷ノゴトクナリ然ルニ右ノ妄說起ルコト其譯如何トナレバ總テ疾病一樣ナラズ其中ニ見證ハ險難ノ病ナレドモ淺邪ナレバ服藥セズシテ自ラ癒ル者アリ左ハアレドモ病初ヨリ中頃マデハ病勢劇シク中頃ヨリシテ漸々ニ諸證穩ニナリテ遂ニ平復スルナレバ素人ハ病因ノ輕重ヲ辨ズルコトナキ故ニ初發ニ投劑ノ醫ハ良工ニテモ下工ニ見エ中頃ニ更タル醫ハ下工ニテモ良工トスル類ヨリシテ玉石混淆ノ謬說起レリ良工ノ施治スルハ豁然タル眼目ヲ以テ古人ノ規矩ヲ用テ盡ク其理ヲ委シ其理ヲ究メテ治スルハ效ヲ奏シ不治ニシテ死スルハ天數ノ盡ルナリ醫ノ罪ニハ非ズ疑似ノ證ニ至リ若謬テ其治ヲ失スル者ハ明目ノ人ノ跌仆レテ怪我スルガ如クニシテ是非ナシ然レドモ良工ノ失治ハ非命ヲ隕スルニ至ラズ庸醫ハ眼中ニ定見ナク胸裏ニ準繩ナシ是故ニ病人ヲ診スル初ヨリ瞽者ノ暗夜ニ土礫ヲ擲ウツガ如ク中

モ偶中又中ラザルモ偶中ナレバ縦令病ヲ治シタリトモ妄治ニシテ其醫ノ功ニアラズ且學術未熟ナレバ人ヲ藥殺シ精熟ナル上工ハ病ヲ痊スコト必然ノ道理ナリ然ラハ幾重ニモ苦學數年ノ功ヲ積テ稍得ル所アルヲ覺タリトモ猶モ切磋琢磨シテ誤リ尠カラムコトヲ願ヒ人ヲ殺スマジキ上工ト成リテ君父ニ事ヘ奉ルベシト堅固ニ志ヲ立ルコソ醫ヲ以テ業トスル者ノ用心ナレ凡人ヲ殺セシ者ハ必ス死刑ニ行ルルコト古今ノ定律ナルニ醫ノ人ヲ藥殺セシハ其刑ヲ免ル其故如何トナレバ人ヲ殺サンコトヲ心トセズシテ殺セル故ニ異國ノ律ニモ過失ヲ以テ人ヲ殺スニ比シタリ然ルニ習業ヲ忽セニシテ偶中ノ幸ヲコヒテカヒ人ヲ殺スコトヲ本分ト定メタル薄技ヲ業トシ君ニ事ヘ奉ラムト欲スルハ泰平ノ代ノ罪人此上ヤアルベキ能ク此義ヲ自省テ庸妄ノ説ニ從フベカラズ。

一 凡醫家習業ハ學ト術ト相須テナルコトナリ學術ノ習業ハ寫字ヲ學ブ者ノ法帖ニヨリテ手做シテ漸々ニ我有トナルガ如シ醫經本草ノ類ハ法帖ナリ病人

ヲ手掛ルハ手做スルナリ醫經本草等ノ軌範ヲ以テ病人ニ施シ又病人ヨリシテ醫經本草ノ説ニ照シ病證變化ノ機ト藥劑ノ當否ヲ參伍シ彼是熟案シ數年ノ間歷試經驗スルコト潭心精思九折ノ功ヲ積テ遂ニ良工タルベキナリ然ルヲ或云醫ノ業ハ專ラ書ヲ讀ニ在ト此最モ僻論ナリ若如此ナルトキハ終身治術ノ真理ヲ得ルコトアタハズ寫字ヲ學ントシテ徒ニ諸法帖ヲ玩弄シ自ラ手做セザルガ如シ醫經經方ノミニ耽ル者ハ文義章句ノ間ニ拘泥シ諸家註釋ノ得失ニ心力ヲ竭シ又本草ニ溺ルル者ハ專ラ廣博ニ驚テ徒ニ物産ノ探索ニ精神ヲ勞シ治術ニ心ヲ潛メズ紙上ノ空言ノミナレバ事ノ上ニ就タル妙用ヲ曉サズ故ニ年長ジテ病人治ヲ請フ者アルニ遭トキハ常ニ胸中ニ覺タル古説ニ符合セシ病證ノミアラザレバ此説ニヤ從ハン彼論ニヤ依ベキト猶豫狐疑シテ胸中惑亂シ自身ニモ安心セザル藥ヲ投スルコトナレバ病ニ適スベキ筈ナク效ノアルベキヤウモナシ其中ニ思ガケナク眩暈スルコトアレバ益疑惑シテ益誤リ此ニ懲リ彼コニ怖レ遂ニ學ト術ト相離

レ治術ハ只平穩ヲ專ラトシテ生活ヲ計ルマデノ事ニテ生涯醫法ノ真地ヲ踏ムコトナク朽果ル者アリ此輩ニ治術運用ノ機ヲ悟ラシメバ明哲ノ醫タルベキニ其非ヲ顧ミザルユヘニ一生ヲ誤ルニ至ル誠ニ悲ムベシ梁ノ簡文帝勸醫ノ文ニ本ト素習セザレバ卒ニ改變ニ難シトハ此等ノ輩ヲ云ナルベシ學術相須テ成ルコトハ猶ヲ寫字ヲ學ブ者ノ法帖ニ臨テ數數手做シテ上達スルガ如ク理ノ邇キ所ニシテ言ヲマタズ然ルヲ書籍ヲ玩フ人ノ是ヲ論サザルハ師ノ教誨ソノ方ヲ得ザル故カ將タ忠孝ノ心ヨリ此伎ヲ學バザル故カ忠孝ニ志篤カラム人ハ能其非ヲ省テ改ムベシ又似テ非ナル者ニシテ遊民ニ等シキ者アリ其徒虛文浮詞ニ耽リ文章ダニ結撰スル力アレバ醫書ヲ讀ムコト破竹ノゴトクニシテ治術ハ其中ニ在別ニ學ブニ足ズト此等ノ言ヲ聞キ隨從ノ弟子ドモ師ノ説ヲ實事トシテ曠ク年月ヲ送リ年ノ長ジタルマテニテ醫術ハ毫髮モ會得セスシテ一生ヲ畢ル者アリ文章詩賦ニテ醫治手ニ得ルモノナラバ古今ノ文人騷客又ハ通儒ト呼レタラム人ハ悉ク明醫ナ

ルベケレドモ左ニハアラズ別ニ習業ノ法アルコト知ベシ凡醫書ハ漢文ニテ認メタル者ナレバ文章ノ句法字法又ハ虛字助字ノ意味ヲ合點セザレバ性命ノ文ナル書ヲ讀アヤマリテ一差千里ヲ誤ルコトノ恐アレバ文章ヲ學ブモ亦醫ヲ學ブ一端ニテ自身ニ結撰セザレバ轆ヲ隔テテ痒ヲ搔ガ如クナレバ學ブベキニハ極マレドモ浮辭ニ溺可ニアラズ初學ノ士醫名ヲ以テ君ニ事ヘ奉ラムニハ如何セバ正道ニ邇ラン如何セバ邪路ニ陥ラント尋思スベシ何事モ此所ヨリ工夫ヲ着バ幡然トシテ覺悟スルコトアラン大抵醫書ヲ讀ニハ醫經經方ノ中一部ノ書ヲ熟讀シ大患ニ融通シテ此ヲ本基トナシ其後數卷ノ書ヲ讀ムトキハ諸家ノ長短得失察然トシテ明ニ事ニ臨テ益辨ス其博ニシテ約スル所ヲ知ルユヘナリ若徒ニ廣博ニ驚テ限リナク群籍ヲ流覽スルトキハ事ニ臨テ洋ヲ望ムガ如ク其津涯ヲ求ムルコトアタハズ不學無術ノ庸醫ニ劣ルコトアリ故ニ醫家ノ學ハ能博ニシテ能約ナルニアリト知ルヘシ。

一 詩經ニモ物アレバ則アリトアリテ凡天地ノ間物ア

ルホドナレバ則ナキモノヤアルヘキ況ヤ人命ニ關係スル醫業ニ於テ法則ナキコトハアルマジ故ニ醫經方本草ノ三種ヲ大法トナシ此ヲ術ニ驗テ學フコト亘古ノ軌範ナリ然ルニ世或ハ云學問ハ治術ニ益ナシ初學先治術ヲ學ヒ多ク病人ヲ手掛ベシト此說庸醫ノ無學ヲ飾レルナリ學問ナクテ徒ニ治術ヲ施スヲバ目ナクシテ夜行スルニ孫真人モ譬ヘ置リ其理如何トナレバ假令バ書ヲ學ブ者ノ法帖ナク徒ニ手做スルガ如シ何ニヨリテカ運筆ノ法ヲ識ベキ醫モ亦學問セズシテ療治セントセバ何ニ據テ脈理診法藥性方意ヲ識得スルコトヲ得ム手做セズシテ拾ヒ書ニテ事ヲ辨ズルモノアリト云說アレドモ運筆ノ法モ知ズ字體ノ結構ヲ知ザレバ書體醜惡ニシテ見ニ足ズ醫ノ學問セズ療治ノミニテコトスムト云モ右ノ拾ガキスルモノ、如ク俗人ヲ欺キ一己ノ口腹ヲ充シムルノ用ハ足ベケレドモ醫理ノ眞地ヲ知ザレバ大病ニ臨テ人ヲ害スルコトアリ且胸中ニ法則ナケレバ幾百ノ病人ヲ視ルトモ梁ノ簡文帝ノ日ニ百方ヲ處シテ其藥性ヲ輕ンジ其死生ニ任ズト

云如クニテ習業ノ益ナシ昔一鄙人ノ京師ニ遊デ歸タリシニ京師ノ風土ヲ問ハ猫ノ少キ所ナリト答フ五十三驛ハ如何ト尋ヌルニ松ノ並樹ニテ退屈セシト答テ名勝舊跡ノ一語ニ及バザリキ數百里ノ山水ヲ經歷セシモ遊觀セザルニ同ジケレバ何ノ益アルベキ醫ノ胸中空虛ニシテハ數千人ノ病者ヲ視タリトモ習業ニ益ナキコト鄙人ノ西遊ニ均シ尙其上ニ何ホド聰明ノ士タリトモ初學ノ時ヨリ良工ニテハアルマジキナレバ習業精熟ニ至ルマデノ間ニ人ヲ藥殺センハ必然ナリ然ラバ仁術ノ習業ニテハナク不仁ノ習業ト云フベシ此故ニ初學ノ子先醫經方ノ書ヲ讀テ明師ノ口授ヲ受テ稍法方ヲ會得シタル後ニ病者ニ照シ多ク治療ヲ施シ學ト術トノ間ヨリ醫ノ眞理ヲ覺悟シテ業トスルコソ本意ナルベケレ本意立タルウヘノ工拙ハ是非ナシ古今ノ法則ヲ蔑如シ私臆ヲ專ニシテ人ヲ誤ラバ其罪遁ル、ニ地ナカラムユヘニ深ク思ヒ篤ク志テ庸妄ノ說ニ註誤セラルルコトナカルベシ。

一凡人ノ才氣ニ長短アリトイヘドモ長ナル故ニ好

キニモアラズ短ナル故ニアシキニモアラズ只學術ノ熟ト不熟トハ勵ムト勵マザルト精ト能トニアリ其故如何トナレハ才ノ長ジタル人ハ何事モ速ニ知覺スルユヘ未熟ノ時ヨリ早ク大成スル心アリテ其才ヲ恃ニシテ志薄ク其業成就セザル者多シ才短ナル人ノ出精スルニハ劣レルモノナリ若才ノ長ジタルウヘニ志篤カラシニ於テハ必ズ拔群ナルコト疑ナシ才ノ短ナル人ハ何事モ解シ兼テ治術モ識得ルコト遲シ其間ニ怠惰ノ心ヲ生ジ志ヲ遂ザル者多シ自ラ我才ノ長短ヲ省テ其短ナルヲ知ラハ益志ヲ篤シ捨ズ措ズ專精ニ勉勵スルトキハ遂ニ大成スルコト是亦疑ナシ古人モ不爲不成ト云又業ハ勤ニ成テ怠ニ毀ルトモ云リ總テ職役ノ家ニ生レ父祖箕裘ノ業ヲ繼者ハ是非其業ヲ業トシテ修メザレバ身ヲ立ルコトヲ得ザルニ極レドモ好マザルコトヲ強テ脩行スレハ質性好マザルコト故其業ニ熟シ難シ此故ニ先伎藝ノ家ノ子ハ其好マザルヲ好ムニ至リ好ムヨリ樂シムニ至ルベシ此ヲ自強ノ道ト古人モ云リ一士人蚯蚓ヲ惡ムモノアリ一見スルトキハ乍面

色變ズ其友コレニ言テ云武夫何ソ小物ヲ畏ルルコト如此ナルト其人コレヲ愧テ蚯蚓數十條ヲ掘得テ掌中ニ弄スルコト數日遂ニ畏レザルニ至ル故ニ聖人モ習ヒ性ト成トノ玉ヘリ假令治療ノ稽古モ初ノ内ハ怠惰ノ心生ズレドモ忍ビコラヘテ療治スル内ニ風度覺悟スルコトアリテ治術ノ意味ヲ得ルコトアルヨリ漸々ニ樂クナリテ病人毎ニ種々工夫ヲ運ラシ書ニ索メ師ニ問友ニ助ラレ篤病沈痾愈ルニ至リテハ誠ニ手ノ舞ヒ足ノ踏ムコトヲ知ザルベシ又不治ナレバ遺憾ニテ寢食ヲ忘レテ思惟シ其案ニテ效ヲ奏スレバ外ニ樂ヲ設ズシテ娛ミ足ルニ至ル者ナレハ初ノ内ニ怠惰セズ措ス研究シテ己ニ克ヲ習業セハ明師哲匠タランコト疑ナシ

一凡世祿ノ醫家本邦當今ノ御時ニ處シタル輩ハ父祖ヨリ承タル業ヲ繼ギテ君恩ヲ報シ奉ルヨリ外ニ謝スベキヤフナシ能ク篤ク此ニ志ヲ立ル者ハ道ヲシレル人トモ云ベシ然ルニ世祿ノ醫家ノ子ニシテ書生ノ席ニ出テ僅ニ經史子集ノ端ヲ讀ミ少ク得ル所アレバ高ク自ラ處シ醫ハ醫才アリ我ハ醫才ナシ故

ニ典籍ノ間ニ志ヲ願フミ異國ニハ科第アリテ其才
ノ長ズル所ヲ撰擧アルコトナルニ本邦ニ此制度ナ
キコソ恨ミナレナド云テ自分ノ便宜ノミニ志シ本
業ヲ忽ニシ彼ノ連誅茶香ニ耽ル輩ヲ見テハ文盲ナ
リ鄙俗ナリト罵ル徒アリ皆是放蕩不羈ナル惡書生
ニ惑ハサルルモノニテ自ラ多病又ハ世ニ不遇ナド
儒者ノ口聲ヲ學ベドモ其儒者一人ノ用ヲ爲ス程ノ
學力ニモアラズ不遇ハ自ラ求テ不遇ナルナリ若又
多病ニ違ヒナクバ其才アル人ヲ撰ヒ其業ヲ紹シメ
其身ハ祿ヲ辭シ仕ヲ致シ山林ヘモ引籠リナハ書ヲ
讀ミ道ノ一斑ヲモ明メタル甲斐アルベキニ左ハ無
シテ私ノ理ヲ立テ飽マデ君ノ祿ヲ貪リ渥恩ヲ謝ス
ベキ心モ無ク父祖累代ノ業ヲ廢シコレヲ天命ニ委
シテ悔ルコト聊モナク不忠不孝ナルヲ自省セズ詩
賦作文ハ李杜元白韓柳歐蘇ガ髓ヲ得經藝ヲ精クシ
テ古先王ノ道ヲ明メ宋朝諸儒ノ書ヲ讀テ格物窮理
ノ旨ヲ悟リ群籍ヲ涉獵シテ博聞多識ナルモ果シテ
何ノ用ルトコロアリヤ主人アリ兩人ノ僕ニ命シテ
羊ヲ守ラシケルニ一人ハ博奕シ一人ハ書ヲ讀テ遂

ニ羊ヲ失ヒタリト云ハ莊子ガ寓言ナリ今茶香連誅
ノ類ニテ本業ヲ忘ルル儒者ノ爲ル所ヲ學ヒテ本
業ヲ廢スルト尸位素餐ノ大罪ヲ犯スコトハ猶羊ヲ
失ヒタル兩人ノ僕ノ同罪タルガ如シ故ニ初學ノ士
謹デ此等ノ輩ニ狐惑セラルルコト無ランコト心ヲ
用ユベキノ第一義ナリ。
一弱年初學ノ輩治療ヲ學ンニモ病人請ヒ來ラズ此方
ヨリ強テ藥ヲ與フベキヤウモナク兎ヤ角スル中ニ
年長シ其期ヲ失ヒ遂ニ其志ヲ得ズト云エルハ最モ
左モアルベシ古人モ學書紙費エ學醫人費ト云リ
大切ナル命ヲ委ルコトナレバ做書冊子ナラムコト
ヲ求ムル者ハアルマジ去ナガラ昔ヨリ明醫良工ト
呼レ多ク病人ヲ救フ人モ初ヨリ多ク施治セシニハ
アルマジ然レバ心ヲ用ルノ厚薄ニヨルコト明ケシ
眞誠ニ篤志ノ人ハ弱齡ノ時ヨリ宗族親戚ハ勿論知
音相識奴婢僮僕ヨリ卑賤養廝ノ屬ト云ドモ病人タ
ル者アラバ心思ヲ盡シテ診視處劑シ其疑シキハ明
師ノ指揮ヲ受ケ或ハ益友ニ尋問シ實意ヲ以テ治ヲ
施ス時ハ治ヲ受ケル病人モ亦必ズ其實意ヲ感ジテ

其實ヲ以テ傳ヘ語ルトキハ聲聞漸ニ遠境ニモ及ビ
治ヲ請者多ニ至ルコト必然ナルベシ然レドモ其人
ノ性質ニテ俗間ニ云ル人ツキ宜ク信仰ニ預ル者ア
リ又人ツキ惡シキアリテ一樣ナラズ然レドモ藥ヲ
與タル病人ノ多少ニヨラズ親切ニ誠ヲ盡シテ施治
スルトキハ習業ニナルベキ程ハ治ヲ請者來ルナリ
如此術ヲ盡シ法ニ依テ診療セハ假令兩三人ヲ治ス
ルトモ等閑ニ診過スル病人ノ十人ニモ當ル故益ヲ
得ルコト極テ多シ如此ナレバ人ヅキノ好惡ニ拘ハ
ラズ後ニハ彼惡キ者モ人ヅキ宜シキモノニ勝リテ
病人夥クナル者ナレバ實心ヲ盡スヲ習業第一ノ專
要トスベシ只管ニ貧賤養廝ヲ多ク診療スルニ如ク
ハナシ證據ノ始末ヲ識得シ藥ノ對不對治法ノ得失
遺ル所ナク自得スル故ニ其後病人ニ對シ此證ハ後
々ハ某ノ證ニ變セン又劇キニ似タレドモ癒ベク又
生ニ似タル死證ト心ニ定見アル故恐懼スルコトナ
ク方藥ヲ處置スルニ滯碍スル所ナキ故ニ醫按モ亦
一段ノ妙理ヲ發明スルニ至ルコトアリ惟其病勢ヲ
恐ル心アリテハ明案良考モ出ズ然レドモ貴賤ノ

習同カラザレバ此ニ意ヲ用テ其習其實如何ト慮ル
ノ差別アレドモ病證ノ輕重虛實寒熱變化ノ機ニ至
リテハ造化ノ自然ナルユヘニ致ナシ去バ先貧民ヲ
施治スルヲヨシトス然レドモ貧賤ヲ以テ輕視シ等
閑ニ療治ヲセバ幾百人施治シタリトモ習業ニ益ナ
シ故ニ貴賤貧富ヲ問ズ病ノ輕重緩急ヲ以テ志意ヲ
用ユベシ然レドモ輕病モ忽略ニシテ治ヲ失ヘバ重
病ニ至リ緩病モ猶豫シテ候忽ノ間ニ急證發スルコ
トアレバ必ズ輕易ニ看過シ施治スベカラズ丁寧反
覆心意ヲ盡シテ治療ヲナシ覺ユレバ日後ニ尊貴ノ
人ノ治療スル助トナルコト極テ多シ尊貴ヲ治療セ
ンハ君父ノ治ヲ誤ルマジキ爲ナリ故ニ初ヨリ志ヲ
立置キ實心ヲ以テ習業ヲ勵ムベシ志子賤モ此ニ誠
アルモノハ彼ニ形ハルト云リ又一念ノ誠ハ天地ヲ
モ動スベシト古語ニミユレバ只誠ヲダニ盡シナバ
治術ノ眞理ヲ得ンコト疑ヒナシ。
一凡家ヲ起ス先祖ハ苦學數年ニシテ經驗ノコトモ
多ケレハ最推尊スベシト云ドモ人々所得ノ同ジ
カラザルコトハ其面ノ如ク萬殊ニシテ一樣ナラズ

此ヲ用ユルニ其所长ヲ以テスルコトナレバ其家ニ
 生タラン人ハ能ク其家技ニ練熟シ其成説ヲ奉シ格
 テ守ルベレ然レドモ所长アレバ短ナル所アルハ必
 然ノ理ナリ醫事ハ君父ノ安危ニ關係スルコトナレ
 バ其家説家技改ムルニハアラテドモ其説ノ長短ハ
 辨フベキコトナリ乍去家門ノ是非長短ハ辨ヘガタ
 ク見エガタキモノナレバ能ク自ラ省ミルベシ古
 人ノ詩ニ不識盧山真面目只緣身在此山中ト
 云ル句ノ如ク我が住ム山ノ形ハ見ザル故ヘ却テ識
 ラス陀山ニ登リテ眺望スレバ始テ其山ノ高低險易
 ノ勢瞭然トシテ目ニアリ此故ニ他家ノ説ヲモ旁求
 博索シテ家説ノ罅ヲ補ヒ遺セルヲ拾ヒテ用ニ供ヘ
 バ家學全備シテ忠孝二ツナガラ立ベキナリ總テ學
 問ノ道ハ齊王ノ鶏ヲ食スルガ如クスベシ齊王ハ一
 度ノ食ニ鶏數十ヲ用ヒ其醜ノウマキ所ノミヲ食シ
 タリシ我が醫ノ學ニ於テモ亦然リ偏執ノ弊ハ異國
 ノ名醫モ免レザル所ニテ石藏用ガ熱藥ヲ多ク用ヒ
 陳承ガ寒藥ヲ多ク用ヒ三斛ノ火一盤ノ水ノ諺アル
 ニ至ル又朱彥修ガ陽有餘陰不足張介賓ガ陰有餘陽

不足ノ類是ナリ故ニ古人モ人ノ病ハ藥ヲ輕ズルヲ
 病ミ醫ノ病ハ偏執ヲ病ト云リ本邦近來偏執ヲ以テ
 家ヲナシ紳庶大夫ノ間ヲ奔走スル者アリ病家ニモ
 何ノ誰ガ石膏何ノ某ガ附子又此病ハ誰ニ宜ク彼病
 ハ誰レ然ルベシナド病家ヨリ其醫ヲ擇ヒ用ルユヘ
 十一一失ナシトスルハ醫事ヲ識ヌ人ノ見ニシテ大
 義ヲ任トスル者ノ識ニアラズ偏執ヲ以テ名ヲ顯シ
 術ヲ鬻クハ一分ノ生活ヲ計ルニハ足ルベケレドモ
 君父ノ病ヲ治スルニ至リ熱因ノ病ニ我が偏ナル真
 武四逆ヲ進メ又寒因ノ病ニ我が癖ノ白虎承氣ヲ用
 ナバ大罪ニ陥ルコト必然ノ理ナリ人ノ身陰陽平
 等ナルトキハ平人ニシテ異論ナシ偏勝ナル故ニ疾
 病起ル偏勝トハ偏寒偏熱偏虛偏實ナルヲ云且陰ヨ
 リ陽ニ之キ陽ヨリ陰ニ變ジ又ハ實中ノ虛アリ虛中
 ノ實アリ寒ニ似タル熱々ニ似タル寒至虛ニ盛候ア
 リ至盛ニ虛候アリ故ニ古人モ病ノ變狀一概ニ言ベ
 カラズ醫方千卷ナラ其理ヲ盡サズト云リ然ルヲ一
 偏ノ見ヲ以テ萬變ノ病ヲ治セントスルハ其誤リ辭
 ヲ費ヤサズシテ知ルベシ其偏執ノ初ハ一二效ヲ附

子ニ獲ルコトアレバ萬病盡ク寒因トナシ又其初一
 二驗ヲ石膏ニ取トキハ萬病皆ナ熱因トナシ爾後診
 スルホドノ病者幾人ニテモ胸中ニ固執スルガ如ク
 ニ見ユルハ必然ノ理ナリ其甚シキニ至リテハ此ヲ
 書ニ筆シ管ニ自ラ誤リ子孫ヲ誤ルノミナラズ後世
 ノ醫ヲ誤ルコト多シ誠ニ嘆ズベキノ至ナリ故ニ我
 住山ヲ他山ヨリ眺望スルガ如ク他家ノ説ヲモ探索
 シテ偏執ナキヤウニ心ヲ用ユベシ去ナガラ醫治脩
 行ノ間ニハ效ヲ取タビゴトニ其藥ヲ用ヒタキモノ
 ニテ以前治シタル症ノヤウニ見ユルモノナレバ自
 ラ省テ自ラ矯ムベシ若シ自省スルコトヲ知ザレハ
 遂ニ偏見偏執ノ弊増長シテ改ムルコト無ニイタル
 故ニ只ヒタスラニ醫治ノ全體ヲ明カニシテ病萬變
 ナレバ藥モ亦萬變ニシ伏テハ衆人ヲ救ヒ仰テハ君
 父ニ事ヘ萬全ノ功ヲ奏セント願フベキナリ。
 一凡早ク父ニ離レ幼ニシテ家ヲ繼タルノミニシテ明
 師モナク益友モナク獨學センニモ家祕ノ傳書僅ニ
 存スルノミニテ口授ヲ受ベキ人モナク心一ツニ身
 ヲ憂ルマデニシテ日回リ月遷リ空ク年齒長ジ一旦

勉勵ノ心生ズレドモ醫治ノ逕路ヲ得ズ偶病人來テ
 治ヲ請者アレバ心中ニ喜悅スレドモ臆裏ニ準的ナ
 ク胡亂ニ方ヲ處シ藥ヲ與レドモ素ヨリ不對ノ藥ナ
 レバ效驗モナク病者遂ニ斃ルレバ病家怨恨ヲ含ム
 ノ色アリテ面目ヲ失ヒ再ビ治療ハセマジキモノヲ
 ト覺悟シ又外ヨリ請來ルコトアルモ病ニ託シテ往
 ト大罪ダニ犯サザレバ秩祿ニ離ルルコトアルマジ
 ト安堵ノ思ヲナシ匙ハ袋ニ納メ藥籠ハ蛙蠹ノ窠窟
 トナシ尸位素餐ト云コトハ忘却シタル輩少ナカラ
 ズ又一等此徒ト初メハ同クシテ俄ニ心ヅキ醫書講
 釋會讀等ノ席ニ出レドモ此程ノコトハ聞レマジ問
 ナバ笑レムト恥入テ口ヲ閉テ席ノ散ズルマデ黙々
 トシテ雲霧ニ坐スルガ如ク益ヲ請ヒ疑ヲ質スコト
 ナキモノアリ此果シテ何ノ心ゾヤ名ノミ醫者ニテ
 一方一藥ヲ知ズ朽果ル輩ナキニアラズ徒ニ年長ジ
 タルハ是非ナシ幡然トシテ自ラ新ムルノ心ヲ生ジ
 前非ヲ悔ルコソ好ケレ速ニ良師友ヲ求メ旦夕接談
 シテ學術ニウチ浸リ他事ナク習業シ病人治ヲ請モ
 ノアラバ師ニ謀リ友ニ尋テ一藥一劑只了寧反覆シ

テ處置スベシ假令誤治アリトモ畏縮スルコトナク
 再ビ其證アラバ改メテ如此センナド工夫ヲ運ラサ
 バ嚮ノ誤治ヨリシテ大ニ眼目ヲ開キ一般ノ新知ヲ
 啓キ大效ヲ奏スルコトアリ常ニ如此シテ學術ノ間
 ニ在バ觀ル所彌博ク習フトコロ彌多ク心モ開キ意
 モ朗ニ業ヲ敬ミ群ヲ樂ミテ心專一ニ他ヲカヘリミ
 ザル故ニ問フコトヲ恥ズ習業セバ晩學タリトモ大
 成ノ日ナキニアラズ只一倍ノ勤ムルニアリ昔王肅
 許叔微朱丹溪ガ輩皆中年ヨリ醫ニ志シ遂ニ無比ノ
 名醫タルニ至ル日暮テ道ノ遠キヲ患ヘズ只下聞ヲ
 恥ズ師友ニ益ヲ請テ怠ルベカラズ衆人ノ譏笑ヲカ
 ヘリミズ學術上達シテ君父無極ノ洪恩ヲ報シ奉ラ
 ムコトヲ冀フベキヨリ外ハアルマジキナリ。

一其初ノ志ヲ立ルコト正シクシテ學術精專ニ習業セ
 シモイツカ中途ヨリシテ廢棄シ遂ニ事成就セザル
 人アリ然ル所以ハ立志堅固ナラザルヲ以テナリ此
 故ニ惟堅固ナランコトヲ欲スレドモ常ニ交ル所ノ
 人又ハ世ノ動靜ニ心移ルハ人情ノ常ナレバ鐵心漢
 ナラズシテ尋常ノ人多クハ磷ギ易ク湮リヤスシ此

故ニ友ヲ擇ヒテ交リヲ結フコトヲ要トス常ニ良友
 ニ接談シ醫事ニ益アルコトヲ得タル人ニ交レバ醫
 事ニ心離ザル故念々々エズ年ヲ積ハ左ナキ人ニ交
 リテモ他ノ物語ノ中ニ吾道ヲ助クルコトアルニ至
 ル此故ニ常ニ良師益友總テ醫事ニ益アル事ニノミ
 打浸リ年月ヲ累レバ潛ニ移リ暗ニ化シテ醫ノ妙境
 ニ至リ熟スルコト古人ニ恥ザルベシ所謂芝蘭ノ室
 ニ久シク居ルトキハ吾身ノ香キヲ覺ヘザルガ如シ
 若アシキ人ノミ親ク常ニ交ルコト久トキハ是亦其
 風ニ化セラレ惡キコトトモ思ハズシテ惡ヲナスガ
 如ク醫事ヲ廢スル心ハナシト云ヘドモ見聞狭ク益
 ヲ獲ルコトナク常ニ平士ノミ多ク交レバ平士ノ如
 ク茶香連誦ノ友人多クレバ遂ニ其彼ノ行狀ニヒト
 シクナリテイツカ醫業ヲ荒廢シ初ノ志ヲ遂ザルニ
 至ル鮑魚ノ肆ニ居ルコト久ケレバ吾身ニ惡臭ノ移
 リタルヲ覺ザルカ如シ其初ノ志ヲ忘レタルニハア
 ラズシテ吾知ズ其風ニ化シテ本志ヲイツカ廢セシ
 ナリ此故ニ専ラ常々親ク交ル友ヲ擇ヒテ益アル人
 ニノミ交ルトキハ本志ヲ遂ルコト疑ナシ故ニ古人

モ君子必ズ交遊ヲ慎ムト云リ。

一凡醫家業成リト思フトモ猶足ラズトシテ初學ノ時
 ノ心ヲ忘レズ手卷ヲ釋ズ老至ルトモ怠ルベカラズ
 讀ハ讀ホド疑フベキコトアリ實ニ熟シタリトハ定
 ガタキ事多ケレバ夕ニ死スル朝マデモ此念ヲ廢ス
 ベカラズ一老宿頗學術ノ聞アリテ縉紳ノ間ヲ奔走
 スルモノアリ其診視ノ様處劑ノ方ヲ見ルニ孟浪不
 對ニシテ不學無術ノ庸工ニ同ジクシテ其治ヲ受ル
 者失治ニ斃スル者多シ其所以ヲ尋ヌルニ其醫常ニ
 云吾弱カリシトキ學既勤テ名聞四方ニ達ス今老ニ
 垂トス故ニ人信ゼザル者ナシ何ゾ診治ノ際ニ於テ
 深ク意ヲ用ユルコトカセント自ラ足レリトシテ吾
 ヲ恃ミユルス心ヨリシテココニ至ルナリ若如斯ナ
 リタランニハ中年マデ苦學研究シテ肝要ノ療治ザ
 カリノ年輩ニナリ實用ニ益ナク不學無術ノ下工ニ
 ヒトシキハ何ノ爲ニ苦學セシ是レモ又實ヲ以テセ
 ズシテ其志意ノ置所ヲ乖戾セシ故ナルベシ新進ノ
 士ト云ドモ一たび君臣トナリタル上ハ忠ノ一字ニ
 輕重ハアルマジ況ヤ世祿ノ醫ハ初ノ立志ヲ堅固ニ

シテ老境ニ至ラバ益勉勵シテ心ヲ逞シテ怠惰スベ
 カラズ北齊ノ顔之推モ老テ學モノハ燭ヲ秉テ夜行
 ガ如シ目ヲ瞑シテ見ルコト無キニ賢レリト云リ且
 吾一人ノ所業ヨリ風ヲ子孫ヘ遺スモノナレバ景桑
 榆ニ迫ルトモ終身不措不棄吾勤ムル所ヲ楮則ト
 シテ子任童穉ニモ示シ觀ゼシムルトキハ皆其風ニ
 化スル故強テ勸ズシテ其風ニ移リ學バザルヲ恥テ
 勤メザル者ナキニ至ル曾子ノ家兒不識闕トアル
 モ習ノ致ストコロナリ如此遺風子孫ニ追トキハ
 後嗣盡ク忠孝ヲ本トシテ家業ヲ勉勵シ道ノ本真ヲ
 以テ君父ニ仕奉リ永ク祿位ヲ保ツコト必セリ是我
 一己初學立志ノ堅固ナルヨリ興ルコトナレバ世祿
 ノ醫家子深クコレヲ思フベキナリ。

醫家初訓

右醫家初訓一十有六則嚴君所撰小子簡受而卒
 業乃喟然而嘆曰至哉訓也奉之於一家不如此
 與衆俱焉遂捐俸鏤書以授同人云
 不肖男 元簡敬識

橘黃年譜抄

橘黃年譜抄

栗園陳人著

余文化十二年乙亥夏五月ヲ以テ信濃國筑摩郡栗林邑
 ニ生ル僻邑師友乏シク徒ニ農桑ノ間ニ嬉戲ス年十三
 始テ外舅熊谷氏名光通 稱珪碩ニ從テ醫書ヲ習ヒ又松本儒臣
 木澤天倪通稱源 稱珪碩ニ就テ詩書ノ句讀ヲ授リ高遠教授中
 村中侗名元通 稱中書ニ依テ儒醫ノ道ヲ問ヒ年十八笈ヲ負テ
 京攝ニ遊ヒ宿儒老醫ノ緒論ヲ聞キ稍學問ノ方ヲ知ル
 後郷里ニ歸リテ醫ヲ業トス一日祖先長政ノ城跡同國内田
 邑山麓ニアリ俗ニ淺田ノ城ト稱長政通稱内藏助乙葉三郎頼季ノ孫
 木曾義仲ニ屬シテ此邑ニ居ル其子石見守長時頼朝ニ屬ス其後武田氏
 ノ爲ニ采邑ヲ失フ傳ニ云淺田ハ攝ヲ弔シ慨然トシテ感興ス
 津ノ源族多田七庄司ノ一ト云フ
 ル所アリ因テ志ヲ決シテ東遊ス去ニ臨テ小詩ヲ題シ
 テ云。父教盡上九。母箴詩式微。桑蓬豈枯落。聊向
 東方飛。時二年二十二
 余江都懸壺ノ年ハ天保七年丙申ノ夏五月ナリ其初伯
 父佐久間氏ノ家ヲ主トス是歲七月ヨリ麻疹流行其證
 咳嗽噴嚏鼻涕ヲ流シ呵欠眼胞腫汪々トシテ面微腫
 シ惡心乾嘔頭痛目眩等アリテ痘ト克似タリ但雙腮赤

橘黃年譜抄

クシテ咽中痛甚キヲ異トス或曰咽喉イライラトハシ
 カキ氣味アリテ飲食不進ユエ俗ニ稱シテハシカト云
 ナリハシカハ即ハシカキノ下略ナリ余九歲時此病ニ
 嬰ル因テ略體認スルヲ得タリ最初葛根ノ加桔梗ニ
 テ發汗シ寒熱虛ニ似タル者ハ小柴胡湯已ニ出テ煩躁
 渴ヲナス者白虎湯煩渴瀉ヲナス者猪苓湯便秘ノ者大
 柴胡湯小承氣湯吐血衄血スル者瀉心湯輕キ者ハ黃芩
 湯餘熱退カザル者竹葉石膏湯微欬止マサル者小柴
 胡湯加葛根草菓天花粉ニテ大抵愈ルヲ得タリ翌丁酉
 ニ至リ麻布邊此病猶行ハル南部候既吏高瀬某女發疹
 一日午没シテ迹ナク心下痞硬直視喘鳴脈洪數須臾ニ
 シテ悶絶死ノ如シ父母相擁シテ泣ク余之ヲ診スルニ
 脈未絶因テ紫圓ヲ與フ忽吐瀉傾カ如ク喘滿失スルガ
 如シ尋テ麻杏甘石湯ヲ與テ安シ梓橋御見役眞野幸次
 郎妻丙申九月二十三日胎兒分娩餘症ナシ念六ノ夜ニ
 至リ暴ニ發熱シ欬嗽甚シク口苦咽乾舌胎白ナリ余曰
 血熱ニアラズ恐クハ疹疫ニ感スルナラント葛根湯加
 桔石ヲ與フ翌日ニ至リ果シテ面部赤腫周身麻疹ヲ發
 シ往來寒熱汗出頭痛裂カ如シ小柴胡加石膏湯ヲ與フ

當年ノ疹疫此二人最重劇トス是歲ノ疹石膏ヲ用ユル
二三日ナレバ下利シテ熱大ニ解シ後患ナシ屢與テ屢
然リ蓋後年ノ疫ニ比スレバ大ニ易治トス。
天保七年丙申

夏四月五日六日幕府大禮俗ニ御代替

今年夏四月ヨリ日ニ雨降り或ハ天陰晴レズ五月ニ至
リ霖雨止時ナシ菜蔬生セズ七月十八日八月朔日大風
雨屋宇ヲ傷リ草木ヲ倒シ山川涌溢シテ民ノ愁苦少ナ
カラズ其秋遂ニ不登ニテ五穀及菜蔬價貴ク翌八年丁
酉ニ至リ米價沸騰百錢ヲ以テ米ニ合五勺ヲ得銀拾五
錢ヲ以酒一升ヲ沽ニ至因テ道路餓殍多シ幕府佐久間
街ニ貧院ヲ設ケ普ク窮民ヲ救フ其員凡貳萬餘人ト云
尙縣令三名ニ命シ品川板橋千住内藤新宿四驛ニ於テ
貧民ヲ教育セシム翌春三月ヨリ貧民熱病行ハレ四方
ニ傳播ス其人壞證多ク胃實ニ屬スル者絶テ少也世醫
殺食不足ノ徵トス其時病人大抵大小柴胡ヨリ導赤各
半升陽散火參胡芍藥參胡三白等ノ如キ錯雜ノ症ニ至
リ其甚ダ脱症ニナリテハ増損理中結胸ノ脱真武茯苓四
逆附子粳米嘔逆甚者ノ類ニテ救治ヲ得タリ又參附ヲ與

フル後餘熱煩渴ヲ生シ竹葉石膏湯ニテ全治シタルモ
ノ間有之。

按正德享保之間錢百文ヲ以米一升七合ヲ得元文延享
之間百文ヲ以三升五合ヲ得天明ヨリ天保ニ至リ凡四
十八年白米一石ノ價銀三十錢ヨリ七八十錢ニ至リ是
歲遂ニ三百八十錢ニ極ル餓殍多キ所以也自後兵亂相
尋キ米價益沸騰シテ外國ノ米ヲ仰ニ至ル田中華城曰
顯宗帝時買白米一石纔銀一錢今日乃不擲銀一貫餘錢
則不能得一石米矣抑米價之貴未有如此甚者也
是歲長崎出島へ和蘭人始テ一角ノ生魚ヲ齋來其長サ
九尺ト云其說ニ云ウニコールハ歐羅巴州ノ内スウエ
ーラント云海ニ産スタトへハ魚長サ二間アレバ角ノ
長一間ト云一角ノ說六物新志ニ悉シ故ニ贅セズ。
八年丁酉

春二月十九日大阪與力大鹽平八郎亂ヲナシ商家ニ放
火ス時ニ岳父佐久間氏大番頭狭山侯ニ扈從シテ大阪
城ニアリ能其情實ヲ詳ニスルコトヲ得タリ又京師摩
島松南ノ詩ヲ寄示ス。
一點良知看未眞。太平猶著太平人。天泉橋上作何

語。業火場中燒此身。唱道到頭終害道。救民究竟是
傷民。心中之賊難驅得。煽動却灰湮浪津。

往々愚民爲頂香。脅從三日調竊糧。半生酷吏狼心
在。一瞬業風螳臂張。粉碎素封真是快。掀翻紅焰亦
狂徒。問君此舉何名義。却見太虛陰霧藏。

滿目窮民雖可哀。揭竿何事漫喧嘩。安期一代風雲
會。本是半生刀筆才。眞訣終知難書點鐵。靈丹忽見
化成灰。伎心誤讀餘姚傳。萬卷圖託禍胎。

首奸賊ノ心肝ヲ洞見シテ妙ナリ其他山城安藤太郎記賊焚
及美濃神田柳深字津木共
甫傳其事ヲ詳ニ
ス參見スベシ

三月下浣余亦熱疫ニ傳染シ昏沈三日人事ヲ省セズ家
人相議シテ沼津醫員中村元三中條ヲ招キ治方ヲ擬ス
其時余始テ醒晤ス尋テ邪勢大ニ減シ漸五月ニ至リテ
快復ヲ得タリ其間無聊ニ堪ヘス傷寒辨術ナル者ヲ草
シ消閑ノ具トス今ヨリ省スレバ寡聞陋識赧汗最甚
シ。

七月十四日夜麻布狸穴旗下土坪田氏ノ兒生テ三歲暴
ニ發熱シ翌十五日朝ニ至リ吐利甚脈弦數身熱燒カ如
夕時ニ心下ニ撞キ顔色青慘眼閉テ開能ハズ煩渴飲ヲ

引形體頗ル脱ス余諷ニ認テ厥陰寒熱錯雜ノ證トシ乾
姜黃芩黃連人參湯ヲ與フ無效而死ス此證俗間稱シテ
早手ト云蓋迅速ニシテ死スルノ意ト云後南溟問答ヲ
讀ニ西國ノ地此病最モ多シ名テ暴瀉病ト云又大神活
庵治痢軌範云。余以攻利爲本。大凡無不治。人不知暴
熱利。故世醫往々誤治。當爲長大息也余因テ早ク大承
氣湯ヲ與テ下ササリシヲ悔ユ書シテ後鑒トス。尾陽
村瀨白石曰ハヤテノ病他邦ニ無處ニシテ吾尾ノミニ
限レリ醫亦其名ヲ知ラズ徒ニ呼テ急症トス延享ノ頃
加藤玄順平安ヨリ來リ治痢經驗ヲ著ハシ文化年間大
鶴活庵治痢軌範ヲ著スモ其所以ヲ知ラスト說ケリ森
蘭齋ノ臆說ニ至テハ其說詳ナレドモ未盡サルニ似テ
痧病ニアラス吾邦風土一種ノ瘴氣ニシテ時氣ト食物
トノ二ツニアリ而後多クハ痢トナルモノ也時氣ノミ
ノ者ハ泄瀉シ或ハ痢ヲ發シ食毒ノミノ者ハ霍亂ヲナ
ス故ニ未食物セズ只乳哺ノミノ者ハ此症ヲ發セズ嬰
兒二三歳ヨリ八九歳マデ尤多大人ニ稀ニ此症ノ發ス
ルヤ俄ニ大熱ヲ發シ或ハ惡寒手足冷或ハ發驚搐搦シ
天吊直視咬牙噤急ヲ發シ或ハ腹痛嘔吐呵欠困悶シ或

ハ泄瀉シ或ハ洞瀉シ下利惡臭也其發スル時發驚吐瀉一齊ニ來ルモノ俗ニ三拍手揃フト云テ不治ノ症トス若三症具ルトモ其勢緩ナルモノハ治セズト云ベカラズ大熱下利驚ヲ挾ムモノ葛岑連昏睡シテ不醒者ハ重症トス劇ク下利スルモ亦葛岑連ナリ緩ナルハ葛根湯加黃連大下利脈沉微ニシテ昏睡ハ利多キニ因ル也桂枝人參湯加黃連或ハ黃連理中湯手足厥冷シテ覺サル者ハ附子理中或ハ四逆加人參湯也。

九月信州鹿鹽村醫生宮下宗恭字千恭通稱恭造來リテ余家ニ寓ス宗恭才氣倜儻奇余カ莫逆ノ友ナリ無幾而學ヲ松崎慊堂ニ受ケ和歌ヲ前田夏蔭ニ學ヒ内科ヲ小島學古春庵ニ習ヒ瘍科ヲ本間棗軒水戸人通稱玄調ニ修シ一家ヲ爲ントス然レドモ其人躁心一藝ニ熟達スル能ハズ終ニ志ヲ齎ラシテ道山ニ歸ス余毎ニ子弟ノ爲ニ之ヲ警ム麻布日ヶ窪御家人鹿子畑杉七郎室舊年水蠱ヲ患ヒ漸々腹大滿動搖スレハ聲アリ皮膚黒ク血氣衰弱ス余診シテ曰難治ナリ棄置シテ天然ヲ俟ツニ如カズ其人強テ藥ヲ乞因テ時後治水蠱一方ヲ投ズ其方亦小豆一升白茅根一握水煎服ス此即南陽不及飲ノ意ナリ後洋醫

者流診シテ曰腸間膜ノ水ナリ刺シテ去ヘシ余曰甯鍼ノコト靈樞四時氣篇ニ出其來尙矣然レドモ已ヲ得ザルノ策ニ出ツ恐クハ遠年血氣衰弱ノ者宜キ處ニアラズ故ニ千金ニ出水者一月死ト云聖濟ニハ水蠱則死ト云醫餘ニハ初時稍愈爾來即不可治ト云鑿サルベケンヤ一醫不肯シテ之ヲ刺ス水浴盤ニ溢レ腹滿頓ニ消ス其人大大喜コト十日許再發シテ腹滿舊ニ倍ス因テ復之ヲ刺ス後三日忽然トシテ斃。

今茲官五兩判金一分銀ヲ鑄テ世ニ行フ此ヨリ前一銖金ヲ鑄又二銖金ヲ鑄二分金ヲ鑄當百錢ヲ鑄金銀局ノ吏徒ラニ利ヲ擅ニシテ官幣益卑ク物價愈騰ル昔時新井白石折焚柴ニ鑿々乎シテ新鑄ノ弊ヲ論ス然レドモ今日ノ甚キニ如ス余聞元祿醫人富永伴意ナル者新幣ヲ舉テ子弟ニ示シテ曰爾後人心必ズ日々澆シ汝五六十年必玉ヲ炊キ金ヲ焚キ楮幣ヲ以テ生命ヲ維クニ至ラシト云云

九年戊戌
今春余業ヲ日本橋頭ニ開カント欲シ正月ノ始メ本銀

坊第四街田中泰仲ノ家ニ寓シテ之ヲ謀ル後又通三街

三村直治ノ家ヲ主トシテ業稍行ハル時暮春中浣也。

三月十日味爽西鼓東鐘忽火ヲ報ス余露臺ニ登リ之ヲ觀レハ紅焰天ニ漲リ黑煙地ニ滿ツ其處ヲ問ハバ云西城ナリ文恭公時ニ西城ニアリ落首云コ辰牌麻布ヲ廻診セント欲シテ霞ケ關ヲ過キ之ヲ望メハ高樓大榭乍烏有トナル其後兩城屢火アリ震災大疫竝行レ加之ニ兵革外寇ヲ以シテ終ニ國家傾覆ニ至ル嗚呼。

夏四月先考濟庵翁瘟疫ニ嬰リ危篤ノ狀ヲ報知ス即其月十三日ヲ以歸省ス晝夜奔走十七日故郷ニ達ス而先考十六日ヲ以テ世ヲ去ル余ガ慨歎知ルベシ余ガ江都僑居モ亦此月十七日ヲ以燒失ス俗所謂小田原街火事是也歲六月余再遊志ヲ遂ントシテ居ヲ通三街ノ横衢ニトス舊知新知相謀リテ余業ヲ懲遷ス。

秋七月既望剃髮シテ名ヲ宗伯ト改ム故法眼本康宗圓君ノ名ツクル處也
仲冬五日栲窓喜多村君ヲ介シテ蒞庭多紀君ニ謁ス是ヨリ師友ノ益ヲ得ル多シトス蒞庭先生曰余常黃連湯ヲ用テ霍亂吐瀉腹痛ヲ治ス其應神ノ如シ又曰疫痢ノ

症治。三陽合病下利ノ機ニ外ナラズ善其旨ヲ擴充ス

レバ他ニ求メズシテ足ルベシ皆實驗ノ言也又曰仲師ノ室ニ升ラント欲スル者ハ先成無已ノ言ヲ以階梯トスベシ。成氏曰凡爲醫者要識邪氣所起所在。審其所起。知邪氣之由來。觀其所在。知邪氣之虛實。發汗吐下之不差。溫補針艾之適當。則十全之功自可得也。ト此即治術之要領ニシテ而今ノ傷寒論家ト稱スル者絶テ講セザルハ何ソヤト亦格言ト云ベシ。

冬十一月墨水御厩河岸渡船覆没シ溺死人有之俗謠ニ曰オツコチガ出來テワタシガイヤニナリ當時ノ俗色ニ惑溺スルモノ謂テオツコチト云

十二月烈女阿藤刑ニ就ク絶命詞ニ曰信濃ナル山路ノ雪トモロトモニ春ヲモ待タテ消ル今日哉阿藤山口氏飯田侯宮嬪其事余ガ知友高知達三徳ノ記事ニ詳ナリ安井息軒亦阿藤傳ヲ著ス參看スベシ。

十年己亥

春三月西城新營成 前大君四月二十七日ヲ以還駕

冬十一月十七日市中貧民病患ノ者小石川養生所へ簡

易ニ願出療養スベキノ令下ル。
十二月十八日和蘭學醫師へ始テ月俸ヲ賜フ之ヲ洋醫
跋扈ノ濫觴トス。
十一年庚子

六月英吉利人蘆州寧波府邊ニ寇ス定海縣ニ據ル清將
衣利布兵二萬餘ヲ督シテ寧波ヲ守兩軍歳ヲ踰テ相持
ス蓋英吉利諸蠻來リテ阿片煙ヲ鬻クノ一項職トシテ
亂ノ階ヲ爲ト云フ我 邦人ハ阿片煙ニ昏迷セスシテ
洋學ニ惑溺ス其害恐クハ阿片ヨリモ甚シカラム。
梁公圖詩云一聲天砲百軍奔、奪了舟山掠厦門。借問滿
州伊里布。何如尹吉馬釐孫。
太乙丹成疾或痊。用何方術正歲誕。澳門五百祖金利。
流毒甚干鴉片煙。

註陳文述願堂外集戒後詩存云。鴉丹此藤蔓中液也。
剪斷漚之一枝可得數升、飲之治阿片癮神功、已數
百人矣、初飲者三日後覺味淡、七日減十分之三、
下赤蟲匝月而斷起早健飯如常人矣、太乙真人所傳
一名大乙丹

又願道堂詩選註曰、粵東澳門地、向爲大西洋所

貨、歲納地稅五百金、他國欲居者、就大西洋轉
貨、英吉利每年船貨、數倍大西洋、而貨地轉受
制積不能平、故欲別求市地、又其強也以火器云
々。

按、王碧卿海島逸誌曰。夫阿片煙之物乃屬春方
意。其性斂攝。人之服此者。蓋藉其火力以取快樂
於一時。不知其能致之陽潛消。貽害於後服之既
久。則欲罷不能破家蕩產。蟲生髓枯。怪病種々醫
藥無效。比々皆然。和蘭却自禁。其衆不得竊服。
犯者立置重刑。何吾人之不悟同於瓜鴉甘墜其術中
耶。

又褚逢椿煙草錄云。外洋鴉片天方國紅鸞粟花。熬
膏成之。色黑而潤嗜者。最成於粵。今士官中多耽
此。弗釋者娼家客寓。無不設此以餌客。然嗜好成
癖受害甚烈。向友人爲余述阿片之美。謂氣受芬味
甜。矮榻短檠。筑笛銀盒。對臥遞吸。則精神煥
發。頭目清利。繼之胸膈頓開。興致信濃。久之骨
節欲酥。雙眸倦豁。維時拂枕高眠。萬念俱寂。但
覺夢境迷離神塊馳蕩。真極樂世界也。

二月六日慎德廟君主人 諱喬子有栖川織仁親ヲ葬ル都下八
音ヲ遇密ス。

六月初四千葉葛野弟大倉屋林兵衛ナル者奇病ヲ患ヒ
診ヲ乞フ其初陰囊偏大堅硬痛甚シ衆醫痛トシテ之ヲ
治ス寸效ナシ赤腫久フシテ紫黒ニ變シ漸腐敗膿ナク
囊皮脱落辜丸突出日夜痛苦ニ堪ス大便秘澁身煩熱ヲ
發シ舌上乾燥シテ渴シ睡臥安カラズ腐潰ノ後腹皮赤
腫シ五六日ノ後小腹水泡ヲ生シ之ヲ穿テハ孔ヲナシ
痰水奔出一升許脈無力汗出四肢厥冷精神恍惚虛憊極
矣一醫云王宇泰所謂勞瘵之類ト一醫東醫寶鑑前陰部
ニ載スル所ノ腎臟風也ト一醫云淋毒ヨリ脫疽ニ變ス
ル者切要方義五香連堯湯云淋疾陰莖及囊。敗爛痛全
似下疳。ト云即此症ナリト余未ダ孰カ是ナルヲ知ラ
ズ亦未ダ其治法ヲ發明セス姑ク記シテ後按ヲ俟。
八月初六醫官藤本立運贊ヲ持シテ余門ニ入ル即宗圓
本康君ノ二男ナリ頗ル才氣アリ書畫ヲ能ス余一ニ仲
師ノ書ヲ以指南トシ、從前醫官東垣丹溪ノ陋習ヲ祛
カシム弘化乙己未月十七日御番師ニ拔擢ス後故アリ
テ官途顛躓シテ終ヲ能セズ惜ムベシ。

冬十月二十八日高遠侯 內藤駿河守使者來リ謂曰市兵衛街
賜邸邊甚醫ニ乏シ將ニ病者ヲ托セントス余諾ス十四
日息女二人糶榮外感アリ併侍婢三人命シテ之ヲ療セ
シム其臣亦藥ヲ乞者多餘諸侯ノ依頼ヲ受ル之ヲ始ト
ス候余ガ貧ヲ憐ミ月々贈ルニ金壹兩ヲ以テス。

深川市川八郎衛門妹芝鶴奇疾アリ治ヲ求ム其始志氣
振ハス穀食日ニ減シ終ニ穀ヲ納ルルコト能ハス但紫
海苔ヲ食ス日ニ一兩枚他苦シム所ナシ醫以神仙勞ト
シ衆方ヲ投ス驗ナシ余腹ヲ診スルニ左脇下癰塊アリ
リ按之ハ肩背ニ徹シテ痛ム大便一月僅ニ一行小便日
ニ一行行事常ノ如シ余斷シテ癰塊ノ所爲トシ延年半
夏湯ヲ與フ服之一月餘癰塊減少少シク河漏瀉ヲ進ム
連服半年飲食常ニ復シ全人タルヲ得タリ。

香川秀菴行餘醫言癰門不食病ヲ論シ有持桂里方輿
輓ニ神仙勞ノ事ヲ載タレトモ其說皆的切ナラス余
ハ概シテ癰積ノ行爲トス爾後一婦人又之ヲ患フ指
迷七氣湯ヲ與テ愈中川故曰神仙病世未有得其治者
也防州福井驛有福田某者嘗遇此病考究之久遂知爲
瘀血。與以大黃蠶蟲丸大得其效。爾後每遇此疾。

必以治之。余未タ之ヲ試ミス蓋コレアラン然レドモ概シテ瘀血トスルハ拘泥ニ似タリ醫級無問録云神仙勞之說。並未見經文。乃方士家。憑空捏造病名。而欺世者也。夫勞或自外來。則勞風血風之屬。或自內出則情欲陰火之由。何嘗有所謂神仙者。今則以辟穀不良。而惟菓是耽。輒謂不餐煙火惟仙。辟穀故以神仙之名加之。使病家患此。疑有仙緣。置而不理。乃竟致羸瘦成勞。良可悲也。上古之世民不知種植。亦不知烹飪。自聖王辨別美惡。教民稼穡使茹毛飲血之天下。變而為熟食。而水火功宏。蒸浮利溥。始得民無天札。此地生物以養民。而聖王教民以利用也。今復捨利生者而為食。安得不妨害乎。且其病之作未嘗有咳熱等證也。惟見神形懶怯言語聲微肢體清寒。步履痿弱。其後漸見羸瘦痛利則臥牀不起。併果亦不食矣。此則久而憎氣天之由也。是症多生於童稚少年。至方長之年而殞。揆其致病之由緣。父母嬌養太過。恣縱成性。其初喜啖果。而穀食少進。繼則啖果而竝絕穀食。始則猶嫌其改常。繼則相安於無事。致令寒中痛則

痿廢難痊。未病勞而竟神仙矣。噫穀食乃天地中和之氣。所以與人奉生者也。故穀氣入胃則分受五臟六府。而生々之氣。化精氣。而裕神明。百年之壽命攸賴焉。故人之有生。未有不以穀食為生者也。五果雖有充臟之功其氣偏駁而不純。豈堪常需以養生乎。適遇此症。唯壯脾胃除陳氣。先熟其果而誘食之。潛與穀味而進退。但得一復穀食而病斯愈矣。抑何之有哉。此說真確論神仙勞之妙按ト云ベシ池北偶談云博野有一婦人一生不飲食而壽男女數人操作與常人無異亦罕疾云ト此ハ似テ非ナル者也

冬十一月十五日 仙洞崩御古典ニヨリテ大行天皇ト稱シ後光格ト諡シ奉ル此ヨリ女院ヲ清樂院ト稱ス十二年辛丑正月閏

正月七日聞文廟病アリ其症水氣痰喘尙藥方ヲ盡トイヘドモ效ナシ菴庭君診シテ濟世全書三子養親湯ヲ進ムト云其夜薨シ玉ヲ御壽六十九贈正一位大相國文廟薨後幾日モナクシテ侍講成島圖書頭司直上書シテ革政ノコトヲ云尋テ新政ノ議行ハル五月ヨリ坊間ノ法度ニテモ中古ニ復スヘキ旨ヲ令セラレ一説ハ是歲四月伊守正議ヲ直訴ス因テ黜陟始ルト云

正月念五夜上野山田郡鹽原村眼醫師幸作女瀧懷妊十一月產門ノ脇股ノ付先ノ邊破裂一女子ヲ産ス母子併安ク瘡口ハ膏ヲ貼シ不日全癒ノ由怪産ニ付地頭能勢大藏ヨリ御勘定奉行佐橋長門守ヘ訴フト云

按廣五行記云。李勢末年涪陵民馬氏婦妊。從脇生子。母無恙。宋武帝時。武陵楊歡妻妊。女從股中生。至齊猶在。魏肅宗熙平二年。並州祈縣人號僧真女令姬。從母右脇而生。靈太后命付掖庭。野史云。莆田尉舍之左有市人妻生男。從股脾間出瘡合。母子無恙云々克似タリト謂ヘシ尙怪産ノコトハ同安盧若騰ガ島居隨錄及本邦奥道逸ガ女科隨割ニ種々見タレドモ治術ニ益ナケレバ茲ニ贅セズ

夏四月十六日前代寵臣林肥後守忠英水野美濃守某美濃部筑前守某等罪ヲ得タリ同二十七日 儲君西城ニ移住ス。

八月北總佐原醫人佐久間宗三孫宗逸余ガ塾ニ入ル。十二月二十六日佐藤坦字大道拔擢シテ儒官トス。十三年壬寅 春正月水府學士鶴峯戊申余ヲ介シテ海鷗社ニ遊バシ

ム時ニ昌谷精溪。澤熊山。川北溫山之ガ牛首タリ。佐久間象山。大橋訥庵。柳澤芝陵。各年壯才鋒ヲ以テ相當ル芝陵余ト同甲最相親ム

春二月朔文廟大夫人廣大君從一位ニ敍セラル勅使清岡少納言。青木甲斐少輔。平田少內記。此ヨリ稱シテ一位君ト云。

三月十九日新曆頒行シテ天保壬寅元曆ト云以テ貞享曆寛政曆ニ異ニス

三月十八日家弟惟一宗倅信州ニ歸省ス從弟佐久間璞宗親同行高遠儒員中村中條ニ遊學ス。

夏ヨリ秋ニ至リ大ニ旱シ泉水涸レ池中ノ魚多ク死。四月十八日 大君駒場野ニ薨ス執政濱松侯薨所ニ於テ陣半掛ヲ賜フ即寛政七年文廟小金原ニ薨スル時服スル處ノ品ト云世人皆之ヲ榮トス侯亦和歌アリ云賜ハリシミケシノ色ノクロマズハ君ノミサキヲ我ユヅラメヤ。

四月二十五日昌平疊ニ於テ閣老參政經義ヲ講セシム。六月二日麴坊善國寺谷ニ小學校ヲ營シ松本兵庫弟謹

次郎ヲシテ教授ノ職ニ任ス。
 同月念日 官列侯十萬石以上ニ命ジ各典籍ヲ刻シ以テ後世ニ傳ヘシム徵士松崎慊堂大ニ其舉ヲ喜ビ古典善本僅皇朝ニ存シ當ニ急鑄スヘキ者ヲ注シ題シテ擬刻書目ト曰以要路ニ獻ス又熊本侯ニ建言シ足利學藏スル所宋葉五經注疏ヲ梓セシム事始テ緒ニ就テ慊堂病ニ嬰リ果スヲ得ズ學者深ク之ヲ惜ム。
 同月二十六日鎖國ノ禁ヲ止メ異國船ヘ薪水食料ヲ與フルノ令ヲ下ス故老歎シテ曰ヘ皇國ノ武備始テ衰ヘ國家是ヨリ多事ナラント。
 景山公歎曰。天下之事不可爲也。若一國則不可不盡力。迺陳狀於幕府。謂封內民俗愚癡。而漁父饒丁尤甚。日布攘夷之令。猶恐或呢夷人於洋中。今廢其令。則貿易之姦。決不可防。講暫泐乙酉之令。以全愚癡之民。幕府從其言。
 冬十月十六日寺門靜軒柳亭種彦爲永春水著書ヲ以テ罪ヲ獲。
 十一月京師開門院明地ニ於テ習字所ヲ營シ縉紳十五歲ヨリ四十歲マテヲシテ講習セシム敕旨門聯ヲ賜フ

其語曰。履聖人之至道。崇皇國之懿風。不讀聖經何以脩身。不通國典何以養正。明辨之。務行之。大納言三條實滿撰關白政通書ト云。
 八丁堀地藥舖藤屋覺兵衛次女年十一生質虛弱時ニ暴熱ヲ發シ搖擗シテ昏冒セントス余千金龍膽湯ヲ與テ熱解ス後咳嗽盜汗出テ羸瘦脈虛數小便赤澁飲食進マズ乃聖惠人參散ヲ與テ漸ク愈主人頗ル醫ヲ解ス怪テ余ガ治方ヲ用ユルヲ問余答曰。楊氏直指曾氏竝云。十五以下爲疳。十五以上爲瘵。幼科準繩云。兒童二十歲以下其病爲疳。二十歲以上其病爲瘵。醫學入門云。疳者乾也。瘵瘵少血也。二十歲以下曰疳。二十歲以上曰瘵。源一也。夫疳ト瘵トハ同因ニシテ其證亦相似タリ故ニ疳ニ黃瘦青脈鋸春穗髮之症アレバ瘵ニ體黃爪青肚高毛聳ノ症アリ疳ニ咬指捻眉之候アレバ瘵ニ揉鼻揩眼ノ候アリ疳ノ兒嗜炭吃泥洋笑多啼ノ變態アレバ瘵ノ人愛暗憎明卒怒暴嘔嗜好常性ヲ變シ火腦水脚米糞淋漓悉ク疳ト符契ス余故ニ疳ノ方ヲ以テ瘵ヲ療シ瘵ノ法ヲ以テ疳ヲ治スルナリト主人大ニ服ス。

余此說ヲ唱テ後數年松本順亭ニ會シテ目耕道人ノ說ヲ聞クニ余ト暗合ス因テ附記ス道人曰。小兒之疳。乃大人之瘵也。其名雖異而其原則同。故瘵藥治疳。疳藥治瘵。互相通用。蓋與病宜也。姑舉一徵焉。今人治疳用烏鴉灰。本是瘵藥也。又治瘵用烏梅胡黃連。卽瘵藥也。可見疳與瘵其名雖異。其源則一也。世之從事于小方脈者。治小兒之疳。猶治大人之瘵。則於疳治何之有。而慮至於此者。千百人中無一人。是以疳之輕者至重。重者至死。其幸而免者。僅々晨星耳。此說最余ガ心ヲ得タリト謂フヘシ。
 十一月十九日琉球人來聘ス正使浦添王子副使座喜見親方余始テ其行裝ヲ見又正使ノ書ヲ見ル同二十二日大城ニ於テ琉人奏樂ス樂畢テ白銀并時服綿等ノ賜アリ薩州侯此役ヲ以正四位上ニ敍セラル。
 按ニ鹽谷宥陰觀琉球聘使記ニ云。按國史所記。歸化創於 推古之朝。而來貢始於靈龜之年。厥後或來或否。自慶長一舉其國臣從。例必聘於我大府。云々其儀衛之數。衣冠之制。彼ノ記ニ詳ナリ。

十一月市中女醫ト稱シ白牡丹藥ヲ賣ルモノヲ禁ス。
 十四年癸卯 二月二十一日諸藩及町醫師其業熟達流行之者取調市尹ヘ訴フベキノ旨令セラル
 正月月中旬ヨリ白氣西方ニ顯レ毎夜宵ノ内見エシガ二月下旬ニ至リテ消ス駿州ニテハ阿部川ノ向德願寺山ニ當リテ出ト云京師推曆博士加茂朝臣保行陰陽權助兼播磨守加茂朝臣保涼陰陽權助兼曆博士加茂朝臣保教等奉ル勘文ニ曰。當月上旬以來。昏白氣出現於申酉之方。其形如布。長數十丈。戊刻後沒。從十日頃。晴陰不定。委難測。十三日十四日之後。所見白氣次第薄。從婁宿之度。至參星之南。東南指非雲彗星之光芒。夫氣者種々之氣雖多。此度所現。去秋以來。晴雨寒暖。至干今不順而所爲也。但歷史舉。其占兵革麥凶水火疾病等之徵也。氣出現之事。和漢其徵有無者。同時之治亂。無定則者也。此度氣所發之分野當西國。金氣胃陽。其所大風若者洪水失火疾病之類歟。雖有其現。殃不勝德。元來治世。聖德遍四方。何有變異之應乎。白氣漸薄。無異而消散。謹勘申如件。默庵曰。天保十四年。二月初五日初昏始見白氣于未申之間。至初更後西沒。人皆以爲斷雲。而後

每夜見之。不更方所。則以為異矣。至中旬七八。其質益分明。念後稍々遷。色光亦薄。至月晦如無所見。天文家謂之彗星。在日下其光芒所射也。前漢書天文志。雖尤旗類彗星。而後曲象旗長廣如一匹布著天。此星則見兵起。孟康曰。熒惑之精也。晉灼曰。呂氏春秋。其色黃上白下也。宋理宗景定元年白氣互天。如張匹練。

四月十三日幕府日光拜廟之典ヲ舉ク道路絡繹威武四方ニ揚ルト云柳澤芝陵詩云。

眞主貽謀開永昌。方今盛典屬更張。萬騎啓行觀濟濟。八鸞和鳴想鏘々。恤民曾已宣新政。拜廟況能循舊章。終古應須無剪伐。滿山松檜盡甘棠。

二荒雲霧老杉昏。祖廟千秋遺烈存。弓銃開先驅魍魎。衣冠執事薦蘋蘩。干城不乏周南國。鎮鑰尤推宋北門。請見睢陽鋒鏑死。寵榮長錄許張孫。

五月二十日都下老人九十以上ノ者ヘ米苞ヲ賜フ水口壽山年一百四末吉石舟年百花井白叟九十七歲最長ト云御中間關根市太郎今年壽百歲日勤ニ付褒賞トシテ銀十五錠ヲ賜フ。

四月二十四日大城園中及新見伊賀守正路庭中甘露降ト云因テ二十五日後宮賀筵ヲ開ク喜多村栲窓曰恐クハ雀錫ナラン信ズヘカラス。

六月十日沼津侯。庄内侯。鳥取侯。林播磨侯。黑田甲斐侯ニ命シテ下總印旛沼ヲ開拓セシム時論以テ新政中第一ノ失策トス果シテ秋閏九月ニ至リ其役ヲ止ム。

七月二十二日ヨリ夜半申酉ノ方ニアタリ怪星ヲ現ス其狀星ノ外火炎ノ如ク麒麟ノ形ニ見ユ其中ハ眼ト尾ノ卷タル形ノ如キ處ニツ有因テ俗ニ麒麟星ト云。

近來大黃船載至ツテ少ニ上品一斤金七兩ニ換ルニ至ル是以奧州邊ノ俚醫河邊ノ木實ヲ以テ代用トス其實牽牛營實桃花等ノ功ヲ兼テ且利水ニ長スルヲ以テ相馬ニテハ禹水實ト云白川ニテハ澤蓋子ト云ヨシ或云女貞實或曰鼠李モドキ未詳

九月四日江戸及西國大風同十日十二日美濃尾張大風南北總大瀨此年四月ヨリ六月マデ霖雨六月中旬ヨリ八月マデ大旱ナリ秋九月殘暑甚シク因テ夏服ノ令出九月ヨリ十二月マテニ軍用金ヲ製造ス其文ニ曰藏充

軍資泰平寶云蓋寬政ノ製ニ比スレバ金五分銀一分ト云九月十三日濱松侯執政ヲ免セラル其日數千人民邸外ニ集リ狼藉ヲナス夜ニ至テ益甚シ官吏及隣邸ノ士漸ク之ヲ鎮定ス建案以來ノ奇事トス。

十月十五日躋壽館講書陪臣町醫共聽聞ヲ允サル。

十二月二十八日江戸大火之ヲ鍛冶橋火事ト云。弘化元年甲辰。

二月九日醫官者施療人員官廳ヘ奏スヘキ令出ツ。

三月朔竹田苞丸胴人形ヲ躋壽館ヘ獻納ニ因テ絹五卷ヲ賜ル。

五月十日拂曉大城炎上奕師井上因碩上書シテ方今海内疲弊宜ク宮室ヲ卑シテ以テ仁政ヲ施スヘキヲ云大君可トシ寺社奉行西尾侯ヲ以テ之ヲ嘉尙ス。

秋七月北亞墨加合衆國水師提督彼理始テ浦賀ニ來リ大統領姓ハ斐護名ハ美辣ノ書ヲ呈シ通商和親ヲ乞フ幕府其書及臣下ノ呈書ヲ和解シテ二冊トシ諸侯ニ命シテ獻言セシム。佐賀侯。鹿兒島侯。福井侯等ハ斷然攘夷ノ論ヲ主張シ後又大ニ通商ノ議ヲ立有志ノ士大ニ之ヲ怪ト云。

梁公圖ノ詩云。同盟十二各鷗張。用底機籌絕外洋。天保甲辰秋七月。亞爾使節到東方。鳥居胖庵詩云。屢言遠虜忤當權。竟值併誣他事捐。誰識忘身元爲主。自嗤落魄尙憂天。岳飛已死胡威熾。秦檜不知宋祚遷。今日如無覆車戒。恐教神國汚腥羶。

十一月十日文廟君夫人廣大院薨。

冬十二月十三日改元シテ弘化ト云

二年乙巳。

正月二十四日江戸大火之ヲ青山火事ト云鹽谷量平火災記能其騷擾ノ狀ヲ寫シ光景目ニ在リ就テ見ルベシ。

二月二十一日濱松侯飯田侯罪ヲ獲テ解職ス故市尹鳥居甲斐守亦罪ヲ獲テ改易丸龜侯ヘ預ケラル後二十餘年幕府瓦解ニ因テ江都ニ歸リ余面スルヲ得タリ余問テ曰古來諸侯ヘ寓スルノ人生ヲ存スルモノ更ニ無シ何攝養スル所アツテ之ヲ獲タル答曰生父述齋每ニ訓シテ曰凡士タル者事ニ臨テ悔心ナカルベシ苟モ悔心アレバ操ヲ立節ヲ存スル能ハズト余唯此一言ヲ守ルノミ甲斐守今胖庵ト稱ス有詩云。東京一望耐悲傷。

來往無人不虜粧。桑海變遷浮世改。故鄉却是似他鄉。榮辱升沈那用論。歸來一望可銷魂。舊時邸市多荒廢。半作田疇半作原。亦實錄ナリ。

同月二十三日金局改役後藤三右衛門罪ヲ獲テ刑セラ
ル古金十八萬兩ヲ藏シ家族七十餘人ヲ蓄フト云。
同月二十八日大君本城へ移ラセラル三月十四日奉賀
ノ猿樂ヲ奏セシム。參政本多越中守之ヲ主ル。
米利堅船又浦賀ニ入ル都下騷擾ス三年和議成リ林大
學頭等ヲ提督ノ船上ニ宴饗ス宴罷テ亞國ノ火輪車浮
浪艇電理機日影像耕具等ヲ大君ニ呈ス大君亦漆器瓷
器綢緞等ヲ贈送シ又力士九十餘名ヲシテ粟米數百苞
ヲ贈ラシム公館ノ塀ニ於テ武力ヲ闘ハシテ遊戲トス
清人羅森有詩云。
兩國橫濱會。驩虞一類同。解冠稱禮義。佩劍羨英
雄。樂奏巴人調。殺陳太古風。和幾番悅意。立約告
成功。
識者之ヲ聞額ヲ蹙メテ曰天下是ヨリ多事殆ンド支那
ノ覆轍ヲ蹈ントス。

十二月七日醫官ノ輩專門研究シ妄ニ轉科スベカラザ
ルノ令下ル又醫官ノ從僕恣睢ノ事ヲ禁ゼラル。
三年丙午五月間

正月十五日余古畑玉函ノ發會ニ趣ク時ニ北風烈シク
未牌本郷邊失火ヲ報ス余辭シテ本郷丸山本妙寺ニ行
ク市尹遠山左衛門尉寺ニ在テ殿ニ火ヲ防ク因テ寺ノ
本堂免ヲ得タリ而火勢益東南ニ及ビ一ハ海邊佃島ニ
及ビ一ハ京橋ニテ止ム街數貳百九拾餘町武家邸數ヲ
知ラズ商船燒失亦數艘ト云此時余南傳馬街ノ僑居及
玉函家モ亦烏有トナル官命シテ諸臣ニ金ヲ賜フ宥陰
鹽谷世弘閣老濱松侯ノ命ヲ承テ丙丁煙戒録ヲ撰ス靜
盧北慎言其非ヲ辨シテ丙丁辨一卷ヲ著ス。
按池北偶談云。丙午丁未。從古以爲厄歲。陰陽家
云。丙丁屬火。遇午未而盛。故陰極必戰。亢而有悔
也。康熙丙午冬。戶部尙書蘇納海。督撫尙書王登聯
等。構死。丁未春。災變疊見。彗星出。太白晝見。
白告出西北。經月餘。是歲七月。輔臣蘇克薩哈誅
死。是說余未ダ果シテ是ナルヲ知ラズ。
正月二十六日仁孝天皇崩ス御諱惠仁二月六日ヨリ八

音ヲ遏密ス。

二月十七日東宮踐祚御諱統仁
閏五月二十七日大雷雨此夜英船浦賀港ニ入ル川越忍
二侯之ヲ警衛ス。
同月二十九日佛蘭西英吉利船琉球國襲來ニ因テ薩侯
國ニ就テ畫策ス八月二十日國ヨリ上書シテ鎮定ヲ乞
フ此時薩ノ和親通商既ニ成ルト云。
六月字子遜軍艦浦賀ニ來ル諸侯師ヲ出シテ之ニ備
フ。

十一月二十八日黃昏江戸所在火氣生ス大城金庫前佐
久間街本郷第一街駒込本所深川等ニ現出ス俗之ヲ火
柱ト云以テ凶兆トス。
是歲清道光帝殂ス改元シテ咸豐元年ト云。

十二月八日江戸大地震
今年夏ノ半ヨリ雨多クシテ晴ルコト稀ニ六月下旬ニ
至リ大雨彌降り續キ洪水溢出シ二十四日利根川二合
半ノ堤崩レ尋テ二十八日日本川股村ノ堤崩レ千住箕輪
ノ邊一時ニ水溢シ家ノ床上ニ及ブコト凡三尺許日本
堤ヨリ之ヲ望メバ蒼海ノ如シ晦日ニ至リ權現堂ノ堤

崩レ本所邊水溢甚シ七月三日曉天中川六間ノ堤崩レ
水龜戸小村井ニ入り法恩寺邊ニ及ブ土民鐘鼓ヲ以テ
報知シ騷鬧宛モ戰場ノ如シ七月雨猶止マズ七八日ニ
至リテ大川水勢益洪ニシテ大橋永代橋遂ニ破損シテ
往來ヲ得ズ本所深川ノ人民皆兩國橋ヲ踰テ都下ニ來
ル喧嘩言ヘカラズ官船ヲ出シ食ヲ給シ以テ窮民ヲ救
フ十五日ニ至テ水漸減ス。

余島屋喜七ノ姉ヲ養テ片倉恭齋ニ嫁ス恭齋ハ鶴陵ノ
養孫ナリ醫ヲ以會津侯ニ仕フ其藥室曾祖ノ書ヲ扁ス
曰。取法方於湯液之遺文。以爲施術之規度。選神藥
於後賢之書籍。以爲應變之治具。其語俗ニ近シト雖
其意適切ナリ。余謂鶴陵ノ著。微厲新書。產科發蒙。
保嬰須知ハ稍益ヲ資ルベシ傷寒啓微青囊瑣探ハ兒
戲ニ近シ靜儉堂治驗ニ至リテハ需藥ノ招牌タルヲ免
レズ。

四年丁未
三月十八日信州ノ北地霜雪降日ニ黑雲ヲ帶十九日夜
大雨屋ヲ動シ氣候異常冷風甚シク二十四日夜戌牌ニ
至リ大地震トナリ經旬不止四月三日又大ニ震シ虛空

藏山崩レ犀川溢レ民屋之ガ爲ニ壓倒シ人及牛馬死スル者若干萬數時ニ偶善光寺黃金佛開龜ニヨリテ四方男女來詣者太多シ故ニ人之死傷殊ニ夥ト云余ガ郷善光寺ヲ距ルコト十六里震大ニ輕ク庭園ノ塀垣僅ニ倒ル、ノミ因テ先妣及弟妹皆恙ナシ夫昇平二百有餘年白首干戈ヲ賭ス然レドモ堯水湯旱聖人モ免ル、コト能ハズ天災地厄不可測者此ノ如キトキハ盛世ノ人士亦警戒スル處ヲ知ラズンバ有ベカラズ此春淺間山ノ煙大ニ減ズ土人之ヲ怪ム果シテ地震アリ震後其煙常ニ復スト云フ震災甚キ處其一ヲ飯山其二ヲ松代其三須坂其四上田其五松本其六高遠其七高島其八飯田其九小諸其十岩村トス。

余一日喜多村氏ヲ訪ヒ佐渡相川醫師瀧浪玄伯ニ會ス其人ノ話ニ金銀坑ニ入テ毒ニ中リタルモノヲ山氣ト名ク其症肺痿虛勞ニ似テ諸藥效ナシ唯薩州方言ギチト稱スルモノ能コレヲ治ス此品ヲ伍ジテ製シタル煉藥ヲ救工丹金銀ヲ堀ル者大工ト云ト稱ス後佐渡門人山田某ヨリギチ一塊ヲ贈ル之ヲ有識ニ質スニ云貝原花譜ニ土ヲ辨ズル條ギチ一名カラウスツチ筑前ニテカラウ

スヲ作ルニテバ土ノ代リニ用ユテバ土ハ黃堊ニ當レバギチハ白堊ナラント云一説ニ此品京師稻荷山カ後谿竝加茂蟻ガ池ノ邊ニモアリ滑石ノ種類ニテ土俗油落シニ用ユ然レバ金銀ノ毒ヲ解スルニ非ズ坑中ニ入ルモノ燈火ヲ點ズレバ油煙ノ毒ヲ解スルナラント又云橘南溪北窓瑣談後篇ニ山氣ノコトアリ可考ト云。東條琴臺名耕元高島藩醫家之子也余ト同國ヲ以交亦深シ嘗詩ヲ寄テ曰良醫猛將雖各異。投劑奏效骸骨多。無限含靈生死處。喟然只付命如何。余年希堯ガ經驗四種ヲ讀ニ瘟疫論附按ニ云今人病至不起。多委之于數。余嘗曰。數之一字非醫家所宜言。使醫委之手數。則軒岐聖人何事。刺々不休耶。殆ト琴臺ト同見ナリ。琴臺後高田侯ニ仕ヘ今尙存ス。

九月二十三日朝鮮全羅道ノ内萬順ト云處ヘ佛船二艘襲來ニ付宗對馬守ニ報知ノ文曰。異樣船二隻到泊於全羅道萬順地境而一隻問情則大西洋屬佛蘭亞國之人也而一隻不知向所則極爲殊常故仰達貴國亦當詳察防禦之事丁未八月十一日訓導述甫奈同知印別差君善十立蒲印。

九月二十三日 天皇即位

今年マデ凡七年雪降ルコト甚稀ナリ世以テ凶兆トス。

嘉永元年戊申

二月十六日改元

三月十四日加賀越前兩國白虹日ヲ貫クト云

五月八日江戸大地震是月霖雨三河遠江洪水矢矧橋之

ガ爲ニ損ス。

六月五日山城大雨桓武帝山陵之ガ爲ニ崩ル宇治橋亦

陷ル。

八月十五日午時氣花降ル俗ニ此ヲ蓮花ト云芝赤坂邊

最モ多シ。

余從來古方ニ私淑シ治療タタ隨證治之ヲ旨トス頃日間居諸詩話ヲ讀ミ發明スルコトアリ吳門徐增子能父曰。余二十年論詩。祇識得一法字。近來識得一脫字。詩蓋有法。離他不得。却又即他不得。離則傷體。即則傷氣。故作詩者。先從法入。後從法出。能以無法爲有法。斯之謂脫也。醫タル者尤斯域ニ至ラズンバ工手ト稱ヘカラズ陳去非曰。揚子雲好奇。所以不能奇。陸放翁曰。後人不知杜詩所以妙處。但以有出

處爲工。其去杜愈遠。余謂陳氏ガ言ハ奇方ヲ好ムモノノ戒トナスベシ陸氏ノ語ハ經方ニ局スルモノノ訓トナスニ足レリ。

朱子劉病翁詩ニ跋シテ云。李杜韓柳。初亦學選詩者。然杜韓變多。而柳李變少。變不可學。而不變可學。故自其變者而學之。不苦自其不變者而學之。乃魯男子學柳下惠之意也。此詩ヲ學ノ法ノミナラズ爲醫者尤此覺悟ナクンバアルベカラズ存餘堂詩話云。孟浩然眉毛盡落。斐祐袖手衣。袖至穿。王維走入醋甕。皆苦吟之驗也。夫詩苦吟ニ非ザレバ工ナラズヤ況ヤ人身ノ工夫ニ於テヤ。

陶詩ニ云詩書敦宿好。林園無俗情。人能如此ナレバ攝養ノ要訣トスベシ。孫過庭書譜云。學書者。初學先求平正。進功須求險絕。成功之後。仍歸平正。余亦謂醫ヲ學ノ道當ニ如此ナルベキノミ。

楊用修曰。今之儒者。皆宋儒之應聲蟲。今以爲今ノ古方家ハ皆東洞ノ應聲蟲。其所謂西洋家ハ皆英醫偉利士ノ應聲蟲ナリ。

隨園詩話。有哭一顯者云。堂深人不知何病。身貴醫爭試一方。今ノ醫者尤此陋習アリ。概然ニ堪ヘズ。隨園曰。夫用兵危事也。而趙括言之。此其所以敗也。夫詩難事也。而豁連李老易言之。此其所以陋也。醫最此弊ヲ免レズ。厚顏書ヲ著シテ人ニ誇ル抑何ノ意ゾヤ。

鄂文端詩云。手理亂絲須用緩。方醫惡疾不妨奇トハ至理ノ語ニシテ醫ニ尤益アリ。

東越文苑傳云。詩貴合法。然法勝則離。詩貴近情。然情勝則俚。醫ヲ爲者多此弊アリ。知ラズンバ有ルベカラズ。

錢琦常言。平常自勉者。惟虛心實力四字。醫家ノ學亦如此ノミ。

葉香崑曰。病有見證。有變證。有轉證。必灼見其初終轉變。胸有成竹而後施之。以方。否則以藥宜以人試藥也。是乃徐增ガ所謂法ヨリ脱ニ入ノ域其論尤的切ナリ。

楊仁齋曰。療病如濯衣。必去其垢汚。而後可以加裝飾。陳修園嘗テ斯語ヲ稱揚ス。余門生ニ示シテ曰。好テ

補齋ヲ用ユル者ノ金針ナリ。

陸中遠曰。醫家之書近於仁。醫家之事近於利。吉益東洞曰。醫道之訣。無善於守廉。醫道之害。無大於求利。彼此同見。豪傑ノ見ル處符契ヲ合スルガ如シ。醫タルモノ仁ト利トノ別ヲ明ニセズンバアルベカラズ。

丁未戊申ノ間藤森弘庵大雅居ヲ余ガ隣街北橫街ニトシ。專ラ詩ヲ以テ友ヲ會シ。嚶々社ト云。杉江春海佐藤蕉盧山田畝郷賀藤月蓬田口江村黒田素行等皆知己タリ。余亦其盟ニ與リ。而詩ヲ事トセズ。一ニ醫籍ヲ攻ム人。或ハ之ヲ嗤笑ス。余亦放言シテ曰。大丈夫當ニ上ハ千古ノ賢者ヲ學ビ下ハ以テ百世ノ知己ヲ待ツ。ベシ何ゾ屑々乎トシテ一世ノ人ト文詞ヲ競フコトヲ求ンヤ。

英國船浦賀ニ來リ牛痘ヲ傳フコレヨリ先佐賀老侯蘭人ニ命ジ其種ヲ移シ西國ニ傳播ス。余師友松窓喜多村先生曰。洋痘之術。信之者曰。救嬰孩之艱厄。補天地之缺憾。真千古未發之秘也。駁之者曰。兒之壽夭繫于天。而痘之險易有數存焉。今欲以人勝天。萬無此理矣。余亦初疑之。既而平心夷

考。譬之接樹者。凡樹歷八九年而花實者。接枝則僅週歲。而著花結實。引痘之術蓋同于此矣。然是等出於恒理之外。則未可以尋常丈尺較量也。必種千萬兒。經十數年。而天下公論自定矣。要不可爲囂々紛繁也。

余戊申終歲病者ヲ療スル一千五十人醫名都下ニ知ラル。二年己酉

三月十五日閣老福山侯ヨリ醫令出ル其文ニ曰。近年蘭學醫師追々相増世上ニテモ信用イタシ候者コレ有ヤ

ニ相聞候右ハ風土モ違候事ニ付御醫師中ハ蘭方相用候儀御制禁仰出サレ候旨其意ヲ得堅相守ララルベク候但シ外科眼科等外治ノ儀ハ蘭方參用イタシ苦シカラズ候。

同月二十八日大君總州小金原ニ菟獵ス。七月十日五島候松前侯ニ命ジテ海邊防禦ノ爲新城ヲ築カシム。

九月二十六日漫ニ洋書ヲ翻譯シ新奇ヲ主張スルヲ禁ズ。因テ長崎奉行ニ命ジ洋書ノ可否ヲ正シ世ニ傳播セ

シム。十二月二十八日鎖港ノ令ヲ下ス。三年庚戌。

二月五日江戸大火諸侯邸二十七延燒ス俗ニ麴坊火事ト云。十一月十九日中山王使玉川王子來聘ス。大觀磐溪詩云。傳呼遠聲徹城濠。子々干旄拂日高。一隊嚴裝前後樣。琉人整肅薩人豪。遺恨千秋尙未消。鵬程無際海遙々。如教藩祖志全就。今日併觀呂宋朝。

四年辛亥。春痘瘡流行ス余數十人ヲ療ス。虛痘多シ千金内托散參芪鹿茸湯補中益氣湯ノ類ニテ治ス。毒痘ト雖神效散透膿散五香湯加反鼻等ニテ愈。

薩州臣入佐助八ノ永良部記ヲ見ルニ琉球三十六島ノ内沖永良部島トアリ其地ニ永良部殿ノ遺物トテ傳藏スルモノアレバ畢竟人名ヨリシテ島名トナリタルモノ乎海蛇ハ即其地ノ産ナリ薩州ニテハ神龍丸ト唱虛家ニ專ニ用ユト云。

崎嶇笠戸怨節曰一種本網無鱗魚ノ中海蛇ト稱スルモノ氣味主治未詳ト雖漢土ニテハ咸豐以來滯氣宣通化痰利水腹痛等ニ用テ奇驗ヲ得ルト云此ハ啓蒙ニ所謂クラゲニテ永良部ウナギトハ同名異物ナリ。

五年壬子。

五月二十二日曉西城炎上。
七月暑疫流行醫多ク寒涼ヲ投ジテ誤ルモノ多シ狹山侯臣高瀬甲之助妻死ニ瀕ス既濟湯ニテ挽回ス櫻田久保街書役久兵衛妻貞武湯ニテ愈同所家主新右衛門妻下利煩謁甚シ眞武湯ニ生脈散ヲ合シテ效ヲ奏ス其他附子ニテ救活スルモノ多シ一種最初ヨリ下利アリ協熱利ニ似テ熱解シ難キモノアリ余一老醫ノ傳ニ因テ小柴胡加竹筴麥門黃連滑石茯苓ヲ用意外效ヲ得タリ。
七月以還築地土州邸瘟疫流行ス門人黒岩誠道父尙謙余ヲ延テ療セシム野々村三内妻及子一瀬孫之進妻及息乾守右衛門并男富永源次郎妻及女山中常太郎北村平之進勝賀瀬範助及息善太郎佐々内藏太及妾奥村爲右衛門及兒松井源藏息國澤善之丞妻南雲仲後室島池九一郎林源三郎等皆危篤ノ域ニ至リ升陽散火湯加附

子眞武合生脈散茯苓四逆湯既濟湯烏梅圓吳茱萸湯ニテ救治ス福永儀助男谷兔毛妻森岡彌右衛門祐祥院僕音吉ノ如キハ元氣衰脱シ遂ニ治スル能ハズ此事土州侯へ聞へ留守居廣瀬源之進ヲ以テ其邸ニ出入スルコトヲ許サル。

余前年ノ疫ニ多ク石膏ヲ使用シテ效ヲ奏ス當年ノ疫大抵附子ニ非ンバ救フ能ハズ疫氣運ニ屬スル論廢スベカラズ蓋仲師ノ教益萬古不易ヲ覺ユ。
八月皇國名醫傳刻成。
十月四日白虹日ヲ貫ス。
十二月十七日信濃國地震
同月二十一日西城落成儲君移徒諸有司各褒賞アリ。
六年癸丑。
春二月二日參遠相豆西州大地震就中小田原特ニ甚シク類屋二千二百戸傷者七百人餘城中大ニ破壊ス官金壹萬兩ヲ賜フテ之ヲ修理セシム。
仲夏嚶々社詩會席上謝疊山贈儒醫陳西岩詩ノ榻本ヲ見ル因テ錄ス猪苓桔梗時爲帝。藥籠書囊用有時。莫把眼前窮達論。要知良相卽良醫。

癸丑六月三日米利堅船四艘又浦賀ニ入ル都下騷然梁公圖詩云。

一道礮聲雷震天。邦家從此事騷然。何須警報方爲備。轉海書來己一年。
萬里風來海氣腥。果知草木化爲兵。願拈拙計和親句。吟與當朝諸老聽。

官浦賀久里濱ニ新館ヲ營シ戸田伊豆守并戸石見守林大學頭等應接シ米利堅使節玻理ヨリ大統領伯領理璽天德ノ書ヲ受ク尋テ十二日玻理帆ヲ揚ク或曰此應接官吏甚拙ヲ極ム余長崎ニ遊ブ次友人某許ニ於テ玻理カ録セル日本記行ナル者ヲ讀テ彼ガ詭計陰謀ヲ知ル此書固ヨリ吾邦ニ泄スベカラザルヲ幸ニ和蘭人船載シテ讀事ヲ得タリ有識ノ士彼ガ肺肝ヲ洞見シ我所置テ畫策セバ孫子所謂彼ヲ知リ己ヲ知ニ庶幾シト其書世ニ傳播ス故ニ贅セズ同十九日米利堅書簡和解成ル。
癸丑新ニ炮臺五所ヲ品川海上ニ築カシム御殿山之ガ爲ニ鳥有トナル其結構ハ難山縣令江川氏ノ創意ト云官マタ諸國ニ命ジテ炮臺ヲ築カシム是歲慎德廟薨シ玉ヒ家定公征夷ニ拜セラレ。夏六月二十二日薨ス十一月ヲ以芝山ニ葬ル同二十三日

將軍
宣下
七月十七日俄羅斯使節布恬廷寄舉ニ來ル其船四隻ト云。

十月八日川路左衛門尉筒井肥前守荒尾土佐守古賀謹一郎應接トシテ崎嶇ニ越ク十二月朔開老ノ返翰ヲ使節ニ報スト云。

同月十八日初昏戌亥ノ方大凡十度ハカリ大微垣ノ地ニ當リ慧星見エ其光芒長サ三尺バカリ北斗ノ内天璣星ノ方尾指ト云フ廿四日ニ至テ見エズ或曰水火星兵亂ノ兆ヲ示ス。

秋九月警海ノ爲メニ諸侯ニ大船製造ノ令下ル又上野國藤原ノ山路ヲ關キ北越ヨリ下總銚子利根川へ達セシム。

冬十一月新令ヲ下シテ曰皇國武備ノ爲西洋ノ利器要術ヲ採用スル事ハ當然ノ事ニコレ有ドモ徒ニ新奇ヲ好ミ猥ニ蠻語ヲ唱ヒ夷國ニ倣フコトハ國威ヲ墜スニ付嚴禁ノ旨長岡侯命ズ識者以テ確論トス。
安政元年甲寅。

甲寅正月十一日米利堅使節船再來玻理和歌ヲ詠ス

「思ヒキヤ八鹽路越テ此國ノ不二ノ高嶺ノ雪ヲ見ントハ」自國ノ詞ニテハヤチムコロトウリハルロレマツチアームロチヨコカケチカイコヘイスルト唱フト云。

大槻磐溪曰。嗚呼甲寅之事。皇國開鎖之所由判。豈非天地之一大變局耶。其誰使之然。雖曰天運所循環。抑亦以亞虜彼理投其機會而已矣。夫投機行之。千載固鎖之國且無不可開。而況於決死從事乎。又曰。夫國一開矣。而不可復鎖也。不待智者而後知之。乃因其一開。棄其舊以新是圖。則甲寅之禍。我可以轉爲福矣。轉而爲福者。豈謂區々貿易之末哉。方將有易國體改軍政以大興富強之業者矣。嗚乎誰歟。興富強之業者。吾日鼓而望之。三月十三日和議成テ米船内海ヲ退帆ス去歲以來攘夷ノ策ヲ講シ死ヲ顧ミズ建白スル者深川吉永町ニ材木渡世中村屋源八者アリ新吉原江戸町二丁目久喜萬字屋藤吉者アリ赤坂田町ニ賣ト者謙藏者アリ其身賤ト雖其志亦憫ムベシ然而堂々タル滿朝ノ人皆偷安ニ處シ一モ憤發シテ祖宗ノ法ヲ主張スルモノナク遂ニ和

議ニ歸ス豈悲ムベキノ至リナラズヤ。四月五日京師禁裏炎上聖護院行宮トナル。六月十五日京畿地震近衛殿行宮トナル近江大和伊賀伊勢尾張參河播磨越前皆震ス。十一月四日江戸大震此日相州箱根山特ニ甚シク二子山ノ巖石崩落道路ヲ壓塞ス豆州下田港ハ加之ニ海嘯ヲ以テシテ市街十八坊流失シテ平原トナリ溺死八十五人ニ及ト云此震災京師ヨリ四國中國十州ニ及ビ土佐高知豐後府内最甚ト云川路氏曰此日余命ヲ奉ジテ下田ノ官舎ニアリ時ニ里老來リ告曰今朝海潮常ヨリ減ズル事一里許恐クハ海嘯アラン五十年前是ノ徵アリ早ク避クヘシ因テ皇邊山上寺院ニ逃ス無幾而大潮山ノ崩ル、如ク數千人ノ戸烏有トナル。按瓊山縣志云。海溢俗呼海翻。颶風起挾雨。海水須與高溢十餘丈。漫屋淪田。卽無大雨海水漲溢。田疇積鹹失耕。沼海苦之。故曰漲海。明紀綱目云。嘉靖清三十五年十一月山西陝西河南地。震聲如雷。雞犬鳴吠。陝西渭南華州朝邑三原等處山西蒲州諸處尤甚。或地裂泉湧。中有魚物。或城郭虛舍陷入地中。

或平地突成山阜。河渭溢。華嶽終南山鳴。河清數日。壓死官吏軍民八十三萬有奇。翠雨軒詩話云。安政甲寅浪華津地動海嘯一時ニ至リ死者數ヲ知ラズ宇治川以南道頓堀アタリ死タル人鮮ヲオンタル如シト聞實ニ人鮮トモ云ベシ黃浩翁ノ詩。命輕人鮮甕頭船。人鮮甕中危萬死。范石湖詩。人鮮尙脫免。虎牙不可憂。大槻磐溪詩云。冢山崩沸百川。生靈壓溺豈非天。廟堂發理如何策。嗚咽空歌十月篇。關蓋梁曰丁未四月信中大震。研有爲陵爲谷。況騰沸十月之篇不我欺句。今讀此詩。眞箇同一感慨也。同月廿二日災異屢至ニ因テ改元ノ命アリ東防城從二位管原聰長群書治要。庶人安政。然後君子安位矣ノ語ニ因テ安政ト定ム。十二月十八日官筒井肥前守川路左衛門尉岩瀨修理ニ命ジテ外國交際ノ法ヲ定ム此月諸蠻條約成ル二年乙卯。三月下旬講武所ヲ創建ス別ニ築地海岸ニ於テ操鍊所ヲ開キ西洋ノ兵法ヲ鍊習セシム。

三月京師ヨリ梵鐘ヲ廢スルノ官符下ス其文ニ曰。太政官符。五畿内七道諸國司。應以諸國寺院之梵鐘。鑄造大炮小銃事。右正二位行權大納言藤原朝臣。宣奉勅。夫外寇事情。固所深惱。宸襟也。況於緇素何有差異。頃年墨夷再入相模海岸。今秋魯夷渡來。畿内近海。國家急務。只在海防。因欲以諸國寺院之梵鐘。鑄造大炮小銃。置海國樞之地。備不虞。速令諸國寺院各存時勢。本寺之外。除古來名器及報時之鐘。其他悉可鑄換大炮。爲皇國擁護之器。及邊海無事之時。復又宜銷兵器以爲鯨鐘。不可存異議者。諸國宣承知依。宣行之符至奉行。時論以景山水戶侯ノ覆轍ヲ蹈トス其令果シテ行ハレズ或曰諸蠻ハ輪輿ノ銅ヲ禁セハ若干ノ兵器立ニ成ルヘシ何ソ僧侶ヲ累スヲ爲ンヤ。冬十月二日夜二更過都下大地震其初海中ヨリ電光ヲ發シ水邊及卑濕ノ地特ニ甚シク高燥ノ地ハ稍輕シ人家多ク崩壞シ失火五十餘所ニ及ヒ壓死九十萬人ト云余東臺吉祥院ニアリテ此災ニ遇フ坐席傾キ辛フシテ庭前ニ遁ル須臾ニシテ震稍輕シ因テ家ニ歸ラントシ

テ辭シ去寺門倒レ奴僕ノ舍壓シテ僕下ニ叫ブ衆ト共ニ之ヲ救フ歸路御成道殊ニ甚シク筋違門ニ入レバ稍ユルシ余家幸ニ傾クノミニシテ家族恙ナシ失火ハ東臺ヲ去ルトキ吉原ヲ初トス家ニ至レバ所在火起リ紅焰天ヲ輝シ啼叫ノ聲地ヲ轟シ寒心言ベクモナシ古老曰國初以來ノ三大變ト一ハ慶安三年庚寅トス一ハ元祿十六年癸未トス一ハ今年トス元祿ノ變ハ新井白石ノ折焚柴ノ記ニ見エ今年ノ災ハ安政見聞誌ト云俗書ニ悉シ官幸橋外淺草廣小路深川海手新田ニ濟院ヲ設ケテ救活ス東臺法王亦臺麓及深川永代寺中ニ教育舎ヲ設ク此日早朝余ガ知己本石坊第三街伊勢屋太助ノ家ニ一ト者年七十餘ノ翁來リ告曰今夕恐クハ大震アラン慎ムベシト主人驚テ其故ヲ問バ答曰余每朝起テ井中ヲ試ニ今日水減スルコト數尺故ニトスト主人亦其井水ヲ見ルニ果然リ是即天然ノ地震機記シテ後鑿トス磐溪詩云。大震曾開上國人。山崩海嘯滅人倫。今日萬死橫道路。豈圖親見在吾身。亦實錄ナリ是歲宇田川與齋地震預防說ヲ著ト云余未タ之ヲ見ズ。

三年丙辰 春二月蕃書調所創建。津山箕作玩市。小濱杉田成卿。鹿兒島松本廣安。萩東條英庵。佐賀原田敬策。三田川本幸民。其他諸藩士三人教諭ヲ命セラル此ヲ洋學開拓ノ始トス。 秋七月十八日大阪御城代ニ命ジテ安治川木津川西口へ砲臺ヲ築カシム。 八月廿五日江戸並近國大風雨築地本願寺堂之ガ爲ニ烏有トナル。 九月和蘭人風說書ヲ奉ル其中今年瓜哇其外屬地中ノ人民壯健ナラズ暴瀉麻疹并瘟疫流行シ外カムボイナ并其邊ノ諸島ニ於テ痘瘡流行シ死亡多ト云。 四年丁巳 二月十九日唐船崎縣ニ入り王民江星禽十二家船主程子延上書道光ノ末紅巾ノ賊起リ數年ノ間戰戮ヲ加ヘ賊勢稍衰ト雖南京城未拔カズ人心不安トコロ廣東紅巾賊英人ト和シ援ヲ乞ニ付兩廣ノ總督葉名榮大ニ怒リ英人ヲ嚴制セシニ英夷價銀六萬貫目ヲ出シ和ヲ乞ト云蓋清ニテハ十年來外夷ト和親シ廣東厦門寧波

福州上海ノ五港ヲ開キ貿易盛ト云。

三月廿八日箱館邊村邑ヨリ始テ貢米ヲ官ニ納ル。

五月箱館通寶ト云鐵錢ヲ鑄ル又盛岡侯ニ許シテ自國通用ノ錢ヲ鑄セシム。

秋九月廿七日京師公卿三十七人罪ヲ獲テ謹セラレ。

冬十月廿一日米利堅使節トウセント姓ハルリス名登

城ス水府老侯及溜間諸侯上書シテ之ヲ拒ム。

冬十二月十一日雨雪後木氷滿林ニ結フ世以テ來歲ノ凶兆トス。

五年戊午。

春二月十日日本橋小田原坊失火翌十一日ニ至テ止マ

ズ坊數百十八戸口十二萬四千五百四十浮屠二寺橋四

所延燒ス同廿六日加賀能登越中大震越中大齋小齋ノ

二山崩潰シテ淨取寺川ノ水源ヲ塞ク三月下旬ニ至リ

其水橫決シテ良田十萬餘石水底ニ沈ミ死亡二千人牛

馬數ヲ知ラズ。

三月米利堅使節杜雲仙來

六月四日京師大火三千六百四十七戸延燒ス。

今歲六月大君溫恭大漸ノ聞ヘアリテ親藩諸侯有司儲

嗣ヲ議ス水戸公景山尾公越前侯春嶽ハ一橋刑部卿ヲ立

ント議ス田安公彦根侯ハ紀公ヲ立ント議ス有司議論

區々決定セズ朝野人心洶々タリ既ニシテ紀公西城

ニ入テ大統ヲ繼玉ヒ尾公水公一橋公越前侯罪ヲ得テ

幽閉シ蕭牆ノ内頗ル穩ナラズ夫儲嗣ノ事ニ付各其黨

ヲ分テ亂ノ階ヲナス事和漢其例少ナカラズ御當代ニア

リテモ國初結城殿イマダ世ヲ早クシ玉ハサル程ハ天

下ノ人心定ラズ二世ニイタリテモ駿河殿在世ノ時ハ

天下ノ人心亦定マラズ況ヤ後世ニイタリテハ其議區

々ナラサルヲ得ズ遂ニ三月三日ノ變ヲ生スルニ至ル

實ニ懼ルヘキノ至リナラスヤ七月朝紀公大城ニ入玉ヒ九月十日大君ト稱ス十二月朔將軍

下ス

七月三日大君疾病ニヨリテ戶塚靜海遠田澄庵伊東玄

朴青木春岱ヲ拔擢シテ侍醫トス尋テ七日伊東貫齋竹

内玄同ヲ舉テ奧詰醫師トス是ヨリ舊令ヲ廢シ當時萬

國ノ所置ヲ探討スルノ間醫術モ亦西洋ヲ兼學スベキ

ノ令下ル。

六七月ノ際美濃參河遠江駿河及關東諸州洪水ニテ人

家良田傷損セサルハナク參州以東ノ橋梁悉ク斷決

ス。
 七月下浣曉天彗星東北寅ノ方ニ現ス地ヲ去ル三竿ハ
 カリ其長サ六尺許八月上旬ニ至リ彗星夕酉ノ時ヨリ
 西北戌ノ方地ヲ距ル三竿ハカリニ現シ其長四丈餘中
 天ニ向フ九月初ニ至テ光彩益熾ニシテ怪ムベキニ似
 タリ夫ヨリ正西西ノ方ニ向ヒ光彩次第ニ減シ下旬ニ
 至リテ全消ス。
 八月十八日前大君ヲ東臺ニ葬ル諡シテ溫恭廟ト稱ス
 夫人篤君ヲ天璋院ト稱シ奉ル。
 是歲六月肥前崎陽暴瀉流行シ西國ヲ經テ浪華京師ニ
 及ビ七月下浣ニ迨テ江戸ニ流轉ス其病ニ傳染スル者
 箭ヲ射スルガ如ク即時目陷リ鼻尖リ忽鬼錄ニ上ル者
 男女併セテ武家二萬二千五百五十四人町家一万八千
 六百八十人ト云余家族門弟子幸ニ其病ヲ免ル晝夜奔
 走人ヲ救済ス九月上旬ニ至リテ始テ病根絶ス其治療
 ノ如キ余治瘟編及暴瀉須知ヲ著ス故ニ爰ニ贅セズ余
 友南園ノ詩ニ奇禍秋來滿四隣。城中誰肯祝佳辰。我
 家何事黃花酒。不復團欒少一人。實錄ト云ベシ。
 此病今ヲ距ル事三十七八年前三日コロリト稱シテ對

州ヨリ京師ノ間ニ流行スト云江戸ハ未ダ行ハルルヲ
 聞カズ。
 掛川老侯太田道順曰寬延年間大霍亂ト稱シテ江戸大ニ行
 ハレ死亡夥ク官水葬ノ令ヲ下シ貧窮ノ民皆死骸ヲ海
 中ニ棄ト云未其出典ヲ詳カニセズ醫人亦之ヲ論スル
 モノナシ西洋ニテハ一千八百二十一年文政辛巳是歲六月
 東印度ニ始リ四大洲ニ蔓延スルコト勃微爾ノ書ニ見
 ユ明年壬午西船始テ此書ヲ齎シ來リ宇田川氏之ヲ譯
 ノ以災ニ備フト云今也文連大ニ關ケ成著陸續出ヅ先
 上梓スルモノ母私篤コレヲ病論新宮義徳同義虎狼痢治
 準緒方洪庵譯述疫毒預防說杉田玄白譯天行病論周防長松霍亂治
 略尾臺善三譯其他一書越中門人九鬼秀達ヨリ贈ル今其書名
 フ遺忘ス最世上ニ早ク傳播スルモノハ松本良順蘭醫
 朋百南漢百トモ書スニ口授スル處ノ手記トス其說ニ云七八月
 ノ間治ヲ施ス事凡テ一千八百餘人救活極テ多ト後長
 崎ノ商賈江都ニ來リ言當年流行病朋百ノ療治ニテ
 一人モ治スルモノナシ反テ漢科ノ醫ニテ治タリ其方
 多ハ五苓散生姜瀉心湯ト云又前橋保岡元吉ノ話ニ
 同藩金子誠之助長崎留學中此病ニ嬰リ直ニ治療ヲ在

館ノ蘭醫ニ托スルニ效ナクシテ死ス同學ノ徒大ニ失
 望悔恨セリト夫醫書治術ニ體驗ナケレバ反テ人ヲ
 害ス儒可以兼天下。醫可以利濟斯人。トハ是ヲ謂ナ
 リ。
 冬十一月十二日赤阪三分阪失火凡長サ五十餘町ヲ延
 燒ス同十四日芝口第三坊失火十五日神田ヨリ失火幅
 七町長二十二町ヲ延燒ス官佐久間町ニ濟院ヲ設ケテ
 教育ス。
 十二月京師市尹ヨリ囚人十一名ヲ送ル是ヲ黨綱ノ濫
 觴トス。
 余當年日夜ヲ分タズ東奔西走病者ヲ診スル凡二千九
 百九十三人懸壺以來是ヲ盛トス偏ニ門弟子贊成ノ力
 ニヨルナリ。
 六年己未
 是歲和蘭亞墨利加英吉利佛蘭西魯西亞五國ニ貿易ヲ
 許シ神奈川橫濱ニ商館ヲ建テ諸蠻ノ銀錢ヲ始テ通用
 セシム長崎箱館ニ港亦之ニ準スト云或曰國初崎嶇
 互市ヲ開キシヨリ凡百餘年ニシテ我邦ノ寶貨外國
 ニ流入スルモノ既ニ金ハ四分ノ一銀ハ四分ノ三ヲ失

ヘリ其後又百餘年ヲ經テ其流失スルモノ幾許數ヲ
 知ラズ今コレニ加ルニ四大國ヲ以テ是ヨリ後數年
 フ出ス國財悉ク竭ナン事知者ヲ待スシテ明ラカ也方
 今量入爲出ノ制ヲ審カニシ外國ニ渡スヘキ歲額ヲ觸
 レ定メズンバ他日國債山ノ如ク終ニ蠹夷ノ奴隸トナ
 ルニ至ント歎息シテ語リキ此事ニ付古河侯留守居遠
 山十兵衛號息軒ヨリ龜井南冥カ十策問答ト云書ヲ見セ
 タリ其策一々理アリ方今諸家海防策ノ比ニ非ス但十
 策ニイタリテ闕テ論セス季子萬ガ無題ノ詩四首ヲ載
 ス寓意ノ事ト見ユ。
 水仙不在水。山屠豈唯山。名實苟紛錯。交賓乍爛
 班。赤夷天北極。烏舶國西關。無惜汚黃紙。斬鯢東
 海灣。
 美利海王國。富饒自古今。敢通豺虎信。直使人民
 淫。交易賣商事。殄殘天地心。若過遺一將。垂頸就
 生擒。
 我皇鮮所實。所實但賢才。追奉尙書典。深知遠物
 災。駱駝今未至。象虎有徒來。無路獻三策。搔頭望
 燼煨。

燒之應復舉。縱此得常來。假是千里至。無令隻燼回。寡多勢必勝。主客氣將倍。加以皇鐵。皮登立可摧。廣志大茂以來漆皮作兜蓋。故假以其義。

或曰此書ハ福岡儒臣青木定遠定遠ハ福岡ニ於テ始テノ所關學ヲ開キシ人ト云著ニシテ龜井南冥ニ非ス其故ハ海防策議ニ詳也ト余未其信否ヲ知ラズ余亦竊ニ議スル所アリテ國本論ト云モノヲ認メ關宿侯並井上信濃守ニ呈ス今皆畫餅トナリス。

開港以來國費日ニ窮シ遂ニ奸吏洋銀ヲ鎔シ國貨ヲ鑄ルニ至ル是皇國開關以來ノ汚事外國人ノ欺侮ヲ受ル尤甚トス彼咸豐十一年正月初一日刊ノ中外新報云今其國中有最不善之事。貿易之間。將西洋人銀。低一分之價。即此一事已足啓爭端矣。而西洋領事不出一言。蓋領事與日本長官。相爲連合。洋銀用自領事。則不減。用自商人則減之。然此事必不能行至日久。若西國君主聞知。恐未必不擬領事之罪也。ト此事既ニ外人ニ看破セラルル況ヤ洋銀ヲ以テ國民ヲ欺クニ於テヲヤ其罪恐クハ天誅ヲ免レザルナリ。

春二月二十一日青山溫田失火所在延燒貳里拾八町ニ

至リ焚死傷創者多シ。

夏五月二十三日鷹司近衛三條四卿落飾其他東坊城一條二條久我廣橋萬里小路正親町三條大原及粟田口宮謹慎ヲ命ス蓋外國ノ議並水府ノ事件ニ關係スト云。

秋七月二十五日終日終夜大風雨武州熊谷土堤潰ニ家作人馬流ル利根川及葛飾領其餘近國洪水。

八月十三日江戶大風雨近國所々洪水駿河以東奧羽ニ至ルマデ風損洪水ト云。

八月二十七日景山水戸公罪ヲ獲テ水府西山ニ閉居ス同日永井玄蕃頭岩瀨肥後守川路左衛門尉三名亦罪ヲ獲世以連累トス。

秋九月二十三日余ヲ醫學館ニ徵シ多紀安常命ヲ傳テ醫書校合ヲ命ス時ニ醫心方校刊ノ舉アリ余其列ニ加ハリ鶴冬ニ至リ官銀二錠ヲ賜フ。

是歲七八月ノ際暴瀉又流行ス蓋其證大同小異アリト雖往年ニ比スレハ稍緩ナリトス鶴牧山崎彌四郎。通二丁目小倉屋文助妻壬生山家右衛門五郎妻並息及姪土州福富猪平出石金子敬齋母鶴牧林武右衛門銀座二丁目戸田屋大助鶴牧萬吉渡邊吉三妻杵屋又二郎妻下

橫町又次郎妻因州長谷川文之介姊福井大導寺七右衛門妻土州岡本久右衛門同山本健次郎鶴牧福原友次妻土州渡邊又四郎女郡山乾我聞妻富樫町家主幸次郎妻福井杉山源次郎安針町伏見屋市兵衛甚左衛門町丸屋榮輔妻等ハ生姜瀉心湯ニテ治ス郡山根津大六郎鶴牧小林和三郎南橫町利助同松岡嘉助三浦侯臣結島順之丞女中防臣中村喜兵衛同原山司吳服町家主彌助女青物町曾我小左衛門妻南傳馬二若林正吉左官德兵衛弟子豐次郎家根屋四郎兵衛母萩原數馬妻等ハ小半夏加茯苓黃連石膏甘草ニテ治ス小松湯榮吉岩邑黃池德治齋者權次郎妻等ハ竹葉石膏湯ニテ治ス鶴牧橫濱左內加茂勝五郎火消同心長谷川氏掛川山本友右衛門小倉文助母澤木新四郎女大垣新田長澤東平龜島町中野屋啓藏等ハ建理湯ニテ治ス其他輕症ハ五苓散發陳湯ニテ治シ未附子ノ的證ヲ見ズ木場信濃屋金三郎大學頭林復齋兩人ハ吳茱萸湯ヲ與テ嘔吐止ムヲ得シトモ精氣奪シテ救フコト能ハズ余其診ノ晩キヲ恨ム。

冬十月十七日晡時大城失火橋門多ク烏有トナル。

同月二十七日日本郷丹後守石河土佐守佐々木信濃守罪

ヲ獲テ閉居ス。

空問侯臣澤田右内嘗テ腹痛ヲ患ヒ一日大ニ發シ腹堅滿心下ヨリ少腹ニ至リ刺痛近クベカラズ舌上黃胎大小便不利ス醫寒痛トシ藥ヲ施シテ反嘔逆ヲ生シ晝夜苦悶見ルニ堪ヘズ余診シテ結胸トシ大陷胸湯ヲ與フ嘔氣ノ爲ニ下利スルコト能ハズ因テ唧筒ヲ以テ蜜水ヲ殺道ニ灌入シ爾後大便快利數十行嘔止ミ腹滿痛頓ニ減ス後堅中湯ヲ與テ全愈。

灌腸ノ法人以西洋ニ創ルトス不知仲師密猪膽汁土瓜根搗汁等ノ導法ヨリ出ル事ヲ蓋彼ハ津液内竭ノ證ニシテ下劑ノ宜シカラザル處ニ用ユ此ハ下藥下ニ達スルコト能ハズ止ムコトヲ得ザルノ策ニ出ツ醫心方卷七引千金治疴濕下黑醫不能治垂死方ノ灌法及十便良方療大便秘塞不通ノ法ニ本テ運用スルナリ但漢士多ハ葦筒竹筒ヲ用テ灌入ス今唧筒ヲ用ユルノ便ニ如カス近來西洋猪尿胞製造ノ灌器ヲ渡ス之ヲ用ルモ何不可ナラン百代醫宗硝角一滑法方後云用手盡力。送入其腸。受藥以開之。其秘如湧決之水。其壅又如何不通。法須如微功取極大。患

此者宜斯道藥當之。今此法ヲ用ユル者宜ク此意ヲ體スベシ。或人余カ古方書ヲ讀ミ古醫方ヲ用テ世ノ古方家者流ト其轍ヲ同クセザルヲ譏ル余許學士叔微ノ言ヲ舉テ對曰。說不乖理。方不違義。雖出後學。亦是良師。讀仲景之書。用仲景之法。然未嘗守仲景之方。乃爲得仲景之心。譬如拆舊屋構新屋。不經匠氏之手不可用也。余ガ所爲亦如此ニ過ザル耳矣。

是歲秋英佛二國攻入天津。至通州。後京城急ヲ告ク清主避至熱河遠明園。是園京城ヲ距ル約三四里。乃清主ノ外宮也。御用寶物盡行槍散。後迫京城。々々大啓。遂爲英佛兵所據。先是在通州時。有英人樹白旗者二三十人。曾爲滿兵所獲。至是生還者約大半。其餘盡歸死屍。英人怒焚遠明園。將死屍葬于峨羅斯墓地。葬時以六馬牽一車。一車載一屍。二國兵送葬者數千。皇弟恭親王ナル者出行和議ニ成二國兵遂退至天津。亦有退至上海香港等處。待兵費八百萬賠償完結始退。天津八百萬外。又有三十三萬償。樹白旗者死之命。然天津日後雖還。亦准外國人立埠通商。又峨

羅斯亦于九月間續增和議。所增者較英人更多。因峨近支那。故較他國尤先一步。前年峨曾以砲八百門易黑龍江南濱海之地。長約二千七百餘里。廣約五六百里。

萬延元年庚申
春三月官使新見伊勢守村垣淡路守小栗豐後守三員及諸官醫士ヲ米利堅ヘ遣ス是ヲ蠻邦使節ノ始トス官醫崎立元村山伯元藩醫ハ川崎道民牧田倫卿トス水師總督木村攝津守別艦ヲ以テ之ヲ導ク
是歲春三月三日朝雪フル水戸浪士數十人嘯聚シテ大老彦根侯ヲ櫻田門外ニ斬ル都下人心洶々タリ佐賀侯之ヲ聞テ驚歎シテ急ニ國ニ歸リ砲臺ヲ築キ封疆ヲ固クシ自國ヲ守ルノ策ヲ爲ス鹿兒島侯朝勤之次播州ニ於テ此議ヲ聞急ニ國ニ返ル其他諸侯或ハ病ト稱シテ朝セス此ヲ天下瓦解ノ基本トス。
閏三月朔改元シテ萬延ト云。
二月以來霖雨多ク五月十日ニ至テ風雨甚ク雨續テ不止米價沸騰金一兩ヲ以三斗八升ニ換ヘ牛蒡一根價五十錢藕一至百錢ニ至ル一老翁歎曰風雨ノ罪ニアラス洋銀ノ所爲ナリ今十年ヲ過ギ洋銀既ニ盡キ紙鈔ヲ用

ルニ至ラハ其價恐クハ十倍セン。
余幼年ヨリ注夏ノ癖アリテ年々葛衣ノ間ハ讀書スルコト能ハズ病家ヨリ歸リ來レハ汗雨袂雲ニ堪ヘス唯袒裼裸體兩脚天ヲ柱ルノミ其中必困頓シテ摩臥句ヲ涉ルコトアリ因テ雜書ヲ翻シ日ヲ消ス古人書中醫ト兵トヲ以臂トスルモノ少ナカラズ昔在吉益東洞六經及秦漢ノ語ヲ抄シテ古書醫言ヲ著ス余其意ニ倣ヒ漢後ノ醫譬ヲ抄集セシトス而秋爽條至リ舊ニ依テ晨起奔走業ヲ卒ルヲ得ス姑ク一二ヲ爰ニ錄ス。
任園謂安重誨曰。明公捨李車而相崔協。是猶棄蘇合之丸而取蝘蝓之轉也。後唐明皇記
李本曰。公嘗語人曰。治民如治病。彼富醫之至人家也。僕馬鮮明。進退有禮。爲人診脈。按醫書述病證。口辨如傾。聽之可愛。然病兒服藥之無效。則不如貧醫矣。貧醫無僕馬。舉止生疎。爲人言脈。口訥不能應對。病兒服藥云疾已瘳。則便是良醫。五代史
蔡襄言於帝曰。天下之勢譬猶病者既得良醫矣。信任不疑。非徒愈而又壽民。醫雖良術。不得盡用。則病且日深。雖有和扁難責效仁宗。

臣本無宿疾。偶值醫者。用術乖方。殊不知脈候有虛實。陰陽有順逆。診藥有標本。治療有先後。妄投湯劑。率情任意。差之指下。禍延四支。寢成風痺。遂艱行步。非祇憚跋扈之苦。又將虞心腹之變。蓋以身疾喻朝政也。神宗宮誨上疏
夫用人如用醫。必先知其業術。可以己病。乃可使之進藥而責成功。今不詳究其術業。而姑試之。則雖日易一醫。無補於病。徒加疾而已。李綱上疏
今日事勢猶以和扁繼庸醫。作壞之後。一藥之誤。代爲庸醫受責矣。黃德秀劄子
詩書載道之文。春秋聖人之用。詩書如藥方。春秋如用藥治病。聖人之用全在此書。所謂不如載之行事深切著明者也。程子
孟軻氏有言。世衰道微。邪說暴行有作。孔子懼作春秋。說之邪也。天下所同聞也。行之暴也。天下所同見也。同聞同見而懼者獨孔子焉。是何也。手足麻痺。雖有筥箠。頑然而不知痛。無疾之人。一毫傷其膚。固已齟齬。慘怛中心。達於面目矣。人皆風痺而孔子獨無疾。宜舉世不懼。而孔子獨懼也。春秋成而

亂臣賊子懼。向者不懼而今者懼。果安從生哉。亦猶風痺之人。倉陀和緩療以鍼石。氣血流注。復知疼痛痼瘵之所在。是知非自外至也。呂祖謙

俗固已薄。為法者又從而薄之。蓋臣竊觀今日天下之勢。如人之有重病。內自心腹外達四肢。蓋無一毛一髮不受病者。雖於起居飲食未至有妨。然其危迫之證深。於醫者固已望之而走矣。是必得如盧扁華陀之輩。授以神丹妙劑。為之瀉腸滌胃。以去病根。然後可以幸於安全。如其不然則病日益深。而病者不覺其可寒心。殆非俗醫常藥之所能及也。朱子文集

兼今日之病。只此一病最大。若藥之未效。則其他小小證候。不必泛投湯劑以緩藥勢。而欲攻此病。所用之藥亦須一君二臣三佐五使。多少緩急次第分明。乃易見效。今既難治他證。而所以攻病根者。又未免互有得失。同上

臣竊以為救荒之政。蠲除賑貸固當汲汲於其始。而撫存休養最在謹之於其終。譬如傷寒大病之人。方其病時。湯劑砭灸固不可以少緩。而其既愈之後。飲食起居之間。所以得護節宣。小失其宜。則勞復之證百死

一生。最不可深畏也。同上

譬如病人。正當循序服藥。積漸將理。使氣體浸受。可及常人而後已。豈可責效於一丸一散一朝一夕之間。而遽怪其不及平人哉。同上

日甚一日。歲深一歲。而古道真若不可行矣。譬之病人。下寒而客熱熾於上。治其寒則熱復大作。俗工不求所以治寒之術。遂以為真熱。而妄以寒藥下之。其不殺人也幾希矣。朱子文集

蓋嘗竊謂欲起膏肓之疾者。必攻其受病之處。而其用功之緩速。制藥之寒溫。又有不可以頃刻毫釐差者。今天下之病在膏肓者久矣。夫人而欲言之。顧不當其任。則雖欲一效。其伎而無所施耳。乃者天子以執事有廉靖貞孤之操。擢真諫洵。納用其言。屏去姦惡。皆所謂膏肓之餘證。海內有志之士知上之心。蓋已深悟隱疾之有躬。而欲假熱事之藥以去之也。又知執事之心。所以姑從事於此者。蓋亦以為之兆耳。其必將有以謹之則夫所謂病本者可去無疑也。然而側聽累月未有所聞。則又懼夫豎子者。知良醫之傷已。而先為術以去之。以是憂疑不知所定。同上

人之將死也。或病於太勞。或病於飲酒。天下之人見其死於此也。而曰必無努力與飲酒。則是不亦拘而害事哉。彼其死也必有以啓之。是以勞力而能為災。飲酒而能為病。而天下之人豈必皆死於此。蘇子由

譬之一人之身。將欲飲藥餌石以養其生。必先審觀其性之為陰。其性之為陽。而投之以藥石。藥石之陽。而投之以來陰藥。藥石之陰授之以陽。故陰不至於涸。而陽不至於亢。苟不能先審視己之為陰與己之為陽。而以陰攻陰。以陽攻陽。則陰者固死於陰。而陽者固死於陽。不可救也。是以善養生者。先審其陰陽而善制天下者。先審其強弱。以為之謀。蘇九明

夫國之長短如人之壽夭。人之壽夭在元氣。國之長短在風俗。世有疴羸而壽考。亦有盛壯而暴亡。若元氣猶存。則猶疴羸而無害。及其既耗削盛壯而愈危。是以善養生者。慎起居節飲食。導引關節。吐故納新。不得止而用藥。削擇其品之上性之良。可以久服而無害者。則五臟和平而壽命長。不善養生者。薄節慎之功。遲吐納之效。厭上藥而用下品。代真氣而助強

陽。根本已危。僨仆無日。天下之勢與此無殊。故臣願陛下愛惜風俗。如護元氣。蘇九明

夫高帝之視呂后也。猶醫者視羸也。使其毒可以治病。而無至於殺人而已。同上

古之法若方書。論其大概。而增損劑量則以屬醫者。使之視人之疾。參以己意。同上

其過人得以議其失。人得以指之。是其偏則可以矯之使正。見其闕則可以備之使全。猶按脈治病。虛實燥濕浮沈。無錙銖之不見。然後隨其病而投之湯劑。加之鍼石。其不瘳者鮮矣。張釋之論

其矣人之惑也。平居治氣。養生。宣故而納新。其行之甚易。其過也無大患。然皆難之而不為。悍藥毒石以搏去其疾。則皆為之。此天下之公患也。禮以人為本論聖人以術激發之。使之踴躍奔走。而坐收其功。正如病瘵者必振發其精神。然後可以有為也。蘇子瞻

治天下如養生。備亂如服藥。養生不過慎起居節飲食。節慎在未病之先。服藥在已病之後。今憂寒疾而先服烏喙。憂熱疾而先服甘遂。則病未作而藥殺人。同上

古之爲醫者。聽音察色。洞視五臟。則其治疾也。有剖胸決脾洗濯胃腎之變。苟無其術。不敢行其事。今無知人之明。而欲立非常之功。解縱繩墨以慕古人。則是未能察脈。而欲試華佗之方。其異於操刀而殺人者幾希矣。蘇子瞻

如人服藥。用茯苓烏喙合而食之。陛下以爲茯苓長年之功。勝烏喙殺人之毒乎。蘇子由

古人以愛惡比之美疾藥石曰石猶生我疾之美者。其毒滋多。由是觀之柳子之愛屈到。是疾之美。子木之違父命爲藥石也哉。屈到嗜文論

古者聖君範圍於上。賢相變理於下。是爲天地之良善言不可離口。善藥不可離手。孟詵之言也。觀物外篇取之。同上

禍及股肱。毒流骨髓。厄運莫逃。殘生殆盡。今而幸逢神醫。獲賜仙劑。是受病者有再生之樂。治病者有全生之功也。剪燈新話

病瘡之人。瘡雖未發。而病根自在。則亦安可以其瘡之未發。而遂忘其服藥調理之功乎。若必待瘡發而後

服藥調理則既晚矣。王陽明全集

夫良醫之治病。隨其疾之虛實強弱寒熱內外。而斟酌加減調理補泄之。要在去病而已。而無一定之方。不問證候之如何。而必使人夕服之也。君子養心之學。何以異於是。元道自量其受病之深淺。血氣之強弱。自可如其所云者。而斟酌爲之自無傷。且專欲絕世故屏思慮偏於虛靜。則恐既已養成空寂之性。雖欲勿流於空寂不可得矣。大抵治病雖無一定之方。而以去病爲主。則是一定之法。若但隨病用藥。而不知因藥發病。其失一而已。同上

小人之才豈無可用。如砒硫芒硝。皆有攻毒破壅之功。但混於參朮蒼朮之間而進之。養生之人萬一用之不精。鮮有不誤者矣。同上

沉嘗云。祖宗時經變多矣。所立法度極是穩便。如老醫看病極多。故用藥不至孟浪殺人。其法雖不無小害。但其利多耳。王堂知新錄

根苗既善。徒植得宜。終必結實豐阜。如初根苗不善。方且萎頹微弱。譬孺孩胎病。氣血枯瘠困苦不暇。雖日加拯救。僅延餘喘息。欲其充實蓋亦難矣。

宋陳甫農書

近者南贛盜賊。雖外若稍定。其實譬之疽癰。但未潰決。至其惡毒則固。日深月積。得漸不可瘳。治生等固庸醫。又無藥石之備。不過後旁撫摩調護以紓目前。自非老先生發鍼下砭。指示方藥。安敢輕措其手。冀百一之成。前者申明賞罰之請。固來求鍼砭於門下。不知老先生肯賜俯從卒授起於死回生之方否也。王陽明與王晉治司馬書

夫弭盜所以安民。而安民者弭盜之本。今責之以弭盜。而使無與于民。猶專以藥石攻病。而不復問其飲食調養之宜。病有日增而已矣。同上

是猶以玉禮丹砂。治麻木不仁之病。立見其消亡。不如藥石之猛而迅利者。可以中窾竅而生死人也。歸愚文抄

陳平六出奇計。全不見奇。友人曰如醫用藥。藥本無奇。只對證恰好。一劑霍然。人便訝爲神效。魏叔子文集

橘黃年譜抄

一四三

觀古詩猶醫處方。詩格卑者。須觀岑李。詩語俗者。須讀李白孟浩然。病於寒瘦者。須讀王維昌齡。病於

釘鉤者。須觀高適張謂。余錄吳詩。姑以療崑體之癩祭耳。傷於吳詩者。亦應以崑體療之病去藥除何常之有哉。趙歐北

竊觀時事。如疴瘵之人病大疽。疽將潰及腹背。危急甚矣。惟攻刺剗剔以盡決癰毒。而後徐理甚羸弱可也。彼庸醫者執議思補。而毒氣入腹不可復救。悔何及焉。然則刺甚恐之。溫補之言爲易入。因循誤國計者。固庸醫者流也。明馬從謙

病而轉承。即肢體臟腑皆無可療。計唯有提攝元陽之一法。可以起死回生。安知治本之不足恃緩急乎。而不然者終日調兵。終日治器械。終日繕城地。亦何益於成敗之數。明劉宗周

七月十日下午谷種痘館官ニ獻シ市中種痘ノ令ヲ下ス。八月十四日水戸景山公薨ス尋テ二十七日其臣三十七名薩州侯邸へ歎訴ス。

是歲夏四月四日清咸豐十一年南京長毛賊蘇州ヲ卷取リ城外民家ヲ燒却シ貨財ヲ奪掠シ十二日ニ城中ニ亂入シテ

遜撫官ヲ殺害シ十六日城中ノ金銀布錢米穀ヲ收テ楓橋へ運送シ楓橋ヨリ船ニ積テ南京本城へ移スト云蘇人此亂ヲ避ケ崎嶇ニ來ルモノ少カラス委クハ十二家在留船主程稼堂ノ上書ニ見ユ。

此時蘇州及嘉興ノ地方ヲ攻取テ追々鎮江丹徒常州等ヲ陥入シ死亡ノ者擧テ數ヘカタク續テ松江ニ亂入シ既ニ危キ時上海ヨリ將軍李萬春討手ノ官兵ヲ率ヒ英佛亦應援ス因テ毛賊逃去リ其地全キヲ得タリ。

文久元年辛酉

春二月十八日市尹池田播磨守命ヲ傳ヘテ余登城セシム閣老關宿侯命シテ曰醫業出精ニ因テ朝謁ヲ允サル同二十八日參政堀出雲侯命ヲ傳ヘ御納戸圍ニ於テ拜謁ス此ヨリ徵士ノ列ニ加エラル。

是歲十月 皇女和宮關東ニ釐降ス御醫中山攝津守侍醫多紀永春院執匙タリ十月十五日清水殿ニ著十二月十一日余朝謁ノ次兼與ラ大廣間庭上ニ見ル其美驚クベシ其費三千金ト云副車二輪アリ亦同裝
清去年英佛ト和シ今年ニ至テ同治ト改元ス是ヨリ先咸豐帝殂シ太子載淳位ニツキ奸佞上ニアリ忠臣下

ニ隱レ政綱墜弛シ人心離散ス今年三月六日長毛賊又海晏平湖兩地ヲ侵シ同九日乍浦ニ攻入ス九月初旬又南浙ノ地ニ入り金華蘭溪ヲ討取リ同十七日蕭山併ニ重關鎮ヲ攻メ同二十九日紹興府城へ亂入シ續テ洪化俞姚慈溪管ノ諸縣ヲ攻テ寧波府城ニ迫ル因急援兵ヲ上海ニ乞ト云福建ノ地モ四月ヨリ廣西ノ賊起リ建寧府ヨリ龍巖州マテ攻入り廈門同安邊モ亦大ニ騷擾ス山東省ニモ賊蜂起シ濰州ノ金錢會賊モ亦亂ヲナシ四境靜謐ナラスト云。

辛酉二月上海寓客尾州葛郡小野村ノ百姓乙吉ノ話ニ當時長毛賊上海ヲ攻ル其兵凡ソ二萬清人城ヲ守ルモノ纔二三千互ニ甲冑ヲ用ユルコトナク但西洋ノ具ヲ取リマセ鐵砲斗リノ戰ナリ大炮ハ至テ少ク互ニ近ク寄テ戰フ毛賊清兵ヲトリコニスレハ頗上ニ燒印ヲ記シ降證トス故ニ再ヒ背テ清ニ歸スル能ハズタトヒ背クモ又清人ノ嫌疑ヲ受ク故ニ歸スル者一人モナシ長毛ハ東西南北ノ王ヲ得テ其勢日ニ盛ナリト其後如何未ダ確證ヲ得ズ。
是歲夏秋之交疫邪流行ス磐城侯邸最盛ナリ又余ガ療

スル處ノ者田生小六郎青傳沼之丞川島助之丞加茂下左内妻等ハ大柴胡湯ニテ治ス菊地熊藏ハ蘊要紫葛解肌湯ニテ治ス秋間仁太郎客ハ升陽散火加黃連ニテ治ス太田要八ハ眞武加人參廣瀨直彌ハ當歸四逆加吳茱萸生薑附子山田左一郎ハ茯苓四逆湯ニテ治ス蓋當年ノ疫陰位ニ陥ル者至テ少シトス。
是歲夏五月清國商民厦門王大源湖州沈篤齋廣東林雲達蘇州陳朴園五名長崎產物所大監督へ上書シテ夏和通親ノ事ヲ乞ヒ併貿易ノ法ヲ呈ス官吏上原賢治即チ使節ヲ遣ハシ和清親約ヲ結ビ清帝ト謀リ夷狄ノ害心ヲ除キ密ニ剿滅ノ策ヲ擬セントス然テ幕府因循果サズ遂ニ明治己巳ノ年ニ至リ俄羅斯滿清朝鮮同盟シテ皇國ヲ侵サントス朝廷大ニ駭キ竊ニ按察使二名ヲ遣ハシ說諭スト云。
十二月二十二日竹内下總守松平石見守二公西洋六國ニ歷聘ス。
是歲冬十二月長門侯毛利氏上書シテ公武一致外夷所置ノコトヲ云言報セラレズ因テ京師ニ迫リ攘夷ノ論ヲ主張スコレヲ毛利氏孤立ノ濫本トス一老翁曰水府

ト長州トハ其事一轍ニ出ヅ他日幕府ヲ倒スモノソレ此二侯ニアランカ恐ルベシトス。
長門侯建白一通説而説書一册アリ文繁故ニ録ズ
春來水戸浪士團結シテ所在金穀ヲ掠メ俄羅斯人對州ニ上陸シテ士民ヲ惱マシ東西平穩ナラズ官水戸侯ニ命ジテ之ヲ諭サシメ又小栗溝口等ヲ對州ニ使シテ鎮定ス。

磐溪詩云。親藩承大統。變理委元老。奈何兩都間。水火爭濕燥。可憐武元衡。朝駕左右擣。近聞霞浦東。風色太不好。橫行黃巾賊。剽掠及孩抱。安假鷹鷂手。驅人水網藻。而後迎鸞輿。肅雍下周道。議論過激ト雖憂世ノ意深シ。

二年壬戌 元日大雪諸侯朝賀ノ從士雜踏幕廷頗ル騷擾ヲ覺エ死傷者間之アリ世以人怪トス翌二日余朝賀ノ次猶其痕跡ヲ見ル。

十五日朝浪士阪下門外ニ於テ閣老巖城侯ヲ害セント以事就ラズ戰死者六人各斬姦趣意書ト云モノヲ懷ニス此日一書生長州侯邸中ニ於テ屠腹ス又其黨ト云。

二月十一日大君婚姻ノ禮アリ。
 二十一日大城ニ於テ申樂ヲ演ス諸侯及諸臣之ヲ觀ス
 余亦其列ニ與ル觀テ酒食ヲ賜フ。
 三月官始テ荷蘭ニ命ジテ三百五十馬力ノ蒸汽軍艦ヲ
 造ラシム。
 諸侯始テ京師ニ朝ス。 朝廷諸侯ニ命ジ禁内九門ヲ
 警衛セシム。
 四月長州侯臣長井雅樂京師ニ出テ上書シテ國是ヲ論
 ス是ヲ長孤立ノ基本トス。
 同二十五日島津和泉上京其前夜伏水ニ於テ家臣ト浪
 士ト爭戰ス浪士即死八人家臣死傷亦少ナカラズ爾後
 京攝ノ間浪士ノ屯集反テ夥ト云。
 六月十日勅使大原左衛門督登城。 勅諭之文略之。
 同十三日勅使再登城廟議アリ。
 七月一橋刑部卿大君補佐ヲ命ゼラル尋テ松平春嶽總
 裁職トナル皆勅命ニ出ト云是ヲ幕府政衰微ノ二變ト
 ス。
 八月二十二日島津和泉^{後改}江戶ヲ發シテ上京セント
 ス途中神奈川驛生麥ニ於テ英人ヲ殺害ス。

閏八月朔會津侯容保京師守護職ヲ命ゼラレ正四位ニ
 任ジ五萬石ヲ賜フ別ニ金三萬兩ヲ與フ。
 九月奧醫師新ニ拔擢ノモノ一世ヲ限ルノ令出但其人
 ニヨリ子孫ニ祿ヲ賜ト云。
 十一月念故執政彦根侯始閣老參政芙蓉間役人ニ至ル
 マテ罪ヲ獲テ祿ヲ削ラル蓋勅使内命ト云。
 執匙伊東長春院亦罪ヲ獲テ閉居ス。
 同月二十七日勅使三條中納言副使姉小路少將登城勅
 書云攘夷之念先年來至今日不絶日夜患之於柳營各々
 變革施新政欲慰朕意怡悅不斜然舉天下無攘夷一定人
 心難至一致乎且恐人心一致畏亂起於邦内早決攘夷布
 告于大小名如其策略武臣之職掌速盡衆議定良策可拒
 絶醜夷是朕意也官因テ諸侯ヲ朝シ各建議セシム。
 是歲諸國麻疹流行シ夏六月中旬ヨリ江都一般之ヲ患
 フ其證從來ニ比スレバ邪熱特ニ甚ク其始メ滿身壯熱
 面腮紅赤眼胞腫起唇舌乾燥咽喉痛ミ或物有テ刺戟ス
 ルガ如ク或ハ半夏南星ヲ噬カ如簽刺如何トモスベカ
 ラズ身體酸疼煩躁シ二三日ヲ經テ通身朱ヲ塗ルガ如
 ク班々粒ヲ成シ或ハ蚊蚤ニ咬ルルガ如ク點々紅色ア

リ嘔吐嚏頻ニ出テ或鼻清涕ヲ流シ漸ク咳嗽ヲ見ル其
 最劇者ハ隨テ出隨テ沒シ或紅雲片ヲナシテ形ヲ見ズ
 或ハ皮膚ノ間ニ隱々トシテ發スルコト能ハズ或ハ肌
 膚枯燥シテ胸腹ノ間ニ磊々疥ノ如キノ狀ヲ見口舌焦
 爛衄血ヲナシ嘔吐喘息譫語煩悶種々篤危ノ證ヲ現ス
 往年ノ疹ハ發出二三日ニシテ疹色白ニ變シ四五日ヲ
 過テ痂ヲナス其形白瘡ノ剝落スルガ如シ今年ノ疹ハ
 隨テ出隨テ沒シ其存スル亦一日ニ過ズ初メ痂ヲナシ
 テ剝落スルモノ更ニナク偶解熱ノ後皮膚ヲ檢スレバ
 傷寒ノ如ク皮膚一面枯剝スルヲ見ルノミ此其毒ノ淺
 深劇易知ルベキノミ一老醫曰安永丙申ノ麻疹ハ未解
 其後享和三年癸亥ノ麻疹ハ重症多ク死人夥シ幸ニ免
 レタルモノモ眼病腫瘍瘡癩疾腸瀉脚氣水氣等ニ變
 ジ死セシ者多シ^{中川壺山成蹟錄云享和癸亥自春至夏麻疹大}
^{下毒爲專務至秋世多患餘毒問生異證} 文政甲申天保丙申
 就先生受治者無復他患一時翕然感服 文政甲申天保丙申
 ノ如キ劇症ヲ聞カズ死亡亦恐ラクハ享和ノ疫ニ下ラ
 ズ麻疹亦五六十一年ニシテ一厄運ナス鑑セズンバアル
 ベカラズ余此病ヲ療スル其初銳意發散清熱ヲ主トス

葛根湯加升麻牛蒡子或ハ葛根湯加桔梗石膏ニテ治ス
 ル者^{人名數輩} 邪氣表裏ノ間ニ散漫シ嘔渴煩悶咽痛ヲ食
 ヲ欲セズ疹皮膚間ニ隱々タル者小柴胡湯加桔梗石膏
 ニテ治ス^{人名數輩} 若寒熱解セズ發透ノ勢ウスク或痒塌
 シ或ハ熱留シテ疹發スル能ハザル者小柴胡加荊芥防
 風連堯或ハ小柴胡湯ニテ犀角消毒飲ヲ合シテ治ス^{人名數輩}
 若內熱解セズ胸中煩悶或嘔吐或ハ下利スル者小
 柴胡加黃連茯苓ニテ治ス^{人名數輩} 若邪熱胸膈ニ鬱滯シ
 咳嗽痰喘止マズ或ハ嘔渴飲食進マザル者小柴胡湯加
 竹葉麥門或ハ杏仁桔梗ヲ新加シテ治ス^{人名數輩} 若熱毒
 熾盛疹色亦黯偏身熱腫喘脹氣急咳嗽嘔渴大小便秘瀉
 者大柴胡湯加桔梗石膏ニテ下スベシ若下利者去大黃
 ニテ治ス^{人名數輩} 嘗聞往歲京師麻疹ノ役吉益南涯大抵
 大柴胡湯ヲ以一下而餘毒ノ害ナシ他醫下劑懼テ用ヒ
 ザル者種々惡證ヲ發スト云若壯熱退カズ喘咳煩渴甚
 ク譫語人事ヲ省セズ或ハ邪熱内陷痰ヲ挾テ煩躁スル
 者竹葉石膏湯加桔梗牛蒡子ニテ治ス若虛羸少氣咽喉
 不利口舌赤爛或ハ下利衄血熱邪上焦ニ蘊蓄シ險惡ノ
 證ヲナスモノ本方ノ石膏ヲ去リ生地黃括麥根玄參ヲ

加テ效アリ人名數輩若疹毒内攻識語煩亂或呻吟懊惱甚者黃連解毒湯加大黃或加牛蒡子人名數輩ニテ治ス人名數輩若疹子出テ未盡佛鬱發熱煩悶寧カラズ或火邪熾盛諸失血スル者黃連解毒湯犀角地黃湯合方ニテ治ス同春名草心角解毒湯氣不定煩渴悶亂スル者三黃瀉心湯加石膏ニテ治ス熱毒解セズ舌上黑胎下利識語精神恍惚タル者導赤各半湯ニテ治ス上焦熱毒鬱滯口舌糜爛或兩眼赤痛スル者加減涼膈散ニテ治ス疹毒肌表ニ鬱滯シ腫痛或ハ焮熱解セザル者犀角消毒飲或ハ加桔梗ニテ治ス色毒肺部ニ着キ咳嗽甚ク膈熱解セザル者金鑑清金寧嗽湯ニテ治ス疹毒血分ニ鬱滯シ熱氣散漫解セズ惡證ヲ發スル者四物湯加芥連連堯玄參ニテ治ス此證日久癒エズ髮枯毛堅肉消シ骨立漸ニ羸瘦スル者不治ナリ其他癆狀ヲ爲ス者不食餐泄ノ者虛腫ヲ發スル者皆不治トス今玆ノ疹其最怪ムベキ者小野侯トス一柳土守嘗テ狂疾ヲ發シ數月差エズ麻疹ニ嬰リテ精神明瞭平常ノ如ク言語起居爽然タリ余疹ノ治方ヲ與フルコト三十日聊狂疾ノ候ヲ見ズ後暴食數日忽宿疾ヲ發シ依然トシテ藥效ナシ余其所以然ヲ解セズ書以俟後考一醫曰素問云陽明主肉其經血

氣放盛甚則寒衣升高、論垣妄罵、余將據此說與四物湯加乾姜桂枝紅花大黃、時以桃核承氣湯攻之、余未知其當否、世醫麻疹ヲ治スル御柳ヲ用ユ此品享保年間ノ舶來也、得之毒自出、可不死、本草經疏云、赤樺木近世又以治痧疹熱毒不能出、用爲發散之神藥、コレ世醫ノ本ツクトコロ然本草綱目唯治腹中痞積一切諸風解酒毒利小便ト云テ痧毒ヲ解スルヲ言ハズ且當年ノ麻疹コレヲ用テ特效アルヲ見ズ見ルベシ新奇ヲ好マズ古方ヲ運用スルヲ妙トス有持桂里曰疹後勞狀ヲナスモノ癩肝丸效アリト余亦之ヲ試ルニ驗ナシ且當年疹後療狀ヲナスモノ百一生ヲ得ス眞ニ憫ムベシトス、今年夏麻疹流行シ加之ニ暴瀉ヲ以テシ醫門多疾拮据暇アラズ診ヲ乞者四千五百九十一人ニ至ルト云、三年癸亥、正月七日佐賀侯閑叟ヲ舉テ、大君文武ノ師範トス、二月十三日、大君始テ京師ニ朝ス、同十九日英國軍艦ヲ以島津臣往年生麥ニ於テ殺害ノ罪ヲ正ス官價金六拾萬兩薩州ノ罰金洋銀三萬鎊ト

云。

京師始テ守護職ヲ置ク會津侯其任ニ充ツ又見廻役ヲ設ク、帝九門内ニ於テ行軍列ヲ、窺覽ス此ヲ天下兵機動ノ兆トス果シテ秋ニ至リテ諸國浪士蜂起ス幕府兵ヲ遣シ討テ之ヲ平グ、五月二十三日長州佛蘭西ト大ニ戰フ其前十日米利堅船下關ニ碇泊ス夜初更長人急ニ之ヲ襲フ因テ碇ヲ上テ上海ニ去リ其旨ヲ橫濱ノ公使ニ報知ス佛人之ヲ知ラズ下關ニ向フ故ニ此變ヲ生ズ同二十六日和蘭公使又下關ヲ過グ長人之ヲ襲テ大ニ敗ス米人大ニ憤シ六月朔軍艦ヲ以長州ニ迫リ劇戰シテ長ノ軍艦二隻ヲ焚キ砲臺ヲ悉ク破リ大利ヲ得テ橫濱ニ歸リ官ニ訴フ後彼ノ一千八百六十四年十月二十二日ノ會議ニ於テ我幕府其部屬暴舉ノ故ニ三百萬ドルノ償金ヲ出サント約シ之ヲ數回ニ割リ一回ゴトニ五十萬ドルヲ出シ之ヲ英佛蘭亞ノ四國ニ平分シテ收ムルニ決セリ如約三回ニシテ遂ニ幕府解體ス彼邦ノ議者曰此償金ハ錯想ニテ日本ヨリ收メシ所ニシテ其數ノ多ニ過タルヤ眞ニ理外ニ在テ笑フベキニ堪タリ當時若シ日本ヲシテ

各國衝行ノ國ナラシメバ余等公議ヲ以テ其際ニ處分センニハ僅々二萬弗ノ債ヲ求メ而テ其發砲ヤ政府ノ意ニ出ルニ非ザルヲ云ハシメ及其謝狀ヲ得テ我國旗ヲ祝スルニ足レリトスト確論ト云ベシ、六月三日西城炎上ス、同月十六日大君軍艦ニテ歸城、七月二日午時ヨリ薩人英ト大ニ戰フ翌三日曉天ニ至テ止英艦七隻戰死ノ者二十名傷者三十人戰將二名之ガ爲ニ死ス英人深ク之ヲ惜ム薩人死傷反テ少ナケレドモ部落悉ク燒失シ辛フジヲ孤城殘ルト云、同月水戸大場一心齋長州益田彈正京師ニ出攘夷ヲ主張ス、八月十七日夜浪士百五十人徒黨シテ大和國五條陣屋ヲ襲ヒ縣令鈴木源内等ヲ害ス此世上ニ稱スル天忠組ノ所爲トス同月二日但州生野手代元占安福大次郎ヲ伏水ニ於テ島木ニスルモノ皆彼ニ出ト云、同十八日長州陰謀露顯シ京師ヲ攘斥セラル三條亞相始七卿其兵ト共ニ長州ニ趣ク、同月二十六日大和屯集ノ浪士二百人餘夜高取ノ城ヲ

襲フ高取郡山ノ兵之ヲ防ギ大敗シテ退ク後又天ノ川
辻ニ數百人嘯聚ス官郡山侯津侯若山侯彦根侯ニ命ジ
テ之ヲ討シム九月中旬ニ及テ賊悉ク平グ。
十一月望大城炎上二丸ニ延燒ス是ニ於テ清水田安ノ
二邸客館トナル。同二十七日大君軍艦ニテ再ビ京師
ニ朝ス。

十二月二十四日夜田浦ニ於テ長州ヨリ砲發シテ薩ノ
船一隻ヲ焚ク士官九人機官十九人焚死ス。

是歲秋暴瀉流行ス輕キ者ハ五苓散生姜瀉心湯重キ
者ハ大柴胡湯小半夏加茯苓石膏湯ニテ愈而疫症ヲ
見スルモノ往々アリ余往年暴瀉ハ瘟疫ノ一種ニシ
テ霍亂ニ非ズト論ズ其徵益明ナリ西洋者流膽液病
冷徹疫ナドト稱スルモ尋常ノ霍亂トハ異ナル故ナ
ランカ蓋此病一種酷厲ノ邪氣ニ感觸シテ發スル故
感受甚シケレバ吐下シ甚シケレバ精神隨テ困
憊シ遂ニ死ニ至ル尋常食傷ヨリ發スル霍亂ノ停滯
ノ物ヲ吐下スレバ苦患脫然トシテ解スルト同ジカ
ラズ其酷厲ノ毒氣タルコトハ鳥獸マデモ病ミ死ス
ルニテ察スベシ庚申ノ歲ニハ都人此病ニ嬰ルモノ

ナク狗馬猫ノ病多シ就中狗ノ自死其數ヲ知ラズ其
始ハ吐食シテ下注度ナク四足痿弱シテ腰臀地ヲ離
ル、コト能ハズ舌塞聲啞シテ死ス吳又可曰至於無
形之氣偏中於動物者如牛瘟羊瘟雞瘟鴨瘟豈但人疫
而已哉然牛病而羊不雞病而鴨不病人病禽獸不病究
其夷傷不同其氣各異病也知其氣各異故謂而之雜氣
殆是ナリ故ニ本邦寬延年中ノ流行病及寬政戊午ノ
秋京師邊流行セシコソツベイ文政壬午ノ秋西國ヨリ
大阪邊ニ行ハレシコロリ竝近歲ノ暴瀉ハ皆一種ノ
疫毒ニシテ大同小異ナルモノト知ルベシ。

元治元年甲子

正月二十日大君右大臣ニ任スツイデ從一位ニ敍セラ
ル島津三郎左近衛權少將ニ任ジ從四位下ニ叙セラ
ル。

三月朔五日會津侯軍事總裁ニ任ジ松平春嶽京師守護
職ヲ命ゼラル。

三月朔年號改元アリ。

同月常陸筑波山下ニ浮浪二百人餘嘯集シテ土民ノ金
穀ヲ募ル官近國諸侯ニ命ジテ之ヲ鎮撫ス。

香港中外新聞云。五載以來英國皇家。屢助兵力。原
爲中國皇家。除暴安良。冀望清朝復興起見。是以英
國皇家改其法律。詔令英國官人統帶兵丁。助剿各省
髮匪。維時僧王十分喜悅。但僧王居心近于茲和。明
知各省總督將軍。多有不悅。番官幫助。各存已見。未
猶不敢勒。令各官聽從其言。即如購買火船一事。未
嘗與英國水師提督先爲妥商。遽然舉行採買。迨前任
海關李大人買就火船。帶來中國。而唐官議論紛々。
始謂其船不合用。遂命呵士寶駛回英國。然既買之而
又反之。可知各官俱無成見。而非知衷共濟者矣。及
攻打蘇州。哥頓曾與各僑王。面訂已允應。其受降者
概皆不誅。詎料既降之後。撫臺竟肆行殺戮。是背
哥頓之前言。而又非爾我同心者矣。然既克復蘇州之
後。忠王與各僑王。猶有意投誠於哥頓。反助滅賊。
惟見撫見撫臺。食言太甚。自恃爲大將軍。不肯俯從
哥頓之言。恐再投誠。又怕撫臺仍循故轍。則反受其
殃。無異自投羅網。是以忠王即返南京。深爲抱恨。
復調廣西老長毛。出來哥頓決一死戰。以雪前仇。此
所以常州之役。而哥頓有此敗亡之慘也。得聞英國皇

家。定議復古例。不准外國官兵幫助。中國剿匪但一
克復常州。是必着令哥頓撤回官兵。則中國不惟少此
勁敵一將。而更少此英銳一軍也。夫撥亂反治。貴賴
得人以主。然究其一國之作亂。其咎不在於民。而在
於官長。由官多失信於民。而民寤死而不服也。故民
雖有罪。而肯悔過從善者。則當赦之。子以自新之
路。此爲國者所不可少之法也。若既許其自新。而復
之死地。則令悔罪之人。雖欲求生而不可得。適足以
阻其獻誠之心。而亂卒不能除。禍亦終不能已。此其
勢之所必然。理所必至者也。

甲子年四月十三日

香港 孖刺官啓

五月二十日大君軍艦ニテ歸城ス。
七月五日英夷軍艦十七隻ヲ以長州ヲ襲フ翌六日ニ至
ルマデ砲戰劇シク長ノ砲臺悉ク粉塵トナル因テ英夷
上陸角石山ニ陣ス七日長人襲來大戰ス夷人五六十名
之ガ爲ニ討死ス後兩軍兵ヲ止和親ヲ議シ九日ニ至リ
海路常ニ依ト云。

上海新報云。日本來信云。茲有英法荷蘭等國兵船。
於本月初五日申正四點鐘。直抵日本國藩王酌樹界內

該處。地名蘭加多。本係出入該國咽喉要隘之地。當時各國兵船約時齊進。開砲轟擊。至上燈時分。擊破兩岸大石營四座。初六日清晨。各兵船復開大砲轟擊。約兩點鐘時分。又破岸上三營。各國水師乘勢擁上彼岸。鏖戰多時。日兵敗走西兵用鐵釘。將日軍砲跟俱皆釘。當即回船。初七日西兵復來岸上。陸戰大勝方回。前後數戰共擊破日軍大石營七座。奪大砲六十二尊。小炮兵器無數。轟斃日兵極多。所有彼軍陣亡兵卒。即時拖去。故西軍不能知彼傷亡數目。其日本營亦被西軍全行攻破無存。英國兵陣亡者十二名。受傷者二十名。法國兵傷亡五名。荷蘭兵傷亡十名。日本土王酌樹自料難敵西軍。當於是日下午時分。差官來英船云。吾主因得罪貴國。極其惱悶。原被國君太官王所使也。今特差我來船。望即勉開鎗炮。隨貴擬國欲做何事務。我國無不應先等語。差官去後。旋又送來禮物食品極多云。以上之事甚是的確。惟差官云被太官王所使一語乃傳聞也。

甲子捌月拾柴日

七月七日野州屯集ノ賊徒追討ノ命下ル參政相良侯之

ガ將タリ田沼丞
同月十九日早天長州京師ヲ襲フ其勢數千人福原越後國司信濃益田右衛門介之ガ將タリ官軍力ヲ盡シテ防戦ス討取ノ者凡六百八人兵燹伏見ニ始リ洛中及山崎天王山離宮八幡天龍寺法輪寺延燒ス其火十九日ヨリ二十一日ニ至ル是ヨリ禁内ノ九門京口ノ諸道諸侯ノ警衛至テ嚴ナリ因テ二十三日長州征伐ノ勅命下ル。九月三日長州征伐惣督尾州前大納言ニ命セラル松平上總介之ガ傳タリ。
十月十六日大君歸城ノ賀トシテ江戸市人へ金六萬三千兩ヲ賜フ但一家ニ錢三貫百三十九錢ト云市井上信濃守嘆シテ曰此金ヲ以テ濟院病院ノ資トセハ鴻益ヲ無強ニ垂ルベシ今一家三貫ノ錢一夕酒食ノ資ニ足ラズ官吏徒ニ舊習ニ拘泥ス幕府ノ振サル所以ナリ。
十一月常野州脫走ノ賊信州和田嶺ニ於テ一戰ス死者凡十三人。
同月尾州侯長州問罪ノ師ヲ班シ脫走ノ公卿ヲ九州侯ニ頒ツ。
余嘗テ世ノ瘍醫者流ヲ觀ルニ胸中更ニ學識ナク鹵莽

滅裂妄ニ截斷ヲ事トシ人命ヲ草菅ニシテ省ミズ人ニ誇テ曰英醫某氏之門人也或曰華岡氏ノ徒弟ナリト余深ク之ヲ慨シ瘍科廣要ヲ著シテ辨證施治ノ指南トス頃日又外科精要ヲ讀ムニ有言云今之名外科者。多是膠柱。不善變通。立性麗率。惟以鍼刀爲快。始用毒藥塗其外。內施冷藥。以虛其胃。外以藥閉塞毛竅。致使毒氣無徒所出。內外交攻。血氣瀾亂。則正氣愈虧。邪氣滋盛。其瘡腫膿。根脚散闊。而患者疼痛昏迷。恣其所措。毒勢爛漫。却云痛者易療。揮心剛狠。輕視人命。以規微利。却以軟言慰諭病者。殊不與念人之痛楚。頃刻難堪。反以毒藥麻痺好肉。務施刀剪去蠱肉。如此爲醫與屠創何異哉。言至於此惻然寒心。故善惡之證全在醫之工拙所致。故愚不得不辨明之。嗚呼至理之言。至仁之意。今之醫タル者其心術ニ於テハ豈慚サルヘケン哉。
昇平校教官鹽谷甲藏號若陰左脇下堅癰アリ時ニ雷鳴下利寐レバ則舌上乾燥冷水ヲ飲マザレバ潤スルヲ得ズ一老醫之ヲ攻テ飲食減少心氣亦鬱塞ス余柴芍六君子湯ヲ與ヘ兼ルニ歸脾煉ヲ以テ後下利止舌滋潤ス但堅

癖時ニ拘急害ヲナス因テ近年半夏湯ヲ與ヘ論シテ曰心腹ノ病之忽諸スベカラズ其人病緩ニヨリテ藥ヲ怠リ遂ニ卒中風ヲ發シテ歿ス。
今茲水戸浪士武田耕雲齋始メ若干人越前敦賀ニ於テ誅ニ伏ス相模人大槻知柔號泰詩云。
元治新元歲甲子。東阪混同賊群隊。虓々西長何許人。智擬留侯吞囊內。上疏報國辭命好。攘除夷害利勸農。却嫌驅他無藉客。蜂起蟻集漫突衝。般富民賊窘窮役。老倪哀哭仰天喙。赫々方叔爰啓行。羣醜倒戈崩厥角。僞士屬俘眞士奔。而後再會張勢餘。蹂躪木曾萬壑雲。鏖戰摧排幾關險。豈料京城才咫尺。雄藩橫斷湖一東。避銳迂折越障裡。隘路漸窮深雪中。誘之枉夫何爲者。回籌帷幄加州牧。凍涸殆死轍中魚。振響請憐世所惡。君不見城溝染血上元雪。紛紛人語交毀譽。今日君臣併黃土。雪擊雪酬何忽諸。
慶應元年乙丑
夏我大君復朝于京師。是歲洋艦來于兵庫及浪華。是歲秋八月二十日佛蘭斯ミニヌーテル姓シユウレ一名レヲシロセス者疾アリ愈エズ醫ヲ幕府ニ乞フ幕府

議シテ余及鍼醫和田氏ヲ遣シ療セシム閣老山形侯參政敦賀侯其命ヲ傳フ即促裝シテ横濱ニ趣ク山口駿河守栗本瀨兵衛接伴シテ余等ヲ使館ニ導キ公使ヲ診ス其按ニ曰日本政府御目見醫師淺田宗伯佛國公使某ノ病ヲ診察シ得ルニ生質強健ナレドモ數歲困苦シテ戰鬪等ヲ經タルユエ筋骨弛緩シテ血氣ノ分利ヲ失ヒテ脈ニ遲緩ノ候アラハレ皮肉潤澤モ年齡ヨリハ枯稿シタリ且腰腹ノ邊ニ打撲ノ痕アリテ左腰ノ臀肉右ノ方ヨリハ瘦タリ腰ハ一身ノ要關ニテ別シテ運動ノ處ユエ氣血ノ分利鈍クナリテ苦惱セリ此病治セザルトキハ漸々腰以下ノ分利ヲ失テ步行難澁ニナルモノナリ内ヨリ血氣ヲ扶助シ腰腹邊ノ強壯ニナル藥ヲ服シ外ヨリ經絡ヲ活動スル鍼治ヲ施ストキハ全愈ヲ得ズト雖十之五六ヲ挽回シテ天壽ヲ保ツベシ。

藥方
桂枝 氣ヲ運ラシ筋脈ヲ強壯ニスルモノナリ。
芍藥 血ヲ和シテ痛ヲユルメル者ナリ。
蒼朮 身體ノ濁濕ヲ去リテ關節ヲ分利スルモノナリ。

茯苓 小便ヲ利シテ氣血ヲ順ニスルモノナリ。
附子 身内ノ陽氣ヲ扶ケテ腰脊ノ痛ヲ去ルモノナリ。
甘草 腹ヲ和シテ諸藥ヲ導クモノナリ。
大棘 生薑 此二品ハ以上六品ノ藥性ヲ混和シテ胃中ノ容受ヨロシカラシメ藥力ヲ身體ニ分布セシムルモノナリ。
以上ノ藥味ヲ調和シテ煎服スルトキハ前件ノ病症漸漸愈ユベシ。
右書シ畢テ栗本瀨兵衛ニ渡ス瀨兵衛通辯官カージユンヲシテ彼ノ國ノ文字ニ譯セシメ公使ニ示シ其後本國ノ帝ニ贈ルト云。
二十二日通辯官カージユン公使ノ別館ニ於テ余ヲ饗ス其資一人ニ付日本金十五圓ニ充ツト云此日風雨烈シカージユン余ヲ馬車ニ載セテ以テ公使ヲ診ス。
二十四日公使病大ニ快キヲ以テ余歸府セントシ別ヲ告ク公使余ガ手ヲ握テ曰病過半愈持喜ニ堪ヘズ其謝ノ如キハ正ニ本國ノ王ヨリ贈ルベシ予ハ即此恩ヲ謝センガ爲ニ治驗ヲ新聞紙ニ載セ日本ニ名醫アルコト

ヲ五大洲中ニ布告セント是ニ於テ又前方ヲ調和シ和田氏ニ托シテ歸ル後其言ノ如ク本國ヨリ余ニ贈ルニ時鳴鐘二箇修囉尼三卷ヲ以テス而官吏之ヲ欺收シ余ニ與ルニ銀十錠ヲ以テス當時ノ政推知スベキ而已噫。

是歲七月 大君大坂城ニアリテ疾病ナリ閣老相議シ同九日夜參政立花出雲侯ヲシテ余ニ命シテ急ニ上坂セシム即促裝十一日ヲ以テ發ス多紀養春院大膳亮弘玄院遠田澄庵高島祐庵與ル御目付大平鑓次郎^{後備中守}奧番菅沼三五郎^{後備後守}之ヲ管轄ス時ニ霖雨東海道川々溢レ通行ヲ得ズ品川驛ニ至リ急ニ舟ヲ雇シテ横濱ニ達ス夜三更金澤驛ニ宿シ洋船ヲ募リ十三日午後始テ洋船^{英吉利商船}ニ移リ明日發碇ス十六日拂時攝海ニ^{其重百八十馬カト云}達シ安治川口ヨリ小舟ニ乘シ即日申牌坂城ニ入ル閣老松山侯^{板倉伊賀守}余ニ命シテ侍醫ニ列セシメ即時上診ス退テ醫按ヲ書シ緘封シテ松山侯ニ呈ス其大略脚氣衝心ノ候悉ク具ル恐クハ不日不測ノ變アラント云時ニ西洋者流 大君脚氣ニ非ス心臟慢性厥衝ノ御通證ナリト抗論ス余即脚氣證タルコト瞭然ノ五徵ヲ論列

シテ御側衆御用掛寶賀伊賀守ニ呈ス二書草按別ニアリ爰ニ贅セズ十八日ノ夜ヨリ衝攻ノ狀益劇ク煩悶言フベカラズ遂ニ二十日ノ朝ニ至テ寶賀易玉ヲ羣臣ノ遺憾云フベクモナシ天朝命ヲ下シテ長州ノ兵ヲ解カシメ靈樞江都ニ歸葬ス余亦其列ニ在リ八月畿内大風雨洪水ス大坂城大木多倒レ城瓦渠中ニ墜ツ近郊ノ民屋流失シ天滿橋之ガ斷裂ス諸國不登米價益沸騰ス是月江都貧民數萬人所在黨ヲナシ紙旗ヲ建富豪ニ至テ金穀ヲ募ル甚ハ屋舍ヲ破壊ス市中之ガ爲ニ閉戸三日官諭シテ之ヲ鎮シ濟院ヲ設テ救濟ス奇ト謂ヘシ。
余大坂城ニアル御城代牧野備後守同加番松平山城守閣老稻葉美濃守參政遠山信濃守御奏者内藤志摩守等諸侯皆舊交タルヲ以テ喜テ診ヲ乞藥ヲ服ス塚奉行池野山城守亦舊知已ヲ以テ遣シ余ヲ延テ令息ノ疾ヲ療セシム。
奥坊主今西宗傳脚氣ヲ患ヒ遍身洪腫手足及口吻麻痺大小便不利心下痞滿虛里動甚ク氣息促迫ス洋醫者流之ヲ療シテ増劇ス因阪府ノ醫ヲ招ク醫固辭シ去ル余診曰病實ニ危篤ナリ然レドモ 大君ノ如ク嘔吐ナク

頸項ノ擁腫ナク脈駛緊ナラズ衝心ノ惡候悉ク具ハラ
ズトス宜ク治法ヲ盡スベシ乃沉香降氣合豁胸湯ヲ與
ヘ養正丹ヲ兼用ス明旦ニ至リ小使快利シ氣息少ク安
シ尙一切鹽味ヲ斷シ前方ヲ連服スルコト五七日水腫
大ニ減ジ其人鬼錄ヲ免ル與詰伊場八郎扼腕切齒シテ
曰我大君ヲシテ此坊主ノ如クナラシメザルハ千載
ノ遺憾ト云ヘシ。

伊場八郎ハ軍兵衛ノ子ナリ擊劍ヲ善クス後遊擊隊
ノ長トナリ戊辰ノ變脱走シ林昌之助ヲ輔ケテ兵ヲ
擧ゲ箱館港ニ趣テ榎本和泉大島圭介ト志ヲ合シ己
巳ノ役遂ニ勇戰シテ死ス嗚呼德川氏ノ忠臣タルニ
恥ジズト謂ベシ。

余十月朔ヨリ西城ニ當直ス同九日坪内伊豆守通詞ヲ
以テ御殘品ヲ賜フ黒二羽御小袖縮御帷子各一領白綸
子一反檀紙一帖ナリ同二十二日伊勢守播磨守伊豫守
伊豆守列座ニテ大君御病中ノ功勞ヲ賞シテ白銀十
錠ヲ賜ル同二十六日伊豆守通詞ニテ溜ノ間ニ於テ御
遺金五十兩ヲ賜ル十一月二十五日斗圭之間ニ於テ閣
老小笠原壹岐守候和宮様天璋院様方々様御診被仰付

旨命セラレ平岡丹波守候ノ前ニ於テ誓詞有之此ヨリ
西城及二丸後宮ニ輪直シ多ク宮女ヲ治療ス。
十一月九日夜江都大火曉天余家亦延燒ス因改テ宅ヲ
木挽街采女原ニトス宮十五日ノ休暇ヲ賜フ十日ヨリ二十
四日ニ至ル
十二月 天皇痘瘡ヲ患テ崩ス孝明天皇ト諡ス二十
九日ヨリ八音ヲ停ム。

三年丁卯
當春 孝明帝諒陰ニテ八音遏密大城ノ賀議總テ廢
シ城中平常ヨリ索寞タリ。
正月三日德川民部大輔公京師へ上程シ直ニ兵庫港ヨ
リ長鯨船ニ駕シ横濱港へ到リ佛蘭斯ノ都ニ留學ス此
亦皇國未曾有ノ新聞ト云。

天璋君夫人中年寄歌川小腹塊アリ時ニ刺痛劇シキト
キハ心下へ衝逆シ寒熱往來微嘔舌上苔アリ大便不通
ス一日大ニ發シ苦楚堪ユヘカラズ同僚松本良順之ヲ
診シ外感トシ脚湯ヲ施シ水劑ヲ投ズ其夜增劇シク振
慄シ明旦診ヲ乞フ余大柴胡湯加茵香甘草ヲ與ヘ大便
通シ熱痛大ニ減ス一日事アリ強テ出仕ス退出ノトキ
氣小腹ヨリ心下ニ迫リ殆昏慣セントス後マタ寒熱ヲ

發ス金匱奔豚湯ヲ與テ衝逆止ミ寒熱解ス後刺痛去リ
塊傷ニ復ス乃當歸四逆加吳茱萸生姜湯ニ轉シ硝石大
圓ヲ兼用シ數旬ニシテ塊消シ痛再ヒ發セズ時ニ君夫
人二ノ丸ニ在リ執匙靜春院其他伊東瑤川院松本良順
各西洋醫流ヲ以テ後宮ヲ治療ス余獨リ漢方ヲ維持ス
是ヨリ後西洋ノ治ヲ得ザル者皆余ニ托シテ療セシ
ム。
去年秋一橋公慶喜入テ大統ヲ繼ギ今茲ニ至幕府政變
革殊ニ甚シ海陸軍ノ士帥ヨリ兵ニ至ルマデ皆戎服ヲ
用ヒ或ハ戎劍ヲ帶ビ被髮登城ス皇國開關以來未曾有
之典有識之士歎テ以テ國家衰微トス。
按ニ宋渡江以來。士大夫始衣紫窄衫上下如一。紹
興九年。詔公卿長吏。毋得以戎服臨民。復用冠
帶。論者以爲優。於是士大夫皆服涼衫。國家正ニ
之ト反ス。有識ノ浩歎スル宜哉。
是歲十月又萬石以下貳百苞マデノ士ヲシテ其半稅ヲ
官ニ納レシム有識ノ士又歎シテ曰是人心瓦解國家分
崩ノ兆ナリ恐クハ 我君終其職ヲ失フニ至ント果シ
テ其言ノ如シ。

我舊友川路敬齋黒川近江水野痴雲何レモ以不是ト
スナリ。

東台准后年五十餘下利久ク不止腸垢ヲ下シ赤白痢ノ
如クニシテ後重ナク手足水氣アリ唇舌白滑苔ナクシ
テ渴シ小便不利腹虛濡脈沈緊下部陰癢アリ濕痒甚ク
時々濕熱蒸蒸頭眩ス湯川安道錯治益劇シ中山攝津守
診シテ脫候トシ八味丸ヲ處ス熱レドモ心下ニ泥戀シ
テ服スルコト能ハズ執當龍王院余ヲ延テ方ヲ議ス余
診シテ曰虛則虛矣然レドモ下利濕熱ヲ挾ム宜ク兼制
スベシ眞武湯加黃連龍骨ヲ與フベシ侍醫其言ニ從ヒ
之ヲ療シテ下利止ミ水氣去リ飲食大ニ進ミ一旦牀褥
ヲ除クニ至ル後數旬攝養宜ヲ失シ一日霍亂狀ヲ發シ
卒然トシテ道山ニ歸ス。
水戸中納言公御廉中夏秋ノ交時氣ニ感招シ其初類瘧
ノ如ク寒熱往來心下痞滿飲食進マズ時ニ氣心下ニ迫
リ苦悶ス侍醫脚氣衝心トシ倉皇策ヲ失ス余診曰此邪
氣胸膈ニ鬱滯スルノ所致眞ノ衝心ニアラズ宜ク邪氣
ヲ清解シ胸脇ヲ疎滌セバ必ズ活路ヲ得ン醫學綱目犀
角湯然ルベシト其臣柁山藏迪ニ曲ニ論シテ歸ル後其

言ノ如ク愈。

寄合酒井六三郎年十八數年遺尿ヲ患ヒ百治效ナシ余之ヲ診スルニ下元虛寒小便清冷加之ニ臍下動アリ物ニ驚キヤスク兩足微冷ス乃桂枝加龍骨牡蠣ヲ與ヘ八味丸蜜煉ヲ兼用ス數日ニシテ漸ク減ジ服スルコト半年ニシテ全治。

桂枝加龍骨牡蠣湯ハ本失精ヲ治スルノ方ナリ一老醫之ヲ用テ宮女年老小便頻數ノ者ヲ治ス和田東郭之ヲ用テ高槻老臣ノ小便閉諸藥效ナキ者ヲ治ス余之ヲ用テ遺尿ヲ治シ屢效ヲ得タリ古方ノ妙ハ運用ニアリ精思スベシ。

藤森弘菴壯年ノ時氣鬱勞ヲナサント欲ス諸醫藥效ナシ一老人教テ蜀椒ヲ食セシム幾モナクシテ病愈ユ余此說ニヨリテ蜀椒一味丸トシ用ユ屢效アリ按本草除寒瘧去老血利五藏ノ語アリテ氣鬱ヲ治スルノ主治ナシトイヘドモ其味辛溫開達ヲ主トスルコト知ルベシ後三因方ヲ讀ニ川椒一味神授散ト名ケ治傳尸勞氣殺蟲方トス方後云昔人嘗與病勞婦人交婦人死遂得疾遇一異人云勞氣已入臟遂此方令急服二斤其病當去如

其言服之幾盡大便出一蟲狀如蛇自此遂安續有人服之獲安濟者多矣弘菴翁ノ治驗蓋茲ニ淵源シテ余讀書疎漏其出處ヲ遺忘慚愧ニ堪ヘズ。

明治元年戊辰

正月三日ノ事件ヲ熟思スルニ固ヨリ我前君ノ失策ニヨルト雖其亂ノ根基ハ長州ニアリトス其初外國相迫リ幕廷開鎖ノ議論一定セズ閣老佐倉侯等假約條ヲナセシトキ家臣永井雅樂ナル者ヲシテ開港通商ノ事ヲ專ラ説カシメ世子長門守屢登城シテ其事ヲ懲逆シ後和親互市ノ議一定スルニ迫テ俄ニ攘夷ノ議ヲ唱テ京闕ニ迫リ慷慨ノ縉紳家ヲ煽動シテ攘斥ノ令ヲ布告セシメ幕府其事ニ應ゼザルヲ知テ天子ヲ挾テ諸侯ニ令セント欲シ兵ヲ擁シテ鳳闕ヲ襲ニ至ル偶會津ノ爲ニ事ナラズト雖退テ益其論ヲ主張シ英夷ト一戰シテ竊ニ和ヲ入レ内援ヲ頼ミ又薩州ヲ賣テ英ト戰ハシメ乃英ニ和睦セシメテ遂ニ兩國志ヲ合シ近國ノ諸侯西洋ニ甘心スルモノヲ合從シ幼弱ノ天子ヲ擁シテ討幕ノ策ヲ成就スルニ至ル是攘夷ハ表向ニシテ内實ハ外國ト和親シテ幕府ヲ征討スルナリ又其臣桂

小五郎後木戶某ト變名ス等ノ激徒ヲシテ薩臣ヲ誘引シ水府慷慨ノ士ヲシテ激動セシメ元老彥根侯ヲ誅シテ幕府股肱ノ勢ヲ殺ギ事ヲ蕭牆ニ起テ竟ニ天下瓦解ニ至ラシム

乃祖廣元ハ公孫ノ裔ヲ以テ朝廷衰微ノ政ヲ輔ケズ朝典ヲ負テ鎌倉ニ走リ賴朝ヲ勸メテ霸圖ヲ開カシメ以テ己ノ營トス其子孫ハ幕府二百餘年ノ恩義ヲ棄テ朝廷ヲ擁シ萬國ト和親互市シ己ガ國ヲ利セントス前年開港ノ獻言果シテ是耶今日攘夷ノ口實果シテ非耶其祖其孫ノ心曲表裏反覆測ルベカラズ千載ノ下董狐之筆アラバ其將如何スベキヤ。

三月十日余當直ス坪内伊豆守通詞ニテ御用有之ニ付早々駿府表ヘ趣クベキノ旨ヲ命ス因テ老女局ヲ携ヘ天璋君夫人ノ御書ヲ帶ビ十一日發程ス十二日川崎驛ニ於テ薩州隊長相良治部ニ接ス無幾シテ參謀西郷吉之助亦至ル乃君夫人ノ命ヲ傳ヘ其書ヲ渡ス吉之助深ク諾シ即時駕ヲ返シ駿府總督宮川宮ノ許ニ趣ク余老女ト共ニ其旨ヲ反告セント欲シ品川驛ヘ退キ十三日西城ニ着ス此行兩後宮竝ニ本壽院様金及諸品ヲ賜フ十五日閣老命アリ功勞トシテ時服二領ヲ賜フ余

西郷ニ呈スル書如左。

亡國微臣淺田惟常味死再拜。謹奉書。大總督參謀西郷君執事。伏惟 皇上御宇如日中天。舉千載失墜之政典。修萬邦協和之禮儀。將富國強兵以冠於坤輿。苟居王土食王粟者。皆可不欣欣然奉戴此盛事也哉。特怪六師東征之日。浮浪或抗其先鋒侯伯或矯其 勅旨。薄海震驚。戰爭無止時。死傷載塗。田野荒廢。民疲於奔命。加之天下金穀糜爛。人牧不能庇其臣子。臣甚恐一朝有事。則何以得奉

萬乘於富嶽之安。鎮蠻醜於滄海之濱焉哉。是固雖廟堂諸賢之所定議劃策。而非草莽淺識之所窺測。竊察其所由。吾 邦上古無爲垂拱而治。此爲不言之世。降至於中古。禮文漸開。自簡而繁。自文而華。真率化爲虛飾。質直變爲詐譎。從是天下多端。遂爲戰國。政權移于公卿。歸于武將。王室不絕如縷。厥後真人一出。尊崇 王室。匡合諸侯。雖偃武修文廓清之功。猶不失馬上得天下之風。是以政刑簡易爲近上古垂拱文治。而昇平二百餘年。政權煩雜。尾大不掉。加以外夷之釁

隙。而中外紛錯。墮綱紊紀。宜乎神兵天降。電戈一指。而人情波駭。大勢挫衄。都城失守。諸侯瓦解。以至於今日也。雖然其君非有桀紂之暴。其臣非有莽卓之惡。其勢自然而然也。執事願察其自然之勢。省先聖速成之箴。行政以德。化民以仁。則不刑而自威。不戰而自勝。是所謂王政之上乘兵略之本計也。若愈征愈戰。橫羅荼毒者。枕骸遍野。懸首盈竿。天下無寧日。四民生怨嗟。則雖有百善政。豈得能行哉。孟子曰。不嗜殺人者能一之。兵志曰。國雖大好戰必亡謂此也。夫王者父天母地子萬民。歲終錄大辟囚。測然爲之素服。減膳徹樂。豈亦忍窮兵黷武棄億萬生靈於鋒鏑之中乎。今執事抱非常之材。處有用之時。挾得爲之勢。宜審古今政權之變態與民心之情實。而不悖於萬邦公平之法。六師振旅以行王道興大平。則天下沐 皇澤。萬民歌康衢。 皇基安如磐石。可引領而望焉。嗚呼聖世難逢。盛典甚不易覩。臣大欣王政之復興。亦深概生靈之死亡。區々之情不能已於懷。爰冒瀆斧鉞之罪以聞。執事冀諒焉。惟常昧死再拜敬白。

川路敬齋翁左衛門尉名聖偏枯ヲ患ル事一二年其始ニ比スレバ諸證稍寛ニ似タリ一日暴熱ヲ發シ頭痛裂カ如シ面色潮紅脈扞嘔吐飲食スル能ハス口涎沫ヲ流ス尾臺榕堂認テ外感トシ柴胡桂枝湯加石膏ヲ與フ頭痛嘔逆益劇シ因テ大柴胡湯ニ轉ス余診シテ曰是中風ノ再發ナリ病頭中ニアリ早之ヲ防クベシ然ラザレバ左癱右瘓全身ニ及バントス翁余按テ許諾ス因侯氏黑散料ヲ與フ服スル數貼熱減シ頭痛嘔逆止ム余前方ヲ連服セシメ神色益爽然詩ヲ賦シ和歌ヲ詠シ書ヲ揮テ樂トス一霄感激スル處アリ溘焉トシテ自裁ス。

此書明治二年己巳八月十八日夜卒業ス即小酌ヲ命ジ小詩ヲ賦シ以子弟ニ示ス其詩ニ云。起向殘燈筆代眠。略尋舊夢入新編。孑然顧影吾躬在。批綠橘黃五十年。

醍醐隨筆

序

みやこの事しげきをいどひて丘焚の水艸きよきあたりにすみかもとむなるよからぬわさ也司馬長卿か四駟の車にのらすんは又此橋を過じといひけむこそほいならめ身を立て道を行ひ名を後代にあげて父母をあらはすを孝のおはりさはいふなれさはいへこ四十五十にして聞ふる事なく病さへさしそひて身をすこやかならす人に交り事にのそむここに吳牛の月に喘くらむ心地のみするをばいかはせむ日かげ待間の露の身のしはしもやすからん事をねがひて都のたつみ醍醐の山下にかくれ居たるに其間の雜事口號をみやこの故人に傳へしめさむとて寛文十の春二月西京の隱處華陽軒にして筆をそめ侍る

醍醐隨筆上

一 醍醐山は帝城を去事十八里世を宇治山の北にあたり郡も同じ名なればみやこのたつみしかぞすむとこゝもやいはむいとわびし四方に山ともつらな

醍醐隨筆

りて松杉風しづかに野艸露ふかゝりし伏見より大津へかよふなれと又た一と方に道もあれは行かふ人もまれなにかしいさや名をさけ身をかくさんにはこよなふよすがなるべし寛平年中釋の聖寶此山のぼりて密教の佛場となさん事ははかるに薪はごもしからねど僧徒をやしなふに水や盡なんごたづねありく時きよき泉を見出してこれをなめ侍るに醍醐味にかはらしとて醍醐山とあらため名けられしにこそ雨ふれば笠取山と詠しけんもむかし語りになりにつらし山上下に堂塔をたて、天下のいのりの師となりぬればおほへも大方ならて延喜帝をさへ山のふもとに葬りたてまつりて醍醐天皇と諡し奉りぬる上は密教の法流こゝを要領とすかの聖寶といへるは光仁帝の苗裔にして氏族もいやしからず真雅の法嗣なれば空海の嫡孫にていまそかりける三寶院門主代々その法燈をかゝげ給ふ中比よりおどろへもて行て堂塔もくづけなむとせしを豊臣秀吉公花見のつゐで三寶院准三后義演をたふとかりたまひて寺領なごましくはへたまへは

今もてこそしからずと見え侍る山上に五十三坊山下に十餘坊木のかけ竹の林の内たふとげに見え侍る山人は近江みやこにすみ侍れど年ごろの病に身もつかれ老のねさめも物わびしくていつちにもつれつれならん方こそすみよかなれと思ふにつけて此山のふもとにつたなき庵むすひて二歳のほど住侍りけり心しづかに身やすらかにてこの世の外ともかゝる境をやいひけむとおさ／＼たのしくおほゆれかしらに雪をいたゞきなから病さへあつしくてこうしにたれはかい／＼しき人にまはらんともせず僧徒は佛にかへ寺を守るなるや／＼ましくむつかし農家はをのかじ／＼田つくりはたうつわさのみいひの／＼しれはにげなくいとなふ心くるしさればとよあく／＼とくると獨のみありけむもさう／＼しくいさわびし隣なる家に不破氏の翁むかしはいみじきもの／＼ふなめれど時うつり世かはりてこのさどに住わびぬる風雅の才もなく誠正の學もあらねど生つきすなほにて心ざまやさしかりければこれなむ友つ人とさためて折にふれつゝいひか

たりなくさみたり

戊申正月廿三日去京城而移醍醐蓋沈痾逐年增長而懶于世事故也仍賦古風一篇示大遺庸軒二丈人云

醍醐下居

聖朝風曆戊申歲、暫避京城、止醍醐、醍醐從來非我地、只是近境無丘隅、五陵年少皆相笑、以夏變夷可謂愚、誰信平生病痾重、豈將衰朽勞殘軀、白髮蒼顏河圖數、身上甲子既須臾、從是保養期其盡、淡飯龜茶足相娛、富貴榮耀塵裡夢、進退存亡波上見、世間毀譽不可聞、汝爲汝矣吾爲吾、罪なくてさすらふる身のたのしさをけさのねさめに先おほえぬる

遊行于醍醐山

山上雲閑山下晴、僧房寺院共繁榮、茂林葉暗猿藏跡、幽谷苔深鳥不驚、秀吉遊遊猶在耳、長明隱逸空傳名、居能移氣豈虛語、世慮日消心性清

和庸軒子被訪隱居之韻

氣弱質懦不堪事、常恐世路更多岐、富貴形勢皆物外、

利祿功名黍一炊、不知何時學孔聖、進退得失窺包犧、紛拏喧阗一生空、頽齡五十有五期、醍醐山下卜巢穴、離群索居待枯萎、比叡春月似歷月、京城風景如撐眉、友人寄詩愛情懇、老眼帶淚吟聲遲、屈指交會十年深、回首別離數日移、道路纒問未甚峻、只看原野草漫滋、膏君車分秣君馬、携手相語不亦奇

酬了長子

待とてもいかてくるすの小野こへて我山里をたつねごはまし

酬田中氏正元丈

いとまあらはきても見よかし山里の都にかはる春のけしきを

卒走筆次庸軒子病中音問之韻

心知間兩地、臺爵欲何之、原野溫風緩、山家晴日遲、蘋繁浮水面、花柳見春姿、病間得完得、一來莫失時、

洛陽儒醫向井氏立升翁寄詩被訪隱處卒次其礎而聊伸謝意但恐行人倉卒吟未了

遠尋草莽問安否、金薤琳琅更老成、句々存誠塵俗

慮、言々說理正人情、去冬閑語及秉燭、來日佳期可到明、一別心知雖兩地、相聞狗吠與鷄鳴

次勢州澤田氏蠶管丈被問隱處之韻

索居僻地春、一方望美人、美人有美德、文武爲主賓、名聞京城域、身住伊勢濱、我是山麓客、幽房何有隣、無能樂閑散、不材嘗清貧、往時在世日、風塵心不淳、如今隱栖夕、雪雰慾亦磷、何時一棹酒、携手阿濃津、山中無益友、猿鹿妄相馴、寄詩愛情懇、樽陶旋得伸

鈴鹿川八十瀬の波の數々に君かめくみをたくへてそしる

久須見氏鶴巢窩主來訪予山家而惠佳詞一章、立談不幾忽促歸裝、別恨不可抑也卒次其韻

身在市朝遠、人欲氣清質淳智也足、長途跋涉喜快情、暫時美談賞新綠、卒揮兔毫題佳詩、又乘肩輿尋芳躑、忽然來兮忽然歸、顏々相對帶泪闕

一小栗栖は醍醐の西にて小川を一ツへだてたり明智光秀山崎敗軍の時この里の百姓おこりて落人をこらへ物の具はぎける夜に入つて光秀主從三騎この

里を落ゆきけるに百姓きつつけ鎌をもて垣のこなたよりつきければ光秀が脇腹つきごほしぬる馬上三三町こたへて死けらし其後光秀といふことあらはれければいみじき手柄をしたりと諸人にうらやまれぬるまゝに彼者たちまち武勇の心いできて近里遠郷にしれものあるときは人よりさきにはせまはりからめどりきりふせなごするほどに小栗栖の作右衛門とてきく人おちおそる用則成虎ためしにや作右衛門死て子の喜兵衛代々武勇のほまれありその比小栗栖に狼あれて日暮に及て道行人もなかりしが中にも白狼のすくれて大なる有て人を害するにより里の悪少年数人より合てこれをころさんと議するを彼喜兵衛聞てそれほどの事議論に及ふやうやある我六十にあまりぬれご彼白狼をころしてわかきものごはぢしめんとて雨そぼふり夜ふけぬるに装をうちきて手に鎌をもち其所の墓所へ行く道の傍に死人のごとく仰臥して居たりけるしはらくありて件の白狼来てこれをみつつけ其あたりを徘徊して次第にちかづき臥たる上を二度ごび

越三度めに喉をくはんとごびかゝりけるを鎌をもつて狼の頭かき落し起あかりて又もこのごどく頭をさしつぎ四足をくゝりて悪少年のあつまりける家まで引もて来りぬ悪少年ごも驚きてほめのしりければいやごよ重くて引あつかひたり酒を市てこの勞をたすけよごてわらひけるごぞ
 一慶長廿年五月七日大坂落城の時秀頼公の乳母子木村長門守ごも耻口口討死して上下感し合ける忝くも大相國公御威のあまり彼頭をめしよせ御覽ありて不便の次第也討死をきはめて出けるよごのたまふいつれの所を御覽ありてかくはのたまふやらんご本多上野介叔父の三也に尋ねられければ三也さる事あり甲のしのびの緒を真結にして端をきりてすてたりふたごび此甲をぬぐましごの義討死の覺悟ごにあらはれぬるといへりやさしき武士の心はせにや
 一春は秋ごよけれ月もおほろにてさやかならす白櫻紅梅は富麗にて黄菊紫蘭の寒疎なる身にしむばかり感ふかきにしかず鶯の鳴も鹿の遠音にはご

りぬなど思ふ冬は夏ごよけれ寒風はげしくて宵たにも開えず雪さへふかければ道ゆく事もものうくなんすしき池の水に逍遙しごはかごなくしげれる宿に暑をわすれ野山ひろげに見わたしぬるにはしかすごおもふ又秋になれば春ごそめてたき折なれあかしかねたる長月に蟲の聲さへかまびすくて庭もまかきも露ふかければ立おるもさうし長閑なる日は野山ありくも心さへうきたつめれかすみにこもる月の色までやはらかにゆたかなりしかなご思ふ又夏は冬ごよかしけれ軒ひき家は炎暑にたへかね暮れば蚊やり火の燈だにいふせく道に出ぬれば手足もたゆみ汗のみかきて柳かげの清水さへたつねかねぬる爐をかこみ茶を煮て思ふどちうちかたらへは寒風も覺えず雪のあけほはすだれまきあげ袂きながらながめ居たるしくものなくぞ覺えぬるなどたがひに過にしをのみしたふなるは人の常の情也なからへは又このころやしのはれんごはよくごよみにけらし孔孟程朱も其時の人はかくは尊まざりしか後世に至てごそ次第

に仰きたふなれ本朝も中比より戦國となりて國の騷動一歳ごしてゆたかなる事なく西おさまれば東みたれ北しつまれば南さはがし家居はやかれて野はらごなり妻子はうばれて行方しらす口口敷足をそらにのみしてうかれありきけんはくるしき事にはべらすや山人等の老病は紙帳の内を出す蒲團の上をさりあひぬごかゝる世に出あひなば山野に寒暑をしのぎ路頭に飢渴をしのびけんに死なごありなば猶かなしからむ今太平の御代に生れて久かたの天すなほにあらかねの土ゆたかにして君臣は禮を重し父子は孝を盡さば外戸不閉途不拾遺恐るゝ事もなごかなしむごもなくおびごけひろけてたのしむらんはありかたきためしに侍らすや人々かくは思はずや侍らん
 一火災は富貴繁榮の地に多して貧賤窮郷の地にある事まれ也繁榮は火をもてあつかふ事しけく窮郷はかまごさへにぎはござればにやご不破翁うたかふむべもよく了簡せられぬされど人氣の驕亢は陽にして火氣也太平の仁政に浴して諸人驕り亢る故に

火災おこるなるへし休徴咎徴は人氣にしたかふ故なり

一火災にあひぬる人火焰にたちまじりて煙に咽ぬれば忽死するも有蘿蔔をうちくぢき汁をしほり口中に入ればよみかへる也又蘿蔔を口にふくみぬれば煙にむせずともいふ忘るべからず

一くすしのつたなくわびたるを藪といふ藪とは多き心かこ不破翁うたかふ田舎山中にすみぬるくすしは藪種かひもどむる事なりかたきゆへに藪のあたりたつねてあけひづるすいうづらせうがひけやうものごりあつめて藪をなして病人にあたふる故ならむ又僧のつたなきをいもほりといふ山の芋を堀に冬はかれて見へすむさどほりあさりては得べからず芋のかれたるつるをたづね出してそのすぢをたがへさればほり得る也無智無學の僧にて佛性の性の字はもとより女偏なればなどいひて女色の工夫ばかりするなれとよき師匠のあとをつぎて後住となりぬれば先住のつるをうしなはじと諸檀越のすてざるいはれ也

一近年南蠻よりわたるとやらんいひてめつらしき耳なれぬ名の藥共をもてはやすなる一藥にて諸病を治するやうにいひて價を高くうりわたせばかゝる奇特の物こそあれとて死を活し生をのふると思ふつたなき事にや藥は偏氣のものなれば一藥にて病を治しがたし治するといへとも又害出來る故に藥方の法をたて、君臣佐使などいふ事ありて五味三味或は十味甘味くみ合せてこそ病を退け身を養ふわざならぬなにか一藥にて諸病を治せむならばくすしの上手下手も有まじうにこうるとやらんは野底茄也あめんたうすとやらんは巴旦杏也みいらとやらんは木乃伊なりこれらのたくひさせる功能なきくすりなるをやそれのみならず妙藥といひてさま／＼の合藥を買賣するなる效なきはしか也害をうくる事おほかめれ人身はふたゝび得かたしゆるかせにすることなかれ

寄京城庸軒子

我入南山君洛陽、燕鴻越鳥各復祥、花晨月夕非無恨、只向春風獨眺望

其二

味爽起來到、夕陽讀書掃室獨祥々、良辰美景雖心足、猶有江雲日暮望

贈薇于大遺儒翁

陟彼南山采蕨薇、雨餘春色紫芽肥、高明勿笑筐中乏、此物幾回扶我餓

春月

非雨非雪非細塵、朦朧夜色不分真、若將春月比心月、只是名奔利走人

久須氏なにかしへ薇をおくること

君かため嶺のさわらひつみためて我山里の春を見せける

横雲鴈

老たるを先にたてゝや次々をまもるはかりの聲のやさしさ

蕨

すめる世をいごふ人なきためしには折ごもみへぬ峯の早わらび

雉子

朝鷹の羽音やゆるにかよふらんまた夜をこめて雉子啼なり

春雨

春雨のいたくは花を打しとやふるとはみへて音なしの里

田家花

事しけき都の花のさかりより門田の末の春はのこけし

白藤

波こゆる折かごみれば末の松まつにかゝれる白ふちの花

春雪

ふりつむとやかて消なんたつねても草のはらまで春風ぞ吹

春晚眺望

夕くれは霞のころも雲の帯花をかさしの春の山ひめ

菩提寺へ花見にまかりけるころはやくうつろひにければ

花の波半は風のさそふとも猶たちかへれみぬひと

ため

角山者醍醐之傍邑也百姓兄弟爭田而積年不決近間有判而兄罪顯矣兄怒不服與父子四人相謀而欲殺弟邑主聽之遣十餘人捕之父子揮刀立殺使者蒙疵者數人使者亦雖殺彼一人殘黨猶衛抗矣邑主告之京兆尹於是京兵多々携弓矢連劍戟而來或殺或捕京兵亦傷者數人于時夏四月二十七日也

兄弟爭田乙普明不知何處有蘇瓊揮刀放矢相殘害天地爲愁神亦隍

射者武藝之最也不可有學焉然善射者鮮矣彼紀昌貫虱養由穿柳異邦之美談也在本朝則鎮西八郎爲朝能登守教經者強弓精兵也源三位賴政那須與一宗高者目當達者也兼之者今葛西氏某甲歟是歲寬文第八月三日任近代恒例於洛東大佛殿傍三十三間堂射通矢行年十九歲忽得七千七十七數而爲天下第一可謂壯矣予雖未見之得庸軒子之詩賦而既知其詳仍次其韻云爾人群大佛前、弦響三十三天、莞爾兒童喜、愕然鳥獸

刷、表斜申上刻、矢徹七千員、見者滿南北、兩軍袒兩肩

一源左馬頭義朝の勅命なればとて父を殺す事不孝のみにあらず勇も又なし替叟舜のたごへを孟子のたまひけんやむことなし大相國入道清盛の朝廷をあなごりおのかおこりを恣にしけん暴悪といひつへし木曾義仲の頑愚九郎義經の驕慢その身をたもつことあたはず三位賴政高倉宮に御謀反をすめしは世を悶る心切なれども謀つたなく力たらず頼朝の羞を忍て池の尼につゐて殘軀をたもち父兄の仇をほろぼし宸襟を休め奉る百戰百勝は一忍にかさる也これ器量の大なる所後天下を治るも此心より得たり齊藤別當實盛か本は源氏の郎従として平氏のために討死せしは義士の耻る所にや佐々木三郎が藤戸の案内をしへたる男をひそかに殺し同四郎か梶原をたぶらかして宇治川の先陣をつとめし一の不辜をころし一の不義を行て天下を得ることもせず先賢の格言なるに盛綱は不辜を殺し高綱は不義をおこなふ論するにたらず

一 小松内府重盛親父清盛の悪事を諫かねて熊野権現

に詣て命をとりたまへと祈たまふ賢者の所行也といへど不孝不智不勇三の罪あるをや身體髮膚をやふりそこなふだにいましめるを神に誣て命をすつべきや父母存不許友以死ともいへり父母唯其疾之憂とは子疾ときは父母うれへかなしむ故に子たるものはつゝしみて疾なきやうにせよ也疾たにしかりしかるを死すべや神は非禮をうけたまはず妄に殺したまへといのればとて神それ無事の人をころしたまはんや清盛の悪事替叟にしかずつねによく重盛の諫にしたかひたまふ何ぞ争子となりて長く悪を救はざる世亂て禍の及はん事を恐るれども父母兄弟をすてゝひとりまぬかれんとするや怯弱のいたりにして勇氣なき也

一 保元平治より以來本朝戰國と成れり諸士の進退得失文にしるし詞に傳るいくそこはくぞやそのうち楠判官正成こそ智仁勇の三徳をそなへたる名將とほきこゆれ是を諸葛孔明に配祀すといふとたれかそしりのゝしらん朝廷の正統をたすけて身をか

へり見ざるは理にあたりて私心なし仁といひつへし等をめくらして勝を決す智といひつべし堅きを破り鋭をくだく勇といひつへし

一 敬の一字は聖學の始終をなし動靜をつらぬくものにして一心の主宰なれば禮義三百威儀三千もことごとくこの一字より出ても来る敬をしらすは萬卷の書をよむとも儒者といふにたらずよく工夫すべきにや程子の主一無適齊謝氏の惶々尹氏の收斂身心の説朱子の敬齋成大學惑問等を引合せて力を用る事久くは自然に自得すべし

一 近年心學とやらんいふ事ここにさざりがましくけはしく久しく人を見くだしあなごりておのれのみどうときやうに思ふらんはいかなる學にやと不破翁問けらしさればよ山人もこのこといふかしくこそ思ひ侍れまつ心學は聖人の學也かれ晝野の易とは太極なれば太極また性の表徳にして心は性情を總る故にはたして心學にあらずや伏羲氏出たまひて一畫して易をうつし出し文王出たまひて辭をつけて易を家りたまふ先天後天皆心學に侍らす

や中比堯舜禹の授受し給ふも人心惟危道心惟微惟精惟一允執其中このたまひけん心學にあらずやそれより禹湯文武周公の的々相承したまひて孔子大聖人にいたりて易無思也無爲也寂然不動のたまひけん又心學に侍らすや顔曾思孟の諸君子傳へ來りたまへど其後ほるかに斷絶して秦漢六朝の諸儒隋唐五代の群賢にいたるまで道は佛老にありとおもひ虚無寂滅を心學として儒の正道をわきまへさるその中にも漢の董仲舒隋の文中子唐の韓退之は惟肖たりといへども漢武帝の香煙の中にして李夫人を見たまふがごとく彷彿としてたしかならず宋朝に至て濂溪の周元公太極の圖を得てはじめて道を悟り圖説をつくりたまふ無極而大極といふ又心學にあらずや河南の二程子相つゝ四傳して朱子文公に至り大にこの道あきらかにして今にいたりて白日のこころされば朱子のこころばにも聖人の學は心與理也このたまふ心學にて侍らすやされと陸象山は無極の二字をうたかひて圖説を用ひず一陰一陽を直に道として理氣をわかつたす老見佛

見を以て心學を悟れり徳性を尊て問學を支離とおもふ故に朱陸常に相そむき侍る信從する人まれにして其徒多からざりしを明朝にいたりて王陽明楊慈湖陳白沙のたくひ陸氏をおし尊て心學の祖と思へりこのころ本朝の學者陸氏王氏の學を心學といへるはかならずしも問學せず見心の工夫をもつはらとする故にやこれすなはち莊子が書は古人の糟粕といひ禪宗の不立文字見性成佛の手段に侍らざらんやこれより龜學になりもて行て惣して儒學といふは理をきはめ性をつくし三綱五常をたゞしくして葬喪祭祀をもつはらとするのみにて文學はこころ／＼く詞章訓詁雜學といやしみの／＼するされどその理をきはめ性をつくすも博學の上より來らずはたゞ是安意妄想にやはべらん三綱五倫も聖賢のあとをたづねず事理の當然をしらすは嫂おぼるゝ時もたすけすくはさるたくひ多かれ歴代の史を見て世變をかんがへずは安危の教化をわきまへじ文字の訓詁をしらすは經書の義理を取まどひけんもごより三代の學は人倫を明にするいはれなり三

綱五倫葬喪祭祀は儒家始終の要領にて道を行ふ事この外なければ是をさへたかへされは庶民の身にしてはめささき儒者なりけりされど妄意妄想を以て了簡したゞこの上にやすんじて文字を捨るは大なるわざはひなればそこをいましてかくいふ也此草紙を見たまはむ人辭をもて文を害したまふべからず子夏の雖曰未學吾必謂之學矣といへるをその流の弊將或至於廢學と吳才老のいはさりしや子路の何必讀書然後爲學といへるを是故惡夫佞者と孔子ものたまはすや文は道の中より流出し詩は志のむかふところをのふる六經も又文にあらずや詩經その内に歷々ならずや詩文風雅をもてあそばさるは野にしていやし博く學て約にするといひ徳性を尊て問學によるといふ程朱の儒これなんめり見心の工夫のみにして問學を事とせざるは陸氏王氏の學老佛の中よりきたりて三綱五倫冠婚喪祭の條目のみ儒をかり用るなるべしそれも博學の中より求めすは正道にあらざるへしといふかしく覺えはへる此學うつりもてゆきて程朱をまな

ふ人も又經書の外はこころ／＼く雜學なりとて聞かぬ草紙の草紙などやうにおもふさればとて其人經書の中にして一篇一部をきはめたるごも見へず心のみたかふりて命よ誠よ性よ心よ中よ敬よなど朝夕の打話にいひの／＼しりてはや大儒大賢たりと思ふ命と仁と子の罕にのたまふ處十哲にゑらばれぬる子貢さへに性と天道とは聞べからずといへり三千子の内にも曾子ばかりにこそ吾道は一以貫之のたまひしが今は五尺の童も一貫のさたのみいひの／＼するはたしてこの理を心に得はたれもたれも曾子たるべけれと言行各別にして行狀は田夫におごれり五倫をたがひぬるは禽獸とおなしきなどこころ／＼しくいひもてあつかひておのれすなはち聖賢たりとおもへどわつかの利慾を見ては心たちまちみたれ五倫もやふれにけれと聖賢の話をかきりかきりまきらわす人のおのれを見る事その肺肝を見るがこころし何の益かあらむ郷原は徳の賊也とこころたくひにやはべらん宋朝以前性理の學をもしらす佛老にのみ淫したりし人も三綱たゞし

く五倫みだらず大節にのそみて尊へからざるたぐひ歴代の史に見えたるあげてかぞふへからず朱子の小學にさへ其嘉言をあげ其善行をしるしたまふ性理にうごきとてあなどるへからずたゞ葬祭のみ近年佛氏を排して文公家禮を用る人ありいみしくおほへはへるされど庶人として士大夫の禮など用ひ僭せる事おほかめれ喪には哀戚を本とし祭には威敬をつくすこそ人にはこらんとにはあらずつしむへきそや

螢

春日野のすゝ吹風にさそはれて今も飛火をみる螢哉

本は笠とり山なるを僧聖寶の醍醐山と改名

せられぬるを聞て

雨露ももることなきをおしへにて笠取山の名やかわるらん

早苗

五月雨のはれ間を待て早苗さる賤か心やいごまなからん

見るからにうふるさ苗も賤か女の一本ことに身やく

たくらむ

納涼

くれ竹のしけれるかけの夕すゝみ人にしられぬ秋風そふく

菖蒲

あやめ艸あやめもしらぬ澤邊にも香をなつかしみ立ごまりつゝ

蓮池

さゝ波や池の蓮にをく露の玉さへにはふ夏のあけほの

撫子

これも又子を思ふにやまよふらんすつるは人の心ならねは

山家雨

夜の雨にむかしを思ふ心こそ我山里の友となりぬれ

晚鐘

身の上を思へははかな行年のけふも數にや入あひのかね

日野の外山に鳴の長明が方丈をつくれる遺跡あり

どきとてゆかしく思ふまゝ我庵よりみちの程なら

ねはかちよりしてたつね侍りけるかの里さすがい

なかびて作りつゝけぬる家居もなくここの藪かげ

かしこのくさむらにわらやのちいさきニツ三ツ見

ゆるありさなからかまどの烟もたえゝなるあは

れとおほゆるすこし引わけて江界寺といふ藥師堂

むかしはいみじくや有けんきはめてふりにければ

くつれなんを待ほどなる東の方へほそ道あり岩間

をつたひ草をわけて上る事三丁はかり足もたどた

どしく汗かきてこうしにたれこゝなん其あごよ

といへばかひゝしく見めぐりけるに山の腰のか

けたるところより二丈はかりなる岩のさし出て西

の方はれやかに伏見淀などの川のおもて舟の行か

ふも見ゆればおもしろけれと下は谷なれば目もあ

やうくて心やすからず薪は山なればごもしからじ

水はほそき溝川のたえゝなる二三人はやしなふ

べしされどかの取をき自在につくりなしたる方丈

室をこの岩上にをきたらんは東の山下風はげしく

て下の谷へ吹をとしてんかりのやどりごはいへご

心やすからずは住かひ有まじ世うつり時かはりて

陵谷變遷するにやむかしはかくはあらしごおもふ

於方丈石上戲作

己出瑞籬入化城、長明心鏡不長明、遺音猶有和歌

在石上松風々雅聲

又

鶯のやまおのかもごめて入月のたへぬ光をなにうら

むらん

三寶院泉石

鬱々竹林裏、巍然古院堆、巖岩圍碧水、瀑布映漸臺、

鳥宿欄前樹、狗眠塔下苔、僧徒勸拂拭、無更引塵

埃

清瀧梵鐘

清淨清瀧社、梵鐘響碧霄、春風眠熟且秋雨、夢長霄、

百八甚喧躁、數聲或寂寥、徒聽時刻轉、不覺鬢顏凋

菩提山夕照

雲常常變、來往濕人衣、路峻可攀蔓、峯高懶採、

薇、樵夫鞭馬降、牧子牽牛歸、山色暮彌麗、菩提

舍德輝

一言寺夜雨

門前林數茂、堂後綠山濃、月暗三更雨、寺寒一夜風、隔窓聞點滴、開戶見雲霧、靜坐蒲團上、寂然方寸中

五大堂眺望

上醒睡

山路不平直、羊腸更崎嶇、綠樹四隣暗、佛閣半荒蕪、五大堂突屹、可以縱睇、近鄉是何處、民屋密又疎、洛中白壁簇、一局黑全輸、淀川連伏見、舟船如浴、霧裡數點鷺、大坂伸畫圖、老眼似隔縠、久視滌淚濡、同志二三輩、携手相共徂、歸興收茶器、秋日殆欲哺

蝮蛇記

醍醐地多蛇其大者六七尺間有一丈有餘者橫行于田野侵入于人家簇々聚紛々散喜則蠢然轉展徇怒則斃然奮起著于人其尤毒者曰蝮所謂紫鼻蛇是也若觸之則或頰敗手足或潰爛肌骨而至死者亦有之誠可畏也至噬彼燕雀吞蛙鼠亦不以憐乎春宵千金之夕欲嘯月弄花則樹陰草間奈爾衆多夏日一榻之困欲避暑納涼則堤傍池畔患爾徘徊探菊東籬下停車楓林邊則園裏之茂茅徑之塞嘆見爾彷彿啣

孟靜園爐敲氷煮茶則坐間之暖灰底之熱畏驚爾蟄伏嗚呼爾之形柔脆懦弱而無手足如繩如帶易奚爲害也若斯之大矣或曰以彼惡毒而移之於人則有可比之者乎曰然桀紂厲幽之暴逆亡秦漢楚之殺戮三國六朝之塵戰隋唐五代之爭奪下及宋元所起之君大率皆是殘滅國家陷溺人民其害孰與于蝮毒也然斯又天下之大變而沛然不可禦者歟至如叔孫武叔毀仲尼嬖人臧倉沮孟子蔡章妬賢則忠良却爲姦邪韓胡惡義則正道翻爲僞學彼楊墨塞路佛老亂眞李斯焚書安石變法之類亦孰與于蝮毒也或曰且夫天地之間物各有善惡雖蝮蛇所不能無也曰然物各有其處也如共工則幽州可也如驩兜則崇山可也如桀則可放鳴條也如紂則可戮牧野也嗚呼蝮也爾去而居深山幽谷巨浸遠島則爲得其處豈迫人倫而妄可毒害乎如彼無能不材與多病衰老無助于世事者雖無蝮毒亦宜遜于山水而以全性命也胡爲飾智抱佞嗜欲容媚索譽於前而受嘲於後乎嗚呼蝮也爾宜從蛟龍而潛晦晏息莫倣蠖蜒而投明遊戲也或曰山水之好有其說乎曰孔子曰智者樂水仁者樂

山又曰山下有泉蒙君子以果行育德山上有水蹇君子以反身修德其君誠子之事也雖然孟子有曰居移氣假使小人居之亦舊染之汚日消而本跡之明有時而見矣唯蝮也如下愚雖居之不可移也然猶可免其毒人也又可莫其自傷也然則可乎於戲其誠可也一近江國甲賀あたりの在家とかやわらははへとも多くともなひ深林に入て雀の子をこらへぬるに大木の上より大蛇下りて十二三はかりなるわらへをのみてけり残りの童子にげはしりて家にかへりてこの事を語るにのまれたる童の父きくこひこしく行てみれば大蛇頭をさけて銜の水を飲居たるかの父飛かゝり刀を以て二つにきりぬきられて口をひらきさきて童を吐出すつく息につれて一丈ばかり前へこび出たりされども父つゝいて蛇をきりこらす其長三丈にあまりふごさは抱はかり也さて飛出たる童は死せる如くなれ共呼吸はごまらす家にもなひ歸りて修養して安全なれども頭潰てゆがみくばむ髪こごくぬけてふたゝび生せずこの人七十有餘の時みつから語りぬるとたしかに傳けらし又

京の人廣澤へ月みんとて出たるにくもりて月みえず水の上に雞卵ほごのひかり物二つあらはれたり人々いふかしくなめ居るに一人衣をぬきて水に入りこれをみると行むかひければ大蛇眼をいからしにらみ居たるなりけりたちかへらんごせしに蛇のび出て此男の肩に頭をうちかけぬ男ごらへて曳ぬれば蛇頭をしめてしる男かへらんごすれば又頭をうちかく又ひけば又しむかやうに三四度しけるが後は頭を出さゝりけり男まぬかれてかへりぬ五躰つゝがなしやごごへは少もくるしむごころなしご答ふさて家にかへりてやすみぬる中にかの頭をうちかけたる肩次第にいたみ出てくすりやうのものかすゝつけぬれごもやます二三日過てくさり骨に入て終に死けるごぞ毒蛇にやありけん一播州赤松滿祐隣國の敵と和睦の後國の境に出合て會盟せんと約して十五六騎の勢にて出行ける城外三四里過てむかふの山をみれば大蛇十丈もあるらむごみゆるが山の腹を横にはふこれを見てはなれ牛一疋逃はしるを追かけ吞てけりすさまじきわ